早稲田大学英語会一〇〇年史

WESS 100

1892
1992

早稲田大学英語会一〇〇年史

WESS 100

In the beginning was the Word, and the Word was with God, and the Word was God.

(John 1:1)

初めに言(ことば)があった。言(ことば)は神と共にあった。
言(ことば)は神であった。

[聖書ヨハネによる福音書]より

写真で見る英語会

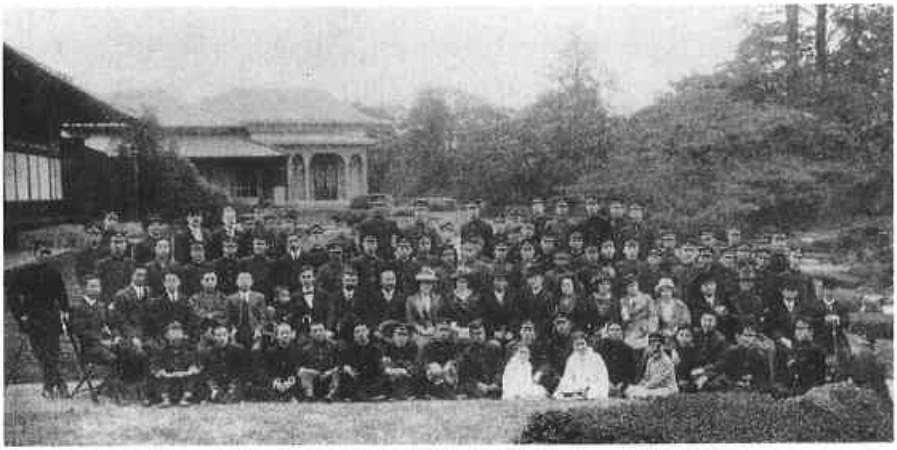
明治39年「ベニスの商人」の劇

明治39年頃、鳩山和夫博士邸にて

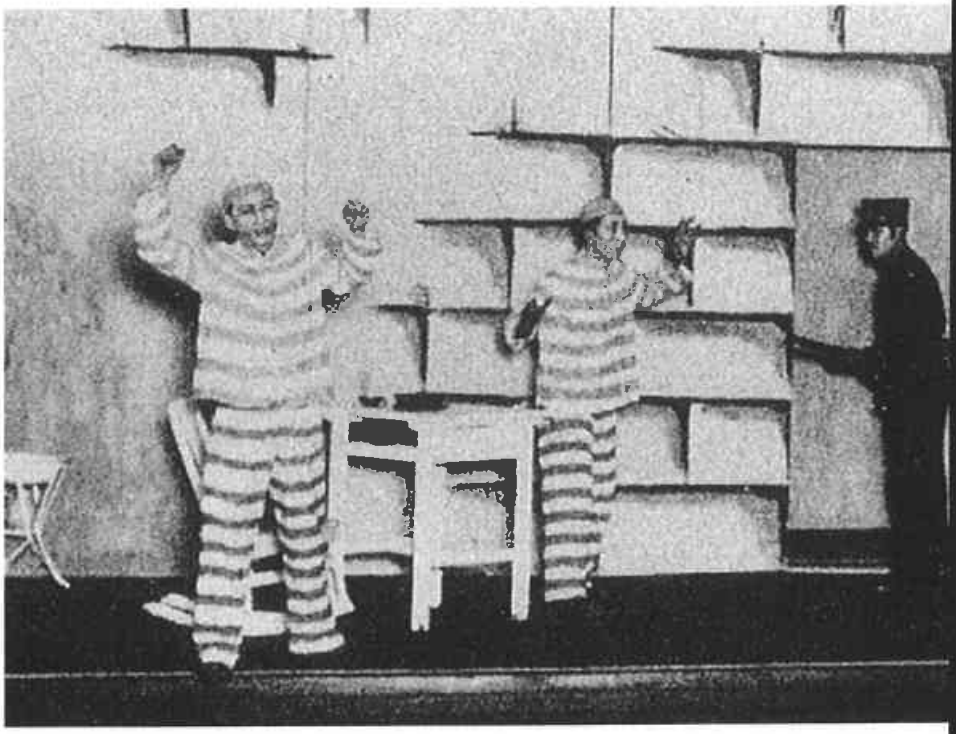
明治40年、劇の翌日ケート夫人邸にて

明治42年頃、牛込払方町の北島邸にて

明治43年度卒業幹事送別会

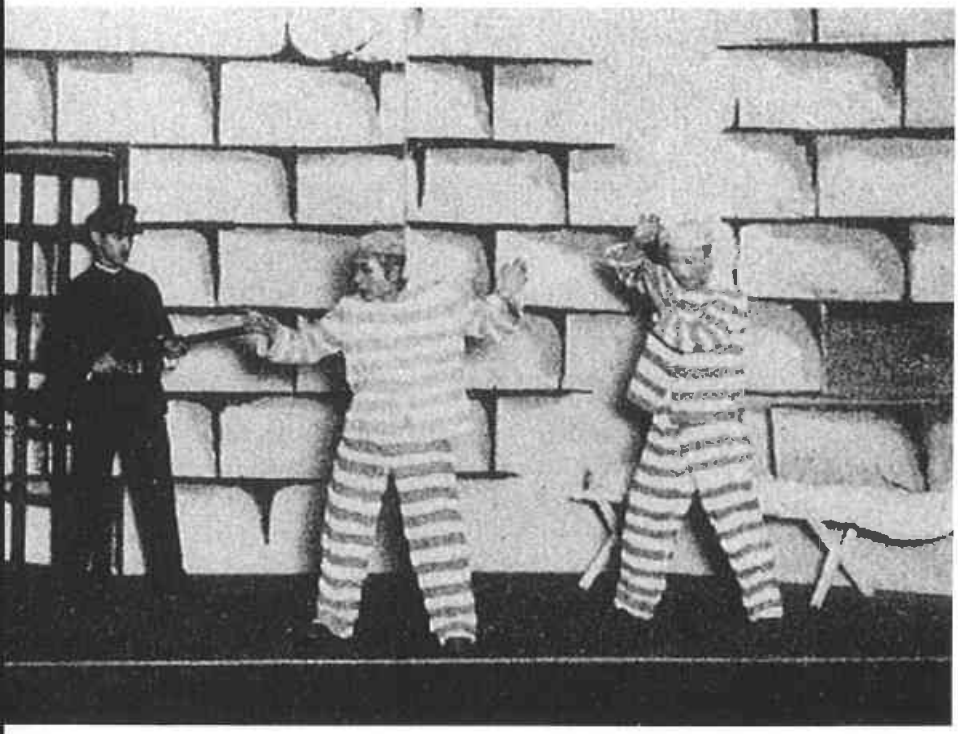


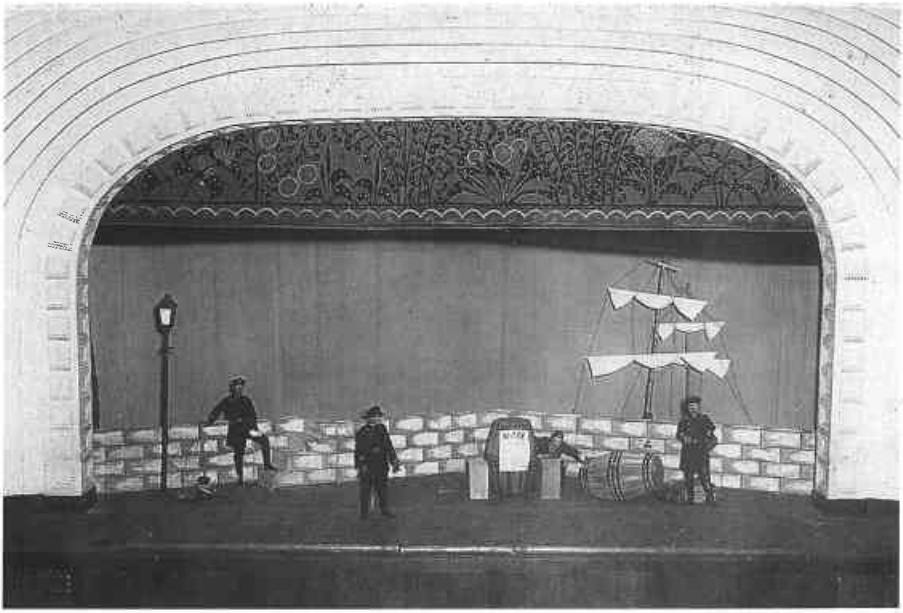
大正4年頃、大隈庭園における園遊会



昭和2年、大隈小講堂における「フリーダム」の劇

大正15年、第一回OBとの会

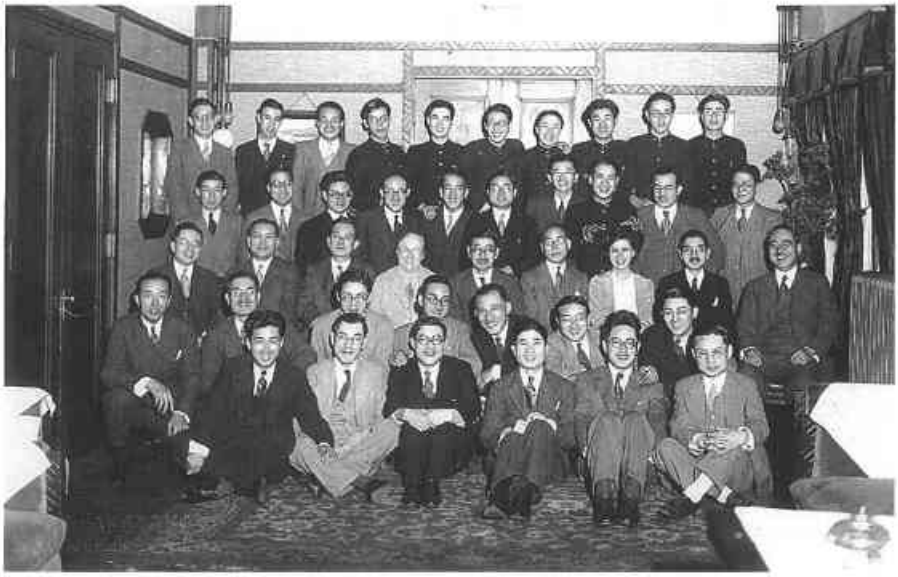




昭和4年、5年、「Rising of The Moon」劇

昭和6年、大隈大講堂における全早稲田英語劇大会

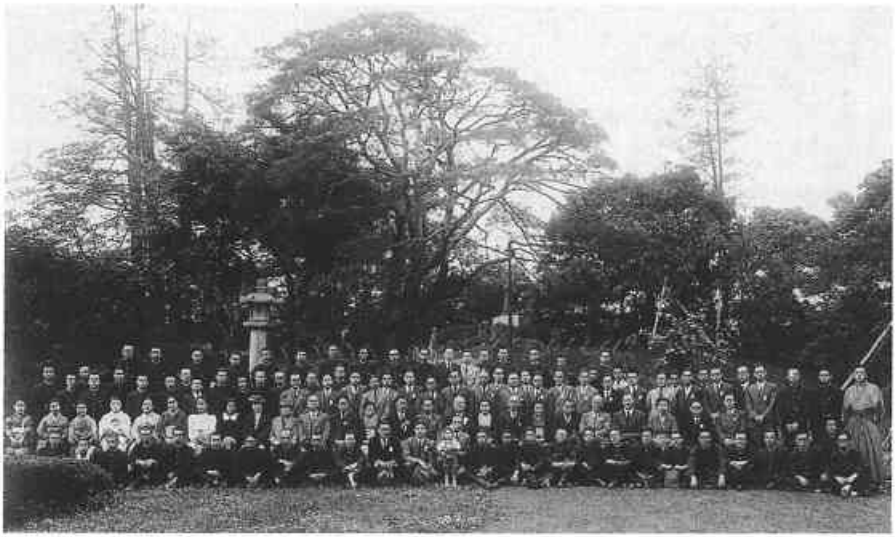
昭和11年、「マクベス」の劇5場13景を上演



昭和12年、稲門英語会総会

昭和13年、多摩川における全早稲田英語会野球大会

昭和14年、第二早稲田高等学院ESS野尻湖合宿



昭和15年、大隈庭園における高杉先生古稀祝賀園遊会

英語会の功労者北島夫人とメリーさん

昭和22年、第8回(戦後第1回)日米学生会議

昭和23年、第9回日米学生会議

英語会の講師バーバラ・シンチンガーさん

昭和25年、時事通信社主催英語弁論大会にて小野眸子さん優勝

昭和27～29年卒業生、MRS.BURKEを囲んで

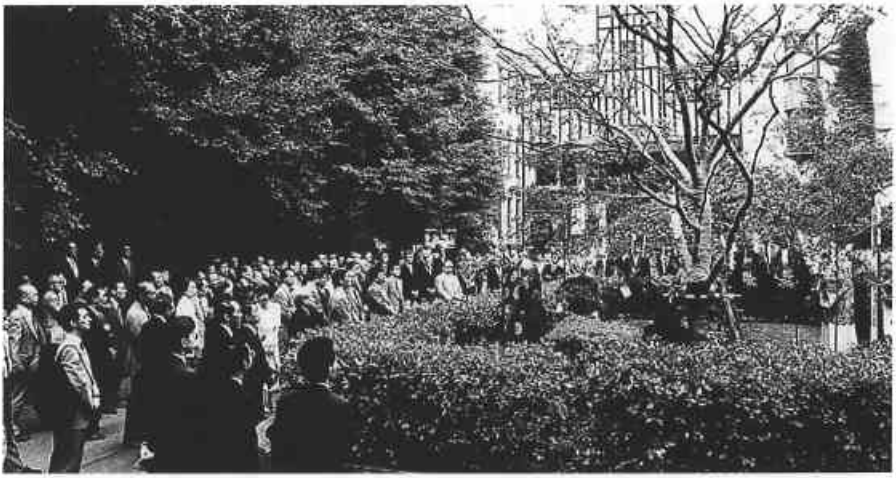
昭和30年、戦後第1回全関東英語弁論大会

昭和30年、英語会主催日米交歓音楽会

昭和34年、稲門英語会総会にて　左から緒方(昭12年卒)、藤原(昭6年卒)、潮田(昭3年卒)、長尾(昭12年卒)の各氏

昭和34年、英語会会室においてスカルノ大統領、大浜総長

昭和39年、駐日米国大使ライシャワー博士の講演



早稲田大学英語会創立百周年記念行事

1994年(平成6年)5月28日

記念植樹祭

早稲田大学演劇博物館前にて

記念式典

井深大記念ホールにて

記念祝賀会

リーガロイヤルホテル早稲田にて

早稲田大学英語会創立百周年記念祝賀会

英語会100年間にお世話になった、諸先生、諸先輩に感謝をこめて……。

早稲田大学英語会歴代会長

初代
会長　鳩山　和夫（郎）
副会長　長田　忠一

二代目
会長　大隈　信常
副会長　高杉　瀧蔵

三代目
会長　高杉　瀧蔵
副会長　伊地知純正
　　勝俣銓吉郎

四代目
会長　伊地知純正
副会長　中島　正信

五代目
会長　中島　正信

六代目
会長　伊東　克己

七代目
会長　東後　勝明

稲門英語会歴代会長

中瀬　精一（明治40年卒）
大柴亀太郎（明治44年卒）
潮田　定一（昭和3年卒）
中瀬　洋一（昭和18年卒）
富田　広　（昭和22年卒）
中瀬　正一（昭和24年卒）
松橋　功　（昭和31年卒）

アドバイザー（顧問団／指導陣）

●明治時代（1904—1912）
大山郁夫先生
北島リリアン夫人
ケート夫人
マクレガー
マクドナルド先生
吉岡源一郎

●大正時代（1912—1926）
北島リリアン夫人
ケイト先生

アドバイザー（顧問団／指導陣）

ミドルトン先生
コックス先生
ベニングホフ先生
勝俣銓吉郎先生
武信由太郎先生
ジーマン先生
クロッカ先生

●昭和時代（1926—1989）
（初期）
トマス・ライエル先生
萩原恭平先生
北島リリアン夫人
ベーカー先生
スタンレー先生
乾　精末先生
千葉恒心先生
中村　伸先生
（中期）
北島リリアン夫人
北島メリー夫人
伊東(旧姓テイクワナー)夫人
萩原恭平先生
山根行雄先生
河辺　晋先生
尾嶋庄太郎先生
野口　勇先生
オーウェン先生
ガントレット先生
デルレイ先生
斎田牧師
ベル先生
山村愛蓮(アイリーン)嬢
岡田嬢
木村道子先生
五十嵐新次郎先生
バーバラ・シンチンガー嬢
（後期）
萩原恭平先生
木村　潔先生
フレンド先生
ウィンクラー夫人
マダンシー夫人
ヘルム夫人
デズモンド夫人
Mr.デューカ
小倉　隆（会友）
橋本　征夫（会友）

（敬称略）

Message to the Waseda University English Speaking Society

The centennial of the Waseda University English Speaking Society is an occasion for all of us to reflect upon the passage of time and the changes that have taken place throughout the world over the past hundred years. History bears witness to the efforts of humankind-often noble, sometimes base-to shape our world and influence those who live in it according to certain principles, beliefs and ideologies. The more noble of these efforts have led to great technological developments, medical and scientific advances, the exploration of space, and the unparalled ability to transmit and receive information around the globe. Along with all our technical achievements, over the past century one basic human desire has remained unchanged : the need to make contact with our neighbors and to share with them our ideas and aspirations.

Founded a century ago, the Waseda University English Speaking Society has built an admirable tradition of pursuing excellence in rhetoric, oratory, and drama, that has challenged successive generations of students not merely to expand their abilities in the English language but to engage their neigbors in the world at large in a dialogue to promote better understanding of their differences and similarities.

This vision of the role of the English Speaking Society, among Waseda University's many other admirable academic traditions, has been of great benefit to Japan many times over, as many alumni of Waseda have made their own significant contributions to international understanding. Relations between our countries have also benefited from the past and current efforts of Waseda graduates, and American leaders including Robert Kennedy, Ambassador Reischauer, and, most recently, President Clinton, have enjoyed the opportunity to visit the University, meet with some of Japan's future leaders and their teachers, and support and encourage their academic efforts. I look forward to the occasion when I can pay a visit myself and learn more about Waseda University.

In the meantime, it gives me great pleasure to send my warmest congratulations to all of you on the centennial of the English Speaking Society. I wish you much success in your study and use of English, and in your efforts to promote better international communication and understanding.

Walter Mondale

前駐日米国特命全権大使　Walter F. Mondale

On The Centenary of the Waseda University English Speaking Society

It is a great pleasure and delight for me to be able to offer my heartiest congratulations to the English Speaking Society of Waseda University on the occasion of the hundredth anniversary of the Society's foundation.

The World has changed considerably in those hundred years, and so has the role of English. one hundred years ago English was probably already the most important international language, but now its position is even more marked. After Chinese, it has the second highest number of native speakers, and is the most commonly studied second language throughout the world. it has become the main language of international finance, science, and diplomacy. Around 28% of all the books published in the world are published in English. By the year 2000, it is estimated that more than one billion people will be learning English.

English Speaking Societies, such as Waseda University's, have played a truly important role in the growth of the study of English in Japan. I wish all of the members every success in their continued studies of English. This year is the year of Festival UK98 in Japan. I hope that all the Society's members will take advantage of the many events taking place to learn a little more about the United Kingdom, and that eventually, they will all visit the United Kingdom too. You will all certainly be welcome.

David Wright

駐日英国大使館英国大使 Sir David Wright

停滞は死滅である

早稲田大学英語会が創立100周年の記念すべき節目を迎えるにあたり，大学を代表して，心よりお祝い申し上げます。

創立者大隈さんは，総長就任時にこう述べられました。「私が総長として諸君に誓うところは，諸君と協力して，わが日本をして世界的活動をなさしめんとすること，これであります。即ち学問の上に於いて，道徳の上に於いて，将た文芸技術の上に於いて，世界列強と競争して，これと馳騁して一歩も譲らないことにしたいのであります」と。

「世界の道は早稲田に通ず」と言われた当時の名声を取り戻すためにも，早稲田大学は今こそ大隈さんの精神に立ち返り，研究教育において「世界へのゲートウェイ」となることを目指さねばなりません。早稲田に停滞は許されません。それは死滅を意味するからです。先達たちの高い理想に近づき，「学の独立」の伝統を守りぬくためにも，本学は断えず自らを革新し続けなければならないのです。

貴会の活動は，まさに大隈さんの理想に適うものであり，名実ともに本学を代表するサークルの一つであることは言うまでもありません。本学の歴史とともに歩んできた貴会の創立100周年のはなむけに，前述した大隈さんの言葉を送らせていただきたいと思います。「停滞は死滅である」。

貴会の今後ますますのご発展を心よりお祈りいたします。

早稲田大学総長　奥島孝康

――英語会のレーゾンデーテルは不変

稲門英語会会長
松橋　功

英語を学ぶことにこだわり続ける同志（コリーグ）の集まりとしての早稲田大学英語会。建学の年から10年目に創立されて，爾来100年の歳月が流れました。

大学の，しかも文科系のクラブが，100年もの間，間断なく活動を続けて来たこと自体，誠に稀有なことです。が，それ以上に誇るべきことは，早稲田大学の建学の理想を，「集まり散じて人は変われども」，英語力の涵養によってそれを実現せんとして，その情熱を，今日まで100年間絶やすことなく燃やし続けて来た，そのことであります。

ここで，100年前に「英語会」が創立された当時の時代背景を見てみますと，恐ろしいほど今の時代に似ていることに驚かされます。昭和35年から28年間，「英語会」の会長をつとめられた伊東克己先生は，その時の状況を，『稲門英語会だより』第１号（平成５年10月）の中で次のように書いておられます。

「高尚の学問を邦語をもって教授することを校是として早稲田の地に開校した東京専門学校ではあったが，官学も私学もこぞって外国人教師を雇い，最新の英学を直接吸収しているという状況の中にあっては，西欧先進国の学問，文化を摂取するためには，どうしても英語をやらねばならないという気運が英語会を開かせたのである。（中略）学の独立とは言ったものの，邦人教師の邦語による教授では，速成二流の教育との批判は免れず，正式な大学としての認知を得る目的のためにも，英語力の涵養が必要不可欠であった。（中略）在日外国人に対する治外法権を認めていた不平等条約は，同時に外国人の日本国内での住居・活動をも制限するものであったから，これを改正するのは今でいう規制緩和，自由化，国際化を実行することになるので，経済はもとよりあらゆる分野で，外国語，特に英語

が必要になると考えられていた。」

翻って，今の時代はどうでしょうか。明治維新や「終戦」にも匹敵するほどの大変革が急ピッチに求められている今の時代。それは，グローバル化，ボーダーレス化，スピード化，ダイレクト化の時代であります。そしてそのキーワードは，国際的コミュニケーション。そのコミュニケーションの手段として，英語が今や世界共通語(lingua franca)として広く使われている今の時代は，「英語の時代」とも言えます。

さらに，わが「英語会」の同志の立場を代弁してやや牽強付会的に言えば，今の世界的な激しい動きに日本全体が対応しきれずに，諸々の改革が遅々として進まないのは，多くの識者が指摘する如く，その背景のひとつとして，今の日本が「英語の時代」ともいうべき時代の流れに乗り切れずに，遅れをとっていることにあるのではないか，と思われます。

事実，政治，経済，ビジネス，文化，情報技術等の分野で，英語によるコミュニケーション能力の不足が多くの誤解と孤立とコスト高と日本バッシングを生んでいることは否めません。

国際会議等の場で，通訳を介さないと自分の意思を伝えることが出来ないのは，日本人，それに中国人と言われます。確かにそのとおりです。が，その中国人が，「英語の時代」に合わせて，本腰を入れて，しかも国家レベルで急ピッチで動き始めている現在，しかも彼等の外国語能力は日本人よりも数段上であることを考えますと，取り残されるのはいよいよ日本だけとなります。残念なことに，日本にはその辺の危機意識が稀薄です。のみならず，英語を使わない，英語を忘れてしまう，ことを特権意識的に誇らしげに言う風潮が未だ政治家や官僚の間に残っています。そして，英語の教育改革が依然として議論の域を脱していないのは，ゆゆしき問題であります。

と考えてきますと，英語を学ばなければ国際社会から孤立してしまうという今の日本の時代背景と，100年前に「英語会」が創立された当時とはあまり変わって

いないことに改めて気が付きます。違う点があるとすれば一点。それは，100周年記念式典で，現「英語会」会長の東後先生がいみじくも指摘されたとおり，「英語は今や学ぶ時代から使う時代に入った」，という点でしょう。まさに，その言やよし。目的から手段としての英語として，より高いレベルが求められている，奮起しよう，という意味で，強い共感を覚えます。

早稲田大学英語会のレーゾンデーテルは不変である……このたび『100年史』を発行するに当たり，100年の活動の歴史を振り返ってみてこのことを強く感じます。この『100年史』が，早稲田大学英語会の次なる100年に向けて，さらなる発展につながる貴重なクロニクルになることを心から願うものであります。

発行に当たっては，多くの同志（コリーグ）に多くの時間を頂戴し，多くの手をわずらわしました。ここに，心から感謝と御礼を申しあげます。　【昭和31年卒業】

——次の100年を模索して

早稲田大学英語会会長
東後勝明

英語を追い求めた早稲田の杜にもとうとう100年という歳月が流れ，その節目をこうして記念誌の発刊とともにお祝いしていただけることはこの上もない喜びであります。しかし，また大変な脅威でもあります。いつまでも安閑としてこの喜びに浸っているわけには参りません。刻々と刻まれる時の経過の中で，この100年を振り返り，同時に次の100年に向けて早くも新たな一歩を踏み出さなければならないからです。

これまではひとことで言えば，英語にロマンを求め，ひたすら英語を追いかけ，英語自体を身につけることを目的としてさまざまな活動が繰り広げられてきたように思われます。しかし，これからの100年はもはや英語を追い求める時代ではなく，英語に青春のロマンをなどと悠長なことを言ってはいられません。執ような時代の要請を受け，英語を使ってこれまでにも増して何かをなし遂げていかなければならない大変な時代に突入していると言えましょう。しかもその何かを当分は模索し続けることになるのではないでしょうか。

自己を高める意味でも，国内をよりよく治める意味でも，そして世界でより大きな貢献を果たす意味でも，今後は思いきって英語を研究や学習の直接対象の地位から引きずり降ろし，文字どおりコミュニケイションの手段として徹底的に駆使していかなければならないでしょう。

しかし，「いや，英語会こそそれをやってきたのではないか」の思いも否めません。でも，それではこれまでにやってきたことをそのまま踏襲すればいいのかと言われればやはり，そこまでは胸を張ってもいられません。そのためには，国は何をなすべきなのか。大学は何をなすべきなのか。学校教育，なかんずく外国語

教育では何をなすべきなのか。そして我が英語会はさらに新たな目標として何を定め，何に向かって新たな一歩を踏み出すべきなのかが厳しく問われていると言わざるを得ません。

私はそれを考えるひとつの目安として次のことを提案したいと思います。

1）英語を外国語と見なすことを止め，日本人のもうひとつのことばとして取り組んでいく。

2）英語を知識として身につけることを第一義の目的とせず，英語をコミュニケイションの手段として使って何かを行うことを目的とする。

100周年に集うすべての人々の共通の関心事と夢は，これまでの100年という軌跡を踏まえ，我が英語会が今後どのような方向に進むべきかに思いをはせることでありましょう。そして，学内で英語会をあずかる私どもにとりましては，それをつきとめることを最大の責務と考え，当面は模索を続ける所存でございます。何卒変わらぬご指導，鞭撻賜わりますようお願い申し上げます。

最後に本誌の発刊にあたり終始献身的に貴重な時間と労力をそそいでくださった早稲田大学英語会前会長の伊東克己先生はじめ稲門英語会の諸先輩，編集の労をとられた多くの方々に心からお礼申し上げます。　【昭和38年卒業】

早稲田大学英語会100年史

目次

口絵　写真で見る英語会
謝辞
祝辞
Message to the Waseda University English Speaking Society――――002
前駐日米国特命全権大使　Walter F. Mondale
On The Centenary of the Waseda University English Speaking Society――――003
駐日英国大使館英国大使　Sir David Wright
停滞は死滅である――――004
早稲田大学総長　奥島孝康
刊行にあたって
英語会のレーゾンデーテルは不変――――005
稲門英語会会長　松橋　功
次の100年を模索して――――008
早稲田大学英語会会長　東後勝明

第1部　英語会通史
第1章　夜明け前―明治25年――――伊東克己 017
英語会のあけぼの／建学の精神「学の独立」／安政の不平等条約がもたらしたもの／条約改正と英語会／内地雑居と英語会／開国(自由化)と英語会
第2章　英語会黎明期―明治26年～35年――――伊東克己 028
英語会の誕生／東京専門学校から早稲田大学へ／英語会の生まれた背景
第3章　再生から中興期へ―明治36年～大正15年――――『60年史』より 033
早稲田大学商科予科の開設／英語会の組織が固まる／英語劇と英語演説会／中興期の大正時代／旺盛に新知識の吸収／昭和への掛け橋

【コラム】
バイブル・クラス／伊東克己　英語会の歌／伊東克己　早稲田英語会発祥当時の追憶／高木隆吉(明治40年卒)　英語会の思い出／立川長宏(明治40年卒)　観光ガイドに暮れたアルバイト／金津熊夫(明治40年卒)　吾が英語会の回想／大柴亀太郎(明治42年卒)　早稲田大学即英語会／小林董次郎(明治44年卒)　シュークリーム／加唐卯之助(明治44年卒)　思い出の人々／石井真峰(大正5年卒)　役に立った英会話／高橋力男(大正9年卒)　英会話の先生になりそこなう／殖栗文夫(大正14年卒)　回想と提言／中島正信(大正15年卒)　英語会出張所／松井翠声(大正15年卒)

第4章　昭和初めの隆盛期—昭和元年～14年————『60年史』より 055

世界不況と軍国主義の擡頭／英語会の組織拡充／稲門英語会の創設／野尻湖合宿の始まり／スピーチコンテスト／四大学英語劇大会

【コラム】
二、三の思い出／前田潔己(昭和2年卒)　昭和の初めの頃／潮田定一(昭和3年卒)　二八会から「稲門英語会」へ／一又正雄(昭和5年卒)　大不況の頃の英語会／藤原研三(昭和6年卒)　想いを当時に寄せて亡き人々に捧げる／緒方省吾(昭和12年卒)　合金の鎖／西前文吾(昭和14年卒)　大学英語会の思い出／梶貞夫(昭和14年卒)

第5章　戦中戦後の混乱時代—昭和15年～24年————『60年史』より 072

第二次大戦中の英語会／学徒出陣と勤労動員／終戦と食糧難／英語会活動の再開／OBの消息を訪ね名簿作成

【コラム】
思い出すままに／富沢慎哉(昭和16年卒)　昭和17・18年の英語会の活動／中瀬洋一(昭和18年卒)　野尻湖合宿の思い出／森田徳次郎(昭和19年卒)　戦中戦後／豊田誠(昭和21年卒)　英語禁止から英語ブームへ／服山邦雄(昭和22年卒)　ESS唯一の会員となって／富田広(昭和22年卒)　戦中、戦後のWESS／中瀬正一(昭和24年卒)　ESSで青春を謳歌／松本政司(昭和25年卒)　1948年10月から49年9月までのESS／高野洋(昭和

26年旧制卒）マダム・チェアマンのメモ／小安総（昭和26年卒）
第6章　戦後の再興期―昭和25年～34年――――『60年史』より 091
戦後の混乱ようやく収まる／四大学英語劇の復活／野尻湖合宿の再開／日英ディベイティングコンテスト
【コラム】
敗戦直後のESS／石榑和夫（昭和27年卒）国内外での活躍の原動力／北村幸子（昭和28年卒）私とWESSの四年間／塩崎満（昭和29年卒）私はWESSの卒業生／大和田龍夫（昭和30年卒）英語会の思い出／早川守（昭和31年卒）アルサロ式英語／望月泰道（昭和32年卒）WESS－昭和32年卒業組／塩見健三（昭和32年卒）我が人生道場－ESS／渡辺五郎（昭和33年卒）関西英語討論遠征／木村千恵子（昭和34年卒）
第7章　高度成長から現代へ―昭和35年～平成4年――――東後勝明 104
ひたすら英語を求めた日々／ホームミーティングの誕生／ドラマに賭けた夢／騒然とした世の中で／ドラマの危機／ディベイト全盛期／スピーチも隆盛期に／チャレンジを受けて立つ／かげりの見えた1980年代／新たな対応に苦慮／新旧会長の交代／1990年代と今後の課題
【コラム】
国際学生会議の思い出／金井利雄（昭和35年卒）安保闘争とESS／福田浩人（昭和36年卒）WESSは人間形成のBASE／西原恢（昭和37年卒）国際的な考え方を与えてくれたESS／青沼浄（昭和38年卒）雑沓と混雑／小原雄介（昭和39年卒）我が青春時代の宝物／田中久雄（昭和40年卒）早馬会の思い出／山内正樹（昭和41年卒）42年度卒（ガキの会）について／大垣嘉彦（昭和42年卒）早稲田闘争の中で／大渕加寿夫（昭和43年卒）WESSドラマ黄金期との出会い／柴原孝光（昭和45年卒）第二次安保闘争の頃の混乱はおとぎ話か／大久保賢三（昭和46年卒）TIDLの思い出／鏡俊一（昭和47年卒）僕達の野尻湖の7日間／本田博（昭和47年卒）ドラマ中断の危機／熊谷伸成（昭和49年卒）今も忘れ得ぬ感動／小倉雅博（昭和50年卒）大隈杯スピーチ／梅田和彦（昭和51年卒）思い出を重ねる昭和52年組／山川薫（昭和52年卒）ホームミーティングの盛ん

だった頃の思い出／平松昌雄(昭和53年卒)「いとしのエリー」の流行った頃／野口元久(昭和56年卒) さらば、一ッ橋講堂／嶋田太郎(昭和57年卒) 真夜中の差し入れ／涌井弘行(昭和60年卒) 時には昔の話を／堀光太郎(昭和62年卒) "English Time"／清水将浩(昭和63年卒)ホームミーティングへの回帰／西田正彦(平成3年卒) Farewell Partyのこと／大木崇(平成4年卒)

第2部　英語会の活動

第1章　ドラマ—英語劇の流れ——遠間昌平 145

「演説」と「演劇」／英語劇が本流／英語劇のマンネリ化／オール早稲田英語会の誕生／演劇界に人材を輩出／英語劇の公演が再開／ドラマ・フェスティバル／各年の公演演目

【コラム】

舞台監督ノート／遠間昌平(昭和36年卒)

第2章　スピーチ——小林公子 169

明治時代のスピーチ／例会では必ずスピーチが／オラトリカル・デパートメント誕生／大恐慌の到来／軍靴の響き／戦争中といえども／スピーチのタイトルを追ってみると／関心の高かったスピーチ／70年から80年へ

第3章　ディスカッション——奥田斐規 185

役に立った討論会／「ディスカッション」の流れ／英語会活動の復活／ディスカッション活動／関西遠征の経験／世相を反映するディスカッション・タイトル

【コラム】

関西遠征・戦後第1号の旅／田崎義信(昭和33年卒)

第4章　ディベイト——小林公子 202

なじみのなかったディベイト／ディベイトの魅力／ディベイト・セクションの誕生／知的なゲーム／ハウ・ツー・ディベイトも／時間が足りない／英語力と社会的関心／成長期を迎えたディベイト／ますます盛んになったディベイト／そしてこれからも

第5章　ホームミーティング――――小林公子 215
七つのホームミーティング／まずホーム対抗のディベイトを／その問題点とは／誕生の時代背景／大きな問題児／新しい試み／日常会話を学びたい人もいる／人間関係も大切／永遠のジレンマを持ちつつも
【コラム】
ホームミーティング事始め／吉田伸弥(昭和36年卒)
「Group Study」－The New York Timesを読む／木村正樹(昭和35年卒)
第6章　国際交流――――伊東克己・川岸高真 229
ライシャワーと英語会／戦前のハワイ大学との交流／ハワイ・早・慶ディベイト／ハワイ遠征／早稲田・ハワイ大交流年表／近いハワイ、遠い日本／日米学生会議など
【コラム】
ハワイ遠征準備活動顛末記／島田哲夫(昭和53年卒)　第1回ハワイ遠征記／柏沢由紀一(昭和54年卒)
第7章　合宿――――伊東克己 246
昭和4年　両学院野尻湖合宿／昭和6年　第1回野尻湖合宿／昭和7年　若さ溢れる合宿／昭和8年　定着する合宿活動／昭和9年　合宿の反省／昭和10～17年　合宿らしい合宿／昭和14,15年の野尻湖／大戦と合宿／学生のいないキャンパス／合宿の復活／野尻湖合宿の歌／野尻湖にギターがこだまする／野田屋から宮川旅館へ
おわりに
創立100周年記念事業へ向けて
稲門英語会常任幹事　小林秀之
新生稲門英語会について
稲門英語会幹事長　志賀　隆
【コラム】
早稲田大学英語会100周年記念祭
参考文献／資料・写真提供者／編集協力者一覧
あとがき　『100年史』刊行委員会

第１部

英語会通史

WESS 100

第１章

夜明け前

明治25年

英語会のあけぼの

早稲田(東京専門学校)に英語会ができたのは明治25(1892)年12月であった。その発起人の名前は文献にも残っていない。「学生某々等」と書かれているだけである。

当時はこのような研究会が行われると教職員もその活動に積極的に参加した。学生の会というよりも学校のメンバー(教職員と学生)の会であったから，英語会にも田原，石川，大隈の諸講師が参加した。

またそのころ，「英語会」という言葉は，研究会の組織を指すだけでなく，「運動会」等と同じようにイベントをいう言葉でもあった。その初会が明治25年12月22日に「盛んに挙行」されたのである。そこで，大学80年史や同100年史等はこの日を英語会発足の時としている。米国ニューイングランドで青春を過ごした大隈英麿などが，かの地のクリスマスを懐かしく思い起こして，25日も近いこの日を選んだのであろうか。

『早稲田文学』に紹介された３人の教員のうち，大隈とあるのは大隈英麿と思われる。英麿は東北の藩主南部家から大隈家に入った養子で，後に病気のため南部家に戻った。東京専門学校の初代校長である。明治３(1870)年13歳で渡米し，ダートマス，プリンストンで

天文学，数学を学んでバチェラー・オブ・サイエンスの学位を得て明治11(1878)年に帰国した。

第2回が明治26(1893)年1月2日に行われ，その記事が『早稲田文学』の同年2月号に出ている。初会が前年12月に行われたこともこの記事によって知り得るのである。第2回では上記の教員たちが「マルチャント・オフ・ヴェニスの対白」を，学生諸氏は演説朗読等を演じた。聴衆には外国婦人も数名いて「すこぶる盛ん」だったという。

このような英語熱は早稲田だけに起こったものではない。明治25年11月には青山学院と明治学院が共催で文学会を開き英語の演説と朗読を催しているし，東京大学，第一高等学校，東京高商(現一橋大学)等の学生が組織する英語会も本郷で活動していた。慶応，明治，東京高師等の英語会活動もこのころ始まっている。

これらの英語会活動は，演説や朗読が主であったが，早稲田の例に見られるように西洋演劇の対白を仕草入りで演じたりする者が結構いた。当時演劇といえば歌舞伎のことで，川上音二郎が大日本改良劇と称して壮士芝居の旗揚げをしたのが明治24(1891)年で，坪内逍遙と島村抱月が率いる新劇の先駆的劇団「文芸協会」が誕生したのが明治39(1906)年であることを思えば，『早稲田文学』の評者が「或いは梨園(歌舞伎界)以外の一種の演劇がかかる辺(英語会活動)より生まれ出ずるに至らんか」と期待したのは興味深いことである。すなわち日本の近代演劇の発祥は英語会活動だったといえるのである。

なぜ英語熱がこの時期に高まったのか。なぜ英語会活動がこの時期に起こったのか。もちろん維新以来4

分の１世紀が経過して，西欧文明の大きな流れが澎湃として日本の文化を飲み込もうとしていた時代であったからだが，次第に日本語による研究教育が普及し始めて学生の英語が下手になったことにも一因がある。

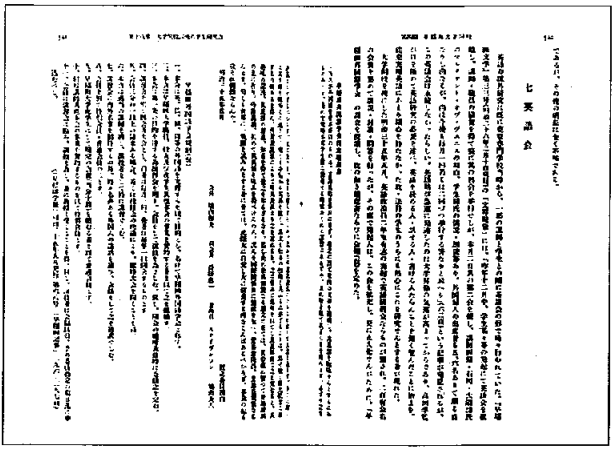
明治初年の高等教育では，東京大学をはじめとして，北大の前身の札幌農学校でも，東京高商の前身の商法講習所でも，すべて外国語，特に英語で授業が行われた。招聘された外国人教師はもとより，日本人教師も外国語で授業をした。討論も，試験も外国語であった。札幌農学校のように寮生活も外国人の指導を受けたところもあったので，このころ高等教育を受けた人々の英語は本物であった。

このような環境に日本のエリートたちは存外抵抗なく順応していった。なぜなら，そのころ学問というものは即外国語学習であって別のものではなかったからである。長い歴史を持つ漢学，すなわち中国古典を基礎教養として育ち，近代の黎明を告げる蘭学によって目を開かれた彼らは，さらに豊富な英学の世界にどん欲に挑戦していったのである。彼らにとって学問とは当然のように外国語の世界だったのだ。

建学の精神「学の独立」

高田早苗は長く大隈重信を助け，早稲田の学長，総長を歴任した人物で，東京大学の出身であるが，若い頃には書いたり議論したりするのに日本語よりも英語のほうが良かったと述懐しているくらいだ。エリートたちは，日本語で教育を行うのは「速成変則」とさえ考えたのである。

これに対し「学の独立」を建学の精神とするのは早稲



『早稲田大学百年史』の「英語会創設」の記述

田であった。今では「学の独立」は政治権力の学問研究に対する干渉を排除するという意味に使っており，そしてそれもきわめて重要な解釈であるが，これは高田早苗が後から付加したのであって，当初は漢，蘭，英等にこだわらない日本独自の自主的な学問研究という意味だった。具体的には日本語で研究と教育をすることであった。大隈重信とそのブレーンのナンバー１であった小野梓は，植民地的な学問のあり方に我慢がならなかったのである。それ故「邦語をもって教授する」ことを建て前とする東京専門学校を建てたのだ。

そして，後の文相井上毅の国語教育論をまつまでもなく，形の上では日本語による授業や研究が定着していったのは歴史が証明している。だがそのために日本の教育や研究は国際性の面で大きなハンディキャップを持つことになるのである。このような二律背反的な事態は大隈重信や小野梓が望んだものではなかった。後に商学部長，英語会会長になった伊地知純正（明治40年卒）は学生時代に，「英語をやらんといかんぞ」と大隈

に言われて発奮している。学長高田早苗は「読めます，書けます，話せます」の3拍子揃った英語を奨励した。だから早稲田の指導者がむやみに国粋的だったわけではない。

しかし，明治の年が進むにつれて，完全英語教育を受けた教授たちには歯がゆい学生も増えたことだろう。また学生たちも語学力不足を自覚したに違いない。そこに修練の場として英語会の必要が発生したのである。そして日本語による教育と研究の実態は百年を経て何等変わらないので，現在も英語会の存在理由があるわけだ。

安政の不平等条約がもたらしたもの

以上のように英語会活動の発生には教育環境上の必然性があるわけだが，当時(明治26年)の『早稲田文学』の記者は，一般論として，条約改正実施の機運が近因だと考えている。なるほど，英語会活動は早稲田だけに起こったものでなく，官立私立を問わず当時の高等教育機関に澎湃として発生したものであったから，若いエリートに対して，時代が英語能力の獲得を要求したものであろう。

不平等条約の改正は，現代ふうに言えば国際化，規制緩和，市場開放であるから，当然，経済や文化の交流が増えると考えられたのである。

そのため，明治も20年代になって，英語を教える学校が幾つも新設され，在来校でも英語科を設けるところや，英語の時間を増やすところが多かった。英語の演説や討論等も方々で行われた。帝国大学文科大学に英文学科が設けられたのは明治20(1887)年。同年には

徹底的に会話体の「正則文部省英語読本」が編纂発行された。磯部弥一郎がフルベッキ博士と国民英学会を設立して英語教育を行ったのは明治21年である。こうした流れの旗を振ったのは明治18年に第1次伊藤博文内閣の文相に就任した森有礼であった。森の外国語奨励は有名であるが，そのために明治22(1889)年には国粋主義者に暗殺されてしまうのである。

大隈重信は外務大臣として条約改正に取り組み，個別交渉と段階的実施を試みたが，明治22年に山県有朋の反対と，爆弾テロに遭遇して挫折する。改正条約の調印は明治27(1894)年，実施は明治32(1899)年を待たねばならなかったのである。

条約改正の挫折は明治20年代初頭の英語熱を一度冷ましてしまったが，数年後，国際関係が緊張したため，国際交渉と交流の技術として英語の重要性が再び見直されるようになった。不平等条約の改正は必至の情勢であったし，日本の朝鮮植民地化政策をめぐって日清・日韓関係が緊迫したり，日本警官がロシア皇太子に切りつけた明治24(1891)年の大津事件が発生したりして，極東に緊張が高まると，弱い日本と英米の関係は緊密になっていく。この図式は，明治27，28(1894，95)年の日清戦争前夜の当時も，10年後の日露戦争のときも，近くは朝鮮戦争のときも同じである。

このようにして明治25年に月に1，2回は開こうと意気込んで始めた英語会だったが，その後の消息は残っていない。しかし，100年前の冬に英語会の名のもとに，国際コミュニケーションの修練を試みた人々の努力は評価されるべきものであり，この先覚者たちを早稲田大学英語会の祖とすることによってその功績を顕

彰することになったのである。

条約改正と英語会

早稲田大学を創設した大隈重信は，徳川幕府が先進5ヵ国と締結した安政の不平等通商条約(安政5,1858)の改正に努力した政治家の一人である。そのために反対者から狙われて，爆弾を投げられ、重傷を負った。

爆弾を投げたのは国粋主義者である。日本の国権を回復しようと不平等条約の改正に奔走した政治家を国粋主義者が襲うというのは一見矛盾しているように思われる。これはいったいどういうわけだったのか。

安政条約によって日本は開国し、その産業革命が始まる。日本は開国することによって，外国の技術と思想を導入し，国内の低賃金労働を利用して急速に産業化を進めた。ところが，この条約は，一方において，外国人商人を開港の居留地に閉じこめて国内での商業活動を禁止し，外国資本の流入を拒否するものであったから，いわば「人と金の鎖国」状態は明治時代前半まで続いていたのである。したがって，安政の条約を改正することは，日本における外国の治外法権を撤廃し，日本の関税自主権を回復するという国権回復の側面と，外国商人の日本における経済活動と外国資本の流入を自由化するという経済自由化の側面を持っていたのである。外国商人の日本国内における商業活動の自由化は，一般に「内地雑居」と呼ばれた。

条約改正は「治外法権の撤廃」と「関税自主権の回復」という2大目標を達成しようとするものであったが，いわばその交換条件として「内地雑居」権が外国人に提供されようとしたのである。

条約改正のためには，政治，法制，社会，文化のあらゆる面でのインフラ整備が必要であった。憲法，刑法，民法，商法が制定あるいは改正された。開国後間もない日本の法制不備を憂える諸外国を納得させるために，治外法権の撤廃と引き替えに大審院判事に外国人を任命する案が大隈外相(黒田内閣)によって提出されたりした。社会体制や文化が欧米のレベルにあることを諸外国に認識させることが必要と考えられたから，いわゆる鹿鳴館時代が演出され，鹿鳴館のみならず，早稲田の大隈邸でも貴顕と外人を招いて舞踏会が催されるという始末であった。

そうしたことは国粋主義者には軽佻浮薄な欧化主義と認識され我慢できなかったのである。また，日本を発展途上国と考えた経済学者や財界人は保護主義の立場から当初条約改正論に反対を唱えた。文明開化を唱道した福沢諭吉でさえもその一人であった。1990年代後半における金融ビッグ・バンの衝撃を思えば，当時の経済社会が期待と恐怖にどれだけ動揺したかは容易に想像できよう。年長の読者は，終戦後の鎖国的経済時代から，貿易，為替，資本の自由化など段階的に行われた経済の自由化・国際化にそのときの社会や財界がどう反応したかを思い起こすだろう。

内地雑居と英語会

「内地雑居」とは外国人に，居住の自由，旅行の自由，営業の自由，土地所有の自由，を与えることである。経済商業活動の自由や，宗教布教の自由もこの内に入る。安政条約は治外法権と引き替えに外国人を開港に設けられた居留地に閉じこめた。しかし，平等条約の

もとでは，日本人が外国で享受するであろうところの自由と同じ自由を外国人に保証しなければならなかったのである。

かくして，明治の外交の最大課題の一つ，「条約改正」は，国権回復と内地雑居をめぐって幕末の攘夷論争にも似た第2の開国論争を巻きおこした。そして領事裁判権の撤廃(明治27)までには，「鹿鳴館」(明治16)から11年，大隈重信が片足を失ってから5年を要し，関税自主権の回復は明治44(1911)年になってやっと行われたのである。その間に民法商法等の法制は整備されて，外国人裁判官は実現しなかったが，「内地雑居」は明治27年から5年の猶予期間を経て，明治32(1899)年に実施された。

「内地雑居」の実施は，たとえて言うなら，太平洋戦争終結時の連合軍駐留のようなインパクトを日本国民に与えた。明治天皇は国民に対して品位をもって外国人と交際するようにと詔勅を発したし，政府も地方自治体もこぞって対策に腐心した。民間でも，国粋主義的外人排斥論から雑居歓迎論まで，雑居に対応する心得を説くさまざまな刊行物がベストセラーになるというありさまであった。その中にはキリスト教徒を迎える仏教徒の心構えや西欧的マナーを教えるものも，英語の会話の教科書もあった。

歴史は繰り返す。終戦当時(昭和20，1945)，連合軍駐留を迎えて，巷には英語会話塾や学校が雨後の竹の子のように焼け跡のバラックに看板を出し，ちり紙のように粗悪な紙質の英会話速成テキストが書店にも露店にも並んだ。明治の世では「内地雑居」を迎えて「民間には英語研究会四方に起こり，急に英学生も増加し」

(『内地雑居後の日本』横山源之助)という状況であった。

かくして，日本全国に英語会話研究会が生まれた。当時の制度でいう専門学校や国立の大学にも英語会が設立された。筆者の知るかぎりでも，本郷英語会や茗渓英語会などの名前が明治20年代から文献にあり，明治(当時は早稲田と同じく専門学校)の英語会は早稲田よりもかなり古い。慶応義塾の英語会も早稲田と相前後して設立された。これらは英語会，英語会話研究会，あるいは英語会話会を名乗ったので，いまでも英語部ではなく，英語会なのである。大学や学校だけでなく財界人の英語会も活発に活動を行った。すなわち，それは教育機関の管理システムに組み込まれた英語部ではなく，新しい雑居社会に備えて英語を話せるようにしておこうという身分を問わない日本人どうしの会話練習会だったのである。明治25(1892)年の早稲田の英語会では，学生とともに大隈英麿をはじめ何人もの教員がスピーチや劇の暗誦を試みている。

また，創立の当初から100年を経た現在にいたるまで常に英語会の主流にあったのは政経，法，商学部の学生であったが，これは，外国人の内地雑居という経済・社会的変革に対応するための英語会ムーヴメントが引き継がれてきたものである。

あえて言うなら，早稲田大学に商科(商学部)が設立されたのも，その設立に際して大学が英語に力を入れたのも，条約改正の結果である。明治25年に設立された東京専門学校の英語会も，明治36(1903)年に復活した早稲田大学の英語会も，条約改正という第二の開国に対応するための大隈重信，鳩山和夫，高田早苗らの教育施策の一環であったのだ。

開国(自由化)と英語会

行政改革，規制緩和，自由化，国際化，グローバル化，ビッグ・バンなど言葉は違っても，そして時代は違っても，日本国民の置かれた状況はなんら変わることはない。「条約改正」を第二の開国とするなら，これは第三の開国である。終戦後に貿易，為替，資本などの自由化が行われたときにも「開国」と言われたから，これは第四の開国と言ってもよい。開国の度に英語会はその存在理由を見なおされるのである。

なお，「条約改正と英語会」の項に関しては，東大の武田晴人教授が1996年11月にＮＨＫＴＶから放送した「産業革命の光芒 第二の開国」に負うところが多い。英語会が設立された社会背景については，明治時代の『早稲田学報』の記事などから，条約改正に関連することが分かっていて，その旨はすでに概略述べたところであるが，武田教授の社会経済史的分析は確実にこの見方を支持するものであったので，その一部を筆者の言葉で援用した。もし間違いなどがあれば筆者の責任である。再度のＶＴＲ閲覧には英語会友ＮＨＫ山内氏を煩わした。両氏に感謝している。

【伊東克己】

第２章

英語会黎明期

明治26年～35年

英語会の誕生

明治26(1893)年から明治35(1902)年まで英語会活動に類する早稲田の学生運動の記録は途絶えたが，この年の『早稲田学報』５月号は，英語政治科２年生の発起による英語練習会が同月16日に行われたことを次のように報道している。

「雨天にも拘らず，会する者二百余名にて，演説，討論，問答その他の演技ありて，なかなかの盛会なりき。」

発起人たちは，これをイベントとしての会から，組織としての会に発展させようとして，趣意書と会則を作り，「早稲田外国語学会」を創立した。会長は東京専門学校長鳩山和夫で，副会長は長田忠一，賛助員はスティーヴンソンと鳩山夫人である。

趣意書は漢文調でいささか難解だが，要約すれば，

「外国の書物を読んで思想が分かればよいというものではない。それでは内容の半分しか理解できない。自分で外国語を操り，文を書くことができて初めて本当の意味が分かるのだ。『況や国際関係日々に錯綜を加え，貿易いよいよ隆昌，交通益々頻繁』になろうとするとき，世界を舞台に活躍しようという者は，自覚して勉強しなければいけない」というのである。引用した部分は現代を言うかのようである。

だが，この外国語学会は少々理想主義に走りすぎたようである。その規則第１条によると，「本会は英，仏，独，清(中国)等の外国語を実習するを以て目的とし」とあり，焦点を絞ることができなかった。そのため，同学会の組織はその後うやむやになってしまったようだ。しかし，英語の練習会にかぎっていえば，1，2年のうちに英語会となって花を咲かすのである。

明治25(1892)年に最初の英語会を創った学生の名前は残っていない。そして，それが誰かを推理するすべもない。明治35(1902)年の英語練習会（外国語学会)の発起人も分からない。しかし，その中に，後に早稲田大学の教授となった２名の英才がいたと推測することは可能である。英語練習会の発起人が，氏名は書いていないけれど，英語政治科２年生であることは『早稲田学報』の記事で明らかである。伊藤重次郎と大山郁夫は当時英語政治科２年に在籍した。そしてこの両名は，翌明治36(1903)年に結成され，翌々年の明治37年新春に華々しく第１回の例会を開くことになる再生「英語会」の初代と２代の幹事長なのである。

ここで，少々話は込み入るけれど，当時の早稲田事情を今一度考察して，このころなぜ特に早稲田で英語会活動が始まったのかを明らかにしてみよう。

東京専門学校から早稲田大学へ

明治15(1882)年の創設以来東京専門学校として存在してきた早稲田を，大学に昇格させようという機運が明治も30年代にはいると高まってきて，高田早苗は鳩山和夫校長のもと，学監という立場でそのために奔走した。当時大学といえば東京帝国大学であり，京都の

帝国大学が発足するかしないかの頃であった。慶応義塾は，明治23(1890)年に大学部を設置したが，学校名には大学を付けなかった。明治34(1901)年には目白に日本女子大学校が開設されたが，予科を設けず，大学でなく大学校とした。その中で東京専門学校は早稲田大学を名乗り，1年半の高等予科を経た者を大学に進学させることにした。高等予科の開校は明治34(1901)年4月，大学開校は明治35(1902)年9月である。

学校制度が整理された現代では，理解しにくいことかもしれないが，大学は官立の東京帝国大学だけで，高等教育を施す私学はすべて専門学校であったところへ，早稲田が大学を名乗ることにし，政府もこれを承認するということになったわけである。

明治15年の設立当初から西郷隆盛の私学校に比せられて，明治政府に危険視され，その圧力を受けてきた早稲田だったが，20年を経て，伊藤博文も大学開校式に祝辞を述べるという状況になってきたのであった。その状況というのは，伊藤と大隈の政治的確執も時代を経過して過去のものになりつつあったということも言えようが，学制の面からみれば，次第に5年制の中学校が普及，増加して，その卒業生を収容すべき高等教育機関が不足してきたという事実の圧力があったのである。

では，早稲田大学は帝国大学とまったく同じステータスを得たのかといえば，むろんそうではなかった。早稲田は大学を名乗り，学士号を授与することにしたけれど，学制上はやはり専門学校の扱いを受けていた。早稲田に続いて，私立の専門学校で大学を称するものが幾つも現れたが，それらも同じであった。

早稲田改称の翌年，明治36(1903)年に専門学校令が公布されるのだが，早稲田を含むすべての私立大学はこの専門学校令に基づくものとされたのである。この学制上の専門学校というステータスは，大正7(1918)年に官・公・私立平等を建て前とする大学令が公布され，同9(1920)年に早稲田がその大学令による大学になるまで続き，『早稲田大学百年史』の編者はこの時期を「大学自称期」とさえ呼んでいるのである。

英語会の生まれた背景

この間，教育の実態はどうであったかというと，徐々に充実してきたのではあろうが，財政，施設，教員，学生の数と質，その他において問題なしというわけにはいかなかった。早稲田は，改称以後，実質的に専門学校である専門部と，高等予科1年半を修業して入学する大学部とに分かれた。帝国大学では，3年制の高等学校（旧制）卒業生を入学資格者としたが，早稲田の予科は1年半である。この大学予備教育は語学を中心とする研究基礎能力の開発を目的とするものであったから，かなりの差があると思われた。高等予科は大正6(1917)年2年制になり，大正9年に早稲田大学が自称大学でなく，「大学令による大学」になったとき，3年制の高等学院に改編されることになる。

そのうえ，早稲田の高等予科の設立当初の入学試験はかなりおおらかなものであったから，学生の質は玉石混交であった。正規の5年制中学卒業生はもとより，早稲田の有名な「中学講義録」という通信教育の修了者や，早稲田が行う入学資格認定試験の合格者も容易に入学できたのである。そのため，十分な中学程度の語

学教育を受けていない学生も多かった。彼らに語学，とくに英語の能力を持たせることは絶対必要であった。高等予科の１年半はそのための期間だという意味のことを高田早苗は開校式で述べている。一つには高田早苗が理想とする教育の実現のためで，もう一つには自称といわれる大学の実質と評価を高めるためである。古い会員名簿の最初に名前が載っている大山郁夫は英語政治科に入学したが，高等予科が設置されたのでこれに入り直し，卒業が遅れるのを厭わなかった。

高田早苗は高等教育の目標の一つを，今風に言えば，国際人の養成においた。そして国際人の資格条件として，英語を「読める，書ける，話せる」人物であることを常に強く要望したのであった。また，早稲田に先立つこと12年，いちはやく大学部を設置した慶応義塾と，他の私立専門学校に先駆けて大学を名乗った早稲田とは世間的にも，識者からもかなり高い評価と期待を受けていた。

明治25年に話題となった英語会が，10年を経て明治35年に「英語練習会」として復活したのはおよそ上記のような背景があったからである。学校当局は明治25年の時もそうだったが，この学生活動を積極的に支持，奨励したのである。校長鳩山和夫は，英語練習会の総会において成立した「外国語研究会」の会長となり，ここに当局と学生の協力による外国語研究の期間が確立するかに見えた。しかし，すでに述べたように，専攻しようとする外国語が異なる学生が一つの外国語研究集団にまとまることは難しかった。その後，この「外国語研究会」の総合的な活動の記録はない。

【伊東克己】

第３章

再生から中興期へ

明治36年～大正15年

早稲田大学商科予科の開設

半世紀にわたる明治時代，すなわち建国以来の自己陶酔から目覚め，世界に門戸を開放した日本が，欧米の先進諸国と肩を並べることができるようになったこの時代は，明治維新を出発点とする近代国家建設の歩みが着々と続けられていった時代である。政治面では，自由民権運動の展開を経て，大日本帝国憲法の制定と国会開設をもって一応近代法治国家の体裁を整え，経済的には資本主義の発達，第１次・第２次産業革命の達成，さらに対外的には，諸外国との国交回復，条約改正，日清戦争，日露戦争などを通じて，国際的地位を確立したのである。

このような時代に誕生したわが学園は，激しい動きの中で浮沈の憂目をみながらも，大きな理想に向かって確固たる歩みを続けていたのである。明治35(1902)年，東京専門学校が創立20周年の式典を挙げ，同時に「早稲田大学」開設を世に公表して以来，世界にも類をみない独自の私立大学を目ざして，着々とその予定は実現されていった。その一つとして，明治36年，実業と学識の達成を目的とした商科予科が開設された。わが早稲田大学再生英語会が輝かしい未来に向かってその第一歩を力強く踏み出したのは，まさにこの時であった。

明治36年の早稲田大学には，商科の開設とともに，早稲田の校風を慕って，あるいは高等商業学校(現在の一橋大学)や慶応大学の試験に不合格で待機中の学生が押し寄せ，百鬼夜行，実にいろいろの学生がたむろしていた。その頃はまだ洋服などが世界では珍しがられた時代であり，まして，英語を話せる日本人は，大変に重宝がられるという時代であった。早稲田大学においては，わずかケート夫人，北島夫人が英語の授業をもたれていた。

英語会の組織が固まる

こういう中でも，特に英会話に興味をもつ学生たちが，いくつかのグループを作っていたが，彼等が集まり，伊藤重次郎氏の指導の下に，シェークスピア作「ベニスの商人」を英語劇として上演した。この指導は前述のケート夫人，北島夫人が英語の発音やイントネーションを，伊藤重次郎氏の夫人がメーキャップを指導して下さったのである。ドラマのメンバーは，伊地知純正氏，高木隆吉氏，金津熊夫氏，大柴亀太郎氏らであった。

とにかくこのドラマは当時の西洋への好奇心に便乗して，大いに人気を博し，これをきっかけに，英会話同好者が続々集まり，英語会が結成されたのである。自分たちの手で会を作ったというだけに，皆英語の好きな人たちで，英語をしゃべりたい，書きたいという強い意欲をもっていた。その数は少く，しかも英語そのもののレベルも高くはなかったが，お互いに楽しく皆と交わりながら，国際語としての英語を若いうちにマスターしたいという意欲に燃え，はりきっていた。

伊藤重次郎先生

大山郁夫先生

伊地知純正先生

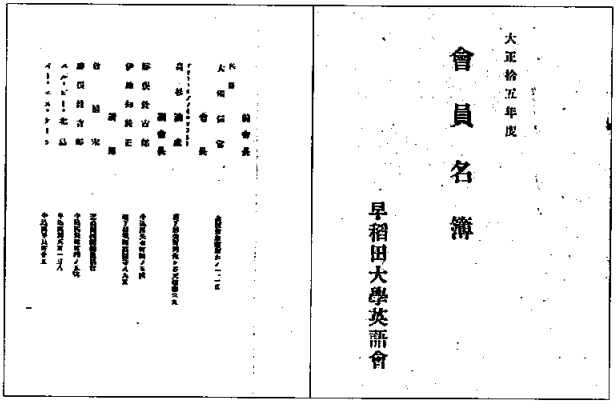
新入会員は多数あったが，会費は無料であった。外人教師も家族ぐるみ，無料で奉仕し，本当に英語の好きな者の集まりであった。会員は増えたり減ったりしたが，結局ドラマをやった者が実力をつけて，残ったのである。

この英語会の組織としては，本科２・３年の各学年から４人ずつの幹事が選出された。予科からは幹事は選出されず，各組から委員と称する者が１名ずつ出ていた。会員は40名くらいで，うち20名くらいがアクティヴなメンバーとして活躍した。会費は１～２円であった(当時授業料は１年に40円)。初代会長は鳩山和夫氏，２代目は大隈信常氏，副会長は高杉瀧蔵氏，また初代幹事長は伊藤重次郎氏，２代目は大山郁夫氏であった。伊藤，大山氏の後を引き継いだ伊地知純正氏，浅川栄次郎氏を経て大柴亀太郎氏の代になると会の組織も一応固まった。

部室は，現在の21号館のところに木造の建物があり，そこの高等予科の教室の一つを学校側に交渉して許可になった。これはスピーキングルームと称され，会員は学校の教室よりも，ここで過ごす時間のほうが多かった。室内では互いに英語で話す規則があったが，これはややもすると守られなかったので，ある時には，その都度１銭也の罰金を支払うことを申し合わせていた。講師にはケート夫人，北島夫人，マクレガー先生，マクドナルド先生等がおられ，この部室で，週２，３回グループスタディの形式で会話の練習を行っていた。これらの先生方に対する謝礼は実に薄謝であったが，劇の指導においても，実に親身になって指導して下さった。

劇の稽古は主として，先生のお宅で紅茶やお菓子を頂いて，夜遅くまで続けられ，そのご好意は尽きなかった。お礼としては大会後に20円前後の置き物類で，当時貨幣価値の高かった時代とはいえ，余りにも少なかったのであるが，師弟関係は寺子屋精神で愛情こまやかなものであった。これも明治時代という背景の賜物であったのかもしれない。部室における会の雰囲気も実になごやかなものであり，学年，科を問わず全員が学生社交クラブの如く，お互いに相知り，相語り，相遊び，日常生活が合宿のようなものであった。このような中に英語会寄宿舎が生まれたのである。明治42年，先輩の進言により，水稲荷付近の下宿舎を英語会会員のみの宿舎として経営することになった。宿舎の相談役まで定め，吉岡源一郎先生(後外国語学校教授)をお願いした。そこには時々英語会関係の外人教師等も訪ねてこられ，英語会外交の本拠地となった。

活動の主なものは，月１回の英語演説会と年２回のドラマであった。演説会には時々外部から外人講師を依頼した。ドラマのほうはクリスマス前，すなわち12月の学校休みには，小会と称する費用のあまりかからないドラマを公開した。そして６月の試験休みには大会と称して，できるだけ派手なドラマを公開した。出し物は２年生が一番大きな物，ついで１年生，次に予科のものという具合であった。そして３年生からは一人演説をするのが例であった。この３本のドラマと１つの演説に早稲田音楽会の協力でピアノ，バイオリンの余興がついた。大道具等は自分たち学生で作り，“Black Smith”やモリエールの「偽せ医者」などを上演し


大正拾五年度

會員名簿

早稲田大學英語會

初めて作成された「会員名簿」大正15年度

た。もちろん男子ばかりであったので，女形がいたし，また不足の場合には会員の友人等が臨時会員として登場した。このドラマには各大学の学生を招待したが，まだ対抗という形式はとられていなかった。

明治時代の英語会は，雄弁会と並んで学校が最も力を入れて援助してくれ，新しい部室，500円の援助金とは，当時としては最高であった。この英語会優遇も実を言えば，国内の欧化主義から来たものであり，明治37(1904)年の対露宣戦布告はそれに輪をかけた。当時は未だ，英語会というものは，他大学においても数が少なかったが，すべての点で他校に抜きんでていたのは高等商業学校(現一橋大学)であった。対抗の活動というものはなかったが，高商においても独自の大会が催されていた。好敵手高商の存在でわが英語会の士気は一段と高揚し，高商打倒に一層の努力を続けたのである。欧化政策の波に乗り，英語全盛の良き時代に出発した英語会ではあったが，現在800余名の会員を擁する隆盛の基礎はしっかりと築かれていたのである。以来90年間は，時代の影響をまともに受け，その道は

決して安易なものではなかった。

中興期の大正時代

大正の15年間は，内政，外交ともに真に問題の多い時代であった。しかしこれらの問題も偶然この時代に起きたものではなく，明治時代にその萌芽を培い，さらに次代へ種子を蒔いているので，前代と次代の掛け橋であると言える。大正３(1914)年に大隈重信侯が首班となって国政を処理するに至ったことは，学園の名誉であり，誇りでもあった。

第一次大戦が勃発すると，わが国は軍需物資の供給国として，未曾有の好景気に見舞われ，日本資本主義はめざましい発展を遂げた。しかし大戦の影響で物価は上がり，労働争議は頻発し，また米価の高騰は各地に米騒動を引き起こした。日本とアメリカは大正９(1920)年頃から景気が下り坂になり，経済恐慌を来たした。とくに大正12年の関東大震災はますます国の経済的負担を重からしめた。このような情勢は必然的に思想の激化をもたらし，社会主義運動が盛んになった。

さらに不景気，社会情勢の不安化に伴い，学生の思想運動も実践的方向へ進み，学園当局者の頭痛の種となった。しかし，他方においては，輝かしい記念すべき時代でもあった。大正２年，創立30周年記念式典において，早稲田大学の教育の本旨が宣明されたのである。「学問の独立」こそ，大隈侯が学校創立の構想を明らかにした時に示した建学の精神であったのである。大正９年には早稲田高等学院が創設された。これは大正11(1922)年，第一高等学院，第二高等学院となり，高等予科は廃止された。大正11年には学園の創立者，

大隈侯を失ったが，この悲しみを乗り越えて，早稲田大学はまた一段と前進していった。すなわち，学園を代表する三つの殿堂，図書館，大隈記念大講堂，演劇博物館の完成である。このように大正15年間の短い間に早稲田大学は明暗交錯する中に，新しい昭和へと踏み出していったのである。

旺盛に新知識の吸収

社会一般，特に学生間においては新知識の吸収，なかでも欧米先進国から学ぼうとする意欲が旺盛であったが，英会話に関しては，その必要性を痛感しながらも，英語を聞いたり，話したりする機会は非常に稀であった。早稲田大学においても，特志の者が，英会話教科課程において学ぶ程度であった。このようなときでも，大隈侯等から奨励されていた英語会においては，部室内では英語で話すことを規則とし，日本語を話すと一語ごとに5銭也の罰金を支払う規則があり，“Fine Box”なるものが備えられていた。部室は，大学正門の横にあった文科の教室に移っていた。これは木造2階建の古い校舎の，1階の片隅にあった小さい室にあった。貧弱なうえに実に粗末なありさまで，床を歩けば動くように感ぜられるほどであった。この校舎は，当時最古のもので，後に取り壊しになったが，それでも部室としては良いほうであった。

この部室には，常時30名くらいの会員が詰めかけ，必ずやアメリカ，ヨーロッパへ出掛るぞという意気込みをもって勉強していた。現在のように，ラジオ，テレビによる勉強法が発達していなかった折から，利用できる機会はあらゆる方法で活用したのである。例え

ば，外国の学者が来日，来校するときには，必ずフリー・カンバセイションを行い，映画を見に行く前にはダイアローグを予め暗記したりした。そして会員が何らかのつてを求めて，外国人の友人を作っていた。講師には前時代から引き続いて北島先生，ケイト先生，ミドルトン先生，コックス先生，ベニンホフ先生，高杉瀧蔵先生，前時代に現役として活躍された伊地知先生等を招き指導していただいた。英作文に関しては，勝俣銓吉郎先生，武信山太郎先生，ケート先生に週2回くらい部室で練習や特別教授をしていただいた。高杉先生の米国で留学中会得されたスラングの数々と先生独特のゼスチャアは，愉快な雰囲気の中で楽しく英会語を学ぶことができた。

昭和への掛け橋

大正期の活動としては，ドラマ，スピーチがあり，ドラマについては，トルストイの「生ける屍」が演ぜられた。石井真峰氏等は役者として大いに活躍した。大正中期になると，このドラマは良い先生に恵まれ，ますます盛んになり一最盛期を示し，春秋2回，年中行事として行われた。練習も2カ月くらい前から，三朝庵で練習した。しかしこの時代を頂点として後期にかけて，社会の不景気を反映しておとろえていった。またスピーチでは，他校とのオラトリカル・コンテストがなかなか活発であった。「私学の役目の重大さ」などがテーマとして取り上げられた。合宿という娯楽は全然なかったが，日曜日などはよく井之頭公園へ外人の先生方とピクニックに出かけたりした。一度，アメリカン・ハイスクールの生徒と一緒に行った，なかなか

意欲的なハイキングもあった。その他の活動としては，後期に２，３名による名古屋，大阪，神戸遠征があるが，これは学校からの援助もなく，個人負担により行われたものである。また大正12年に，外務省顧問，マクレガー氏を招き，軍備縮小問題について講演会を開いた。大正期の会員は，WにＥＳＳをからませた銀を緑地に表した七宝のバッジを胸につけて学内を歩いていたのである。

英語会における大正時代は，日本の歴史がそうであるように，明治と昭和の時代の掛け橋であった。すなわち明治時代にその萌芽を培った劇やスピーチ等の活動が，内容的に充実し，かつ消化され，次の昭和時代の種子をしっかりと蒔きつけたのである。大正９年には早稲田大学高等学院が創設され，まずこの第１回生の中から，松井翠声氏と中島正信氏とが，大学の英語会の会員となった。その後，大正10年には，第二高等学院が開設されると，先ず第一高等学院に，次いで第二高等学院にとそれぞれ英語会が発足し，早稲田の英語会は，大学本部，第一，第二高等学院の３本立てとなったのである。

大正15年「アラビヤ人ノ天幕」（第二早稲田高等学院英語部）

バイブル・クラス

明治時代も中期を過ぎると外人教師による大学教科の授業は激減し，日本人教員による日本語の講義が一般的になる。そのため学生の英語力は落ちる一方となった。一方，条約改正による経済・社会の国際化が進んで，外国語のできる知識青年の需要は増えてきたので，課外活動としての英語会が誕生したことはすでに本文で述べた。

ここで必要とされたのは，社会の国際化に対応する英語力だったが，それは学問というにはあまりにも基礎的な性格の教科であったから，当時も今も大学に設置される英語会話のクラスはきわめて数少なく，専門教科からも，教養主義的英文学教育からも必要悪のように見られてきた。

授業料を払わずに外人教師による会話の機会を求めた学生たちは，あちこちの教会のバイブル・クラスに集まった。若干の献金と宗教的な雰囲気を我慢すれば，学生たちは手近な場所で生の英語に触れることができたので，なかにはバイブル・クラスを渡り歩く者もいたし，キリストの奇跡について牧師に議論を吹き掛けて得意になる若者もいた。たとえば，河合栄次郎のように文化人の教養として，ギリシアとローマの神話にならんで聖書を読むことを薦める学者も多かったから，多感な青年たちは，語学だけでなく，宗教的なあるいは哲学的な関心を満たすためにもバイブル・クラスに集まったのである。

バイブル・クラスは隠れた英語教育の場として大正から昭和を通じて存在してきた。太平洋戦争の初期にも，勇気ある外人牧師や，２世の日本人牧師はバイブル・クラスを開き，昭和18年ごろまではこれに出席することが可能であった。戦後，英語会話ブームのさなかに教会はバイブル・クラスを復活させたが，企業としての英会話学校に押されて，往時のように多数の学生を集めることはない。

【伊東克己】

英語会の歌

英語会は若者の同志的集団であったから，歌声は絶えなかった。そして自分たちの歌を持ちたいという願いも今の青年

と同様に強かった。のちに合宿が行われるようになると，「野尻湖合宿」の項に掲載したように，「野尻湖の歌」ができ，戦後はフォーク・ソングの流行とともに合宿の班歌が朝夕にギターの伴奏にのって湖面を流れた。

大正15(1926)年のころに英語会が発行した活版刷り，名刺版二つ折りのメンバーシップ・カード(会員証)には裏面にベニングホフ博士の作詞になるソサイエティ・ソングが記載されていて，曲は「メリー・ランド(Merry Land)」だと書いてある。この曲は米国か英国の民謡だろうが，どんなものか今では知る人もない。

ベニングホフ氏は早稲田の教員ではなくて，キリスト教伝導機関の早稲田奉仕園に駐在した伝道師であった。英語の会話を勉強するには，教会のバイブル・クラスに出て，外人牧師の英語による聖書解説を聴くのがよいとされていたから，英語会の学生はキャンパスにほど近い早稲田奉仕園に通った。外人牧師と仲良くなった学生たちは，オラトリカル・コンテストのジャッジを頼んだり，スピーチの原稿訂正を依頼したりして，親密の度合いを深めたのである。また，外人牧師も伝導活動の実績を挙げるため，積極的に学生に近付き，英語の指導を行った。記録に出てくる名前の頻度から判断すると，その頃の英語会会員はベニングホフ氏の献身的な指導を受けていたらしい。同氏の英語会への思い入れは相当なものであったようで，それはこの会歌の歌詞によっても理解できる。

Society Song

1) O Waseda, our guiding star,
Over life's broad ocean;
We lift our voice in praise of thee,
Queen of our devotion

O Waseda, our hearts are free!
We'll sing thy praise forever,
By day by night our hearts' delight,
Naught thy love can sever

2) Amongst her sons "the Eigo-kai"
Sings her praise and glory
And in a tongue heard round,
Tells her sacred story.

Words：Dr.Beninghoff
Tune："Merry Land"

【伊東克己】

早稲田英語会発祥当時の追憶

私が早稲田大学の商科に入学しましたのは明治36(1903)年の春のことで，ちょうどこの年に初めて早大に商学部が新設せられましたので，私は名古屋市立商業高等学校を卒業してすぐ入学したのであります。

私は14歳の時に父の仕事上の友人，カナダのライフ・アッシュアランスCo.の代表者の夫人がホテルに滞在していて，日中一人で淋しいからと毎日呼び出されて出かけていきました。当時は半分以上話はわからぬながら，美味しい紅茶とお菓子を楽しみによく出かけたものであります。

名古屋商業では，英会話の先生と貿易実践科の先生は両人とも米国人で，英語はかなりミッチリやったものです。英語の商業文のごときは，注文発状とその請書の手紙等，1時間に3本くらいは書かされましたし，もちろんこの時間の対話は全部英語を使用していたものであります。

したがって，早稲田大学に入ってからは，商業実践の講座は日本人の先生ですし，中学出身の学生が多数で，1時間にやっと1本の英語商業文を教わる程度でしたから，私はほとんど出席はしませんでしたが試験には80点以上はもらっていました。

早稲田大学英語会の大会では，英語芝居をやりました。伊地知先生や武市さんと一緒に旅順の陥落を演じ，私は若い娘に化けたことを覚えていますが，当時手とり足とりお世話下さったのは，北島夫人(米国夫人)で真に母親のような親切極まるお世話をして下さったものであります。実に静かなやさしい夫人で，英会話の前後にはよくお宅へいって，ごやっかいになったものです。

その後私は一度スピーチがしてみたくなり，(実は甚だ拙劣ですが)“Asia for the Asians”という迷文を作ってマクレガー先生に文章もスピーチも大変直してもらいましたが，当時先生はこの文の精神をあまり好まれなかったようで不思議と思っていましたが，民族独立の旺盛なる今日では何でもないが植民思想極まる時代には一つの警句であって，英米人には聞き苦しい言論であったと今にして悟っています。

【高木隆吉●明治40年卒業】

英語会の思い出

私が英語会におりました当時，一大センセーションを巻き起こした事件がありました。それはまだ大隈侯が在世のおりで，米国よりの珍客，かのBryant氏(大統領の候補者にもあがったことのある有名な政治家であり，かつ一世の大雄弁家でもありました)が来日した時のことであります。そのブライアント氏が早大の広場で学生を集め，獅子吼した際に冒頭に“My fellow students”と呼びかけて，1時間にわたる大演説を試みたのであります。

その時，当時会員であった金津熊夫氏が演壇にかけのぼりました。何をしゃべるかと皆かたずを飲んで見守っていると，突然“I am a Bryant”と言ってかのブライアント氏の腹話術をそっくりやって，居並ぶ聴衆の度肝を抜き，拍手喝采を受けたのであります。これ等は実に異彩を放った同氏の奇想天外よりくる構想の一つでありました。かく大胆に自己の所信を吐露したところに先輩の「よさ」があり，また学ぶべき点があるのではないでしょうか。　【立川長宏●明治40年卒業】

観光ガイドに暮れたアルバイト

私の印象に残る人に，安倍磯雄先生がおられる。師は私が牛込からの道々にいつも一緒で，歩きながら英語で話して私を指導して下さった。師のゆっくりした，だがしっかりした，広大な草原を水が流れて行くような英語は，私を強く感銘させたものである。師はどんな時でも，英語を使っておられたのは大変印象に深いものがある。そもそも私が英会話というものに興味を持ったのは，明治36(1903)年，大阪博覧会が開かれた時である。中学を卒業した私はこの大阪博覧会を見るべく，汽車に乗って上阪したのであるが，この車中，私は英国人にいろいろと話しかけられた。しかし全然対応できなかった。これではいかんと奮起し，早大入学後下宿の牛込から，本郷の中央会堂，九段下教会へと外人を求めて，一日中足を棒にして歩き回ったのである。

そうこうしているうちに，英会話も曲がりなりにできるようになり，当時やっていた収入の少ない魚の行商のアルバイトをやめ，外国観光客をつかまえては，皇居，増上寺などの東京見物のガイドを

するようになったのである。ある時，芝の増上寺へ米人をガイドしていった時のこと，本職のガイドが「ここは私の縄張りだ，免許のないもぐりのガイドは，まかりならん」ととがめられ，私は，ガイドの試験を警視庁にて受け，昭和25(1950)年に，免許を得たのである。

当時，外国旅行者の案内所として，東京商工会議所に"Welcome Society"というのがあったが，私はここからアルバイトの口を世話してもらうべく，魚と酒を一本ぶら下げて出かけたところ，大変気にいられ，後はトントン拍子にガイドの口がかかり，日光に，歌舞伎にと，大忙がしの毎日であった。ともあれ，若いうちに，学生のうちに，何でもやっておくことが後になって大変役に立つということを，私は私の経験から推して皆さんにはっきり言えると思うのである。

【金津熊夫●明治40年卒業】

吾が英語会の回想

明治38(1905)年当時の英語会は英語会創立の第3年目に当たっていたように思う。あるいはそれ以前に揺籃時代があったかもしれない。形の整った姿で英語会が発足したのは明治36年であったと思う。当時は英語会会長大隈信常先生であり，幹事長は大山郁夫先生(明治38年卒)であり，高杉瀧蔵先生は名目は忘れたが有力なる指導者であった。

当時英語会は雄弁会と並んで学校が最も力を入れたので，新校舎の教室の一つを与えられ，その室で会話の授業を行い，また全員が集合して会話の練習をした。授業は週2～3回で教師はすべて外人の先生であった。カナダのマクドナルド先生，北島リリアン夫人，その他の先生にお願いした。月に1回の予定で生徒の英語演説会を催し，時々外部から内外人の講師を依頼した。

クリスマス前，すなわち12月の学校休みには小会と称する費用をあまり使わない劇を公開した。3月の試験休みには大会と称してできるだけ派手な劇を公開した。中心出し物は2年生が大物を出し，次に1年生，ついで予科生の出し物という順であった。3年生は一人演説をするのが例であった。3本の劇と演説が1つ，これに早稲田音楽会の協力でピアノ，バイオリン等の余興が一夕のプログラムであった。公演は当時の大講堂で収容数

500人くらいであった。

当時の東都における英語会で最も有名なものは高等商業(一橋大学の前身)で，ついで外国語学校であった。高商の英語会は質において，観客の層において第一流で，われわれはこれを模範として修養に励んだものである。

劇の稽古は主として先生方のお宅で，紅茶やお菓子を頂いて，夕方8時頃から10時，11時におよび，ご好意は尽きなんだが，お礼としては大会後に20円前後の置物類で，当時大学の月謝が1カ月4円50銭の物価で貨幣価値の高い時代にしてもあまりに薄かった。師弟関係は昔の寺子屋精神で愛情のこまやかなものであった。明治時代という背景の賜物であった。　【大柴亀太郎●明治42年卒業】

早稲田大学即英語会

私は明治40(1907)年4月，早稲田大学商科へ入学すると直ちに英語会に入会した。英語会のあることは中学時代ある月刊英語雑誌ですでに承知していた。英語会の本拠は同会が専用していたスピーキング・ルームと称する一室で，私が入会の申し込みに行ったら，伊地知氏か桜井氏かのいずれかが流暢な英語で返事されたので，片田舎の中学出の私は面喰らうやら，いたく感心した。

私は学校の教室よりも，スピーキング・ルームで過ごした時間のほうが多かったと思う。ことに冬期は教室は寒かったが，スピーキング・ルームにはストーブの設備があったので，いつもなかなかの人気であった。同室では会員は互いに英語で話す規則があったが，これはややもすると守られなかったので，ある時には違反者はその都度1銭の罰金を支払うことを申し合わせ，20銭，30銭集まると，焼芋などを買って一同で喰べたりした。英語会は毎年春秋2回，英語の演劇を催したが，私等の同期生の会員のみでは出演者数が不足の場合には，会員以外の友人を臨時会員として出てもらったこともあった。劇に関しては次のような思い出がある。2，3人の会員とともに，浅草馬道の「大勝」という鬘屋へ鬘を借りに行った帰途，志るこ屋の「梅園」へ立寄った時，風呂敷からはみだしていた鬘を他の客が見て私たちを馬の脚と思ったのか「宮戸座」のお方と呼びかけられたことがあった。またある時の演劇にモリエー

ルの「偽せ医者」を上演した時，主役の木樵が女房を叩く場面であまりの熱演の結果，女房の鬘が飛んでしまったので観客爆笑のうちに慌てて幕を降ろし，また暫くして幕を上げて続けた。喜劇中の喜劇だった。

明治42年頃，先輩の勧めで，水稲荷付近のある下宿屋を英語会会員のみの宿舎として経営することとなり，私も同志とともに引き移って行った。宿舎の相談役には吉岡源一郎先生(後外国語学校教授)をお願いした。同宿舎へは時々英語会関係の外人教師等も訪ねて来たが，ある日夫人矯風会の米婦人２名が来て，私等一同に熱心に禁煙を奨めたので，一同は各自所有の煙草を女史等の眼前で焼き捨てたら，彼等は非常に感激して早速われわれを麻布の自宅に招いて饗応してくれたが，禁煙は数日後破られた。

【小林董治郎●明治44年卒業】

シュークリーム

私は早大に入学するとすぐ英語会に入った。まもなく新入生歓迎会が教員室で行われた。午後６時頃開会で先生は一人もいなく，英語会関係の先生も一人もいなかった。やがて開会となった。あまり昔なので記憶もぼんやりしている。ただ上級生が会則を説明してくれたのはよく覚えている。一人の上級生が各人の前にわら半紙を１枚置き，すぐ別の上級生がその上に湯呑み茶わんを置き，次の人がシュークリームを３個ずつ半紙の上にのせて，最後の人が茶わんにココアを注いでいった。さすが英語会だと思った。今でこそシュークリームやココアは珍しくも何ともないが，その当時は珍しく高級品であった。早速ご馳走になった。久し振りなので実にうまかった。一人の上級生が近よってきて，君これ好きなのかと聞いた。すこしたつと別の上級生が加唐君シュークリーム好きなのかいと変な顔で質問した。何だか変だなあと思った。二人とも同じ質問をするのだもの，左隣にいた新入生の前田君がシュークリームの食べかけをもって，「何だこれは，こんな変なもの食えるかい」といった。すると我が意を得たりとばかり「そうだこんな変なもの食えるかい」と新入生があっちこっちで言い出した。ことは急に面白くなってきた。「加唐君こんな変なもの好きか，それでは僕のを食べてくれ」

と近くにいる新入生がシュークリームを届けたり，自分の近くのを集めて持ってくるのもいた。たちまち私の前に15，6個もシュークリームが集まって，今までは一つ一つを味わっていたが，こうなると態度一変，焼きいもでも食べるように大口でたべ出した。幸福の頂上だ。しかし，幸福は永く続かないものだ。二人ばかり上級生がきて「シュークリームは，そんなに食べると毒だぞ」といって大事なものを持っていってしまった。中には本当に毒なのか食べなくてよかったというものもいた。横暴だと思った。次に変だなあと思った。とにかく自分には安い会費であって，あれほどシュークリームを食べたことはない。英語会新入生歓迎には毎年シュークリーム，ココアと決まっていたのだ。地方から出て来た人にはシュークリームは食べられなくココアは飲めないのだ。新入生歓迎とは新入生の犠牲において上級生がシュークリームをウント食べ，ココアをがぶがぶ飲むことなのだ。それを知って新入生曰く，「馬鹿にしてやがる」と非常におこった。しかし1年たつとシュークリームのうまさがわかり，この人たちも一致して次の新入生歓迎にはシュークリーム，ココアで迎えるのである。姑には嫁がなる。上級生には新入生がなるのだ。

【加唐卯之助●明治44年卒業】

思い出の人々

私は英文科の出身であるが，同級生の中で今も交際を続けている人はほとんどなく，わずかに1，2人の人と年賀状を交換しているにすぎない。ところが英語会で知り合った先輩後輩の人の数は非常に多く，今でも親しく交際をしている。英語会がなかったら母校と私との関係は甚だうすいものである。その意味で英語会の存在を非常にありがたく思っている。私は浄土宗寺院の住職であるが，同時に公立専門学校および国立大学の教授をつとめた。長い教壇生活にもかかわらず，母校とは何の関係もないが，英語会とは大変親しい関係にあるということは不思議なご縁である。

今，昔を回想して，物故された先輩，同級生の思い出を書いてみたいと思う。大先輩に中瀬精一さんがあった。商科出身であるから文科の私とはまず関係がなかったのだが，私の渡米留学の際に，伊

地知先生から中瀬先輩に紹介され，初めてお目にかかったのは，シヤトルの日本郵船の社宅においてであった。私が同地のワシントン大学に入学し，在学中，中瀬さんと奥さんにお世話になったことは今でも忘れられない。中瀬さんはその後ニューヨークの支店長に栄転され，私もワシントン大学を卒業し，ニューヨークにあるコロンビア大学に入学したので，またまた中瀬さんにお目にかかる機会に恵まれ，そこでもお世話になった。

同級生として親しかった人には政経科の飯島徳次君と商科の馬場君がある。どういうめぐり合わせか，この二人と私はニューヨークで一緒になったのである。渡米したのは私が先だったが，ニューヨークへは両君が先だったので，二人は私をグランド・セントラル駅に出迎えてくれた。在米3年の私もニューヨークへ着いた時はちょっとびっくりした。馬場君とは同じベットへ三晩ばかり寝かしてもらった。その後は飯島君のアパートへころがり込み食客となった。馬場君は関東大震災のため横浜で横死され，飯島君もその後，病を得て永眠された。二人ともいい人だった。今いたらさぞ楽しかろうと思う。また世間のためにも役立っているであろう。私には英語会あっての母校である。英語会よ，ありがとう。

【石井真峰●大正5年卒業】

役に立った英会話

大学卒業後，直ちに当時大阪の一流銀行であった加島銀行に入行しました。当時は第一次世界大戦で日本の経済は急激に発達し，銀行は毎年多数の大学，並びに専門学校の卒業生を採用していました。たまたま青年行員より海外留学生を選考するに当たり，銀行は米国人の教師を紹し英会話の練習を始めかつ，試験の結果有資格者を米国に約2カ年留学せしめることとなりました。幸運にも小生一人，留学資格者として決定，入行後2年にして1922年春渡米，フィラデルフィアやニューヨークで外国為替業務を修得し，さらに英，独，仏，伊首都銀行を視察して，再び米大陸に行きカナダの銀行を視察した次第です。

海外生活において最も痛感したことは，相手の話すことを理解し，かつ自分の意志を表明するには，まず第一に言葉を解することのいかに必要であるかを身を以

って体験したものです。立派な教養を身につけた有能の人であっても言葉を解せなければ，その人から学び，また自分を認識してもらうことも困難であり，折角の機会を与えられながらも目的を達せられぬ場合が多々あります。この意味において語学に堪能であっても，話す業を持たぬ以上意志の疎通は困難であります故，国際語ともいうべき英語が話せれば，先々楽しい外国旅行が営まれ，かつ効果的な旅行をエンジョイできます。私も多少は会話に通じていたおかげで外国旅行も気軽にかつ面白くできたもので，今でも往時を回顧して愉快な思い出に浸ることができて喜んでいるものであります。

余談のことですが，当初米国の銀行においてその銀行員たちとともに執務し，かつ彼等の日常生活環境にあっていろいろと経験できてその生活慣習に親しみ，言葉のニューアンスに慣れ，イエス，ノーの使い分けを心得ることは，誤解を防ぐのに役立ちます。当初は頭脳の中で和文英訳して自己の意志を表現するのでは調子が出難いものですが，耳から入れる英語が理解され，充分消化されますと自然自分の意志の表現が円滑となり，アクセントが正常となりますと相手方も正しく理解してくれます。そうすると楽に話せるようになります。これらはすべてより多く話す機会を持ち練習を積むことにより会得されるものです。

【高橋力男●大正９年卒業】

英会話の先生になりそこなう

田舎の中学をあまり良くない成績で卒業した私は，上京して大学受験となってきつい壁にぶつかってしまった。どこを受けても英語の問題にはまったく歯がたたなかったのである。一年味気ない浪人をして，ようやく早稲田に入った。２年になったとき，ケート夫人が英会話の先生として現れた。生まれてはじめてお目にかかった外人教師である。教室へ出ても一言も分からない。たまたまクラス委員をしていたので，日本語が一言も分からないこの先生といろいろ交渉しなければならない破目になったのである。これには参った。発奮して満２年間，気違いのように英会話をやった。努力の甲斐あって夜通っていたＹＭＣＡ英語学校も優等で卒業した。外人宅へ住み込みで実地修業もした。こうして自信がつくと，す

っかり天狗になった。大正12年頃である。当時の英語会のメンバーはおとなしい人が多かったので，会へ行ってもいささか食い足りないような生意気な心持ちを起こしたこともあった。その頃活躍していたのは，先輩では篠崎，粟野，神田の諸氏，同級では伊場，臼井，川口，横枕の諸君であった。

大正14年卒業の年は不景気でなかなか就職口がない。いささか得意の英語で何とかならないものかと高杉先生のお宅を訪ねた。ところが先生は全然私の英語など問題にしない口振りである。あわよくば，どこか英語会話の先生にでもなるいい機会でもと思いあがっていたうぬぼれもすっかり見込みがなくなってしまった。暗い矢来の通りをショボショボと帰って来たときの自分のあわれな姿を思い出す。

【殖栗文夫●大正14年卒業】

回想と提言

私が大正９(1920)年に早稲田大学第一高等学院に第1回生として入学したときのことである。当時大学にあった英語会の会員がやって来て，流暢な英語で勧誘演説をやった。中学時代から外人との交遊があったが，英語には少しも自信がなかった私は，その演説にすっかり魅せられてしまい，松井翠声君とともに高等学院からは最初の会員として大学の英語会に入会した。飯田要三君，唐沢金四郎君，高橋武二君らとともに英語会の活動に熱中し，私はとくにスピーチに興味を持っていた。

その頃ミス・トーマスという素晴らしい美人の先生がいて，皆この先生をつかまえて英会話の練習をすることを好んだ。私は，青山に住んでいた先生を，いつも高田馬場で待ち伏せて学校まで歩いては英会話を練習したものだった。ある時この先生が出席をとって「ミスター中島」と呼ばれたので「イエス・サー」と３回も答え，４回目にようやく気付いて冷汗をかいたりしたこともあった。日曜日などはよく英語会のピクニックで井之頭公園に行き，外人の先生方と楽しく話し合う機会を持った。

当時残念に思ったことは，英語会にアカデミックな雰囲気が欠けていたことであった。これは英語会に対する私の唯一の批判であり，不満であった。そこで後に私が早稲田大学の教師になったとき，

英語会の会員と親しくなった機会を捉えてこの批判を述べ，アカデミックな雰囲気を英語会の中に取り入れるよう要望したが，これはその後次第に良くなったようである。また会員の中には学業の成績も優秀な者が多く，中には教授会で話題になるような者も何人かいた。このような伝統は是非とも守って欲しい。

さらに後に早稲田ガーディアンが生まれたが，ガーディアンが英語会から完全に独立して，英語会の活動と無関係になるというのはけしからんことである。もちろん，現在このガーディアンが活発であるのはよろこばしいことであるが，やはり英語会とガーディアンは表裏一体であらねばならない。出来得ればガーディアンの会員は英語会から取り，同一の系統のものとなって欲しい。

英語会の生活を送って愉快に思ったのは，後に外国へ行ったときどこへ行っても英語会の先輩がいたということである。こんなに心強くかつ愉快に思ったことはない。つくづく英語会の良さを感じた。とくに大正15年卒の高橋武二君，松井翠声君，それに私と同期の会員が３人もニューヨークで一緒になることができたのは非常に愉快なことであった。

現在の英語会を見るに，あらゆる面で昔よりはずい分良くなってきている。しかし注意せねばならぬことは昔は周囲の英語のレベルも低かったが，最近では英会話の必要性の増大とともに，周囲のレベルは飛躍的に向上してきたので，非常な努力で英語の勉強をしなければ従来の伝統は守れないということである。またドラマにしろスピーチにしろ何といっても勝たねばならない。これはスポーツと同じである。毎日毎日練習をせねばならないのである。したがってチームを作って猛練習を毎日行い，チームワークを育て，さらにコンテストを行って技を錬磨したら良いと思う。そうすれば必然的に層の厚い強力な体制を作り上げることができる。英語会の各会員も会員たる意識を強く持ち，さすがは英語会のメンバーだといわれるくらい，英語の模範生になって欲しい。それにアカデミックな雰囲気の不可欠なることはいうまでもない。要するに英語会の会員は英語会会員としての特異性を持たねばならない。そのためには英語で生活することを心掛け，常に世界的視野を持ち，世界人，国際人たる人物にならんと努力することである。

【中島正信●大正15年卒業】

英語会出張所

あの頃は，まだ英語会なんてものがなかったので，何とかして大学なみに，学院にも英語会をつくりたいと思って(私だけ大学の英語会に入れてもらった)学院の外人先生に課外講義をお願いしたりした。初めは1週に1回，ただ何となく集まって外人先生のお話を聞くだけのことだったが，大学の英語会で大目に見てくれて，英語会なら本部のほうの本物に入ったほうがいいんじゃないか，なんて言わなくなった。そこで私たち学院の英語会委員は，さもさも大学の英語会の公認支部みたいな顔をして会員の募集をした。

英語となると正課の英語でも苦手なのに，好きこのんで外人と直接話をしようなんて生徒はいなかったから，いつも集まるのは2～3人だった。これでは講師の先生に相すまないと思って，各教室に宣伝に出かけた。「放課後階段下の狭い部屋で英語会があります。皆さん，ご出席下さい。今日の講師は美しいアメリカの娘さんです」美しい娘さんです，てなことはウソだが，階段下の物置部屋であったのは事実である。

そのうち大学英語会の山田先輩が本腰を入れて応援をして下さることになり，学院でも『部』に認めてくれて，何がしかの予算が出ることになった。ジーマン先生や，クロッカ先生や，ミセス北島先生に薄謝を届けるのが，私の役であった。その都度字引と首っ引きで「薄謝」てのは何と翻訳したらいいかとか何とかいろいろ困って，英作文を頭の中でやりながら行ったものだ。

ある時，コックス先生にご講義を願ったので，「薄謝」を届けに行って，おそるおそる直訳的感謝の辞を述べたら，先生は流ちょうな日本語で，「わざわざ恐れ入りますね」と言われたので面喰らった。まるきり舶来のような顔をしていて発音やシャレまで日本人より巧い人がいるのを発見して驚いた。

ラジオがやっと日本でも放送されるようになった頃で，映画もまだ無声であった。生きている外人の先生と直接話ができるのは英語会以外にはなかったのである。第一学院ができた年のことである。今は第一学院も第二学院もなくなってしまった。

【松井翠声●大正15年卒業】

第４章

昭和初めの隆盛期

昭和元年～14年

世界不況と軍国主義の擡頭

昭和時代に入ると，第一次世界大戦時代の好景気は一転して，経済界の不況は甚だしくなり，社会的不安も高まってきた。昭和５・６年(1930/31)頃は地主や小作人などの貧富の差が激しく，社会主義運動が盛んに芽ばえ世相は騒然としてきた。早稲田大学においても思想運動は激しさの度を加え，さらに英語会においてもこの世相を反映して，ディスカッションのタイトルには「封建思想に対する自由主義，社会主義の問題」などが多く取りあげられた。昭和６年の満州事変勃発，７年の上海事変勃発にともない，昭和７・８年は不景気のどん底となり就職難は深刻な問題となった。そして五・一五事件，二・二六事件と軍国調も急激に高まり，ドイツもヒットラーの擡頭，再軍備宣言と全体主義への道を歩み，昭和13(1938)年には日独伊防共協定，15年には日独伊三国軍事同盟が締結されるなど世界の歴史は再び戦争へと向かっていったのである。このような情勢の下で，英語会におけるディスカッションのタイトルも「米英の圧迫にどう対処するか」などに変わっていった。

このような世相の中でも英語会の活動は，比較的余裕をもって行われ，まず昭和の初期に著しくその規模

を拡大し，昭和８年から14年頃には一つの黄金期を現出した。当時の英語会は，各学部と専門部の学生を対象とする大学英語会と，そのジュニアコースに相当する第一高等学院，第二高等学院の三本立てで各々活動していた。部室はそれぞれ，現在の記念会堂付近，早稲田奉仕園付近のスコットホール，教育学部地下にあり，三部合同のスピーチコンテストやドラマを通じて交流していた。

さらに昭和12年，高等師範部の英語会が加わり４本立てとなると，大学の中でもとかく，系統的，派閥的となった。この欠陥を是正しようとして，まず四本を大学本部の英語会に統合した。そして劇にしろ，スピーチにしろ，あらゆる活動に勝たねばならないとして，大同団結し，オールスターキャストであたることにしたのである。そして，猛練習に猛練習を重ね，その甲斐あって，とくに劇，そしてスピーチも一躍有名になり，層も厚くなったのである。これらの活躍に対し，田中穂積総長からもおほめのことばをいただいた。この時代を境に英語会は強化され，内容的にもずいぶん良くなった。

英語会の組織拡充

組織の面では幹事長はなく，幹事２名，委員10名，会計１名で構成され，各々が独自の分野を受け持って活動していた。中心となった幹事たちは，すでに５～７年の学生生活を過ごした最高学年の学生であり，ジュニアコースで腕を磨いてきた人たちばかりであったから，その貫禄たるものはまさに大臣級であった。会長に高杉先生，副会長に伊地知先生，そして萩原先生，

野口先生，トマス・ライエル先生，北島先生，乾清末先生等が毎日学生と接触されて，直接指導して下さった。大学の講師でもあった乾先生は，ほかに国際連盟東京支局のアドヴァイザーもしておられ，英語会を国際的な方向へひっぱって下さった。

毎年新学期には，各教室を回って勧誘演説をし，会員を募集した。このようにして集まった人数は200～300名，多い時に400名くらいに達したが，最後まで残って活動するのは一割程度であった。入会金5円，学校からの援助金1,000円で合計2,000円程度の予算があり，比較的余裕があった。英会話の練習には，部室で行われる「レッスン」があった。昼休みや放課後を利用して週2回，多い時で4回行われ，外国人教師を招いたり，教授や先輩を中心にして行われた。そのほかに，平常のディスカッション，それに「トーキーイングリッシュ」があった。これは，映画のシナリオを買って，それを暗誦し，それから映画を何回も見て，勉強した。また時には「カレント・トピックス」の担当アナウンサーを招いて，講演会を開いたりした。

昭和11年　天長節の日

昭和時代に入ると英語会は，組織は充実して，活動もまた一段と拡大し，大きな進歩を遂げた。まず昭和2（1927）年には潮田定一氏等の努力で，六大学英語会連盟が組織された。これは早稲田，慶応を中心に，明治，立教，法政，商大（一橋大）によって構成され，後の四大学英語会連盟の母胎となった。しかしこれは昭和5（1930）年，早慶の横暴さが原因で解散となった。この連盟の事業として，六大学合同英語演説会を開催し，さらに神宮外苑の日本青年会館で，第一回六大学英語劇大会が，英文毎日新聞の後援で開かれた。その時は慶応が優勝し，早稲田は二位に甘んじた。その後審査員に対する批判も出たので，順位を決めることを止め，ただ，六大学合同の英語劇を催すことになった。これも連盟の事業の一つであるが，六大学の学生が交歓して親睦をはかるために，六大学英語会懇親集会が開催せられ，パーティや旅行などと賑やかに行った。

稲門英語会の創設

同じく昭和初期の英語会の事業として特筆すべきものに，稲門英語会創設がある，これは，高橋武二氏の構想にもとづき，潮田定一氏，一又正雄氏の努力で設立の運びとなり，同時に稲門英語会の第一回の名簿が作られた。昭和9（1934）年，第一回日米学生会議が開かれた。また昭和12年に日比学生会議が開かれた。同じく昭和12年に第二回稲門英語会の名簿が，死亡者の名前も含めて，十時尚秀氏，西前文吾氏らの手で作られた。さらにこの年に英語会の機関誌のような形で，「ガーディアン」が英語会内で作られた。この指導には花園兼定先生が当たり，松原弘雄氏らが活躍した。そ

の後この「ガーディアン」は独立して，現在の「早稲田ガーディアン」となった。

また昭和14(1939)年に初めて女子会員が誕生したことは，この時代の特筆すべきことである。昭和15年に，高杉瀧蔵先生の古稀を祝して「高杉先生古稀祝賀園遊会」が一又正雄氏らの努力で大隈庭園において盛大に開かれた。これには家族同伴で多数のＯＢが出席した。そのほかにこの時代を特色づけるものにアメリカンベーカリーの会がある。これは昭和14年２月11日に第一回がもたれた。紀元節の日に，早稲田大学の学生は８時に皇居前に集合した。万歳を三唱した後で，英語会会員は連れ立ってアメリカンベーカリーまで歩き，そこで一緒に食事をしたのがきっかけになって，卒業を控えた最高学年が下級生にいろいろと忠言を与える場となったのである。

野尻湖合宿の始まり

対外活動としての最大の活動は夏合宿である。今と同じ長野県の野尻湖で，最初は百姓家の二階を借りて行っていたが，後に小松屋，野田屋に50名から60名の会員が１週間にわたって起居を共にするようになった。20日間の長期にわたる時代もあった。昭和14年には，ベイカー先生，15年にはスタンレー先生を中心に，午前中はレッスン，午後はゲーム，野球，水泳，ハイキングと湖畔の生活を十分に楽しんだ。

期間中毎年妙高へ登るのもこの頃の慣例であった。合宿中は禁酒が守られ，また“One Word, One Sen”の掟の下に，日本語禁止の時間が設けられた。ある年の罰金支払額の最低者は20銭，最高者は１円20銭であっ

た。最後の日は，町の公民館で「早稲田の夕」と称して，グループ別に寸劇を演じ，野尻湖の生活に終止符を打った。この夕べの集いには，向う岸の大蔵高商(東京経済大)ＥＳＳ，東京商大ＥＳＳからスイカや色々のものが贈られた。年一度のこの「早稲田の夕」を見ようと，野尻湖近在の人たちは，朝早く，遠方からわざわざ弁当持参でおし寄せ，会場はいつも超満員の盛況であった。テレビ，ラジオ等の娯楽設備の普及していない時代であったから，人々が年一度の楽しいお祭りとして心待ちにしていたのである。

スピーチコンテスト

合宿以外の活動としては，スピーチがある。三部合同スピーチコンテスト，早慶オラトリカル・ミーティング，全関東スピーチコンテスト，早慶明スピーチコンテストなどがあり，多方面に進出していった。三部合同のスピーチコンテストは，春秋二回，大学から４名，第一・第二高等学院から各３名の計10名で行われた。全関東スピーチコンテストは各校からの３名の選手によって争われ，英文毎日がスポンサーとなり，英・米大使館員が審査員となった。早慶オラトリカル・ミーティングは，春秋２回行われ，春には早稲田で，秋には慶応で行われた。全校５名の選手が出場したが，審査の結果，早稲田の敗北となったため田中総長からおしかりをうけ以後中止になった。しかしその後，審査員なしの単なる親睦，意気振興のためのミーティングとなった。

また，スピーチの一端として関西遠征があげられる。この遠征の起こりは，湯瀬氏が関西を訪問した際，関

全早稲田英語会大会のポスター（昭和3年）

西ＯＢの間で「関西遠征をしてみたら」という声があがり，昭和10(1935)年，関西遠征の誕生をみたのである。神戸商大，大阪商大，同志社大を相手校として行われたが，形式はスピーチであった。スピーチコンテストで優秀な成績をおさめた７～８名だけが参加を許され，高杉先生もご一緒であった。昭和14年には同志社大学の一行７名が南石先生とともに早稲田を訪れ，同様にスピーチを行った。

四大学英語劇大会

ドラマは毎年春には四大学英語劇大会，秋にはオール早稲田の英語劇大会が行われた。四大学英語劇大会は，まず昭和２(1927)年に六大学英語劇大会として発足し，昭和５(1930)年に六大学英語会連盟が解散するとともに，早稲田，慶応，立教，商大の四大学によって構成される東京大学英語劇連盟が，このドラマを主

催することになった。これは東京大学英語劇大会と呼ばれ，後に四大学英語劇大会となった。昭和の初期はコンテストの形式であったが，その後昭和26(1951)年に再びコンテスト形式になるまでは，親睦を目的として順位は決めなかった。会場には神宮外苑の日本青年会館を使っていたが，昭和12年頃は軍人会館のホールを使うこともあった。秋のオール早稲田の英語劇大会は最初は三部合同で行われ，この大会で優秀な成績をおさめたチームが四大学英語劇大会に参加することができた。後に高等師範部の英語会もこれに参加するようになり，対外のドラマにはこれら四部からのオールスターのキャストで当てるようになった。

オール早稲田の大会の会場は最初は早稲田奉仕園の近くのスコットホールを使用していたが，後に許可を得て大隈小講堂を使用し，昭和3(1928)年には初めて大隈大講堂で行うことができた。当時の出し物は「月の出」や“Glittering gate”“Bound East for the Cardiff”などが主なものであった。ほとんど全会員が参加し，装置などは全て自分たちの手で作り，衣装や小道具の類には会員の家族も総動員という有様であった。昭和10年の秋には大隈講堂において，シェークスピアの「マクベス」が上演された。これは5場13幕を全部通して上演するという，前例のない大規模なものであった。トマス・ライエル先生が主として演技のほうを指導し，役者には西村延太郎氏，伊藤鮮三氏，星崎欣三氏，山中誠人氏らが活躍し，裏方としては，中村康夫氏，小熊正安氏，西前文吾氏と続く伝統的な系列があった。ドラマはこの時代には，他校の英語会でも非常に盛んであった。立教においてはこの頃から日本物を英訳して

上演していた。すなわち根岸由太郎教授が日本の戯曲を英訳して，ポール・ラッシュ氏が指導に当たっていた。「父帰る」，「恩讐の彼方に」，「盗賊戯説」などがその出し物であった。商大ではレットマン氏が指導に当たっていた。このように各校において盛んであったドラマであるから，役者が本職の劇団からスカウトされたり，裏方が卒業後演劇関係の仕事に従事することも珍しくなかった。立教で活躍した池部良氏などはその好例である。

二，三の思い出

私は第一高等学院に入学と同時に，同学院の英語会に入りました。英会話が上手になりたいという念願が一つ，それからは何かの会に入って，少しでも学生生活に潤いをつけたいという目的からでありました。

3カ年の学生生活を終えて，大学の商学部に進みましたが英語会のほうはそのまま継続して，大学の英語会に入会しました。卒業後，何かにつけて，両方の英語会に郷愁を感じるとともに，実社会で活動するうえに，英語会にいて勉強したことのお蔭を体験しております。

学院の英語会では，コックス先生，ケート先生，北島リリアン夫人らの恩師のことがすぐ連想されます。コックス先生はみごとなひげで有名，“My name is cox, not fox.”を口癖のようにいうことでも知られていました。ケート，リリアン両夫人からは，英語劇の指導もうけ，発音や表情や，ジェスチャーについて，手をとって，教えて下さった思い出は忘れられません。

それから第一高等学院の英語会は早稲田大学バスケットボール部発祥の役割を果たしました。これについては，私どもが発言しなければ，もし，誰かが早大籠球部の発展史を編む場合，画竜点睛をかくうらみがあるのではないかと思っています。英語会の一部会員が雨天体操場で，スペンサーという若い米人講師から，球の持ち方，投げ方，プレーの仕方を教わり練習を始めたのがその発端です。後に早大球技部の人たちも参加するようになりました。当時の早稲田籠球部のことは，ここに詳しく書くことはできませんが，あまり知られていないことと思うので付記しました。

会員同士はいつどこで会っても英語でしゃべらなければいけないという申し合わせがあって，違反すれば罰金何銭を払わされたのでした。電車の中では他の乗客にみつめられながら「グッドモーニング」等々とまくしたてたものでした。それから年1回春季にオラトリカルコンテストがあり，私は2年生のときのコンテストで1等に入選し，エスマン論文集の原書をもらったことがあります。

【前田潔己●昭和2年卒業】

昭和の初めの頃

小生は大正14(1924)年４月から昭和３(1928)年３月までの大学時代，早稲田大学英語会幹事として，同僚とともに会の運営に熱中しました。その当時の事業として特筆すべきことは，六大学英語会連盟を組織したこと。六大学合同英語演説会を開催することになったこと。六大学英語会懇親集会を開催することになったこと。稲門英語会を設立したこと等であった。

その時の六大学というのは，早稲田，慶応，立教，明治，法政，商大(一橋大)であった。

連盟の事業の一つとして，六大学合同英語演説会を催した。第１回の時は明治の松本君が優勝した。彼はハワイ生まれで我々はどうしても及ばなかった。彼は吉田内閣時代，副官房長官として首相の通訳をやっていたようである。第１回の六大学英語劇大会は神宮外苑の日本青年会館で行われた。六大学合同であるから観衆も会場にあふれた。その時は慶応が優勝して早稲田は２位であった。小生は個人賞をもらって今でもその大きなメダルは保存してある。英文毎日新聞に後援してもらったので新聞にも写真入りの記事が出たものである。ただ審査員に対する批判も出たので，その後順位をきめることをやめて，ただ合同で劇を催すことにした。そのほうが良かったと思う。

稲門英語会の設立については，高橋武二君がこの構想を練ったのであるが，彼が渡米することになったのでそれを引き継いで，小生と一又正雄先生(当時は英語会の幹事)とが主として推進し，大勢の先輩の方々のご協力によったものである。主だった先輩は一々訪問してご相談をしながら話をすすめたのであったが，色々な意見が出て調整に苦心した。発会式を開くところまで運ぶには非常な努力を要した。

高杉滝蔵先生は永い間英語会の会長であった。誠意の士であったので学生から親爺のように親しまれていた。とくに幹事連中はお宅へお邪魔する機会も多かった。会長の在任年限か，ご年齢かの関係で先輩諸氏が記念品を贈呈するのに，何かご希望があればということであったが，先生は大きな10人ぐらい並べるテーブルを希望された。先生は我々学生を呼んで，このテーブルを囲んで食事をしたり，歓

談したりすることを何よりの楽しみとしておられた。まことにまことに懐かしい思い出である。

【潮田定一●昭和３年卒業】

二八会から「稲門英語会」へ

私は早稲田大学ではなく，早大英語会を卒業したのだといっているくらいだから，ＥＳＳの思い出話は，つきるものではない。第二学院（２年制）時代は，青木昇君，中島保俊君（成女学園校長）や，郭明昆君などと一緒に委員だった。英語劇では，スコット・ホールのせまい舞台にも立った。ダンセニーの怪奇な「黄金島の王の妥協」という芝居で，青木君の王様の前で占いを行い，意にそむいたというので死罪を申し渡される僧侶になったが，侍僧には，法学部の仲間だった我妻源二郎君（弁護士）や池田滋君（判事）を従えたものだった。香をたくところを，煙草のきざみでごまかしたので，けむくて声が出なかった。また英詩の連続講義を企画し，繁野天来教授に，キーツの「聖アグネスの夕べ」をご講義願ったが，テキストづくりに二晩か徹夜した。

私の１年の時，今の大隈講堂ができたが，大学はなかなか学生に使わせず，がんばった末，２年目に小講堂を，３年目に大講堂を借りることに成功した。しかし，小さい舞台になれていたので，大舞台となると万事勝手がちがい，舞台装置にはみんな苦心さんたん，徹夜させられた。私は３年の時，スピーチをさせてもらったが，自分であの大きな幕をあげた後，息をはずませて演説した。

私が英語会に，終生の感謝をささげているのは，他では得られなかった「人の関係」だった。学院時代は，台湾出身の郭明昆君（早大の中国語教師になり，戦争中，台湾海峡で遭難死去）を通じて，被統治者たる異民族の苦悩や怒りをはじめて知り得た。また私は，英語部では変わり種の法学部だし，自称文学青年だったので，専門の文学部の人たちとの接触で，得るところも多かった。築地小劇場に通い出したのもその頃だった。また，ややお高く育っていたので，英語劇プログラムの広告とりをやらされてこぼしたら，商学部の人たちに，保険の外交や，セールスマンの苦しみを説教された。

先輩との大同団結ができた「稲門英語会」の発足も，昨日のような思いがする。

私の大学２年の時，「二八会」ができた。主として銀座裏の「ひさご」という小料理屋の２階を会場とした。二八会というのは，先輩の月給日を考えて，28日に集まるところからである。昭和３(1928)年10月15日に創立。伊庭，高橋氏，平岡，潮田，中沢，青木，一又の７名が発起人だった。今でも寄せ書きや勘定書を保存してあるが，30数回もつづいた。第６回目が高橋武二氏の渡米送別会だったが，高松先生，中村伸先生はじめ27人が会合。勘定合計22円５銭だった。その後，もう少し組織だったものにしようということになり，昭和４年11月１日，新橋の「ふもとや」レストラン(先輩兵頭実氏経営)での会合で，「早稲田ＥＳＳ二八会」の規約を作り，会長に中瀬精一氏(日本郵船常務)，副会長に稲荷義太郎氏(ライジング・サン石油支配人)，顧問に高松先生をお願いし，高橋伝三郎，藤沢久，飯島徳次，伊庭秀晴，平岡弘男，神谷勝太郎，潮田定一，中沢鍬太郎，青木昇，一又の10名が幹事になった。そして，昭和６(1931)年８月に，「稲門英語会」と改称したのである。

【一又正雄●昭和５年卒業】

大不況の頃の英語会

もう70年以上も前のことになります。その頃の活動といったら，まず日常会話のレッスンがありました。ノルウェー人のトルーネ先生，北島リリアン先生，そのお嬢さんの北島メリー先生，ボンエン先生が，それぞれのカリキュラムで教えてくださっていました。

そこで習った英語に，巻き舌を意識的に混ぜて，新入生の歓迎をしたものです。何しろ会費を集めなければいけません。皆で手分けして，200人ほどの１年生を入れました。

そして，四大学ドラマ。英国大使，米国大使その他各国大使にも招待状を送って，意気を上げたものです。もちろん，大使本人は来ませんでしたが若い代理の人が見にきてくれました。私は英語が不得意でかつ英語劇等に不向きであり，物を作ることが好きだったので，いつも裏方，舞台装置を担当していましたね。

私が卒業する年(昭和６年)前後は，大不況の余波をもろにかぶっている頃でした。英語のできる神谷勝太郎氏(昭和３年卒，現存)はジャパンアドバタイザー

に，栩木仲氏(昭和４年卒)は米国の大学に留学しました。就職難で，多くの人々が満州(中国東北部)に職を求めて渡っていきました。私は運よく日本鋼管に勤めることになりましたが，卒業後，32年たって，ニューヨーク事務所所長を命ぜられた時には，もっと英語会で一生懸命にやっておけばよかった，と後悔しました。仕方なくベルリッツに入って再勉強しましたが，30時間で200ドル(当時は１ドル360円)だったことを覚えています。

これからの人は，英語だけではなく，もう一か国語，例えば中国語，スペイン語などをマスターすることが必要でしょう。ぜひ，それを達成していただきたい，先輩の一人としてそう願っています。

【藤原研三●昭和６年卒業】

想いを当時に寄せて 亡き人々に捧げる

昭和11(1936)年ごろ，英語会のメンバーは毎日はやめに昼食をすませて分室につめかけたり，休講があればまた分室で時間をついやしたものだ。したがって，お茶飲みや麻雀に時間を過ごすことすら念頭には少しもなかった。これは私のみならず，多くの会員がそれぞれ同じ気持ちであったと思う。

「オールワセダ」の英語劇大会の準備に入る９月末から11月中旬までは講義にすら出ることが難しかった。「マクベス」を当時上演したとき，いまは亡きライエル教授に指導して戴いたが，先生が余り熱心すぎて，教えた通りアクションするのを忘れたら最後，台本をアクターめがけて投げつけたことが再三あった。その当時のお元気な面影は今なお彷彿として眼前にある。

猪瀬先輩は，四大学やオールワセダのドラマの練習が始まると同時に，寝食を忘れて，深田兄と毎日，大隈講堂の裏方に金槌とブラッシュを持って出掛けて，仕上げたご尽力には今でも感謝の気持ちが一杯である。猪瀬先輩の仕事のあい間の憩いの場所は，講堂近くにあった「ツバサ」であったことを記憶している。用事があってどこにもいなければ，「ツバサ」に行けばたいてい会えたものだった。昭和13(1938)年の秋，私が弘前の連隊にいたとき，猪瀬先輩が見習士官に任官して北支へ派遣される直前，わざわざ青森から陣中慰問にかけつけて戴き，営庭

で話しつきない時を過ごしたのが最後で，北支でまもなく戦死された。まことに惜しい人を失ったものだ。

深田先輩は36年1月にご尊父の手厚い看病のかいなく亡くなられたが，私はいまだに深田兄がどこかでお元気にご存命されていることと思われるほど，往年の深田兄は病気一つ知らない人だった。よく川崎方面に商用で出掛けた帰りみち，私の会社に立ち寄られて，コーヒーを飲みながら雑談をしたものです。いまは亡き諸先輩の一端を寄せて，故人のご冥福を祈る次第です。

【緒方省吾●昭和12年卒業】

合金の鎖

早稲田大学英語会のあるべき姿について，所信を述べたいと思う。私はこれを合金でできた輪の鎖にたとえてきた。一つの輪はある学年を意味する。人間は十人十色である。性格の点ばかりでなく女学生も入会するようになった現今では，その異質性はさらに倍化し，複雑化する。その輪は結果的には，黒くたくましいものもあれば，細いものも，錆びたのも，輝いているのもある。だが密度は緻密で硬く鍛えられ磨かれ強固なものとならなければならない。そして，それは互いに縦に鎖の如く次々と連らなっている。

換言すれば，英語会会員は日夜努力している結果，英語の点は他の学生に比較して学年が進むにしたがって実力が向上するのは事実であろう。だが，言葉や文字は手段にすぎない。英語会会員は真の学生の持つべき資質を持つことが第一義的でなければならない。英語が良くできるというだけならば，他民族にはそのような若者は沢山いる。英蘭の旧植民地に行くと，その原住民たちの大部分は自国語同様に英蘭語をマスターしている。英語ができるということは日本では自慢になっても，一度外地に行けば普通のことなのである。専門の学問の修得，人間性の理解，いろいろな経験，それらによってさらに高い次元に自己を向上させることができ，次代の日本をリードする人物たり得るのである。このような学生こそ英語会会員である。

また英語会は長い伝統を持っている。その伝統を受け継ぎ，多くの先輩が陰に陽に後輩を指導し世話をしてきた。そして，英語会であればこそ在学中，数々の

楽しい学生生活を送ることができた。自己が今日あるのはまったく校内・校外の先輩のお陰であることが多い。感謝しなければならないことだ。このことは卒業して年が経過するに従い，その感を深くするものである。人がある人から恩を受けた場合，恩を受けたその人にお礼をするのが普通である。しかし英語会の場合，先輩が後輩を指導したり世話するのは後輩から反対給付を求めてではない。後輩のためを思って自分の人生においては極めて大切な時間を人に捧げて悔いないのである。では後輩は誰にその恩返しをすれば良いのか。それはさらに後から進んでくる自分の後輩に対してすれば良い。先輩への感謝の心算で。一つの輪は上の輪にしっかりとぶら下がっている。しかしまた自分の下の輪をしっかりと引き上げている。そこに早稲田大学英語会の偉大なる歴史がある。

【西前文吾●昭和14年卒業】

大学英語会の思い出

昭和12(1937)年の夏当時我々は２年であったが，世界教育会議が東京で約１週間開かれ，その折り大学の推薦と文化振興会により当時のＥＳＳのアクティブメンバーの大半が接待委員に選出された。一応現在の家政学院の講堂で日本の文化についての講習を受けさせられた。

当時の有名校の大半から選出されたので恐らく500名はいたと思う。我々早稲田組は，日本橋にあった八洲ホテルに配属されたが，豪州の先生たちが主だったが，支那事変直後だけに，それに関しいろいろと質問があって返事に窮したことがしばしばあった。同時に当局からも，これには触れぬように注意がきた，それでも女の先生でかなりしつこく聞くので弱ったことを，微かに記憶している。１週間の市電の無料パスが配布され，食事費が１日当たり３円支給されたが，案内を兼ねて観光バスであちこちと回った記憶も残っている。

我々の時代の稲門英語会の様子を思い出すのも意義あると考えて記述しておきたい。当時は早稲田大学が創立されてからでも，50年は経過した頃で，大学英語会が創立されてからでも，30年くらいだったから，ＯＢの数も現在から見れば極く少数で，私の記憶でも，出席されていた主なる方々は，大学英語会の初期のメ

ンバーの大先輩だった。

昭和13年頃のある日稲門英語会の例会が開かれ，杉野伊勢雄(父上が株式取引所理事長をされていた)先輩が東洋経済主筆の石橋堪山(後日の総理大臣)さんをゲストとして，連れて来られた。すでに前年日支間では戦争状態となっていて国家総動員法も制定されて，文字通り戦時態勢がしかれていた。当然言論も自ら制限されていった時代である。そんな折りに石橋さんは大胆に軍部を批判し，軍の幹部の経済に関しての知識の低さは目に余るものがあって，荒木陸軍大将の如きは，お金が不足しているならどんどん刷ればいいじゃないかと言うのを聞いて悲しくなったと，お話しがあった。しかし極く少数の集まりの席だとはいえ，このような発言をするのは当時としては相当勇気を必要とするだけに感銘した。場所は現在の野村ビルの上の永楽クラブであった。今は相当過激な発言をしても逮捕される恐れはないが，当時は反軍的であったり軍を批判すると弁解の余地なく憲兵隊に連行される時代だけに私としては今でも脳裏深く残っている。

【梶貞夫●昭和14年卒業】

第５章

戦中戦後の混乱時代

昭和15～24年

第二次大戦中の英語会

この頃は戦争直前から戦中へ次第に激しくなった言論統制，学徒出陣，食料不足等の何か重苦しい，国を挙げての軍国調一点張りの時代であった。すなわち戦時体制がとられ，一億一心に名を借りて，専制政治が行われた時であった。このような中にあって，わが早稲田大学英語会は最後までさまざまな制約により，活動の縮小を余儀なくされながらも保ち続けていったのである。昭和16(1941)年には，日本も第二次世界大戦の渦中に巻き込まれていった。当然の成り行きとして昭和９(1934)年来毎年開かれていた日米学生会議の中止が余儀なくされた。翌17年には英語がそろそろ「敵性語」とみなされるようになり，英語会に対する圧力は次第に強くなってきた。官立である商大に対してはその圧力がより顕著であったためか，四大学英語会連盟から脱退していった。この頃この四大学の英語大会も中止せざるを得なくなった。

このような状態では，英語会の会員募集も容易ではなくなった。そこでいろいろと考えた結果，「孫子の兵法」から取った「敵を知り己を知れば百戦危うからず」「敵を知る為には先ず，その言葉である英語を学ぼう」を会員募集のスローガンとして掲げた。このようにし

て集めた教員は昭和17年頃は，学部，専門部，高等学院合わせて200～300人であったが，英会話の実用性が乏しかったため，その数を急激に減少し，夏休みが過ぎるとわずか10数名を残すのみとなった。入会金に5円払えば卒業まで無料であったが，学校から伝統的に野球部と英語会には特別な補助金が出ていたので，会計面では相当楽であった。第一，第二高等学院，専門部，学部に分かれて活動し，講師には，北島リリアン先生，伊東(旧姓ティクワナー)先生，伊地知純正先生，英字新聞担当の中島正信先生，和文英訳担当の萩原恭平先生，さらに山根行雄先生，川辺晋先生，川本茂雄先生らがおられた。

当時の世相の中にあって，思いきり羽根を伸ばし制約された青春を謳歌することができたのは，なんといっても野尻湖での2週間にわたる合宿であった。50～60名の会員，5，6名の先輩，それに昭和16年にはスタンレー先生も加えて行われた。第1夜のエンターテイメントで始まり，午前中のグループスタディ別ディスカッション，午後の水泳，ボートレース，外人村訪問，妙高登山，そして最後の夜のランタンパーティで終わるこの合宿を通じて全員すっかり親しくなることができた。しかしこの合宿も昭和19年を最後に，しばらく中断せざるを得なくなった。

学徒出陣と勤労動員

このように灰色の中にも潤いのあった時代も，戦局が不利となるにつれて永く続くことは許されず，それまで徴兵延期でのんびりしていた学生にも昭和18(1943)年には徴兵制が適用せられ，ここに学徒の出

陣が始まったのである。そして徴兵年齢も19歳に引き下げられ，学生たちは学窓を去り戦地へと駆り立てられた。英語会からも会の主体であり会の運営者でもある上級生の中から，多くの出征者を出すこととなり，上野駅，東京駅で校歌，応援歌を歌って先輩を見送る風景が日常茶飯事となった。こうなると自然，1，2年生が英語会の中心とならざるを得なくなった。この年，永年英語会会長をつとめられ，英語会に多大な功績を残された高杉滝蔵先生を糖業会館に招き，謝恩会を開いたが，その直後逝去された。

やがて昭和19年には勤労動員が始まり，兵役年齢も遂に17歳にまで引き下げられ，戦争の魔手は下級生にも及んできた。しかし他のクラブ活動がほとんど休止状態にあったが，英語会においては，中瀬正一氏，住野喜正氏，伊東克己氏らが徴兵年齢に達せず英語会を守っていたのである。

このような状態では組織的な活動は出来なくなってしまったが，それでも動員の休みの日には5，6人が集まり，オーエン・ガントレット先生，北島メリー先生，サイダ牧師，デイルレイ夫人を囲み，あるいは米国からの引揚者を招いてレッスンを行っていた。また暇をみては萩原先生宅を訪問し，英語に疎遠になりがちな情熱を呼びさますべく，お話を伺った。当時英語の先生方は国賊のようにみられていた折柄，大変歓迎された。このようにしてやっと英語への情熱を保持出来たのである。

しかし，なんといっても最大の悩みは，どこへ行けば生の英語が聞けるか，であった。そこで外人の英語ならなんでも良いとばかり，うまくもないヒットラ

ー・ユーゲントの学生や，東南アジアからの留学生の英語を聞いたり，日比合作戦争宣伝映画に半分くらい英語が出てくるというので弁当持ちで朝から出かけ，何回も見たりするなどその意欲は涙ぐましいものがあった。また当時唯一の英字新聞のニッポンタイムス(ジャパンタイムスの改名したもの)を電車の中で読んだり，バスの中で英語を話していて非国民扱いされると同盟国ドイツの言葉であるといって相手を煙にまいたり，あるいは大学から高田馬場まで英語を話しながら歩いて，途中憲兵に怪しまれたりするなど，世相へのささやかなる反抗もしていた。

このようにして続けてきた英語会も，一人，二人と出征して行き，遂に昭和20(1945)年には会員は富田広氏唯一人となってしまった。空襲も激しくなってきたので，教育学部地下の部室からタイプライターや部旗やアルバムを疎開させた。4月には当時会長をしておられた中島正信先生の家が焼け，富田氏宅へ移る話をしていたところ，数日後に富田氏宅も焼失してしまった。このような苦しい状況の下で遂に終戦を迎えたのである。

終戦と食糧難

戦後の一年間は，混乱の真っ唯中にあった。すさまじい食糧難，物資欠乏の時代，加えて新円切替えでも抑制できなかった大インフレの時代，教室には学生らしからぬ様相を呈した学生が見られ，授業料も月ごとに目のまわるような勢で増額され，またそれを稼ぐためにアルバイトに追われ授業に出られないものなど学生生活も多事多難，大変なものであった。しかし戦時

中の英語禁止的な抑圧の時代を過ごしてきたためか，英語に対する熱意はすさまじいものがあり，また英会話の必要性はそれに輪をかけた。英語会においても入会者が殺到し，その数は800名にも達した。しかし当時の幹事長住野喜正氏の会の鉄則が「授業には出なくても部室へは必ず来い」という厳しいものであり，また生活自体も繁雑を極めていたので，最後まで残るものはわずか10名足らずであった。

英語会の会長には，高杉先生の後をついで伊地知先生，副会長には中島先生がおられ，講師としては，ミス・シンチンガー，萩原先生，中島先生，山根先生がおられた。レッスンは週3回程度外人講師，他に3回程度学内の先生によって行われた。程度により上級生向きと新入生向きとに分かれていた。その他各部には，先輩後輩を教えるグループ・レッスンが随時行われ，これが次第に日を定め規則的に部室で行われ，現在のグループ・スタディに近い形となった。また時には，外部から講師を招いてレクチャー・ミーティングを行った。その頃の早大英語会の実力は，議論に強い英語をという信念の下に，他大学に比較しても話す英語という点では数段上であった。21年には早稲田においても，女子学生の入学者が増え，英語会にも10名くらい入会した。しかしまだまだ学内においては女性の存在が珍しく，積極的に部室へも入ってこれなかった。そのような事情を考慮して，住野氏の提案によりガールズ・セクションが創られた。このセクションは，指導力もあり，語学も堪能なリーダー鈴木瑞穂氏の努力によって，各活動において優秀な成績を挙げた。その結果，女子会員も男子会員と対等に活動することができ

るようになったことと，男女同権の主旨から，誕生後一年にして廃止された。

英語会活動の再開

この時代の特徴ある活動は進駐軍との間に行われたエクスチェンジ・レッスンであった。これは昭和20年頃から行われたもので，多くは米軍の二世であったが，30～40名の軍人軍属の日本語に興味を持つ人が，トラックで乗りつけ，大隈庭園などで会員と3，4人ずつのグループになり，1時間は日本語，後の1時間は英語で話し合うという形式の，一種の交歓会のようなものであった。これは1年くらい続いたが，いつのまにか立ち消えとなった。学内においては珍しい風景であった。このような事情もあって，当時の英語会会員は，とかく一般学生からは別人視されていた。同21年に，第一回レシテイション・コンテストが各部別(学部，専門部，第一，第二高等学院，高等師範部，ガールズ・セクション)に原稿を選んで行われたが，2，3位を女性が獲得し，ガールズ・セクションの意気を高めた。同年，英語劇も他大学に先がけて，大隈講堂でオニール作，“A Night at an Inn”を上演，翌年も同劇をスタッフ，キャストを変更して再度上演した。昭和24年になると，戦後初めて四大学が合同で英語劇を読売ホールで，読売新聞社後援により，来日中のヘレンケラー・キャンペインの一環として行われた。これはまだコンテスト形式ではなく，それが復活したのは昭和26(1951)年であった。

昭和22(1947)年になると，第一回ディベイティング・コンテストが住野氏の提案により行われた。これ

日米学生会議開会式（高松宮殿下）

は各部対抗で行われ，テーマは「家族制度を廃止すべきか」であったが，決勝では「ローマ字を採用すべきか」でガールズ・セクションが第二高等学院を破り優勝した。さらに同年，日米学生会議復活第一回（通算第８回）が明治大学で開かれた。このときの米国側の出席者は，米兵の中から選ばれた学生であった。これは日本学生協会（ＪＳＡ）（後のＩＳＡ）の努力によるものであったが，資金の調達，各方面の連絡等，東奔西走した彼等の努力は大変なものであった。高松宮両殿下を迎えて，毎年秋に開催されるようになったこの国際的な集会の，縁の下の力持ちとしての早大ＥＳＳマンの活躍は，翌年度の長谷川信氏にしても，次の島沢重夫氏にしても，紫田加寿男氏にしても，あの華やかなる会合を成功に導き，早稲田の実力を身をもって示してくれた人々であった。当時マッカーサー杯争奪の全国スピーチ大会が，二世も混えて行われていた。これは出場者の多くが二世か，外国帰りの学生であった中で，松本政司氏は大いに気を吐いた。そのほか関東地区のスピーチ・

コンテストがあった。

OBの消息を訪ね名簿作成

住野氏の後を継いで幹事長に選ばれた長谷川信氏の時代には，会員数も少なく，年下の会員も大勢コミティ・メンバーに加わって活躍していた。戦後四散したＯＢの消息を訪ね，第三回目の稲門英語会名簿が作られたのもこの長谷川氏らの功績であった。次代高野自郎氏を経て，英語会誕生以来の，また他校にもその例をみない女性幹事長西川総氏が出現した。昭和24(1949)年春，六・三・三・四制の学制実施により，早稲田大学も新制大学となり，それとともに英語会を構成していた各部が一本にまとめられ，第一，第二高等学院は，新制高校として一段下のものとなり，また旧専門学校から新制大学の３年に転学してきたものが一緒になったため，内容も複雑な様相を呈してきた。そのような中で，従来のコミティーと新制２，３年の会員で異例の選挙が行われ，ここに女性幹事長が誕生したのである。ともかくも女性幹事長の出現は，内外ともに大きなセンセイションを巻き起こしたものであったが，見事早大英語会の伝統を守り通し，我が英語会史の上に，新時代を画するとともに，女性会員の一つの生き方を身をもって示してくれたのであった。彼女のフロンティアの精神，さらにこれをバックアップした男性会員の度量とに敬意を表せねばならない。

娯楽面の活動においても，この頃は未だ生活に追われる時代であったから，計画的に全会員によるハイキングや合宿は不可能であった。しかし昭和21(1946)年には戦後初の合宿を箱根で行ったが，これは合宿とい

うにはあまりにもお粗末なものであった。翌22年には志賀高原に一週間，23年には山中湖で立教と合同で一週間，というふうに転々と場所を変えて行われた。これらの合宿には食糧の大部分は持参せねばならず，まったく深山にでも入るようなようすであった。それでも女性の参加もみられるようになり，昭和25年頃からは共学も板につきかけてきたのか，女性に対するマナーも程を得て，それぞれの立場でエンジョイすることができた。

このように，一億一心の名の下に戦時体制が布かれ，英語も「敵性語」とみなされるようになり，英語会に対する社会的圧力の増大，さらに戦局が不利になるとともに，学徒出陣，学徒の勤労動員と，英語会も時代の波の中で大揺れにゆれつつも，押し流されることはなかった。そして終戦，米軍の進駐と国際語としての英語の認識は，またも英語会ブームを巻き起こした。しかし戦中の苦難を耐えてきた英語会の生命力はこの時代も，しっかりと燃え続け，窓ガラスは砕け，熔けて飛び散り寒い冬の風が吹き込む部室で，オーバーの中に身を縮め，手足を凍えさせて英作文，英会話の練習と，今日の隆盛への下地を作るべく全会員は努力を重ねたのであった。そして他大学に先がけて活動を開始し，慶応，立教，明治学院，青山，日女大，東女大，津田塾に復活を呼びかけたのである。このようにして次代へそして現代へと英語会伝統の精神はその生命力を伝えていったのである。

思い出すままに

鳥兎匆忙とか，20年の歳月が流れた今，昔の思い出をちょっと綴ってみましょう。私どもは卒業を間近に控えた昭和16年暮に，戦争勃発のため３ヵ月の繰り上げ卒業をさせられたものでありますが，ＥＳＳの各種アクティヴィティーは心残りなくエンジョイでき，その後の人たちには誠に気の毒に思いつつ校門を去って行ったものです。何しろ英語を敵性語だなどという馬鹿者がウジャウジャいた時分で，英語会の諸君が仲々動きにくかったと思っていました。私たちは幸いにも対外的にも各種のオレーションや英語劇，あるいは野尻湖合宿もほとんど支障なく行ってきたので，今考えても学生生活すなわち英語会の生活と言っても過言ではありません。

当時の会長は故高杉滝蔵先生で，会合の挨拶などでは初めは穏かに，次第に熱が入り，感情をむき出しにされたようなスピーチを聞くたびに，あのくらい英語が話せたらなあと何度思ったか知れません。先生のワセダユニワルシティという発音を忘れた人は無いと思います。常々必ず百歳以上生きると言われていましたが，実現しなかったことは残念です。

またその頃の教師では米人のＭ・Ｂ・ハッパ夫人などはとくに親しくして頂いて，自宅(九段にあった日本住宅)に招かれたり，戦後10年以上も経ってニューヨークからクリスマスカードを送られたりして往年の女史の銀髪と早口の英語を思い出しては，感慨に耽ったものです。

また合宿まで一緒にしたベーカー夫人(現ブラックモア夫人)には趣味の絵画の個展を，麻布の国際文化会館に開かれた際，お会いして懐旧の感に打たれました。その他北島リリアンさん等は全く日本人のような感じで，口癖の“Is that so?”も忘れ得ぬ思い出です。四大学英語劇では，立教大学のメンバーだった池部良氏が，九段の軍人会館の舞台裏でステージマネージャーなどを務めて活躍していた時代でした。

【富沢慎哉●昭和16年卒業】

昭和17・18年の英語会の活動

戦争も末期的になりまして，昭和16年12月に第1回目の繰り上げ卒業が始まっ

て，以後９月卒業になり，昭和18年９月卒業の直後に徴兵延期がなくなり，学徒出陣となりました。

○英語会

会長・高杉瀧蔵先生，伊地知純正先生，中島正信先生。

○稲門英語会

稲門英語会年次総会は銀座の森永レストランで開催されました。

出席者　高杉・伊地知・中島諸先生。

中瀬精一(会長，元日本郵船常務横浜港運社長)・御子柴頼一氏・金津熊夫氏(日本鋼策社長)・山口賢吉氏(富士屋ホテル社長)(以上明治40年卒)，大柴亀太郎氏(明治42年卒)，花園兼宅先生(明治43年卒)，石井真峰氏(住職，大正4年卒)，潮田定一氏(山一証券取締役，昭和3年卒)，一又正雄先生・青木昇氏(以上昭和5年卒)。等々錚々たる重鎮が顔を揃えて出席されました。英語会の幹事も招待されました。

幹事長・鈴木　格，副幹事長・中瀬洋一，幹事・植田文夫，増田亮，吉田三男その他でありました。

○英語会の活動

前学年までは四大学英語劇が開催され，我々もお手伝いしましたが，我々が引き継いだときは学内でのレッスンもやれなくなりました。何もすることがないので，久々に稲門英語会名簿を改訂発行しました。大変な売れ行きで，ファンドをたくさん残しました。

対外活動としては，親密な関係にあった慶応大学英語会と何回か英語懇親会を行いました。

何といっても忘れられないのは，中島正信先生が毎日部屋に来られて，ご指導を頂いたことであります。

○同期生の動向

我々の年度の卒業生は27名おりましたが，戦死，戦病死５名，復員直後病死２名で，その後現在までに亡くなられた方は８名ですので，現在の生存者は12名です。　【中瀬洋一●昭和18年卒業】

野尻湖合宿の思い出

「緑の丘に包まれて，歴史を語る野尻湖よ，高くそびゆる妙高山，こもる英語部の意気高し」

軽快な舟足にのり若人の歌声が青い湖水の上を流れ，緑したたる山々にこだまし，すき通るような青空に吸い込まれてゆく。白い雲にヨットの白帆が映える。

静かで美しかった信州野尻湖畔の別天地。その真夏の2週間こそ，私どもの生涯の別天地，まさに人生のオアシスであり，当時の軍国時代，学生生活としては，精一杯の青春のシンボルではなかったか。

忘れ得ない印象は数々あるが，まず緑したたる外人村，それも昭和15年(1940)を最後に英米人は姿を消してドイツ人がこれに代わってしまったが，外人村で子供を相手にまず英会話……ところが「私日本語話せますから……」といわれて大笑いの初日談も，1週間もすると大分ほめられるようにまでなる。これも，イングリッシュ，オンリー三度の食事 One word, one sen の罰金制のたまもの。2週間目にはチャーチの天井裏2階で外人牧師からバイブルとエターナルライフのお説教，湖畔の森に響く鐘の音と讃美歌とともに強い印象となって未だに消えない。そして，別れのランターンパーティー，楽しい村芝居で仲良しになった村人や女子大生等に愉快なストームの返礼答礼の後，静かなランターンの灯がいつまでもいつまでも湖面にゆれ流れ，夜霧とともに模糊としてたゆとう。つきることのない思い出の歌声！　湖畔のファイアー赤々と燃えて青春の雄叫びと哀歓。

思えば2週間，午後の楽しいフリータイム，弁天島の島影にボートを浮かべ，語り明かした人生論，世界観等々が如何に多くの影響を永遠の青春と不変の友情の上に与えてくれたか，それは計り知れない深く大きい波紋にほかならない。あの灰色の時代に幸にして私どもにのみ許され与えられたその自由な環境と雰囲気だった。

【森田徳次郎●昭和19年卒業】

戦中戦後

学院と学部時代(入隊まで)のことは楽しいことでいっぱいだが，あえて省略する。

戦局は進み，当局からの弾圧はなかったものの，公開のオレーション英語劇等は自制され，実用英語研修の機会も少なくなって淋しい学生時代だった。時局便乗の文士たちにより敵性語という言葉が流行し，ついには野球のストライク・アウトまで使用禁止となる時代であった。

昭和18(1943)年末に，今まで学生の特権であった徴兵猶予が停止され，多くの学生がペンを銃にかえて出陣すること

になった。英語会の吾々も二，三の者を残して陸海軍に入隊した，それは死と真正面から対峙することだった。

吾々が部室を最後にするとき，富田君や木村君たちが送ってくれたが，木村君(李揆現氏)が独り淋しそうにタイプライターを打っていた姿が今でも脳裏に焼きついている，その木村君もやがて出征したそうである。

我々は入隊から約2年間，陸海軍の将校としてある者は航空隊で，ある者は陸軍の前線で活躍した。あと3ヵ月終戦が遅れたら皆んな生きてはいなかったろう。

死と真正面から向きあうことは悲痛なことだが，国のために，父母弟妹のために死ぬという一本筋の通った素直な気持ちには，何か爽やかなすがすがしさがあったことは確かである。

全てを捨てる覚悟であった我々が，敗戦となって復員し，暫くの虚脱状態をへて復学してみると，学園は荒廃混乱しており，すぐに学生として適応するのにかなり困難であった。何よりも驚いたことに学園は全く見知らぬ左翼の連中により占拠され，アジ演説のるつぼと化していた。

英語会も全く見たこともない左翼の連中が中央派遣の政治局員のように牛耳っていた。浦島太郎となった吾々復員学徒はただ呆然と困惑していたが，命をまとに戦ってきた吾々である。ついに堪忍袋の緒が切れ，左翼集団の群がる教室で三年生として一喝して集団を崩壊させ，英語会に入り込んだ左翼の連中も完全にせん滅排除をした。我々は英語会の組織と機能の復活に全力をあげ，20年末にはＮＨＫからの要請により英語劇をマイクを通じて放送するまでに至った。

【豊田誠●昭和21年卒業】

英語禁止から英語ブームへ

私が早稲田大学に入学したのは，大東亜戦争が勃発した数ヵ月後，すなわち昭和17(1942)年の春で，外国映画はすでに同盟国であったイタリー，ドイツのものを除いてすべて上映を禁止されており，日本で発行される英字新聞には，大本営発表がトップを飾っていた時代のこととて，英会話の勉強は決して楽なものではなかった。「何処へ行けば英語が聞けるか」という情報交換が我々の間の極めて重要な問題の一つで，例えば英語を教え

てくれる教会などを誰かが見つけて来るとさっそく大挙しておしかけて行き，英語の勉強だけをすませると，礼拝などには顔を出さずにさっさと帰ってしまうので，最後に牧師さんを怒らせてしまったり，東南アジアからの留学生やヒットラー・ユーゲントなどをつかまえてきて，あまり上等でなかった彼らの英語に嬉々として聞き入ったものだ。

この頃には珍談が多い。大学から高田馬場まで，２，３人で英語を話しながら歩いて，途中憲兵に怪しまれたり，英語会禁止を叫ぶ右翼思想の学生たちと，「敵を知るためには先ず彼等の言葉を学べ」という論旨のもとに一大論争を展開した後２，３ヵ月恐ろしい思いで登校したりしたものだ。戦争が続くにつれて，我々の先輩，同輩が次々と戦場へ送られて行った。やがて，私自身も軍隊にとられる日が来た。火の気のない，うす暗いＥＳＳの部室で配給のコッペパンをかじりながら友人たちと別れを惜しんだことを覚えている。

そして終戦。アメリカ軍の進駐に伴ういわゆる「英語ブーム」に我々ＥＳＳをして一躍学生文化活動の花形として登場させた。明確な数は覚えていないが，多分早稲田ＥＳＳ開設以来と思われる多数の新入会員が殺到した。さらに男女共学制による女子学生の入会も戦後の英語会の歴史を飾るものとして特筆してよいと思う。

【服山邦雄●昭和22年卒業】

ＥＳＳ唯一の会員となって

昭和19年になると最早や大学の授業を続けられる事態ではなくなりました。軍事召集も19歳以上と１年切り下げられ，韓国人の李君にまで赤紙が来たりで相次いで出征し，残るメンバーは遂に私一人になってしまいました。９月になると，商学部学生中病欠者を除き全員集めて20数名で中島先生が中心になって勤労奉仕団を結成し，現伊勢丹に特設された軍需省航空兵器総局外局に勤務することになりました。仕事は全国の航空機関係工場の人員整備，生産等の統計事務その他で，特に英語に強い？私は外国航空機関係の書籍の翻訳などもさせられました。10月末より開始された空襲を転機として都市としての東京は全くその機能を失い死都と化し，都民は先を争って地方へ疎開し，

焼け跡はみるみる広がっていきました。私一人部室に立って焼け行く町々に心を痛めながら如何にして40数年にわたる諸先輩の築いたＥＳＳの伝統を失わず次の世代へ伝えるべきか衷心迷わずにはいられませんでした。夕日に赤く映えた窓ガラス，煙草の臭も消え失せ，塵すら白く積もっている机を眺めて茫然と立っていました。黒い書棚にある何10冊かの原書を見つめながら心に決めたものはＷにＥＳＳの旗，野尻湖合宿の歴史を語るアルバム，それに当時の貴重な財産の1つであったポータブル・タイプの３つを疎開させることでした。今にして思えば頬笑ましい心掛けだったといえましょう。

８月15日終戦の日を迎え伊勢丹では妙な型の学徒奉仕団解散式が行われ挨拶を聞きながら「明日からは我々ＥＳＳマンの本当の力を示す時が来たのだ」と思いました。焼け出された後，長野，群馬の山奥へ疎開した荷物と一緒にタイプやアルバムを取ってきて，ＥＳＳへ返還したのは大部後のことだったと記憶しています。学徒勤労動員は早速解除され若い人たちは９月頃から大学へ帰って来ました。諸先輩の中にもご記憶の方がいられると存じますが，“Before I submit my mission to you, 云々”で始まる会員勧誘演舌の文を練って川本茂雄先生をご自宅にお訪ねした折，若い米軍将校が居合わせ，先生と二人で私の原稿をほとんど書き替えられ，“I have something very much important to you, 云々”のアメリカナイズされた言葉に改められました。早速一人で例の旗を持って第一，第二早高から専門部と40数教室を勧誘して回り，新会員は一挙に800数十名を数えました。

【富田広●昭和22年卒業】

戦中、戦後のWESS

私がＷＥＳＳに入会したのは第二高等学院に入学した昭和18(1943)年４月であった。一緒に入会したのは伊東克己，佐野喜正(故人)，藤井弘太郎，永井英輔等の諸兄である。

その頃のＷＥＳＳは大学の英語会の下部組織として第一高等学院，第二高等学院と専門部にそれぞれの英語会があった。

それまでは学生に対して徴兵猶予制度があったが，昭和18年になってそれが廃止となり，20歳以上の学生は理工科系と病気の学生以外は昭和18年12月学徒出

陣となり，残った一部の上級生と新入会員のわれわれがＷＥＳＳを守って運営することとなった。

翌昭和19年４月に新入生が入ってきたので，われわれは各教室を回って新入会員の勧誘を行い，多くの新入会員を確保するのに成功した。しかし間もなく戦局が日本にとって不利になってきたため，学生は工場等へ勤労動員に駆り出されることになり，われわれは川崎の日本鋼管へ，一年後輩は川崎の昭和電工へ配属されることになった。それでも後輩のレッスンのために灯火管制下の真暗い街を歩いて昭和電工の寮まで出掛けたことを今でもはっきり記憶している。

そのうちに兵役年齢が20歳から19歳に切り下げられ，われわれも次々と軍隊に取られていき，私も昭和20年１月長崎県大村の陸軍歩兵第47部隊に入隊，終戦を宮崎県の山の中で迎えたが，終戦と同時に私は通訳部隊に配属されて９月末まで連合軍の進駐立ち合いのため各地を転々として，学校にもどったのは10月初めであった。英語会の部室にいってみると伊東克己君はもうＷＥＳＳの組織化のために飛び回っていて，私も一緒に外国人講師との交渉，レッスン会場に使用する教室の確保，スピーチコンテストの準備等に追われる毎日であった。

また，ＮＨＫのラジオで英語劇を演じたり，他校に先駆けて大隈大講堂で英語劇を演じたのも今では懐かしい思い出である。それまでの大学英語劇は各校とも出演者全員が男性で，女性の役も男子学生が演じるのが常識だったが，われわれは萩原恭平先生の紹介で文学部の女子学生を英語会に入会してもらい，その中から数名に英語劇に出演してもらった。したがってＷＥＳＳに女子会員が入会したのも，英語劇に女性が出演したのもその時が最初であった。

他校の英語会との交流も戦争のために中断されていたので，昭和20年後半になって主要校に呼び掛けて英語会連盟（Federation of English Speaking Societies）を結成し，大隈会館横の学生ホールで発会式を開いたのも思い出の一つである。

一方，われわれの先輩たちが戦争中廃刊になっていた「ザ・ワセダ・ガーディアン」を昭和20年再刊したが，後継者がいないため，伊地知純正，中島正信両先生のご指名で伊東克己，加藤毅康と私の３名がガーディアンに出向することにな

った。その後ガーディアンが独自に会員募集を行うようになり，今ではＷＥＳＳとは無関係な会になってしまったのは時代の流れとはいえいささか淋しい気がする。

われわれの頃の英語会は時代背景に恵まれていたとはいえないが，何んとか戦中から戦後へとつなぐ役割を果たすことができたので，今日の伝統あるＷＥＳＳが存在しているのだと自負している次第である。　【中瀬正一●昭和24年卒業】

ESSで青春を謳歌

太平洋戦争真っ只中の昭和19(1944)年に早稲田高等学院に入り,間もなく勤労奉仕に狩り出され,20年には軍隊へ入隊し，終戦後は生活苦に喘ぎ，生きるために食糧の買い出しに農村に出向く，またアルバイトで生活費を稼ぐという最悪の状況の中で学生生活を送ったのがわれわれ昭和25年卒業の仲間であった。

当時のＥＳＳは現在と異なり学部，学院が兄弟で一本のＥＳＳとしてつながっており，学院入学後直ちに先輩の勧誘でＥＳＳに入り，終戦復学後はＥＳＳ中心の学生生活に終始したものだ。われわれの多くの者は好きな英語を役立てて進駐軍の通訳で稼ぎながら学校へ出たらＥＳＳの部室へ直行し，ＥＳＳ行事に参加して青春を謳歌したものだ。

それにしても伊東，中瀬，住野先輩諸兄のＥＳＳ立て直しの努力には全く敬服した。お陰で，思い出に残る英語劇も大隈講堂で上演し，また私はマッカーサー杯争奪全国SPEECH CONTESTに昭和22，23年２年連続早稲田代表で参加できたこと，すばらしい思い出として記憶に刻まれている。

【松本政司●昭和25年卒業】

1948年10月から49年9月までのESS

早慶商立四大学英語演劇大会は1948年10月10日に行われた。戦前10回上演されたものが復活した喜びは大きかった。これはヘレンケラー基金募集運動と結びつけて上演することになり，出しものはロード・ダンセーニの A Night at an Inn 。

12月５日には学内英語演説会があり，

ＥＳＳ以外にも参加を呼びかけたが，結局ＥＳＳメンバーのみの参加にとどまった。五十嵐新次郎氏，スプリンジャー女史，コールマン氏が審査員。一部(予科２年以下)と二部(予科３年及び学部)に分けて30人余りが参加した。

このように大学間の交流と競争が活発になりだすと成果が気になるのが自然の人情で，競争力を磨くために専門グループの設置と活動強化をめざすようになった。これには中島正信先生の『専門家を育てよ』との示唆もあった。そこで演説，ドラマ，討論，読書の四つのグループを設け，責任者を置いて定期的にグループ会合するようにした。

この頃の学内の雰囲気を伝えるものとして文化団体連合会の中の力関係を示す記録がある。２月24日文団連の臨時総会があり98団体中49団体が出席した。校舎が焼け落ちたため部室が不足しており，単独で一つの部屋を持っていたのはＥＳＳのみだった。この臨時総会では部室の再割り当てが重要議題の一つだった。危機感を持った私は文団連対応の委員を一人指名した。

この後私は文団連委員長をしていた社会主義青年同盟の某氏と取り引きをして劇団ともだち座を部室の一角に入れてもいいと答えた。その一方でＥＳＳはメンバーには部室内で大声で英語で話し合うよう奨励し，この劇団はうるさくて打ち合わせができず，出ていくことになり結局ＥＳＳのみ一室の現状を回復した。ともだち座は私の友人が主宰していて気心が知れていたが，左翼系団体が入ると掻き回される心配があった。

なお1950年11月12日の記録として「来年は旧制・新制合わせて７千人の卒業生があるが，この日現在就職先内定は１割に満たないという話を聞いた。ＥＳＳは全員片づきそうだ。島沢(室町物産)，有馬(伊藤忠)，島田(金商)，奥野・柴田(第一通商)，露木(日綿)，小野・木股(東綿)，林(日石)，稲田(日通)，富安(日商)以上内定。高野(ＮＨＫ)一次試験パス」とある。

【高野洋●昭和26年旧制卒業】

マダム・チェアマンのメモ

旧制高等師範部に新たに社会教育科というのが設けられて，思い切って受験したら偶然入学することができたのは昭和

21年(1946)年6月1日であった。早大としては初めて旧制高女の卒業生を公募した際で同級生60余名中，10名の女子学生がいた。その8名までが半ば強制的に英語会へ入会させられた。

昭和24年(1949)年春六・三制の仕上げとして新制大学の実施と共に高師部は教育学部に昇格し，私共は社会科3年に編入されることになった。

旧制専門学校から新制3年へ転学して来た人も大勢あって，英語会の内容もまた複雑な様相を呈してきた。すでに卒業を間近く控えた人，転入してきた人，古いものと新しいものの間に立ってうまくやっていかねばならないその困難な仕事が私にめぐってきたのである。早稲田の伝統をうかとして崩してはならない，新しく入った者にかき回されては困る，そんな事情から先輩たちが，私をチェアマンに推すからと，異例の選挙が行われた。

すなわち，従来のコミティー・メムバーと新制3年，2年からなるメムバーとが一堂に集って投票し，そして私が選ばれた。エポック・メイキングとひやかされたり，大丈夫かと不安がられたり馬鹿にしていると不満を言われたりしたが，私はしめたと思った。何故なら入会以来，必ずチェアマンの座を占めようと心に決めていたからである。そのごたごたの際に已むを得なかったかも知れないが，何人かの有力なメムバーとなるべき人が離反して，ＢＥＡを商学部内に新設して独自の活動を始めた。

とまれ男の大学において，全ての学生団体を通じて女性が委員長をつとめたのは，恐らく私が最初であろう。他の大学の英語会から非難とも皮肉ともつかない声があがった。“早稲田には男はいないらしいぞ”“何時フェミニスト揃いになったのだ”もちろん男の人たちは憤慨したが私は屈しなかった。幸にして，コミティー・メムバーの大方は実によく，手足となって活動してくれた。

昭和24年末から25年の新学期一杯，半年余りであったにもかかわらず，次の学年の三好氏に後を引き継いだ時には正直ほっとした気持ちであった。

【小安総●昭和26年卒業】

第6章

戦後の再興期

昭和25年～34年頃

戦後の混乱ようやく収まる

敗戦後5年を経，ようやく終戦直後の絶望的な混乱期から，新しい民主々義の時代へと移っていった。昭和26(1951)年のサンフランシスコ平和条約の締結，さらに昭和31年には国連加盟が実現し，日本は再び国際社会へ完全に復帰したのであった。破壊し尽くされたかに見えた経済界も，朝鮮戦争による特需景気，昭和32年の神武景気と次第に立ち直りを見せてきた。学内においても，昭和25年のレッドパージ反対事件とそれに尾を引く「五・八早大事件」等，左翼運動の盛んな世相を反映して不穏な様相を呈していた。さらに昭和35(1960)年には新安保条約締結反対を巡るデモが学校の内外で繰り拡げられ，学園も騒然としていた。しかし他方では，新制大学の発足に伴い「新体制」が確立され，大学院設立，学生会館の開設など，幾重にも重ねられてきた歴史の上に，また一つの未来が開かれたのであった。目を海外へ転ずれば，米英ソの核実験競争と東西の冷戦，人工衛星や人間衛星の打ち上げ成功等々，目まぐるしい変化が歴史の上に起こりつつある。このような情勢の下で，早稲田大学英語会も戦中戦後の混乱から立ち直り，再び戦前の隆盛を取り戻したのである。そして今やそれをはるかにしのぐ規模において，

発展を続けているのである。

新制大学に切り替えられると，それに伴って英語力も著しく低下した。しかしあらゆる機会を利用して，終戦とともに回復した英語熱を高めようとする気運は，一般学生の中にも拡がっていた。定期的な勉強には，ドイツ人のミス・シンチンガー，五十嵐新次郎先生，河辺先生，その他米人二世等の指導によるレッスンがあった。また当時ＮＨＫのカレントトピックスを担当していたトーマス・ライエル先生がおられ，牧師さん等もしばしば招いて指導してもらった。これらの他に，連日上級生によるレッスンが行われていた。しかし時代が時代とて語学力のあるものはアルバイト(米軍キャンプやホテル等)へ出掛けるのがしばしばであった。中には二世の兵隊等をたずねて郵船ビルなどに行き自己の英語を磨き自信をつける者もいた。

四大学英語劇の復活

活動状態は，昭和30(1955)年頃までは組織性に乏しかったため，広範囲には及ばなかったが，ドラマはやはり最大の行事であった。四大学英語劇大会も復活し，

ハイキング(昭和３１年)

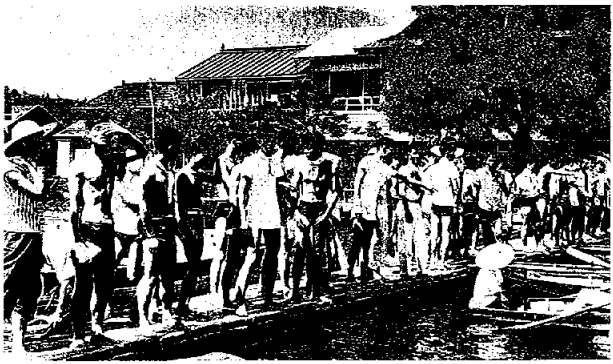
26年からはコンテストの形式となった。この年の出し物はポー原作の「マンキース・ポー」で，そのキャストの人選には中島先生らが助言して下さった。そのキャストの多くが卒業生であったことは注目に値する。だがその結果は立教が断然強く，わが早稲田は遺憾ながら思わしくなかった。その他の活動は，まず4月の入学時に，リンカーンのゲティスバーグアドレスの暗誦コンテストが行われた。まずこれによって新入生は英語会会員としての洗礼を受けたのである。また昭和25年にＩＳＡ総会に初めて参加し，この年に始まったＩＳＡ主催ディベイティングコンテストにも参加したのである。また立教，慶応等とのディスカッションも年を追って活発なものになっていった。

昭和25(1950)年に学生会館が設立されると，部室は永年住み慣れた教育学部の地下の部室から，現在位置の学生会館二階二号室へと移ったのである。それに伴って，昭和30年から31年にかけて著しい入会者の増加が見られた。それというのも単に学生会館設立の故ではなく，メルボルンオリンピック，ガット加入等々の事がらが英語熱を刺激したことによるものであった。このように多勢の新入会員をかかえては，従来の勉強方法では運営困難となり，31年には時間割制によるグループスタディ制ができ，この制度の下で従来のレッスンのように漠然としたものではなく，内容にアカデミズムを取り入れ，ここに現在みられるようなグループスタディが発足したのである。同時に英語会の組織，各部門が大幅に強化充実せられ，今日のそれに近い会の体制が出来上がった。すなわち幹事長，副幹事長，総務，会計，ドラマセクション，スピーチセクション

が設定されたのである。またこの年は戦前に行われていた活動が復活，充実せられた。すなわち先ず野尻湖合宿，関西遠征が復活されたのである。

野尻湖合宿の再開

合宿は昭和31(1956)年，野尻湖で二泊三日で行われ，翌32年にはその期間は一週間に延長され，今日に至っている。この合宿では旅館内は日本語厳禁，日本語を話すと罰金を取られた，内容はソフトボール大会，ピクニック，水泳大会等々，会員相互の親睦をはかる行事が盛りだくさんあった。今日ではなくなったが，最後の晩には仮装行列が行われた。これは近隣の人々にとって大きな楽しみであった。また同年再開された関西遠征は，昭和30年の英語会の納会のとき，西前文吾氏から話が出され，31年正式に決定された。この年は修学旅行のような形式で4年生が遠征して，京大，同志社，阪大，神戸大，大阪市大，大阪女大，神戸女学院，関西学院等とディスカッションを行い交歓した。その頃から毎年，関西学院や同志社等も東京へ遠征して来るようになった。ドラマはやはりいつの時代にお



野尻湖合宿復活(野田屋・黒姫山)

いても，花形的存在であったが，この時代にも例外ではなく年間の最大の行事であり，かつまたユニークな存在であった。30年にはその資金調達のため，高輪プリンスホテルでダンスパーティを開いたりした。ディスカッションの面では，定期的な四大学ディスカッションがあり，対内，対外で月３回くらい行われていた。タイトルは時局問題が取り上げられた。またスピーチでは，全関東オラトリカルコンテストが従来の英文毎日，研究社の後援によりカップや賞品が出されていたが，百瀬伸夫氏の奔走の結果31年からシェル石油がこれに一枚加わり，２万円前後の後援費を出すことになった。このスピーチには三宅義氏，津田節哉氏らの活躍が目ざましかった。

日英ディベイティングコンテスト

またここで忘れられないのは日英ディベイティングコンテストである。これは昭和30(1955)年三田の慶応で行われたが，日本側から早慶両校，英国側からはケンブリッジ大学，オックスフォード大学連合軍の間で，英国大使館員のジャッジの下に，日本のネガティヴ，英国のアファーマティヴで行われた。そのタイトルは「科学は人間に幸福をもたらしたか否か」であった。この頃はディベイティングコンテストが非常に活発で，ＩＳＡのディベイティングコンテスト等で大和田龍夫氏，望月泰道氏らが活躍したが，いずれも準決勝までのことが多く，俗に「ジュンケツの早稲田」なる異名を取った。いずれにしても大和田氏らは早大ディベイトの草分けと言って良いだろう。

英語会の細胞といわれるホームミーティングなる，

会員の地域別の団体が誕生をみたのは昭和33(1958)年のことである。これは最初，ある会員が慶応にあった制度を参考にして，会員相互の結束を強めようと，2，3年が中心になって結成されたのである。翌年になると英語会でもホームミーティングの重要性を考慮して，正式な英語会の活動として認めた。これは今では膨大な数にのぼった会員の相互親睦をはかり，もって英語会の活動へのスプリングボードの役割を果たすものとして，英語会の不可欠な構成要素となったのである。

敗戦直後のESS

われわれの学生時代は敗戦直後の占領下であった。働かなければ喰えない時代であったので，多くのＥＳＳ員は通訳等，進駐軍相手の仕事をしていた。無知のためだったと思うが，一時，会室でも下品ないわゆる「Ｇ・Ｉ」英語も使用され，指導にきていた米国人女性講師に「紳士はそういう表現は慎むべきです」と注意を受けたこともあった。一方，もっと格調高い英語を学ぼうと「ニッポン・タイムズ」を読むグループ活動も開始された。

対外活動として，各種コンテストや，日米学生会議等にも積極的に参加した。昭和25(1950)年の朝日新聞社主催の大学対抗討論会には，三人で参加，わがチームは順調に決勝まで勝ち進んだが，決勝で敗退し，涙をのんだ。偶然，準決勝，決勝とも，同一テーマの「再軍備は是か非か」となり，準決勝では「是」の立場で勝ったが，決勝では運悪く「非」の籤をひいてしまい，準決勝で主張した自分たち自身の論点を打ち破れず，敗退したのは残念だった。

【石榑和夫●昭和27年卒業】

国内外での活躍の原動力

思えば昭和24(1949)年早大文学部英文科に入学したものの，クラスには女性が他に１名。敗戦後の苦しい中，まわりの同級生の多くは地方出身や，戦後復員，家族をかかえて勉学。卒業すれば故郷で教師という人も多く，あまり明るい雰囲気といえない面もあった。米軍が駐留していたのと，これからは視野を世界に向けねばならない，英語・英文学の勉強は大事だが，外国人との交流，相互理解こそ新しい時代への道。英語で話ができなければ との思いの中でＥＳＳの存在を知る。教育学部の小野眸子さんと行ってみる。諸先輩が暖かく迎えて下さる。日本人離れのジェスチュアで雄弁に話している人，Japan Times，Asahi Evening News など読んで会話をしている人がいる。名誉会長の伊地知教授は流暢なアメリカ英語(アメリカ育ちでおられたと思う)。そして日米学生会議，当時アメリカ側は在日の軍関係の男女，日本側は諸大学ＥＳＳのメンバーが出席した。アメリカ人は親切で協力的。われわれもこの人たちや他大学の志を同じくするメンバ

ーとともに友人となって，英語を使う訓練を重ねていった。苦しい時代ながら皆のまなざしに将来への希望が満たされていた。戦争で経済面もゼロになった日本を築く戦士が，こういう先輩，同輩，後輩のめざましい国内国外での活躍の原動力になったと思う。

私自身は卒業後ほどなく結婚，1954年主人の任地ニューヨークへ赴く。まだ，日本人は極少の時代だった。何もない日本，そして何もかも素晴らしく，豊かなアメリカ。当時治安はよく，人々は親切，ブロードウェイの芝居，ミュージカル，音楽もバレーも最高で，天井桟敷の安い席でもその魅力が味わえた。コロンビア大学でマーガレット・ミード教授の社会人類学講義をとるのにあたって，英語力テストは上級パス，自信をもって対応できたのはＥＳＳのお蔭であり，怖いもの知らずというか，案外，堂々と振るまっていた。

以後私の住んだ外国は，アメリカ２ヵ所，イギリス２回，フランス，インド，カナダなど５ヵ国計19年余である。特にサンフランシスコ，ロンドン時代は元ＥＳＳメンバーを含む現地の稲門会のプログラムに参加させて頂いた。卒業後45年，稲門英語会，稲門女性ネットワークの関係で母校を訪れることが多くなった現状を幸せに思う。自分の国際社会での体験が，校友，後輩の方々に微少でもお役に立てれば嬉しい。

【北村幸子(旧姓伊藤)●昭和28年卒業】

私とWESSの四年間

私が早中から新制早稲田高等学院へ転入学したのは終戦直後で，戦中の英語禁止の反動から英語学習全盛の時代であった。学院３年のとき，WESSの代表が学院にもESSを作ろうと呼び掛けにやって来た。そのとき来た人が28年卒の小野さんで，彼女の流暢な英語とチャーミングな容姿に魅せられて，同期の寿君と早速入会した。

最初に部屋に入ったとき，室内の暗さに一驚したが，早坂，石榑，平田さん等ら諸先輩の英語力に感心し，フレッシュマン時代はWESSの部屋によく通ったものだった。ソフォモア時代は勉強が忙しくなり，恋愛などもあり，WESSには御無沙汰していた。

ジュニアになってある日，図書館の前

を歩いていたら、石樽さんに呼び止められ，「ジュニアは役員をしなければ」とWESSに呼び戻され，久米，尾西，大矢，鈴木，大沢君らとともに役員になり，レッスンを担当させられた。いささかいい加減なレッスンで赤面の至りだったが，神保，早川，鹿毛君らは私のレッスンを覚えていてくれたそうで嬉しく思っている。

この年，第16回四大学英語劇に出ることになり，二枚目役で髪を金髪に染め，かの有名な加藤武氏の指導を受けた。哀しくもないのに哀しい顔をする演技の難しさに閉口した。指導と言えば私にとって最初のESS会長伊地知先生，次の五十嵐新次郎先生(シンジャエロウ，アイガラシ先生)，中島正信先生等のご恩は忘れられない。特に中島正信先生は後年頼まれ仲人もして戴いたがお礼金をお届けに上がったところ，意外な顔をされた。後で聞いたところでは先生に只で仲人をして戴いた学生，OBが多かったらしい。その他WESSが新聞社の後援で第一回関東学生スピーチコンテストを主催し(大学，高校の部)，私が司会を務めたこと等あったが、紙数が尽きたので擱筆します。　【塩崎　満●昭和29年卒業】

私はWESSの卒業生

朝鮮戦争の最中，講和条約論議に沸騰している春，私はキャンパス内の新人勧誘に誘われ，文学部地下の英語会の部室のドアをくぐった。それから4年間の学生生活は，まず部室に入ることから始まるようになり，以後変わることがなかった。

講和条約締結，メーデー事件，マッカーサー解任，朝鮮戦争の終結，スターリンの死と激動する中で，米軍基地での建設会社の通訳や早大事件直後の学生運動の合間を縫ってのＥＳＳ暮らしだったが，先輩や後輩との触れ合いはすべて部室や夏季の合宿の中で育まれたものである。

ＥＳＳの中では新人の勧誘とディベイトが私の主な役割であったが，特に自衛権の可否を巡る初回のディベートは，大学院の信夫淳平先生や上智大学のマシュー先生の懇切なご指導に触れられたこともあり，今でも記憶に新しい。

そして中島正信先生の“君には商社が向いてるよ”という一言と，毛筆の推薦状と，就職課への説破がなかったら私は三井物産に入ることはなかっただろう。

まさに私は昭和30年ＷＥＳＳ卒であった。　【大和田龍夫●昭和30年卒業】

英語会の思い出

英語会に入って有難かったのは，煩わしいノルマが一切なかったことだ。唯一の義務は，伝統のリンカーンの演説を諳んじて，先輩同輩の前でスピーチするくらいのことだったろう。後は，勇気を以て，あの薄暗い文学部の一階の廊下を通って突き当たりの部屋(ここは，両面が窓で大変明るかったが)に頻繁に通うことに尽きた。それができなかった者は，可惜(あたら)，会費を納めたまま，自然に部から姿を消して行った。

最初は，主にシニアーから英字新聞を音読させられ，発音を矯正されたものだ。当時のシニアーは，米軍関係の施設で，アルバイトをしていた人もかなりいて，本物に近いと感じられる発音が習えたように思う。また，なかには多分，関係先からうまく仕入れた「ラッキーストライク」や「キャメル」のカートンを鞄から取り出して中身の小箱を原価？で分けてくれる先輩もいた。

部屋は憩いの場所でもあり，弁当持参者にとっては，格好の「お食事処」で，米人講師のセイガー先生もアルミの弁当箱を広げて一緒に歓談できたのも楽しかった。

とにかく，貧しい時代であった。そのような時に先輩が英字紙に広告を出し，苦労して調達できた，どでかいテープレコーダーがどんなにか心強く感じられたことか。今でも語り種となっている。大学生活が終わろうとする頃(昭和31年)は不況で就職も確かに厳しかったが，今よりは希望があり，各人とも，社会人になってからは英語会での経験を遺憾なく発揮し，大きく飛躍していけたものと思う。　【早川守●昭和31年卒業】

アルサロ式英語

アルサロがアルバイト・サロンの略であることは，今更ことわらなくてもよいほど，近頃ではアルサロで通じる。今の小学生が成人する頃には，それが元来ドイツ語と英語からの造語であることを知っていたら，何々の雑学家だといわれる時世になるのではなかろうか。

サロンは社交場としての呼び名として，なるほどと思わされるが，一体その上にアルバイトという言葉をドイツ語から借りて付けたのには，案外面白い由来があるかも知れない。それをアルサロと片付けたのは如何にも日本語らしい。これは英語のabbreviation でもなく，また comfortableをcomfyとshort formにするのとは根本的に異なっている。comfyは5 lettersで2 syllables であるが，アルサロはletterとsyllableの数が一致している。日本語における短縮は，ただ語呂だけが問題で，英語の如き音になり得るspelling 上の問題はまったくない。

英語会は年に，Recitation Contest, Speech Contest, Debating Contest とかを主催したり，それらに参加したりしている。去る日，現役の諸君との談話では，それ等を「レシコン」「スピコン」「ディベコン」とかいうふうに呼んでいた。多分近頃の英語会では一般化されているのだろう。これらはまさしくアルサロ式英語ではあるまいか。この式では，Drama Contest なら「ドラコン」，Drama を Theatrical と直せば「シアコン」になるが，これだけは Drama といっていた。英語で話し合う時には，それ等の略式等は用いないだろうが，「シアコン」等は知らない人には「エアコン」と聞き間違われる。外国語は日本語式でも，より正しく使うのが上達への A short cut ではなかろうか。

【望月泰道●昭和32年卒業】

WESS—昭和32年卒業組—

「もはや戦後ではない」。有名なこの経済白書が出た翌年の卒業であったが，世間は「なべ底不況」，就職難のなかみんな走り回った。部室は未だに戦後が残っているような狭くて汚い，雑然と物や人が集まった感じ。とはいえ，みんなの顔は明るく，お互いに聞き取り難い英語をしゃべり合うグループは廊下まで溢れることがしばしば。ここでは先輩・後輩の年齢上の区別はあっても，熱意と英語力には差別がなかったと思う。会長は確か中島正信商学部長。

学外では，未だに進駐軍がいて，生の英語に接せられる機会があった。東京駅西口側のビルにあったFEAF-THEATER（極東駐留空軍の将校クラブ——米・英・豪の混成）でのコーヒーにケ

ーキ付きのWeekend gatheringに潜り込んだり，このころ創刊されたAsahi Evening Newspaperの予約取りアルバイト(１部数百円くれた)で，米軍Camp巡りなど。ほかにダンスパーティー，バザーや仮装行列，合宿は楽しく，こんな時だけ活躍する人，フルブライトやISAにパスして一段上の世界に行ったと尊敬される人，真面目に原書を読む人，商社こそ英語会に似つかわしいと思い込む人等々，さまざまに集まり散じた４年間であった。

われわれ同期成25人の現状は，物故者２人，住所不明１人，外地居住１人であり，残り21人中15人(女性4人，男性11人)が，去る５月末懐旧集会をした。おもに日本語での会話だったが，一気に40年前に戻った１日であった。

【塩見健三●昭和32年卒業】

我が人生道場—ESS

もうすでに45年も経ったか，昭和29(1954)年早稲田に入学するや，早速ＥＳＳの門戸を叩いた。地の果て土佐から初めて上京した田舎者にとっては，ＥＳＳの雰囲気は如何にも都会的，然も諸先輩が流暢な英語で堂々と話をしていたのが，記憶に新しい。恐る恐る文学部の地下に足を運んだものだ。最初に含羞のあるのは，今以って変わらないが，仲々話題の切り出しや選択が出来ないのは語学のせいばかりでなく，勉強不足なのか，人間の内容，奥行きのなさなのか，今以ってパーティーや会合で感じる，あの劣等感にも似たもどかしさである。

小生は他人からは，決して寡黙で物静かなタイプの人間とは言われないが，心の片隅にある頑固さ泥臭さのせいなのか，近代的社交性を嫌う偏見がある。そういうこともあり，ＥＳＳにいって巻き舌でペラペラしゃべる奴はどうも辟易した。必然的に手前勝手に，一人でやる仕事に精を出した。当時流行のサマセット・モームやスタインベック，バートランド・ラッセル等を読みまくった。

また，自分なりに持っていた考えを何とか英語に表現して，英語の弁論大会に出ることにした。１年生の新人として「全国英文毎日英語弁論大会」の早稲田予選で1位に入選した時の喜びは，今なお忘れられない思い出だし，このことが小生が英語に更なる関心，興味を持つきっ

かけになったと言っても過言ではない。それまで3年連続で全国大会を制覇した五十嵐新次郎先生の愛弟子であった先輩(4年生)を倒しての優勝だっただけに大きなセンセーションを呼んだ。中島正信先生の自筆による優勝賞状は家宝の一つとして大事にしまってある。

Debateにも参加した。仲々のつわもの揃いであった。幹事長の田崎，副幹事長の百瀬等，腹の座った宇宙人は尊敬の的であったし，今なお友人として啓蒙されることが多い。小生は，その点では落第生ではあったが，朗らかで親切なチームワークプレーヤーも沢山いた。人のために尽くす善意の持ち主の巣窟であった。何よりも何よりもＥＳＳは，我々全員の刀を磨く研鑽の人生道場であったと思う。

【渡辺五郎●昭和33年卒業】

関西英語討論遠征

1958年の夏，4年生17名，3年生2名の一行は，関西ディスカッションツアーに出発した。

訪問先は，大阪市立大，同志社大，京大，大阪女子大，関西学院大で，討論の議題は「日米貿易の将来」，「天才教育の是非」，「日米外交のあり方」などだった。ある時は満足感に浸り，またある時は相手校の実力の高さにタジタジとなりながらも，日頃からグループスタディで研鑽をつんできた成果を，存分に発揮し得たと確信している。リセプションの楽しかったことは言うまでもない。

宿舎の「みその旅館」には，関西在勤の顔馴染みの先輩方が差し入れ持参で訪ねて来てくださった。

生駒様はじめ大先輩方が催してくださった関西稲門英語会には，夏の暑さも何のその，男子は全員詰襟，女子も服装を整えて出席し，緊張の中にも，伝統を受け継ぐ流れの中に身を置く責任を感じ，胸が高鳴った。

先輩方の貴重なドネに支えられて実現したこのツアーは，延々20時間に及ぶ鈍行夜行列車の座席の固さをもものともしない，若き日の熱き思い出である。

＊(グループスタディでの当時の議題は，「米の統制撤廃」，「教員の勤務評定」，「産児制限の是非」，「日中問題」などで，世相を反映していて面白い。)

【木村千恵子(旧姓田中)●昭和34年卒業】

第7章

高度成長から現代へ

昭和35年～平成4年

ひたすら英語を求めた日々

英語会にとって大きな発展期とも言うべきうねりは昭和35(1960)年を前後して訪れた。当時，世の中は安保反対闘争の激化に伴い，時のアメリカ大統領アイゼンハワーの訪日阻止のデモが続き，日頃はあまり政治活動をしない英語会会員もあれよあれよと言う間にこの空前のデモにかり出された。東大生の樺美智子さんが機動隊との激突の中で事故死をするという惨事もあり，大統領の訪日は中止される。その前年同じ美智子さんでも正田美智子さんは時の皇太子と民間人として初めての婚姻が成立。全国民的アイドルとして祝福を受ける。

昭和33(1958)年にはインドの首相ネールが早稲田を訪問，またその翌年にはインドネシアの大統領スカルノが早稲田を訪れ，大浜総長とともに英語会の部室にまで足を運び親しく会員とことばを交わすなどして国際色豊かな英語会の側面を当時の会員に印象づけた。

学内は総長に法学部の大浜信泉氏，英語会の会長には商学部長中島正信氏，そして会長はその直後(昭和36，1961)に商学部教授伊東克己氏へと引き継がれている。とは言え中島正信氏を頂点に当時の英語会顧問はきわめて充実していたことがうかがわれる。法学部の木村

教授，教育学部の萩原教授，五十嵐教授，本村教授，文学部のProf. David Friend, それに加えてMrs. Winkler, Mrs. Madancy, Mrs. Helm, Mrs. Desmond, Mr. Duca といった人たちが名を連ねている。

充実した指導陣を配し，当時の執行部四役(幹事長，副幹事長，総務，会計)は居城幹事長(昭和34，1959)が従来の組織にセクション制をとりいれ，各セクションの幹事で幹事会を構成し，英語会会則を制定。セクションの内訳は1) Discussion, 2) Public Relations, 3) Speech, 4) Library 5) Home Meeting, 6) Group Study, 7) Drama 8) Recreation 9) I.S.A. 10) Tomonnkai。

この中でI.S.A.だけがちょっと毛色が変わっていた。独立した組織のInternational Studennt Association の頭文字であり，当時すべての英語会の会員は一括加入でこの協会のメンバーということになっていた。全国に10カ所の支部(北海道，東北，東京，横浜，名古屋，京都，大阪，神戸，中国，九州)を持ち，全国規模のディベイト・コンテスト，スピーチ・コンテスト(高松宮杯)，そして国際学生会議(Internatiional Student Conference)を主催していた。我が英語会からは逐次代表を送り込み大きな成果をあげていた。

そうした中，数年後に控えた東京オリンピックの影響もあり，一種の英語ブームに乗って会員はどんどん増えつづけた。毎年400人近い新入会員 があの手狭な部室と中二階にあふれ，ラッシュアワーさながらの混雑をくり返す。部室内は日本語厳禁ではりつめた空気がいつも漂っていた。近隣の喫茶店も英語会の会員で満員盛況。そうした中でなんとか会員を学校から居住地域に移し，そこで活動はできないものかと考えた。

ホームミーティングの誕生

そしてホームミーティング(幹事吉田氏)という苦肉の策を編み出したのもこの頃。電車の沿線沿いに新宿，渋谷，高円寺，横浜，城北，秋葉原でスタート。主として1，2年生が中心に東電サービスセンターや時には自宅，下宿先をも開放して活動を行う。

英語会の広報誌「ACE」(幹事平野氏)が初めて発刊されたのもこの頃。そしてESSのバッジを従来の横長シルバーに黒字のものから現在も使用されている角形で赤黒のものに変える。

年を追うごとにこの時期につくられた英語会のいわば新しい枠組みが徐々に広げられ，さらなる発展と充実の時を見ることになる。会員の増加(一時は総会員数1,000人とまでいわれた)に伴う活動の拡張，各セクションごとの企画の多様化に対応し，英語力の強化をはかるため，組織面で手が加えられた。これまで副幹事長が主として当たっていた企画管理の役割を独立した執行機関に移し，従来の四役に企画管理を新たな役職として加える(昭和37，1962)。またセクションも上記の10セクションに視聴覚教具・教材の積極的利用を促すためにAudio-Visual Aids を設け，さらにディベイトの強化をはかるためディベイトセクションを加える。文連担当幹事，四大学代表幹事も置く。

ドラマに賭けた夢

しかし，こうした急成長の英語会にも一つの悩みがあった。それはどうしても四大学対抗のドラマコンテストに勝てないことであった。なんとかこの壁を打ち破ろうと昭和35(1960)年度の執行部(幹事長西原氏)は，

昭和35年上演ドラマ

学内の演劇サークルに全面援助を申し出て，演劇の専門の人たち(稲門会名誉会員の小倉，橋本両氏)の指導を仰ぐことになる。

そして昭和37(1962)年，我が英語会が創立60周年を迎えたこの記念すべき年に四大学ドラマコンテストで念願の史上初優勝という快挙をなし，英語会の急上昇に勢いをつけた。

騒然とした世の中で

しかし，昭和38(1963)年にはアメリカの大統領ケネディーがダラスの銃弾に倒れ世の中は騒然とする。英語世界への淡い憧れ，世界政治における若手指導者への期待は瞬時にして失望に変わった。その翌年には駐日アメリカ大使ライシャワー氏を招き早稲田祭に講演会を開いているが，英語会をとりまく環境は以後かならずしも順風満帆ではなかった。大学を根底から揺り動かす学生紛争の波状は執拗に続いた。学生はついに昭和40(1965)年，大学の打ち出した授業料値上げに激

しく抗議，翌年には全学ストライキに突入。早稲田の杜は大揺れに揺れ，前代未聞の紛争を巻き起こした。その結果，学生の逮捕者200余名を出し(含ESSメンバーも数人)学内外に悲惨な爪痕を残した。

英語会もそのあおりを受けた。大学は教室をはじめクラブ活動関連施設の使用を禁止，または厳しく制限し，さまざまな活動に支障をきたした。そうした中で，当時の幹事長岸氏，河井氏をはじめ五役と幹事はよく逆境に耐え，新入生勧誘にも精力的に働き700人近くを集め，年間を通じ，関西遠征，ドラマ，スピーチ，ディベイト，ディスカッションとすべての活動を他の年度と遜色なくこなしたのは特筆に値する。

1960年代半ばからホームミーティング対抗のディベイトが盛んになり，その勢いと相まって新たなディベイト・リーグ TIDL (Tokyo Itercollegiate Debate League)を生み出している。その成果が昭和42(1967)年にTIDL Championship Debate Tournament で見事に優勝を収め，さらにThe 18th All Japan Debating Contest においても全国優勝をなし遂げている。学内のホームミーティング対抗のディベイト大会もこの頃は盛んであり，ちなみにこの年は新宿ホームミーティングが栄冠を勝ち得ている。またこの年にはハワイ大学からの遠征チームを迎えている。後のハワイ遠征の萌芽と思われる。四大学ドラマコンテストにおいてもベルリンの壁をテーマに「The Wall」で完全優勝グランプリを獲得している。

昭和39(1964)年には日本の大動脈，新幹線が開通，時同じくして東京オリンピックが開催され，国中が興奮の渦と化し，女子バレーは強豪ソ連を破り，その余

韻にみんなが酔いしれる。しかし，大学紛争はこの年東大をピークに続き，さらに火の手は高校の学園紛争へと移行していく。この年は昭和35(1960)年に続き二度目の大学紛争に英語会も巻き込まれることになる。構内封鎖のため学生会館の使用が思うようにできず，時の幹事長宮本氏は当時をふりかえり「あのときはほんとうに英語会と自分自身の存亡をかけて戦った」と語っている。学内は大浜総長から阿部，時子山総長時代を経て，村井資長総長(理工学部教授)の時代へと受け継がれる。世の中はいざなぎ景気で高度成長をまっしぐらに走ることになる。

1960年代の英語会は一言で言えば大世帯をよしとし，ひたすら英語力強化に努め，すべての対外活動において勝つことを先輩諸氏より義務づけられていたと言えよう。文化クラブでありながらサロン化することを極端に嫌い，むしろスポーツクラブ的な風潮を追い求めていたとも言えよう。高校時代は運動部で慣らしたと言う人も会員の中には多く，運動部さながらのスピーチの特訓を先輩から徹夜で受け(石井英樹昭和42年卒談)，後の活躍の原動力となる。当時の上級生や先輩諸

昭和51年ウェルカム・パーティー

氏を思い起こし，うなずく人も多いのではないか。ちなみに，各代の幹事長は以下のとおり。西原(昭和35)，東後（昭和36)，垣見(昭和37)，小林(昭和38)，山内(昭和39)，大垣(昭和40)，岸(昭和41)，河井(昭和42)，中瀬(昭和43)，宮本(昭和44)。いずれの代も400～500人の会員を抱え学内に最大の英語クラブとして君臨していた英語会黄金時代と言えよう。

60年代末期からこれまでの風潮とやや異なったものが出始める。そのころの年間目標を見ると，Let's Share joys and Sorrows through English！とかLittle by Little Forward through English! のように感傷的，情緒的になっている。

そして70年代に入ると，これまでのセクションも整理統合され，徐々に少なくなってきている。五役の総務と企画管理に各々副(Assistant)を置き，セクションは従来の12セクションから以下の９セクション(昭和45，1970)に統合されている。内訳は以下のとおり。Debate, Discussion, Drama, Home Meeting, International, Public Relations, Recrreations, Study, Speechte, そして各々の代表として稲門会，文連，ISA，四大学を置いている。

ドラマの危機

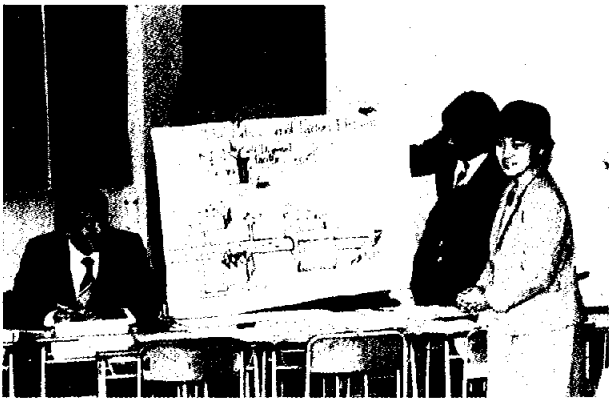
1970年の活動方針を見ると「過去のことに捕らわれることなく活動の中心となる３年生がやってみたいと思うことはすべてやろう」となっていて，厳しい「競技としての活動の取り組み」ではなく「自由奔放さ」を求めている。ドラマに関してもコンテストと言うよりも一つのフェスティバルとして位置づけ，全員の関心を集

めようとしているが，その後徐々に会員のドラマに対する関心はうすれていく。2年後の昭和47(1972)年にはついにドラマ消滅の危機にさらされる。ドラマ活動への会員の無関心と意欲の減退に抗し切れず，遂に当時の3年会は「WESSドラマ中止」の決定に踏み切る。そのことが諸先輩はじめ多くの関係者に波紋を投げかけ，その是非をめぐって長時間にわたる議論が「長岡屋」の2階で続く。

その結果，ホームミーティング対抗のドラマコンテスト(於大隈小講堂)を四大学対抗と同じ脚本を使用して部内で行い，それを翌年の四大学の大会につなぐことで決着をつける。急場をこうした形で救ったのはその時まで着々と育ち健在だった7つのホームミーティング(横浜，渋谷，目白，新宿，高円寺，城北，秋葉原)の存在であろう。当時の幹事長平野氏は「一旦は中止を決めたが，あのような形で継続を再決議をし，のちのちまで禍根を残さずに済んで本当ににによかった」と今も胸をなでおろしている。

ディベイト全盛期

こうしたドラマへの関心の無さは他の活動に対する関心に置き換えられていった。全国の大学ESSの統合，組織化であり，それを通しての活動の発展，充実ということであった。まず昭和45(1970)年にWESS主導でKUEL(Kanto University ESS League)の旗揚げを行っている。またハワイ大学から遠征があり，日本で親善ディベイトを行っている。関西遠征(神戸女学院，関西学院，関西大学，立命館，同志社)もこの頃まで順調に続いている。この頃から，ディベイトの大会が盛んに



昭和56年ディベイト

なり，TIDL（2人制）のディベイトに加えて，KUEL（5人制）のディベイト大会，さらに全関東であったKUELがJUEL（Japan University ESS League），つまり全日本に発展し全国大会を開くに至った。

さらに全国大学対抗（朝日杯争奪）ディベイト大会，上智大学杯ディベイト，IEC（2人制）ディベイトなども行われた。昭和45（1970）年にはIECディベイトで，翌46年には第22回朝日杯争奪の全国大会で優勝をしている。こうした他の活動の擡頭が背景にあってドラマ中止への引き金ともなっていた。しかし，一時は衰退をみたドラマであったが，そのことがかえってバネになり4年後の昭和50（1975）年には四大学ドラマで3度目の総合優勝をもたらしている。またこの年にはJUELの5人制ディベイトにも全国優勝している。こうした中ディベイトの基礎ともなるべきディスカッションも盛んで，KUELのDiscussion Meeting や JIDM(Japan Intercollegiate Discussion Meeting)などが行われている。

スピーチも隆盛期に

この頃から，新入生のためのレシテーション・コンテストの題材として恒例のゲティスバーグ・アドレスだけではなく，イギリスのエリザベス女王の「コモンウエルスへのメッセージ」が女性会員のために加えられているのは面白い。そして，昭和49(1974)年には第22回目を迎えた大隈重信杯争奪全関東スピーチコンテストを全国規模の大会に格上げしようとの案がもち上がり，みんなの夢はスピーチでも膨らんだ。

当時の模様を会計の梅田氏はこんなふうに語っている。「そう思いたってから苦労の日々が始まった。大学側との交渉に走り回る幹事長の荻野と企画管理の山田。運営をどうするかに頭を捻る副幹事長の戸川と総務の河本。限られた予算の中から運営費を捻出しようとする会計の私。ようやく大学側の承認が得られみんなの顔がほころぶ。毎年12月になるとあの時のみんなの頑張りを思い出す」と。

もともとこの大会は大学のESSが主催するスピーチ・コンテストとしては戦後間もなく（昭和28，1953）始め，当時は大規模のコンテストの草分け的な存在であった。その影響を受け，後に独協大学の天野杯，慶応大学の福沢杯など多くの大学で同じような大会が続いている。特に70年代後半から80年にかけてはこの種のスピーチ・コンテストの花盛りと言えよう。

また昭和47(1972)年からは恒例の夏合宿がいつもの野田屋旅館が老朽化したため，近くの宮川旅館へとその場所を移すことになる。ちなみにその年の参加者は約150人。相変わらずの大世帯を誇っているかのようである。

70年代に入り世界はオイルショックに見舞われ，日本の政治の舵取りは田中角栄から三木武夫へと引き継がれる。その後，昭和51(1976)年にはロッキード疑獄が問題化。経済は円高・ドル安で不況は深刻化する。

チャレンジを受けて立つ

70年代の英語会にも問題がないわけではなかった。これまで名実ともに学内一を誇っていたWESSの前にその名も紛らわしいもうひとつの会が現れた。もともとはESSからの分派で，教育学部所属の小規模な会であったものが，だんだん会員数を増やしWESAの名のもとに学内予選に顔を出すようになったのである。この問題に対処するには実力で決着をつけていくより仕方がない。わが英語会にとってははじめて学内のチャレンジを受けることになる。幸い実績はわが方に分があり対外活動には早大の代表権を保持してきている。しかし，一方では前述のとおり70年後半から80年にかけて早稲田を代表して出かける対外試合のスピーチ，ディベイトの大会は急増し，選ばれた選手をどの大会に割り振るかで連日頭を悩ますほどになっている。この頃は，スピーチといわず，ディベイトといわず，軒並みに優勝，準優勝，入賞を繰り返している。その対外的な成果にはすざましい勢いが感じられる。その要因の一つに前述のWESAのチャレンジに対抗するWESS魂があり，その陰には伊東(当時会長)先生の親身の指導があったことは周知のところである。

目立ったものだけを拾ってみても，昭和51(1976)年には第4回全日本5人制ディベイト優勝，第11回上智大招待ディベイト大会優勝，全日本高松宮杯争奪スピ

ーチコンテスト準優勝(藤場氏)等。翌52年には第21回全日本大隈杯争奪スピーチコンテストに優勝(板谷氏),53年には第43回四大学ドラマコンテストで総合優勝といった具合である。

昭和50(1975)年にはハワイ遠征に向けての布石が打たれる。早稲田大学英語会幹事長荻野氏と慶応大学英語会委員長柴田氏が中心となってハワイ大学と交渉開始する。ハワイから2名を招聘し初の親善ディベイトが実現。後のハワイ遠征の足掛かりとなる。そして,3年後の昭和53(1978)年に待望の第1回目のハワイ遠征がハワイ大学西山教授の特別のご好意とご指導により実現。第2回目を翌54年に12名の隊員で行っている。そのときのテーマは Japan-US Security Conference であった。

この頃になって英語会の組織面ではこれまでの9セクション(昭和45, 1970)からInternational を落とし8セクション(昭和52, 1977)にし,翌年には9セクションに戻してはいるが,その翌年(昭和54, 1979)にはHome Meetingセクションをなくして7セクションに統合されている。この年にオール早稲田で伊東会長杯争奪2人制ディベイトが誕生している。

ちなみに1970年代の歴代幹事長は以下のとおり。鏡(昭和45),川俣(昭和46),平野(昭和47),木原(昭和48),荻野(昭和49),藤場(昭和50),島田(昭和51),大塚(昭和52),戸町(昭和53),曾我(昭和54)。

かげりの見えた1980年代

80年代の世界は戦争で幕を明けた。イラン・イラク戦争,そして続いてフォークランド戦争。ニューヨー

ク株式市場大暴落。さらに天安門事件があり，一方ベルリンの壁は取り壊され新しい時代の到来を告げた。国内では大平首相が選挙中に急死。急遽鈴木善幸氏が首相となる。昭和60(1985)年にはあの忌まわしい日航機墜落事故があった。日米経済摩擦は深刻化していく。そんな時代背景のなか英語会も80年代に入っていく。相変わらずスピーチとディベイトは活発に行われる。このころから少しずつ英語会は対外活動に選手を送りだすための選手養成機関になりつつあるのではとの声がどこからともなくささやかれるようになる。例えば昭和55(1980)年の活動報告にはディベイトは年間16試合で8勝8敗，スピーチは40の大会に参加し優勝，準優勝を含め30の賞を獲得とある。大変な数の大会である。

この頃の一つの変化はホームミーティングの存在意義がはっきりしなくなってきたことである。従来の幹事会構成セクションからもはずされている。7ホームミーティングは確かに健在ではあるが全体の活動の中心からどこかはみだしている。急増する対外活動に対処するのに追われた結果，ホームミーティング対抗のディベイトやドラマフェスティバルなどの活動を行う余裕がなくなり，徐々にホームミーティングは全体活動の外に置かざるを得なくなったものと思われる。

そうした中で各代はこんなスローガンを掲げて頑張った。"Immediate Action and Cooperation"(1977), "Do Your Best. We'll Do the Best"(1979), "Sail the Ocean Aboard the WESS!(1980), "We Will Win!"(1981), "Triumph Together!"(1983), "Full Running, Then Taking Off!"(1984), "Be Active, and You'll

be Atractive!(1985), “Create Today for Tomrrow!”(1986)。

これまで築き上げてきた活動の実績をなんとか踏襲しようとの必死の試みが見られる。その結果昭和58(1983)年には“Triumph Together!”スローガンのもとにホームミーティング対抗のドラマフェスティバルを再現し，その年の第47回四大学ドラマコンテストでは見事に総合優勝を成し遂げている。また同じ年に第25回目のホームミーティング対抗ディベイトも再開し，目白が優勝している。その翌年もドラマフェスティバルを行っている。また早稲田主催の大隈杯争奪スピーチでは優勝(緒方)をしている。

昭和60(1985)年にはディベイト王国復活と言わんばかりに第15回KUELの５人制ディベイトトーナメントで優勝。それまでの沈滞ムードを一気に吹き飛ばしたのがこの昭和60年であろう。これまでの７セクションをさらにDebate, Discussion, Drama, Speechの４セクションに集約。目白押しに並ぶ内外両活動にくまなく選手を送り，すべての活動をよくぞこなしたものだと感嘆する。以下に過密ダイヤなみの恐るべき活動記録とその年のスタッフを「ACE」誌27号に記録されている。

対外活動で輝かしい成績を収めるのも大切だが，そのために会員相互の親睦や理解，切磋琢磨して互いに育つことが望めないとするならば学生のクラブの在り方としては本末転倒とも言える。80年代はこうしたジレンマの始まりであったと言えよう。

新たな対応に苦慮

80年代半ばを過ぎると前述の英語会内外の活動に直

接関わるジレンマのみならず，それを取り巻く多くの環境の変化にも目をとめなければならなくなった。当時の若者たちは「新人類」などと呼ばれ，それまでの若者たちと選別されるようになったのもこの頃。街には英会話学校が乱立，学内には帰国子女の急増，学生の授業外の時間の使い方の多様化などあり，一定の組織に組み込まれることを極端に嫌い始める。数人寄れば同好会を作ると言った風潮にじわじわと英語会の活動も影響を受けていった。

あれだけの活動をこなした昭和60(1985)年だったが，翌61年になると，はやくも予想だにしない問題に遭遇する。かねてから心配だったホームミーティングに人が集まらなくなった。横浜ホームミーティングが会員不足で成り立たず，渋谷と合同でやっとスタートにこぎつける。このあたりから学生の質の変化とそれに伴う生活パターンの変化が目立ち，従来の英語会の組織やスケジュールでは対応ができなくなってきたことを五役は痛感。そこで年間スケジュールの抜本的見直しを試み「WESSの今日を創り出し，明日につなげることを目標とした」と時の幹事長清水氏は語ってくれた。そして，もう一度原点に返り，対外活動の成績はさほど輝かしくなくとも，会員間の人間関係を深め，踏み込んだこころの交流をはかるためにホームミーティング活動に充分なケアーをすることを決めたという。

思えば80年後半の学生は，子供時代を高度成長期の真っただ中(1960年から70年にかけて)に送り，家庭はといえば，仕事人間の父親と教育ママ母親の間で，勉強，勉強と追いまくられ，熾烈な進学競争に勝つことだけを強要されてきたそんな世代である。つまり高度

成長期の落し子だとすれば，そう簡単にこれまでのレールの上は走ってくれまい。英語会にとっても新たなチャレンジが始まることになる。

学内では早稲田の移転問題が新学部を所沢に作ることで決着を見，総長は村井資長氏から同じ理工学部の清水司氏へ，そして80年代には法学部の西原春夫氏へと引き継がれることになる。

新旧会長の交代

我が英語会も商学部教授の伊東克己氏から思い切って会長の若返りをはかるということで辞任の申し出がある。稲門会の総会の議を経て教育学部教授の東後勝明氏(昭和38年卒)が新たな会長として推挙されこれを受諾した(昭和63)。昭和60(1985)年にはACEの発刊が一時途絶える。5年後の平成2(1990)年には4年生が自主的に各自の思い出として再発刊を試みているが予算的なこともありこれまでのもののように十全ではない。

ちなみに80年代の幹事長は次のとおり。間沢(昭和55)，栃尾(昭和56)，沢登(昭和57)，小池(昭和58)，富岡(昭和59)，堀(昭和60)，清水(昭和61)，東原(昭和62)，平尾(昭和63)，久原(平成元)。

平成元(1989)年からはそれまでのセクション制を，ホームミーティング制に戻し，総合的なコミュニケーション能力を習得することを目指しているのが目立つ。このことは会員の関心が対外活動よりも内部活動に向けられたことを意味する。この年には昭和天皇の崩御があり，新た会長のもとに新たな英語会の年明けを思わせた。

翌平成2(1990)年には久々にホームミーティング対抗のドラマフェスティバルで盛り上げ，第53回四大学ドラマコンテストでは見事総合優勝を果たす。またわが英語会主催の第16回全日本大隈争奪スピーチコンテストでも優勝(東方)を獲得。ディベイトにおいても第18回全日本大学2人制ディベイト大会で準優勝(佐々木，猪股)を飾る。

この年からセクションの組織が簡素化されDebate, Drama, Speech, を中心に幹事と複数の3年会員をあて，Public Relations, International, Recreation, Home Meeting は各々一人を当てる。各ホムミーティングにはHome Meeting Chairman を置きその統括と指導に当たるものとする。Discussion セクションはHome Meetingで行うのでそちらに併合されたことになった。

昭和25(1950)年代に始まった関西遠征と相まって昭和53(1978)年から始まったハワイ遠征は英語会の中心的活動となった。前者は現役の3年生が中心になるのに対し，後者は4年生が中心で始められた。第1回目は7名が参加。トピックは Japan-US Conference on Balance of Trade. 第2回目(昭和54，1979)は12名(女子2)と規模がやや大きくなり，How Should Japan and the US Assure the Security in South-East Asia? についてハワイ大学の学生と激論を交わす。第3回目(昭和55，1980)は7名。What are the Obstacles for Japan and US to Assure the Stable Supply of Crude Oil from OPEC?を取り挙げる。第4回目(昭和56，1981)も同じく7名。トピックはJapan and US Trade Friction. 第5回目(昭和57，1982)，第6回目(昭和58，1983) 7名，The Trade Friction among Japan, the US and EC がト

ピック。同様に順調に毎年継続され100周年の平成6(1994)年には第17回目を実施。沢　朋宏幹事長をキャプテンにハワイ大学のディベイト，ディスカッションの授業にも参加，その年度の目標である「英語によって説得することができる技術とは何か」を求めて現地学生と交流を深めてきた。4年生を中心に始めたハワイ遠征も90年代に入ってからはホームミーティングのChairmanが加わり，その成果を即それからの英語会の活動に生かそうとの狙いがうかがえる。

一方，関西遠征も訪問先は年度によって多少の動きはあるものの，毎年順調に継続されていった。例えば昭和55(1980)年には同志社大，立命館大，関西大，関西学院に加えて甲南大と神戸商大が加わっている。昭和60(1985)年には同志社大，立命館大，関西大，関西学院の4校。従来あった神戸女学院がはずされている。しかし，平成2(1990)年以降はハワイ遠征に現役2，3年生が加わることで，伝統の関西遠征の記述がACEから消えているのは寂しい限りである。

ちなみに90年代に入ってからは次の諸氏が幹事長を務めている。尾上(平成2)，遠藤(平成3)，田中(平成4)，木下(平成5)，沢(平成6)，佐藤(平成7)，曾我(平成8)，真子(平成9)。

1990年代と今後の課題

90年代はホームミーティング中心のディベイトやドラマフェスティバルなどを中心に内部活動に力を入れ会員の融合をはかり，会員一人一人がコミュニケーション能力を身につけられるようにとの配慮が見られる。対外活動にもそれなりの成績を残している。全国規模

のものから拾ってみると1990年に続き1991年(佐藤)にも大隈杯争奪全日本スピーチでは優勝している。またJUELの全国スピーチ大会では1996年(一色)が優勝。1996年ディベイトでは1992年にAll Japan Debate Tournamentで優勝，同大会に1996年には準優勝。その他の中規模の大会では優勝，入賞がスピーチ，ディベイトで続出している。

こうして過去30年の英語会の足跡を概観してみると，1960年代はとにかく英語の力をつけようとがむしゃらに突っ走った時代，でも人との交わりも大切にし，対外活動の成績も結果として後からついてきた。70年代は対外活動を充実させ，特にディスカッション，ディベイト，ドラマ，スピーチの大会を中心に目に見える成果を求めた，いわば活動中心の時代，そして80年代後半から90年にかけて，伊東会長から東後新会長へ移行した時期と相まって，次の質的な変化が英語会内外に起きていった。従来の対外活動中心の在り方から内部活動を通じて会員一人一人の再生，充実を内面から求めていったように思われる。その間の会員の心の推移が当時の幹事長のことばからうかがえる。対外活動中心のピークであり最後とも思われる輝かしい昭和60(1985)年度の直後を受け継いだ幹事長清水氏はこんなふうに言っている。「従来のスケジュールや組織ではもはや対応できない。学生がクラブに求めるものや生活のパターンが大きく変わってきた。とにかくみんなで何かを創り出すことから始め，それを楽しみ，あるときは苦しみながら一生懸命頑張った」。このことばの中に「決められたレールを走り続けるのはもういい。真に内から沸き上がるエネルギーをもう一度実感し，それ

を形にしよう！」との内なる叫びが聞き取れる。時計の振り子は反対に揺れ出した。それまで外に向いていた目，否，外に向かされていた目が中を向き始める。歴史はくり返されるのことばどおり，どこか原点に帰りつつある。あくなき英語力を求め，朋友との交わりの中でそれを培い，その結果として活動成績があがればそれもよし。活動成績の向上を目指し，朋友と切磋琢磨し，その結果英語力を身につけるもよし。そしてどちらかに極端にかたよれば自然にバランスをとる智恵が働く。

しかし，豊かな人間性も強力な英語力さえも新たな時代の要請に応えるにはもはや手段に過ぎないのではないか。新たな世紀は，はやくも次の目標を求めている。そうして身に付けた人間性と英語力を用いて我々は一体何ができるのだろうか。英語会はその問いにどう応えていけばいいのだろうか。次の百年に向けての模索はすでに始まっている。【東後勝明】

国際学生会議の思い出

ESSの想い出というととっさに思い出すものがいくつかあります。野尻湖の合宿，四大学のドラマ，高松宮杯のディベイト，国際学生会議，関西遠征，etc。

現在も続いているのかどうか不明ですが，国際学生会議は「ひや汗」をかいた経験から特別強く思い出されます。諸先輩方のご活躍のお陰で，初めての国際学生会議，しかも政治部門での議長席に座ることになりました。各国の学生代表が，それぞれの「お国訛りの英語」で口角泡をとばし議論したことは，今思えば懐かしい思い出ではあります。

実力不足のESSメンバーであった当時の私には大変な試練でした。政治部門会議の最終段階，「原水爆禁止」の決議文を採択する場面で，インドネシアの代表が決議文を黒板に書けと言い出しました。そこでやむなく黒板に向かって書き始めました。どんな決議文だったか今ではすっかり忘れてしまいましたが，その中に早稲田大学で一度も聞いたことのない「affiliate」という言葉がありました。天下の早稲田大学英語会のメンバーとしては，「affiliate」って何ですか？　などと聞くわけにもいかず，適当に「afiliate」と書いたところ，“double f” とすぐさま指摘されてしまい大変恥ずかしい思いをしました。

「ひや汗」はともかく，初めての国際会議は，各国の学生の肌の色，言葉，習慣の相違を反映する「思考回路の違い」を実感し，カルチャーショックの連続でした。しかしながら，全く違う別々の人間が，その「違い」をお互いに認めた上で，決して「同じ」にならなくても，話し合えるし，和合もできると実体験したことは，私にとって「英語」以上の収穫であったと思っています。

【金井利雄●昭和35年卒業】

安保闘争とESS

ブラザーズフォアのＧＲＥＥＮ　ＦＩＥＬＤＳが流行った年だった。早慶戦で安藤の６連投に外野席が燃えた年だった。

４年生にとってあの秋は忘れられない思い出を作ってくれた。しかし，同じ年の夏の激動は全国の若者たちにとって忘れることができないだろう。安保闘争と

悲しい犠牲者のことだ。元来，ＥＳＳ部員は学生運動に無縁なはずであった。ジャパンタイムズ紙や外交時報誌などから国際知識を吸収し，グループスタディや慶応・明治・立教などとのディスカッションの雰囲気には，とても左翼思想の入り込む余地はなかったし，どちらかというとプロアメリカンに偏しがちだったのではないか。

そんな僕たちを学生デモに参加させたのが，あのハガチー事件だった。昭和35年６月，羽田空港へのデモや国会を取り巻くデモと警官隊との衝突の中で，東大生，樺美智子さんが亡くなった。僕たちは翌日，折からの小雨の中を学生デモに参加した。「樺さんの死を無駄にしてはいけない」，感傷からではなく，確かに怒りが僕たちを立ち上がらせたのだった。アイクの訪日は延期になり，岸信介首相は退陣し，新安保条約の成立を受けて池田内閣による高度成長が始まる。

あれから38年，日本は豊かになり，学生運動のエネルギーが影をひそめ，そして身を挺して国事にあたる政治家も見かけなくなった。

【福田浩人●昭和36年卒業】

WESSは人間形成のBASE

月日の経つのは早いもので，昭和37年に卒業してから36年が過ぎようとしています。何を書こうかと考えながら，２～３年前に戴いた「THE ACE」DEC.'60の復刻版のページをめくっていました。

私はCHAIRMANを１年間やらして戴いた後，「OUTLOOK OF OUR ACTIVITIES THIS YEAR」と題した挨拶文でこのように書き出しています。(今思うととても古い表現で気がひけますが…)

It is truly said that time and tide wait for no man. Before I am aware of it, one year has already past since we, juniors, succeeded the committee of the English Speaking Society. Hundreds and thousands of things, good or bad, instructive or trifle, happened to us.

また，こんな文で終わっています。

Finally let me express my heartiest thanks for having given me the nice experiences. They were too valuable for words. "Thank you!!"

本当に今までもこの思いは同じで，大げさに言えば，ＥＳＳの４年間の生活が，20歳以降の私という人間の形成のBASEになっていると思います。進取・在野精神，向上心，遊び心，集団である事をなし遂げる素晴しさ，英語を通じて広く世界に目を向けることの大切さ，人の良い面を見ようとする姿勢，結果よりある時は過程の方が大切であること等々が私の学んだことです。

そして何ものにも変えがたいのは，今でも心の拠り所である多数の友人たちと知り合えたことです。

私の58年の人生で今まで２回だけ“嬉しくて泣いた”ことがありますが，２回ともこれ等友人たちとCLUB活動の中で経験しました。

【西原恢●昭和37年卒業】

国際的な考え方を与えてくれたESS

ぼくの卒業は昭和38(1963)年卒なのです。そのころの男子学生は大半学生服を着ていました。そんな中でジャケットと怪しげなコトバを喋ってガッカンの２・３階を＜彷徨＞していたのが英語会でした。ＥＳＳは英会話が出来るようになる学生クラブでした。でもぼくは入試のための英語の勉強はしましたが，英語でしゃべるなどとは凡そ考えてもみませんでした。入部したＥＳＳです，とにかく英会話の練習を一生懸命していました。ワシントン・ハイツの駐留軍の良き家庭の方々から英会話の勉強をさせて頂きましたが，彼女らは「日本の人々を少しでも理解できる機会があるならば」と我々に無料で英会話の時間を割いて下さいました。有り難いことに英会話の勉強を通じ異国の人々から多々学ぶことができたのはぼくたちの方でもあったのです。ＥＳＳは逞しい国際人を輩出しましたが，同時にあの「戦後と経済成長の狭間の中で」国際的なものの考えの基礎を我々に与えてくれていたのだと思います。

【青沼淨●昭和38年卒業】

雑沓と混雑

ＷＥＳＳへの強烈な第一印象は，学生会館の２階にある狭い部屋の中とその前の薄暗い通路に，ラッシュアワーの電車

の中と比較できるほどの人が集まり，その混雑のあっちこっちから聞きなれない英語が飛び散っていたこと。こんな雑然とした中で英語を喋れるのは，よほど自分の英語に自信があるか，もしくは色んな意味で目立ちたい人なんだろうと思って，一人隅っこに立っていた。1年生のとき，クラブ活動のための入部手続で，WESSには500人くらいが入会金を納めるけど，卒業の時期まで「生き残れる」のはせいぜい20～30人と先輩から説明を受けたとき，さもありなん，この部屋といい，この雑沓での生存競争に残れるのは，かなり強い心臓の持ち主か，英語への執着心が必要であろうと一人で合点した。

混雑で思い出すのは，クリスマスの時期によく催すダンパンことダンス・パーティ。今でこそ"Shall we dance?"の映画でリバイバルの社交ダンスがもてはやされてるけど，あの頃，今から30年以上も前では，ダンパンが唯一の社交の場であったような気がする。生バンドの演奏でマンボ，ルンバと早いリズムで，結構汗をかいて，興に乗つてくると，パーティ会場はムンムンと人の息と熱で一杯になる。人，人の中で前後，左右ぶつかりながら踊る。スローのテンポでは，彼女をしっかりホールド出来ても，ジルバの左手で回転しながらリードするステップでは，横側から外のカップルに邪魔されて，うまくリードできない。それでも懸命に踊り続け，いつのまにか，雑沓の中で自分たちが邪魔者の中心になってしまった。

その当時，早稲田大学の周囲に，喫茶店，雀荘が各々200軒あると，早稲田祭であるクラブが報告していたのを思い出した。そもそも，大学自身が雑沓の中に位置しているので，混雑も無理からぬことであろう。楽しい思い出の一つになっている。

【小原雄介●昭和39年卒業】

我が青春時代の宝物

早稲田英語会時代のさまざまな思い出は，そのまま我が青春時代の思い出につながる。私の場合の英語会活動は，早稲田高等学院時代の3年間と大学時代の4年間をあわせた通算7年間を意味し，まさに，16歳から22歳にわたる，人生で一番光輝く青春時代を英語会とともに過

ごしたことになる。したがって，英語会活動そのものが私にとっての青春時代と言って過言ではないのである。

当時の思い出としてのハイライトは，オランダのベアトリックス王女(現女王)との箱根ドライブ旅行である。確かオリンピック東京大会の前年の1963年，ベアトリックス王女が初めて来日された。日本の大学生と率直な話がしたいと言う王女のたっての希望で，早稲田，慶応，ＩＣＵ及び東大の４校から学生代表計４名が選ばれ，箱根へのドライブ旅行に同行した。早稲田大学学生課から，我が英語会に代表者の要請があって私が参加することになった。早稲田と東大が男性，慶応とＩＣＵからは女性がでた。ドライブのルートは東京→茅ヶ崎→箱根→茅ヶ崎→東京と全行程を４区間にわけ，各区間ごとに学生がベアトリックス王女の車に同乗しその間約２時間，自由に車内で話をすると言う段取りであった。一番手に私が指名され，私が助手席，後部座席に駐日オランダ大使とベアトリックス王女が座り，政治，学生運動，学生生活，結婚等の幅広い内容につき熱のこもった話をし，あっと言う間にパシフィックパーク茅ヶ崎に到着したのを憶えている。王女は水玉模様のワンピースと言う気楽ないでたちで王侯貴族と言う雰囲気は微塵も感じさせない気さくな方であった。

それから時は流れ約30年後の1991年10月23日，日蘭修好500年記念行事がサントリーホールとホテルオークラで開催され，この行事にベアトリックス女王が国賓として来日された。偶然私はこの記念行事に仕事仲間の関係で招待され，レセプションでお会いする栄誉に恵まれた。短時間ではあったが30年前の箱根へのドライブ同行の話を良く覚えておられ，約30年ぶりの再会に感激を新たにした次第である。

以上二つの思い出は，氷山の一角の如く記憶の海に鮮やかに突出した出来事であったが，英語会時代の数多くの出来事は学生時代から今日にいたる私の人間形成に多くの影響を与えるとともに数々の思い出を残してくれた。

【田中久雄●昭和40年卒業】

早馬会の思い出

われわれの代(41年早馬会)で何か書けと言われれば，まず昭和39(1964)年春

の「インカレ・ディベイト」に優勝したこと。5人制のこのディベイト選手権は，東と西の大学トーナメントで予選をし，その勝者が決勝で闘う。それまでの覇者は毎年決まったように大阪外大で，わがＷＥＳＳはもちろん，関東の大学で優勝したところはなかった。初めてトロフィーを箱根の山を越えさせた原動力は，語学の実力よりもチームワーク，緻密な理論構成，それに相手をねじふせる戦闘精神ならびに騙まし討ちであった。

夏の野尻，四大学ドラマなどアルバムを彩る思い出は尽きない。秋の「早稲田祭」に駐日大使のエドウィン・ライシャワーさんを呼んで大隈講堂で講演会を開催した。控え室に見たこともない大学関係のお偉方が次々と来て，ぺこぺこしながら大使に名刺を渡し始めたのは仰天した，というより恥ずかしくてたまらんかったです。

【山内正樹●昭和41年卒業】

42年度卒(ガキの会)について

私たちの代の特徴というと高等学院の卒業生が多いことである。彼等はいってみれば怖いもの知らずで、ESS活動に対しても非常に積極的だった。教室へ行く代わりに一日中部室か学館にいるような者が何人もいた。なにせ3年の時に幹事長と副幹事長をやった者が二人とも4年の時にドラマのキャストをやったりする有り様である。そのため対外的にいろいろな活動に手を伸ばしたり、部内でも新しい活動を設けたりした。

また，私たちはいわゆる早稲田騒動の被害者の世代でもある。当時3年生だった私たちは翌年いくつかの，特に「早稲田の卒業生が多く働く」会社から締め出しを食った。彼らは「社会的制裁」と称したが，私たちには「保身」としか映らなかった。

そのせいか，私たちの代にはいわゆる「会社への忠誠心」が比較的低く，以前はあまりポピュラーでなかった転職をしたものが多い。例の幹事長と副幹事長もそれぞれ何回も転職している。そのため，いわゆる「出世番付」では大したことはなく，卒業後３２年にして一部上場会社の役員がやっと二人誕生した程度である。

時期的にみると，女性陣が子育てから開放されて元気になっている反面，男性陣は不景気，リストラでもうひとつ元気

がない。

私たちの代には同期のカップルが二組いる反面，未だ結婚していない(出来ない?)男性が一人いる。また，残念なことに5年前に女性メンバーを一人病気のため失っている。

【大垣嘉彦●昭和42年卒業】

早稲田闘争の中で

昭和39(1964)年入学と同時にジャズバンド「ハイソサエティ・オーケストラ」に駆けこんだものだ。ついでにＥＳＳにも入会した。2年になり，少しは勉強をしようと中央大学の聴講生になったが，それを機にバンドを辞めることになる。ついでに入ったＥＳＳはそのまま継続したのだからよほど居心地がよかったのかもしれない。そして昭和40年暮れ，新執行部に加えていただいたのだが，折悪しく“学費値上げ反対”をスローガンに「早稲田闘争」が燃え盛ってきたのである。

昭和41年1月20日全学ストに突入し，学年末試験も実施できなかった。入試に際して警官が導入され，逮捕者は200名(うちＥＳＳメンバー数人)を越えた。全共闘議長に大口昭彦君が就任し，いよいよ激しく闘争はエスカレートし，早稲田大学の学内問題は社会問題にまで発展したのである。ＥＳＳ執行部の中にも大学当局の運営に疑問を持つものも多く，会議においても喧々囂々の渦の中で，前に踏み出すにも動きの取れない状態が続いた。新入生の勧誘はいつもの年のように行われたものの，全共闘に占拠された中では活動は思うに任せなかった。多くの仲間がデモに参加し，警官ともみ合うことになる。当時の4年生が就職は決まったものの卒業できるかヤキモキしていたのもこの頃である。

私たち3年生も授業日数の不足で留年か！　と4年生と同じ思いであったのだが。6月末，やっと学生ストライキも終結し，対外活動が本格化した(門のないことを誇りにしてきた早稲田の正門に門が作られたのはこれを契機にしている)。

6月以降，五役をはじめ執行部は異常に忙しい時期を過ごした。関西遠征，ドラマ，スピーチ，ディベイト，ディスカッション等をなんとかこなしてその1年を終えたものだ。終わってみれば，スピーチにおいてはトロフィーをいくつも手にすることになったし，ドラマもグラン

プリは逃したものの個人グランプリをはじめ，個人部門で二つの賞を勝ち取ることができた。私自身はといえば，HMセクションチーフとして，周囲の力を得ることでやっと1年を終えたのである。

当時のメンバーが思索力，企画力，行動力どれをとっても非常に優秀な連中であったと振り返るたびに思い返す昨今である。残念なのは五役のうち，板津道生君(企画，中日新聞)と石野隆一君(副幹事長，博報堂)という優秀な人材を早くして亡くしたことである。

【大渕加寿夫●昭和43年卒業】

WESSドラマ黄金期との出会い

今から31年前の昭和42(1967)年11月下旬の肌寒いある日，場所は一ツ橋講堂でWESSドラマが「THE WALL」の公演を行い，最高のパフォーマンスをなし遂げた。これまで四大学英語劇大会で過去1回の優勝しかなく，他校に遅れをとっていたが，前年の「Something to talk about」で，ベストパフォーマンス賞と個人グランプリ賞(昭和42年卒，大垣嘉彦氏)を取り，にわかに上昇気流に乗っていたドラマ活動ではあった。

最終公演までの道程は，決して順調なものとはいえず，むしろ苦難の連続であったと思う。特に演出の朝倉輝明氏とドラ監の小坂晋氏の2人は，先輩方からの連日の叱咤激励で相当のプレッシャーがあった。私も2年生であったが，一応ドラ監助手という立場で3年生をサポートしたメンバーであった。

勝因の一つとして挙げられるのは，公演まであと一ヵ月を切った頃，当時，会長であった伊東先生の発案で，これまで築き上げてきた演技を一度崩し，キャストの思うがままに演技させてみたのである。このことでキャスト全員がリラックスし，これまでにない伸び伸びした創造性に富んだ演技ができる境地に入り，ここから一気に好調を維持して最終公演までこぎつけることができた。

本番では，ぴったり43分間の完璧なパフォーマンスで観客のほとんどを泣かせることができた。結果はご存じのとおり，WESSの圧勝であった。何しろ，9個の賞のうち8個を受賞したのだ。オールラウンドプライズ，ベストパフォーマンス，ステージエフェクト，個人賞もグランプリ以外の1～5位(1位堀公雄氏，

２位小林みどりさん，３位植木彰氏，４位田中真佐子さん，５位田中順子さん）を独占した。この日のＷＥＳＳドラマは，まさに今年のワールドカップで優勝したフランスチームのように夕闇に包まれた一ツ橋講堂中庭は，歓喜の嵐となり，これまでのドラマの不成績のうっ憤をすべて払いのけたようであった。昭和42年の「THE WALL」（プロデューサー：河井隆雄氏），を頂点に私の代になった43年「Five in Judgement」（プロデューサー：中瀬英憲氏），44年の「American Dream」（プロデューサー：宮本直人氏）と３年連続優勝へとＷＥＳＳドラマの黄金期を迎えることになった。

【柴原孝光●昭和45年卒業】

第二次安保闘争の頃の混乱はおとぎ話か

この頃はベトナム戦争を背景に学生運動真っ盛り，特に昭和44年は安保更新を翌年に控え，全共闘の成熟期であった。安保を語らない者は学生にあらずの風潮の中，我がＥＳＳでもディベイトとディスカッションのテーマは安保一色であった。

全共闘による大隅講堂占拠と何回目かの校舎バリ封鎖も排除されて学校側のロックアウトが始まり，何ヵ月か大学内に入れない状態が続いた。ＥＳＳのどのセクションも活動場所の確保に苦労したが，やはり長丁場のドラマが一番苦労したと思う。私も五役の端くれとして他の４人の足を引っ張りながらも，当時の第一学生会館裏の「キッチンハトヤ」や「そば処長寿庵」で異常事態下のＥＳＳ運営について熱く議論したものである。

先日，たまたまその辺りを通ったが，それらしき店の看板はもう見当たらなかった。学内にももはや「安保」の痕跡はないだろうし，そういえば私の記憶の中の「安保」も消えて久しい。あれは30年前のおとぎ話か。

【大久保賢三●昭和46年卒業】

TIDLの思い出

春のＴＩＤＬに参加した中では，油田・荘多（酒井）のコンビが最強のコンビと誰もが考え，優勝の期待がかかっていた。しかし結果は惜敗。幹事長だった僕

は，試合を終え輪になって集まった大勢のディベーターと応援に来ていた会員たちの前で，彼ら二人をどう慰めようか，何と言えばいいだろうかと思った。ディベーターとして二人の良きライバルでもある省一(村上)に，

「何んていってやればいいのかな？」

と言うと，省一は，

「実力がないからだ，と言ってくれ」

僕は省一の言ったとおりのことを大勢の輪の中で言い，エールをきった。

秋の朝日杯。油田・荘多のコンビは朝日講堂をダイナマイトでブッ飛ばすいきおいで優勝の栄冠を得た。朝日杯のタイトルは「少年法改正」。ＴＩＤＬのタイトルは覚えていない。

【鏡俊一●昭和47年卒業】

僕達の野尻湖の７日間

昭和45(1970)年７月24日10時，上野駅団体待合室集合，その１時間前から上野駅の要所要所に目にも鮮やかなオレンジ色のＴシャツに身を固めた３年生40人が待ち受ける。参加人員総勢250名，行く先は野尻湖畔野田屋旅館，僕たちの合宿は動き始めた。

木造２階建，あまりの歴史と伝統に今年こそはもう取り壊されるかと心配した野田屋旧館は今年も何とかもってくれた。

６日間にわたる全体合宿，厳しく楽しく徹底的にやろうのモットーの下，運営する側の３年会には今資料を見ても，かなりきついスケジュールが組まれている。３年生には日中そして夕食後にきっちり組んだSTUDY時間が唯一安心できる時，この年のしっかりした３年に対し，１，２年にも手強い奴らが数多い。

３年会は桟橋ぎわのボート小屋，40人車座になってのミーティング，３年会の意志統一が合宿委員長には何より心強い。３年生の何人かは合宿中ずっと，このボート小屋でのザコ寝で過ごしてくれた。

エンタテ→登山，ハイキング，ボートと分かれてのレクリエーション・ディ→キャンプファイヤーと続いた青春のイベントの中も，裏方である３年生の緊張がゆるむことはない。

野田屋名物，透けて見える芸術的な薄さのたまご焼きも，天カスだけをかけた別名ガソリン・ライスもクリアーし，６日目すべての公式スケジュールをこなして病人，ケガ人，途中リタイアまったく

なしで1，2年を送り出した後の一種の放心状態。その夜の打ち上げほどの充実感と解放感は，人生のうちでもそうは味わえないだろうなあ。4ヵ月の準備期間中各自のやりたいこと，言いたいことを勝手に出し合うので英語会のオアシスと呼ばれていた合宿委員会の皆さんと，評判の悪かったオレンジTシャツを着てくれた3年会の皆さんと，その3年会の緊張をゆるめないようにと，いろいろな思い出を作ってくれた後輩の皆さんに感謝しています。

【本田博●昭和47年卒業】

ドラマ中断の危機

昭和47(1972)年3月，WESS'72活動方針を決める五役会が"ルナ"(地下鉄早稲田駅出口の上，今のダンキンドーナッツのあるところにあった喫茶店)で連日開かれていた。平野幹事長，杉本副幹事長，池上企画管理，添田会計，それに私熊谷(総務)の五人。

当時，SPEECH，DISCUSSION，DEBATE，DRAMAが4大活動だったが，「ドラマをやめよう」という話になった。最初に言い出したのは誰だったか定かではないが，私は「ドラマをやめる派」の急先鋒だった。ドラマは会員全員の英語力向上に役立つのか？　大道具，小道具，サウンド，メイク…なんで英語会でこんなことをするのかという考えからだった。

一方，「WESSは英会話学校ではない」「生きた英語はドラマにある」―― 等々限りなく議論が続き，ドラマ中止に傾いていき，伊東先生(当時会長)の耳にも届くこととなった。東後先生ほかWESSのうるさ型の先輩が集まり，新五役と談判となった。「ドラマこそ本当の英語だ」「ドラマはWESSそのものだ」「ドラマをやめるとは何事だ」「やめることは許さん」。そうしている間に五役会の空気は「考え直そうか」に変わっていったが，誰がディレクターをやるのか，誰がステマネをやるのかなど問題は多かった。

新3年会のメンバーに緊急召集をかけ異例の3年会3月合宿となった。決め手がないまま千葉の民宿で延々と話し合いが続いた後，秀川君と大羽君の2人が"俺たちにドラマをやらせてくれ"と発言，幹事長の平野君がドラマ実施を決断。WESSのドラマの歴史はつながった。

伊東先生もホッとしたに違いない，平野の英断に拍手。

【熊谷伸成●昭和49年卒業】

今も忘れ得ぬ感動

四大学英語劇イフェクトプライズ。

題名はもう忘却の彼方へ去ってしまったが，昭和48(1973)年秋のあの英語劇のシーンが今でも時々脳裏に蘇ってくる。そのとき私はＬＩＧＨＴチーフとして調光室と客席とを仕切る小窓から客席側に首を出して，静かにキュー出しのタイミングをはかっていた。

夕闇迫るある公園での一幕――若者と老人の二人が，金持ちの男の背後から殺意をもって近寄ってくる，そして大きな石をその男めがけて落とそうとするその瞬間(暗転，そして)小鳥のさえずりとともに夜が明け，昨晩は何事もなかったかのように，陽光に照らしだされたいつもの公園の情景が鮮やかな青空とともに舞台の上に現れてくる……幕が降りると同時に観客席から感動の溜息が漏れてくるように聞こえたのは私一人だけだったのだろうか。

残念ながらグランドプライズこそ取れなかったが，イフェクトプライズを取ることができた。その晩の反省会での酒の味が今も忘れられない。大道具，小道具，サウンド，メイク，コスチュームそしてキャストが一体となって作り上げる舞台は，映画とは違って二度と再現ができるものではない。まさに一期一会の感動の作品であったという私自身の思い入れがある。そんな貴重な体験ができたこと，そしてその宝物を時々まぶたの裏に再現できる私はきっと幸せ者なのかもしれない。

【小倉雅博●昭和50年卒業】

大隈杯スピーチ

それは誰が言い出したのだろう。良く考えてみればかなり無謀な計画だったかもしれない。

私たちが幹事をしていたのは昭和49(1974)年。その前年までオール関東スピーチコンテストとして，WESSが主催する年末の恒例行事をオールジャパンに格上げしようという話になった。夢は更にふくらむ。早稲田が主催する全日本の大会なら名称は大隈重信杯だ。

それから苦労の日々が始まった。大学側との交渉に走り回る幹事長の荻野と企画管理の山田。運営をどうするか頭をひねる副幹事長の戸川，総務の河本。限られた予算の中から運営費を捻出しようとする会計の梅田。

ようやく大学側の承認が得られた。みんなの顔がほころぶ。いよいよ師走のある日，第一回大隈重信杯争奪全日本学生英語弁論大会が催された。場所も大隈講堂。緊張する五役，スピーチセクションのメンバーたち。

そんな中，大会はつつがなく終了。スピーチセクション・チーフの二木は堂々三位入賞。

毎年１２月がやってくるとあの時のみんなの頑張りを思い出す。

【梅田和彦●昭和51年卒業】

思い出を重ねる昭和52年組

ＥＳＳにはいろいろな思い出をもらった。野尻湖での合宿，Debate，Speech，数え上げれば切りがない。この仲間たちには世話人も多く，何時集まっても気持ちがいい。思い出に男も女もない。早稲田ＭＡＮと言われるキャンパスのなかでは女性の部員も多く，活動での女性進出が実現していたし，今でも集まれば女性陣の元気の良さと活発さには圧倒される。

女性の参加が積極的で，いつも男たちが女性の目に曝されている組織は健全だ。男優位の日本社会の閉塞感を見るにつけ，男女同権のＥＳＳ社会の清涼感は今でも同期の求心力だ。

毎年11月の第二土曜日を同期生の集合の日と決めている。昨年の卒業20周年に我妻家の尽力で大隈庭園内の「完之荘」で開催，総勢19名が参集した。その場での役回りも毎年決まっている，「ぼけとつっこみ」。Ｉ氏とＦ氏。会合と言えば必ず最後に集合するＩ氏が話題の中心だ。Ｉ氏が居ないと，場が盛り上がらない。

我々の年次はＥＳＳから思い出だけでなく生涯の伴侶を得たカップルも５組を数える。我が家もその一つだ。

【山川薫●昭和52年卒業】

ホームミーティングの盛んだった頃の思い出

われわれは昭和50(1975)年入学，52

年に3年生として英語会で活動をいたしました。当時の英語会は3年生が五役(幹事長，副幹事長，総務，会計，企画管理)と4活動(Dabete, Discussion, Drama, Speech)で活動を行い，1,2年生は7つのホームミーティング(HM)(秋葉原，城北，高円寺，目白，渋谷，新宿，横浜)を拠点の4活動を行うというシステムのピークだったと思います。1年生約200人，3年生約100人，3・4年生各30～40人で約360～380人程度の部員がいました。夏の野尻湖合宿は毎年約200人が参加した大合宿であったのを覚えております。

51年に四大学英語劇大会で優勝，Debateでは大きな大会は5人制で51年秋の全日本，52年春の大会，秋の全日本の関東学生英語会連盟(KUEL)主催の大会で3期連続優勝をしました。

また50年から英語会主催のスピーチ・コンテストが大隈杯と改称し52年に初めて大隈講堂で大会を行いました。

海外旅行がやっと一般的になってきた時代で先輩や同期が米国留学の時は羽田空港に皆で見送りに行ったのも今はなつかしい思い出です。そのような中で伊東先生の助言により4年生の有志でハワイ大学のクロフ教授のもとへ行き，翌54年からのハワイ遠征実施の下準備を行いました。

当時は現在のようにビデオ等のメディアが全く発達しておらず，皆が英語の情報に今以上に飢えていた時代ではなかったか，と思います。

【平松昌雄●昭和53年卒業】

「いとしのエリー」の流行った頃

昭和52年，「勉強はもういい，キャンパスライフをEnjoyしたい」と早稲田入学。英語に特段興味はないが，勧誘してくる美男美女の先輩たちに憧れて(騙されて)，ＷＥＳＳに入部した向きが多かったはず。この年は王選手がホームラン世界記録756号達成。2年になると，「いい日旅立ち」が流れる中，「与作」のようにＨＭの運営に大童。3年生の時の思い出として，われわれの代の自慢話を若干ご披露。関西遠征大盛況。スピーチは幾つかの伝統ある大会で1位。四大ドラマは“The Wall”で優勝。Debateも秋の5人制大会で全日本チャンピオン。ドラマとDebateはしばらく優勝から遠ざかっていたため，

大いに盛り上がりました。そうそう野尻湖での夏合宿で，夜中にボートが転覆して溺れかかっているアベックを救助して，表彰されたこともありました。カラオケの定番「いとしのエリー」(昭和54年のヒット曲)を歌う度に，この頃を懐かしく思い出します。

【野口元久●昭和56年卒業】

さらば，一ッ橋講堂

われら昭和57(1982)年卒から，四大ドラマのホームグラウンドとも言うべき，あの一ッ橋講堂が使えなくなり，ジプシー公演を始めました。恒例の記念写真を撮った傾いた正面の石段や，最終日の搬出後のセットに放り出される快感，また不便ながらもこじんまりとして雰囲気のある講堂で，総力を挙げて芝居に打ち込み，最後はエールで締めるというような，ドラマにつきものの光景が，残念ながらその年から味わえなくなってしまったのでした。

当時，新しい会場の江戸川公会堂の予約確保の順番取りに徹夜で関係者数人が並びました。ライトバンで乗り付けたのですが，暑かったのか乗り切れなかったかで，地面にマグロのように寝転がっていたところ，通勤してきた隣接の区役所の職員にみっともないから即刻起きなさいと注意されたのも，ジプシー初年度で必死だったころのいい思い出です。

【嶋田太郎●昭和57年卒業】

真夜中の差し入れ

「おーいラーメンが来たぞ」とピロティに声が響いた。

そこは，深夜の江戸川公会堂のピロティだった。夜が明ければ，秋の四大ドラマで，我ら早稲田プロダクションが「ウエストサイドストーリー」を上演することとなっていた。私は小道具を担当していたが，ネットフェンスがうまく張れず，公会堂で徹夜の作業をしていた。

私は風邪気味で微熱があった。11月の夜は寒く，連日の夜遅くまでの作業も手伝ってか，体力・気力とも限界に近かった。

そんな時，当時幹事長(プロデューサー)であった沢登さんが，作業をしている我々にラーメンを差し入れてくれた。

近所から出前を取ってくれたらしい。味はわからなかったが，冷えた体に再び活力が湧いてきた。

残念ながら賞は１つも取れなかったが，２日目の上演後，自分たちが前の晩まで作っていたものをすぐにぶっ壊し，仲間たち，先輩方と抱き合って大声で泣いた。今もって何故あんなに泣いたのか，わからぬままである。

【涌井弘行●昭和60年卒業】

時には昔の話を

加藤登紀子の曲に『時には昔の話をしよう』というのがある。宮崎駿の映画『紅の豚』でも使われたから，ご存じの人もいるだろう。

この曲の歌詞は，２番で次のように続く。

「道ばたで眠ったこともあったね／どこにも行けない皆で／お金はなくてもなんとか生きてた／貧しさが明日を運んだ／小さな下宿家に幾人も押し掛け／朝まで騒いで眠った／嵐のように毎日が燃えていた／息が切れるまで走った／そうだね」。

僕の当時の思い出は，その頃の喜びや感動，悩みや苦しみと相まって，いまだに整理がついているとは言えない。代わりに，青春の熱い日々をＷＥＳＳで過ごしたＯＢ・ＯＧすべてに，共感を込めて後半の歌詞を贈ろう。

「……どこにいるのか今では分からない／友だちも幾人かいるけど／あの日のすべてが空しいものだと／それは誰にも言えない／いまでも同じように見果てぬ夢を描いて／走り続けているよね／どこかで」。

【堀 光太郎●昭和62年卒業】

“English Time”

ＥＳＳの活動のなかで English Time がなつかしく思い出されます。学館内では英語でしか話をしてはいけないという極めて簡単なルールの「活動」でした。他の活動のなかでテーマが与えられているときには気にならなかったのですが，日本人同士が日常会話というフリートークを英語で行うことには，何故か気恥ずかしさを感じました。事実，五役総務が English Time を Call する前後のラウン

ジには人が極端に少なかった記憶があります。なかには，学館に来て English Time だとわかると，急に用事を思い出して帰ってしまう人もいました。逆に，英語で話すことに熱中する余り，学館の売店のおばさんに焼きそばパンを注文するのも英語になってしまった「猛者」もいたように思います。English Time はいつから始まったのでしょうか。その素朴さから，百年前のＥＳＳ創設時の最初の活動も English Time だったのかもしれないと思うのですが。

【清水将浩●昭和63年卒業】

ホームミーティングへの回帰

昭和から平成へと元号が変わったその年に五役を務めることになった私たちが手がけたのは，ホームミーティング制への回帰でした。私たちが２年生の時はセクション制で，２年生はセクション員として活動しながら，ホームミーティングの１年生のケアをするスタイルでした。自分たちが対処できなかった点もあり，もう一度ホームミーティングを見直してみようとしたのです。

ホームミーティングのメリットは，いろいろな活動に触れられるというだけでなく，１，２年生中心のグループの中での人と人とのつながりだと考えていた私たちですが，それが試されることとなったのが，大夏合宿でした。

心配していた参加人数も，フタを開けてみれば，前年の倍と大成功でした。２年生が中心となって１年生を誘ってくれたおかげです。

純粋な英語活動ではなかったけれど，ＥＳＳでの一体感を感じられた場として，その年の大夏合宿は，今でも私たちの心の片隅を占めています。

【西田正彦●平成３年卒業】

Farewell Partyのこと

Farewell Partyというイベントがある。大学卒業式に先立って行われる英語会の卒業式と言えば先輩方にも通りが良くなるかもしれない。すでに現役活動を実質的に退いていた４年生が正式にも活動を終える日の，つまり最後の最後の活動を私たちの学年を代表するエピソードとして選ぶのはある意味で逆説的だ。エピソ

ードは確かにたくさんある。四大優勝，大隈杯奪回，ディベート全日本準優勝。夏の合宿も成功のうちに過ぎた。

記録だけを見るとたいそうだが，勝てば官軍というおい目も強かった。3年会の発足は大幅に遅れ，しかも副幹事長は途中脱会，まとまりもリーダーシップもない我々は失敗を重ねるごとに「君らの学年には期待しない」という言葉を浴びた。実際そうなのだからへこむしかなかった。しかし英語会の活動は自然と人を鍛えあげるものらしい。最後のこの日，この活動としては画期的なことにほぼ全員が顔をそろえ，思い出を語り，そして仲間同志健闘を称えあっていた。どんなになろうともがいてもなれなかったものに今なってることに気が付いた。前述の諸エピソードを思い出として語っていってもいいような気がしたのはこの日からである。　【大木崇●平成4年卒業】

第２部

英語会の活動

WESS 100

第１章

ドラマ―英語劇の流れ

DRAMA

「演説」と「演劇」

稲門英語会の名簿に記載されている最も古い先輩は，明治36(1903)年卒業の伊藤重次郎氏である。東京専門学校が早稲田大学に生まれ変わったのは明治35(1902)年のことであるから，明治38年卒業の大山郁夫氏やその翌年に卒業の伊地知純正氏等は早稲田大学英語会の草創期を担った先輩たちである。英語会は早稲田大学と時を同じくして誕生していることが名簿から推定できるのである。

明治の時代といえば，西洋文化が怒涛のごとくわが国に押し寄せ，かつての「和漢混交」から「和洋混交」へと変貌著しい時期であった。新しい文化に接し，その文化を吸収するために知識階級は西洋の言語を体得しなければならず，英語をはじめドイツ語，フランス語を学ぶことは必要不可欠の使命であった。外国語を学ぶことは，外国の文化を学び理解することでもあった。英語会の会員は言語としての英語を学ぶことと同時に，読み書きだけに終始せずに実践的にその言語を如何に使いこなすかを模索したに相違ない。

「演説」という言葉は福沢諭吉の造語だが，古来わが国では聴衆を前にして自論を述べる風習がなかった。一部の寄席等で物語を聞かせる講談等の話芸は存在し

たが大衆芸能としてのものである。また，歌舞伎や能・狂言といった形式に拘泥した伝統的芸能はあったものの現在言われる「演劇」は存在しなかった。言語による表現場面が「演説」や「演劇」といった西洋の文化の吸収によって大きく拓けたことになる。

英語会における活動内容をみると「スピーチ」と「ドラマ」すなわち「演説」と「演劇」という二本柱が認められるのはこのような時代背景を反影してのこととうなずけるのである。スピーチにしろドラマにしろ古今の名スピーチや芝居の名台詞を暗誦することから始まった。いわゆる「レシテイション」が行われるのであるが，シェークスピアの大家である坪内逍遥先生による指導を直接受けることができる早稲田の英語会会員は非常に恵まれていたとも言えよう。シェークスピア演劇は「ハムレット」，「オセロ」，「マクベス」，「ベニスの商人」等をみても分かるように素人にも受け入れやすい作品が多いし，原語である英語でそのまま暗誦するのであるから極めて直截的である。先生翻訳するところの「永らふ可きや，而し亦永らふ可きに非らざるや，そこが思案の仕処じゃ」等としかつめらしい邦語訳台詞を使わないで済むのである。台詞の遣り取りのみのレシテイションは次第に身振り，手振りが加わり，動きのある芝居に，さらには舞台を使った本格的な芝居・演劇へと昇華・展開するのは至極当然の成り行きである。

「早稲田の三尊」と言われるのは高田早苗先生，坪内逍遥先生，天野為之先生のことだが，文学部の生みの親でもある坪内先生は学外に「文芸協会」を興し(明治39年)，島村抱月(演出)，松井須磨子(女優)らとともに演劇の振興に力を入れた。島村は後に「芸術座」を結成し，

さらにその後「芸術座」から独立した沢田正二郎によって「新国劇」が作られた(大正8年)。「文芸協会」は学生たちの素人から新時代の俳優を養成していた。また，高田先生も後に「演劇協会」を創立していることを思えば，早稲田の指導陣の演劇に対する思い入れは非常に強く，英語会の演劇活動もこのような環境下にあればなおさらのことである。学生の中で根付き育った「野球」が「職業野球」の今日の隆盛をもたらしたのとその生い立ちが似ているのである。

英語劇が本流

スピーチもドラマも聴衆，観衆があってはじめて成り立つものである。英語会の活動は「英語会例会」という観客を対象とした形式で，いわば「発表会」のような形で成果を世に示すのが恒例であった。一方，通俗世間にあっては川上音二郎・貞奴夫妻のような人物が西洋式の演劇を「新演劇」と称して興し，明治30(1897)年には「壮士芝居」を結成し歌舞伎に対抗したり，帝国座という洋風劇場を大阪に建設したりもしているが，本格的な現代劇が生まれるのはまだ後のことである。むしろ，学生が行う英語劇の方が本流であり，世間の耳目を聳動させていたのである。

大学当局も英語会の活動に対しては非常に好意的に支援を行っていた。当時の大隈秀麿校長をはじめ高田早苗学監，坪内逍遥博士，鳩山和夫教授等々大学幹部の面々が「英語会例会」が催される度ごとに出席参会されており，唯一の学内機関誌「早稲田学報」もその都度数頁にわたって開催記事を掲載している。これ等の記事を見ると，学生の演ずるドラマの出来栄えはすこぶ

る好評を博しており，時の有名名士と称される多くの貴顕紳士・淑女が早稲田の大講堂につめかけているようすを窺うことができる。前述した英語会初期の卒業生である伊藤重次郎，大山郁夫，伊地知純正の各氏等も卒業後は講師(後に教授)として学園に残り後進の指導に当たられ，先輩から後輩への流れとなって受け継がれ，年を降るごとに英語劇の実績は質的にも向上していった。英語劇大会は知的で高尚なエンターテイメントとしての地位を築き，その評判は雑誌の誌面を飾りマスコミの話題ともなったのである。

明治時代の学生はエリート集団であった。エリート集団を形成する彼等は政治的啓蒙，文化的啓蒙といった社会的啓蒙を行うべく，それなりの使命感に燃えていた。中でも英語会の会員は国際感覚を持ったエリートを自認していた。こんな意識が昂じて，シェークスピアの本物を演じるかたわら，創作劇も演じるようになった。明治38(1905)年の英語会大会のプログラムを見ると，公演演目の中に「花婿」と題するものがある。登場人物を見ると，韓君，韓君の令嬢，日本君，清君，以下独，仏，露，英，米が続くのだが，その筋書きは当時の国際間の問題を擬人化したもので，国威昂揚を問うたものである。

英語劇のマンネリ化

明治30年代後半のわが国を取り巻く国際情勢は対外条約や同盟の締結と改正の時代ともいえる。欧米に向けられた視線が清国，露国，韓国等アジアにも向けられるようになる。他方，条約改正の影響と相まってキリスト教系の大学が日本各地に設立され，文化面でも

今まで極めて斬新であった西洋文化が徐々に一般化する傾向が強まるのである。当初「鹿鳴館」の代名詞のように言われたダンスやパーティが普及し西洋音楽も身近になる。演劇界にあってもプロの集団が次々と旗揚げをするようになるのである。議会政治が体を成すようになれば，演説，弁論も耳慣れたものとなった。英語会で行われていたエリート意識に根差したスピーチやドラマ活動の迫力は自然に弱まってくるのである。

大学そのものも，昔ほどの気負いが減少し，英語劇に情熱を傾ける学生の気風は次第に希薄にならざるを得ないのである。このような時代背景のもとでは英語会の英語劇もややもするとマンネリ化を呈することになる。ただし，マンネリ化したからといって全く廃れてしまったわけではない。その証拠に「英語会温習会」の名のもとに明治41(1908)年にシェークスピアの「リチャード3世」，モリエールの「俄分限」を，明治42年にはシェークスピアの「ハムレット」および「マクベス」等が演じられている。さらに大正時代に突入すると，大正2(1913)年にはシェークスピアの作品に出てくる各主人公を登場させるといった奇劇「夢魔」なるものまでを公演しているのである。

明治時代の「英語会例会」でのパフォーマンスは，スピーチ，レシテイション，ドラマに加えて，ハーモニカ演奏とバイオリン演奏等の音楽がアトラクション的に付加されていたのに対し，大正年間の特徴は早稲田大学交響楽団やグリークラブが英語会と競演していることも注目すべきことである。オーケストラやグリー側に発表の場がなかったのかも知れないが，英語劇と併せてオーケストラやグリーの評判も高く，早稲田の

文化活動のレベルの高さは穏やかながら保たれていたのである。大正年間で特筆すべきことがもう一つある。大正11(1922)年早稲田の創立者である大隈重信老侯が逝去したため，全学を挙げて喪に服すことになり，学内における歌舞音曲は自重を求められ，英語劇も自粛することとなった。明けて大正12年に起きたのが関東大震災である。震災の影響は学園のあらゆる活動を止めてしまった。もちろん，英語会の活動も麻痺状態に陥ったことは想像に難くない。さらに追い討ちをかけたのが翌大正13(1924)年6月，時の文部大臣であった岡田良平の発した「学校劇禁止令」である。禁止の理由は「軽佻浮薄」を廃するというものだが，お上の御触れには致し方がなかった。この馬鹿げた禁止令はその後，うやむやとなり，大正15年11月にはカール・グリッツの「まだ済まんぞ」とチェホフの「心にもなき悲劇役者」をひっさげて英語劇は復活している。

オール早稲田英語会の誕生

大正15年に，学制の改革が行われた。その結果，第一高等学院と第二高等学院が早稲田大学の予科として設けられた。第一・第二高等学院共に英語会が結成され，昭和初年から大学(学部)の英語会と合同の発表会を行うこととなった。以降，「オール早稲田英語会」という名称が使われるようになり，第一・第二高等学院と大学(学部)英語会は各々で英語劇を競演することとなるのである。「オール早稲田英語会大会」の第1回は大正15(昭和元・1926)年のことである。以降，一年に1回を原則として，第二次世界大戦の激しくなる第17回まで続いた。

現在「英語会」と言えば固有名詞として使われ理解されているが，英語会が発足した頃は「英語会」と言えば「送別会」や「園遊会」という風に使われる「会」であった。「第何回の英語会を挙行します」という表現が使われたのである。「春の英語会」，「秋の英語会」といった行事名の一つとして認識された名称であった。戦前の英語会英語劇は，「オール早稲田英語大会」に集約され継続されていた。

早稲田における「早稲田英語会英語劇」は昭和11(1936)年に他校との交流を始める。早稲田大学，慶応義塾大学，立教大学，東京商科大学(現・一橋大学)の四大学による英語劇大会が始められたのである。この四大学が一堂に会することになった経緯は詳らかではないが，遡ること昭和3年12月8日に，東京日日英文，大阪毎日英文両社主催による「インター・コレッジエイト・ドラマチック・トーナメント」なる催事が開催されており，この延長線上で開催された可能性は高い。因みに，昭和3年時の各校の演目は，ジョン・リードの「自由」(早稲田)，菊池寛の「父帰る」(立教)，ハリー・グラハムの「国家の秘密」(慶応)，アラン・モンクハウスの「グランド・チャム公の金剛金」(女子高等学院)であった。この大会にはまだ東京商科大学(一橋大学)の名は見られない。

早稲田大学は，第一・第二高等学院(予科)との3グループによる「オール早稲田英語会大会」を大正15年からスタートさせ，昭和11年からは「四大学英語劇大会」(早稲田・慶応・立教・商大)を加えての活動となり，その結果，英語会の「オール早稲田」での演目がそのまま「四大学」でも演じられるのが通例となった。

四大学の英語劇は各大学の演ずる演目にそれぞれ特色があった。それは，慶応は喜劇・コメディ，立教は日本物の翻訳もの，商大は探偵もの，そして早稲田は怪奇ものを概して演じるというものである。早稲田の怪奇ものとは幽霊やゴースト，時にはモンスター等が登場する劇である。英語劇というジャンルの中で立教が得意とする日本ものは，台詞こそたしかに英語ではあるが登場人物は日本人そのもの，舞台の設定も日本のお国なのだから，他の大学の出し物とは一味違ったものになる。菊池寛の「父帰る」や「恩讐の彼方に」とか木下順二の「夕鶴」等が演じられるわけであり，台詞のイントネーションや発音にはあまり神経が払われなくとも済んでしまうのである。その上，時代考証や場面構成の勉強にも手間は掛からない。「四大学英語劇大会」はコンテストとして競われたので，日本ものを出してくる立教は優勝する回数が極めて多かった。台詞以外は全て日本を地で行けばよかったのだから当たり前なのかも知れない。

「オール早稲田英語大会」は学内の３つの英語会が英語劇を公演したが，プログラムには英語劇の他に，スピーチや音楽もあって賑やかなものであった。プログラムが多彩であるということは出し物が多いということでもある。出し物の手持ち時間に制限が加わることになる。したがって「英語劇」は一幕物が常であった。演目が絞られるのである。「四大学英語劇大会」も各大学が限られた時間の内で公演をしなければならないのである。また，当時の英語会会員は男世帯でもあったため，男優中心の演目に限定されるといった制約もあった。そこから，定番的な演目が生まれることになる。

ダンセーニ作の「宿の一夜」，ポー作の「マンキーズ・ポー」等がよく演じられた。「宿の一夜」は男ばかりの芝居であり，台詞を喋るのは四人，他は無言の印度人と海賊が一人といった役回りであったし，「マンキーズ・ポー」もお婆さんが一人出て来るのであるが，何とか男優で誤魔化してしまうのが常であった。「宿の一夜」も「マンキーズ・ポー」も日本全国の旧制中学から大学まで，あちこちで数多く上演されたレパートリーである。早稲田英語会の出し物に怪奇物が多かったのは，ダンセーニ作のものを扱い慣れていたためかも知れない。ダンセーニはアイルランドの作家であり，アイルランドと言えば幽霊・お化けの本場なのである。

演劇界に人材を輩出

大正15年の卒業生の名簿の中に，五百井清栄氏の名が見える。五百井氏とは，芸名・松井翠声氏のことである。徳川夢声と並んで斯界の鬼才とも称され，しかもアメリカ帰りのインテリ芸能人と名声を博した松井氏を招き，英語劇に対する心構えや多くのアドバイスを受ける会合が昭和９年頃に度々開催されている。当時の英語劇の指導には多くの学園講師の先生方や外人講師も当たられているが，英語界出身の先輩諸氏も何かと世話を焼いているのである。昭和９年の「オール早稲田英語大会」においては，外人講師の先生方にまじり，後の映画大監督・谷口千吉氏の名が指導陣の中に見える。谷口氏は昭和11(1936)年の英語会卒業生の一人であるから，学院時代からすでにその才能を大いに発揮され，指導役を努められていたことになる。

舞台装置や照明効果等の裏方部門では，英語会をは

なれた理工学部の建築科や電気科の人々の応援を得たこともあった。早稲田大学のあちらこちらに演劇にかかわる多数の人々が存在していたのである。英語劇の分野に限定することはできないが，劇作家，演出家，監督等舞台関係者は多い。もちろんのことながら役者も多いのである。学生時代に才能の萌芽を見ることのできる人たちを輩出しているのである。

一般世間において演劇がプロの劇団によって上演されるようになると，街中の劇場も増えてくる。かつて明治の時代に学生がリードした「英語劇」は次第に斬新さを失い，英語会の活動の一部を担うに留まることになる。その上，スピーチ，ドラマのほかにディスカッション，ディベイト等の新しい活動範囲を拓くことにもなった。その昔，大学生の英語劇に寄せられた名声は薄れ，本来の学業の合い間に行われるクラブ活動のさらにその一部門として認識されるに至るのである。

ただし，英語劇を公演するということは，英語を通じて，会話の技術のみならず，英語圏の文化を役者，裏方が協同して学習・会得する絶好の機会なのである。慶応大学の英語会は英語劇部を切り離し，独立させてしまったが，早稲田の英語劇は全員参加で取り組んだ。

昭和10年代後半は第二次世界大戦下，「鬼畜米英」が唱えられ，英米語はいわゆる敵性語であると蔑まされた時代である。「敵を知らずして敵に勝てるか」と言いながら英語会の活動は続けられた。しかし，学生は次々と戦場へと狩り出されたり，勤労動員で軍需工場へ働きに出されたりと，最早学問の府はその存在をなさない状況を呈していた。年齢の若い「学院」の学生が英語会を細々と守っていたのであった。

英語劇の公演が再開

昭和20(1945)年ようやく戦争が終わりを告げると少しずつ学生が早稲田に戻ってくる。新入生として入学してくる学生もいる。英語会も息を吹き返すのである。敗戦後の日本人の眼は戦勝国とりわけアメリカに向けられ，英語に対する関心が急速に高まるのである。進駐軍兵士向けのラジオ放送・ＷＶＴＲ(後のＦＥＮ放送)が開始され，英会話教室のラジオ番組が人気となった。英会話は大人気・ブームとなった時代であった。ＮＨＫから早稲田の英語会に英語放送劇出演の依頼がきたりもしたのである。昭和20年12月のことであった。「サムシング・トウ・トーク・アバウト」が放送された。昭和24年卒業の中瀬正一氏(後の稲門英語会会長)他が出演し，一年先輩の伊東克己氏(後の英語会会長)が演出を担当した。

英語劇の公演が再開されたのは昭和21年である。大隈講堂でダンセーニの「宿の一夜」が公演され，翌年の昭和22年にも同じ演目が公演されている。昭和24年には「四大学英語劇大会」も復活している。早稲田の出し物はポー作の「マンキーズ・ポー」である。早稲田英語会初の女性幹事長小安総氏(旧姓西川，昭和26年卒業)がこの時の舞台監督を務めていた。「四大学」は昭和26年から昔の通りのコンテスト形式となった。この頃の配役には何人かの卒業生もエキストラとして応援出演している。

昭和24(1949)年４月から，学制改革による「六・三・三・四制」が施行された。新制大学の実施とともに高等学院は新制高校として一段下の存在となり，英語会は大学・学部のみに一本化された。大学におけるク

ラブ活動は文科系，体育会系ともに雨後の筍状態を呈し，演劇関係だけを見ても，演劇研究会（通称「劇研」）を筆頭に，自由舞台，白鳥（しらとり）座，黎明座，パンの会等それぞれ特徴を持った団体が誕生した。昭和24，5年当時の「劇研」の会員には，今村昌平氏，小沢昭一氏，北村和夫氏，加藤武氏，といった現在の演劇界の大御所の顔が見える。昭和28年の英語会英語劇において，劇研ＯＢの加藤武氏に演技の指導を乞うている。

昭和30年代に入ると，毎年秋の「早稲田祭」に大隈講堂で催される「早稲田演劇祭」に学園各劇団とともに参加することとなった。英語会としては「四大学」での演目をそのまま再演することとなり，一年間の打ち上げ公演的なものとして年間活動の締めくくりを演じた。

ドラマ・フェスティバル

時は変わり平成の時代，現在，英語会の会員は約250名を擁している。会員は居住地域ごとにグループに分かれて会員相互の連帯を取り合っている。このようなグループを「ホーム・ミーティング」と呼んでいる。「ホ

舞台づくりで大道具を運ぶ会員（昭和５０年）

ーム・ミーティング」制が生まれたのは昭和35年である。各ホーム・ミーティングが英語会の中で，互に競い合うのである。英語の能力だけではなく，ミーティング内の人間的な付き合いや親睦をも含めた交流の場となるのである。各ホーム・ミーティングはそれぞれ独自の活動をするようになるが，ホーム・ミーティング同士の競い合いの雰囲気も生まれる。これがホーム・ミーティング対抗の「ドラマ・フェスティバル」に発展するのである。

昭和35年当時，ホーム・ミーティングは，横浜，渋谷，新宿，高田馬場，高円寺，城南，城北，秋葉原，目白の９つの地域に分かれていた。現在は６地域に統合されている。「ドラマ・フェスティバル」は毎年６月に開催され，同一演目によって競演される。ここ10年ほどは，Ｍ・ウォーカー作の「ザ・ウォール」が定番とのことである。

「ドラマ・フェスティバル」は各ホーム・ミーティングのメンバーが，共同作業を通じて連帯感を強め，友情を深める格好の機会を作り出している。「ドラマ・フェスティバル」に参加して，それをやり通したメンバーが英語会の最終的なメンバーとして卒業までその名を留めることになる，と言われるようになった，との噂を聞いたのは最近のことである。「ドラマ・フェスティバル」で優秀な演技をしたキャストは，英語会英語劇の一大イベントである秋の「四大学英語劇大会」の有力候補としてノミネートされることになる。

「四大学英語劇大会」への準備は６月後半から始められる。「ドラマ・フェスティバル」からノミネイトされたキャストに加え，一般会員からのオーディションも

行われる。本年度の早稲田のキャストが決定する頃には。演じられる演目も決定され，いよいよ11月の公演に向けてのドラマ・セクションの活動が始動することになる。6月に決定した演目に対する「作品研究」が7月から始まる。作者の考え方，時代背景，配役の人間関係等が徹底的に考察され，「私たちが，この芝居を通じて，何を表現したいのか？」が問われるのである。

夏休みの後，9月から11月の本番まで，約4回ほどの合宿稽古が行われ，演出，役者たちは芝居作りに文字どおり没頭することになる。英語会会員は，3年生になると，ディスカッション，スピーチ，ディベイト，ドラマ等の各セクションに分かれて活動をするのだが，ドラマ・セクションのメンバーは，稽古場の手配や合宿所の予約等に東奔西走を余儀なくされることになる。学内の空教室の確保ができなければ葛飾区内の「水元合宿所」を押さえねばならない。すべて，自前で北馳南駆するのである。演技や台詞の指導も，3，4年生が責任をもって当たり，外部の力を借りることはない。今や「四大学」を中心とする早稲田英語会の英語劇は，まったくの自主公演となった。ドラマ・セクションのメンバーが中心となって企画・制作を行っているのである。とは言え，ドラマというものはキャストだけでは成り立たない。裏方がいなくては出来上がらないないのである。裏方は誰が担当するのかと言えばセクションを超えた「オール英語会・全員」が相変わらず参加しているのである。この参加精神，一体感は英語会の伝統とともに，早稲田の伝統精神なのかもしれない。

その昔，早稲田英語会の英語劇は，「奇怪物」を得意とした時代があった。今の出し物は，シリアスな人間

模様を描いた物，ヒューマニティな題材，大人から子供まで幅広く共感を覚える物としてのファンタジックなメルヘン物等と多岐にわたっている。作品を演ずるのではなく，自らが作品を通じて自己を演ずるようになったのかもしれない。最早，学生は時代を牽引するのではなく，時代を牽制する役割を背負っているのかも知れない。

戦後，新設される大学も多く，既存の大学自体もマンモス化したため学生数もそれなりに増加した。学生自身の意識も戦前のようなエリートとしての存在感は薄れ，クラブ活動に参加する意義も大きく変換した。学生は社会へ巣立つ前の雛であり，学生演劇は飽くまで素人演劇と位置付けられたのである。以降，英語会の英語劇は「四大学英語劇コンテスト」を中心に演じられ現在に至っている。キャストは人数が限られているためオーディション形式で選考されるが，スタッフは英語会会員挙げての体制で公演に臨むのは伝統的である。大道具・小道具・持ち道具，照明・音響・かつら・メーキャップ・衣裳・記録・プロンプ等の役割を

昭和51年舞台公演より

大勢の会員が一致協力して分担するのである。最終公演の緞帳が下りた後，ホール前で撮る記念写真には，ほとんどの会員の顔を見ることができる。多くの先輩方の顔も見ることができ，１年間指導を頂いた先生方のにこやかな笑顔を見ることができるのである。

明治時代に，わが国に初めて演劇をもたらし，自ら公演し世間を瞠目させた早稲田の英語劇の情熱や意気込みは最早その面影を残していないかもしれない，プロの秀れた劇団も増え，海外で本場の公演を観ることができるようになった今日，学生演劇はスマートになった学生によって優等生的に上手に公演されるようになった。時代が変わり，学生が変わり，演劇そのものの価値が変わったのである。しかし，英語会とともに生まれ，ともに歩む英語劇の歴史は滔々として留まる所を知らない。その流れはまさにドラマチックなのである。いつの時代にも芝居気のある若者はおり，英語劇は青春の一場面として存在価値が在るのであるんであーる。

昭和５６年舞台公演より

各年の公演演目　(　)内は作者ほか。

明治37年　高等御下宿，転居，正直の頭，露探(創作)。

明治38年　正直の頭，花婿(新作)，枯尾花，珍客来(新作)，旅順陥落(新作)。

明治39年　The Boy Who Wins(対話劇)，The Three Pilgrims(対話劇・伊地知純正)。

明治40年　Romola(対話劇・George Eliot)，Judas Maccabreus(対話劇・Longfellow)。

明治41年　みかど万歳，俄分限(喜劇・モリエール)，ケートの最期(悲劇・アディッソン)，リチャード3世(悲劇・シェークスピア)，守銭奴(喜劇・モリエール)。

明治42年　六百騎(テニソン)，魔法医者(喜劇・モリエール)，オセロ(悲劇・シェークスピア)。

明治43年　ハムレット(悲劇・シェークスピア)，同盟罷業，ルイ11世(シェークスピア)。

明治44年　マクベス(悲劇，シェークスピア)，書斎喜劇遺言。

大正2年　気まぐれ息子，良き習慣を造れ(教訓劇)，美酒チェリーバウンズ(喜劇)，夢魔(奇劇・シェークスピア作の各主人公が登場)，女権拡張論者，滑稽偽医者(喜劇・モリエール)。

大正4年　Worth Before Show，A Pair Of Spectacles，The Three Deformed Men，The Living Corpse (Tolstoi)，Telephone(笑劇)。

大正5年　真夏の夜の夢(シェークスピア)，ジュリアス・シーザー(シェークスピア)，Gentlmen，The King，A Man About Town，Taking Father's Place，After The War。

大正６年　妖怪の新郎(喜劇)，デア・タッハ(諷刺劇)，銭たる人。

大正８年　先陣。

大正９年　Mis Chievous Bob，Rising Of The Moon(グレゴリー夫人)。

昭和元年　イット　イズント　ダン(カール・グリュック)，心にもなき悲劇役者(喜劇・アントン・チェホフ)

昭和３年　自由(ジョン・リード)，A Man About Town(A.Stange)，A Pair Of Spectacles(S.Grundy)，Cripples(D.Pinski)。

昭和４年　The Youngman With The Creamtarts（R.L. Stevenson)，A Race For A Dimer（J.T.G. Rodwell)，The Rising Of The Moon(Lady Gregory)。

昭和５年　まだ済まんぞ(カール・グリュック)，１ドル(デビッド・ピンスキー)，月の出(グレゴリー夫人)，X＝0(ドリンク・ウォーター)，身代り(社会劇・フランソワ・コペー)，旅宿の一夜(怪奇劇・ロード・ダンセーニ)。

昭和６年　The Shadows Of The Glen(J.M.Synge)，The Maker Of Dreams(オリファント・ドーン)，動く指(バーシゥアル・ワイルド)，まだ済まんぞ(カール・グリュック)。

昭和７年　The Bells(Leopold Lewis)，The Pio And The Tart(M.Jagendorf)，Bound East For Cardiff(Eugene O'Neill)。

昭和９年　One Day More(Tommorrow)(JosephConrad)，Barbara's Wedding(I.M.Barrie)，The Rising

Of The Moon (Lady Gregory), Bird Of A Feather (J.O.フランセス)。

昭和12年～14年

ハムレット，マクベスやイギリスの歴史物を上演していた。

昭和17年 The Glittering Gate

昭和21年 A Night At An Inn (ロード・ダンセーニ), Stolen Prince。

昭和22年 A Night At An Inn (ロード・ダンセーニ)。

昭和24年 Monkeys Paw (ポー)。

昭和26年 マンキーズ・ポウ(ポー)。

昭和28年 マクベス(シェークスピア)。

昭和29年 Long Goodbye (Tennessee Williams)。

昭和30年 Hellow Ant Here (W.Saroyan)。

昭和31年 Ile (Eugene O'Neill)。

昭和32年 Adding Machine。

昭和33年 When The Roses Bloom Again (Joe Cottie)。

昭和34年 Portrait Of Madonna (T. Williams)。

昭和35年 Where The Cross Is Made (Eugene O'Neill)。

昭和36年 The Valiant。

昭和37年 Lithuania (Rupent Brooke)。

昭和38年 Through A Glass Darkly (S.Richards)。

昭和39年 The Rope。

昭和40年 White Dresses (Paul Green)。

昭和41年 Something To Talk About。

昭和42年 The Wall (Michael Walker)。

昭和43年 Five In Judgement (Douglas Taylor)。

昭和44年 The American Dream (Edoward Albee)。

昭和45年 Only A Game (Edward Pomerantz)。

昭和46年　An Evening For Mertin Funch（C. Dizeuze）。
昭和47年　Picnic On The Battlefield（F. Arrabel）。
昭和48年　The Tricycle（Fernando Arrabel）。
昭和49年　A Frourth For Bridge（Denis Johnson）。
昭和50年　Lithuania（Rupent Brooke）。
昭和51年　The Arrival（Osker Zemme）。
昭和52年　Odds All Even（Norman Leuen）。
昭和53年　The Tea-pot On The Rocks（J. Kirkpatrich）。
昭和54年　The Wall（Michael Walker）。
昭和56年　The Spiral Staircase（Andrew Laslie）。
昭和57年　The Devils Limelight（Ella Adkins）。
昭和58年　Barefood In The Park（Neil Simon）。
昭和59年　Heaven Can Wait（Harry Segall）。
昭和60年　Frankenstein（Mary Selley）。
昭和61年　The Prisoner Of Second Avenue（N. Simon）。
昭和62年　Crines Of The Hart（Beth Henley）。
昭和63年　Come Brow Your Horn（Neil Simon）。
平成元年　Flower For Algernans（Daniel Kyies）。
平成２年　Witness For The Prosecution（A. Chiristie）。
平成３年　Arsenic & Old Lase。
平成４年　Harvey（Mary Chase）。
平成５年　Mousetrap（Agatha Chiristie）。
平成６年　Enter A Free Man（Tom Stoppard）。
平成７年　The Arkansaow Bear（Aurand Harris）。
平成８年　Invisible Friends（Alan Ayckbourn）。
平成９年　The Ghost Of Penny（Rosemar Musil）。
平成10年　Catch A Falling Star（Lee Murphy）。

【遠間昌平】

舞台監督ノート

机の引出しの中，奥深くに，古びた2冊の大学ノートがひっそりと保存されています。表紙に「舞台監督ノート」とあります。今を去る昭和33(1958)年と34年の「四大学英語劇大会(コンテスト)」のために作られたノートです。今から40年も前に記されたこのボロボロのノートには，大会のプログラムとガリ版刷りの台本がホチキスで止められており，当時のキャストやスタッフの面々を容易に思い起こさせてもくれます。稽古日程や舞台装置の見取図，道具類のメモ等が細く書き込まれていますし，夏の間には，キャストの選考表やコンテストのジャッジ表のメモなんかも挟み込んであります。帰省先から稽古場に宛てたキャストの書簡もあります。私の学生時代，ESS時代がボロボロになりながら収まっているノートなのです。実に「ナ・ツ・カ・シ・イ…ノートなのです。」

熾烈な受験戦争なしで，学院からエスカレーターで学部に進学した私は，伝統あるESSに入会はしてみたものの，英語の力は最下級であったはずです。それでも何とか卒業するまでESSに在籍できたのは，実に，ドラマ・セクションがあったればこそなのです。芝居の裏方ならば語学力の劣弱さを曝け出さずに安住できるのではないかしらと考えたのです。こんな浅はかで安易な了見が何時しか一人の学生を舞台の虜とし，青春の情熱へと変質昇華させて行くのですから妙なことではあーりませんか。

フレッシュマンがリンカーンのゲチスバークでの演説の暗誦をし終える頃，すなわち6月に入ると，秋(11月上旬)に毎年開催される四大学(早稲田，慶応，立教，一橋)英語劇大会へ参加するためのキャスト選考会が開かれます。自選，他選の役者志願者の中から役柄に合った人物を選び出すのです。語学力については英語会顧問の五十嵐新次郎教授とサリー・パッカードさん等が厳しくチェックする。ここでパスした人たちをもう一度，今度はアクション面でテストするのです。こちらのほうはドラマ・セクションの先輩方が担当していました。

この時点では，すでに，今秋の演目は決まっておりました。それぞれの大学の持ち時間は一時間以内と決められておりましたから，一幕物も出し物が適当だっ

たのでしょう。当時の早稲田のレパートリーはJ・ユリー，T・ウィリアムス，E・オニールといった比較的一般受けをする作者の戯曲が取り上げられておりました。これ等の作品は，ちゃんと翻訳本が市販されており，私にとっては大変都合が良かったものです。各校とも，演目には特徴があり，例えば，立教は「竹取物語」とか「修善寺物語」といった日本物を英訳して舞台に乗せていたようです。だから，立教でも，裏方ならば英語は要らなかったかも知れません。

キャストが決まったら，スタッフの陣容も固まらなければなりません。英語会での安住をドラマに求めざるを得ない私は，一年生の時は大道具係を，二年生の時は舞台監督助手を，そして三年生の時はなんと舞台監督を強引かつ隠密裡に買って出たのであります。一学期が終わって夏休みに入ると，役者も裏方も台本を持って自分なりに役柄や舞台の構想を練るのです。とりあえずは自習に取りかかるわけですね。田舎へ帰る学生もいるし，アルバイトで百貨店のお中元の配達をする人もおります。前年度に単位を落として夏期講習を受ける者もいらっしゃいました。英語会の会員で，英語の夏期講習を受けたのは私のほかはいなかったのではないでしょうか。

7月末から8月にかけて，長野県の野尻湖でESS恒例の合宿があります。ドラマもスピーチもディスカッションも，会員全員，みんなで参加する年中行事の一つです。私はドラマ・セクションと同時にリクリエーション・コミティを，これまた，英語不要ポストとして担当しておりました。この合宿の思い出については誰か他の人が書きそうなので，私は遠慮しておきます。楽しかった合宿が無事終わると，そこからドラマのキャストは早稲田の杜に集合です。いよいよ稽古が始まります。本読みから始まり立ち稽古へと進みます。この稽古にはキャストはもちろんですが，演技をつける演出・演出助手とともに舞台監督も立ち合うことになります。役者の動きは舞台装置の中で行われるわけですから，裏方の元締めである舞台監督は立ち合わざるを得ないのです。

四大学英語劇大会はコンテスト形式で開催されます。英語力と演技力，そして舞台の3点が審査の対象となります。舞台については装置，照明，音響，衣裳，化粧等が吟味されます。時間オーバーは

分刻みで減点。審査の先生方の顔ぶれは英国大使館員，国際基督教大学の先生，ジャパン・タイムスの記者，外語学校の先生といったところで，各大学の利害関係のない人々に依頼されました。

芝居を始める時に，先ず第一にしなければならないことがあります。キャストもスタッフもが，その作品について同一の基盤，視点を持つための「作品研究」です。作者の言わんとしているところ，時代背景，登場人物の性格や相関関係等を分析して理解しておくことです。この統一見解に基づいて，役者は役者なりに自分を作っていきます。我々裏方は，時代考証というのをやります。これが大変なのです。部屋の内装から役者の衣裳まで徹底的に調べ上げなければなりません。図書館には随分通いました。演劇博物館にも通いました。

台詞と台詞の間に書いてある「ト書き」の裏側を推察判断しながら大道具(装置)の図面を作制し，照明プランを立て，置道具や持ち道具を選定し，衣裳やメーク・アップの計画を練ります。役者は自分自身に鞭打ちながら役柄の完成へと努めます。裏方は舞台作り，物作りを担当しますから，ある時は設計技師，またある時は大工，そしてまたある時は裁縫の内職，更にそしてまたある時は古物回収業者となって準備を重ねます。ズブの素人の学生ではありますが，形だけは本物の芝居を演(や)るのですから多少の気取りも出て来ようというもの。学生服や角帽を脱いで，ジャンパーにベレー帽なんていう出立ちになっちゃうんです。専門家が出入りする藤波小道具店とか宮川かつら店，志ら菊化粧品店，東京衣裳や神田貸靴店等に出向いていろいろ物色するんです。ラジオ東京(現TBS)へも行きました。音響効果のテープを借りるためです。二学期に入って10月頃になるとジャンパー・ベレー姿はさらに成長変身して黒足袋・雪駄なんかが加わり珍奇な風体で部室へ出入りするようになります。当時の制服・制帽全盛期の中での格好ですから目立ちました。こんな珍奇な姿の学生は，露文科のルパシカ姿と早稲田精神昂揚会の羽織・袴姿と私ぐらいでした。

舞台稽古をするために大隈講堂を借ります。講堂の管理人さんに煙草の付け屈けをするのも仕事のうち。本番の前日に，早稲田の杜から会場の一ツ橋講堂まで大道具や置道具のセットを運搬するために，自動車部のポンコツ・トラックを借りる

契約をするのも仕事の一つです。夜遅くまで，あーでもない，こーでもないと打ち合わせを繰り返し，新宿の深夜喫茶「凧月堂」で夜を明かしたこともあります。フーテン族なんていう連中がウロウロしていたのを憶えています。

本番公演は11月上旬の土曜日と日曜日，昼の部，夜の部の都合4回です。大道具係は金槌を各自持参。大工さんが釘や小物を入れて腰に下げる袋に鎹（かすがい）を入れて着装します。鎹のことを「ガチ」と言い，これを入れる袋を「ガチ袋」と呼びました。裏方の男性は全員トレーパン姿で統一，ゴム草履姿の者も約一人おりました。近所のパン屋で仕入れたカレーパンをトレーパン姿で食べました。照明係には軍手が配給になりました。メーク・アップ係の女性軍はエプロンを持参です。外国の芝居を日本人が演ずる都合上，鼻を高くするパテも用意して役者の顔づくりです。

日曜日の夜の部終了後は審査発表なのですが，私の時代には残念ながら優勝はできませんでした。でも，役者の中で個人賞をもらった女優さんはおりました。この夜は，先輩諸氏も大勢お越しくださり，舞台衣裳姿のキャストを中心に先輩，後輩，英語会会員全員で記念撮影です。

この公演は11月中旬の早稲田祭の演劇祭（於・大隈講堂）で，もう一度演ぜられ，長かったドラマ活動はドラマらしく幕となります。

約半年間のドラマ活動は，私にとって，青春のドラマそのものでした。実にドラマチックでした。ドラマ活動を通じて，良き友を得，良き思い出を作ることができたのです。２冊の舞台監督ノートの１冊は，一年先輩の平林さんが私に，参考にしなさい，と与えてくれたものです。もう１冊は私が私なりに書き付けたものです。平林さんのノートには平林さんの青春がつまっていると思います。長い間私の手許に置いてあったことを思うと，何か相済まぬ思いがします。主の御許にお返ししたいと思います。

【遠間昌平●昭和36年卒業】

第2章

スピーチ

SPEECH

明治時代のスピーチ

「演説」ということばが，福沢諭吉の造語であることは，よく知られている。慶応義塾大学には，福沢が造った“演説館”が現在も存在している。

明治時代以前の日本では，公衆の面前で自分の意見を述べる風習はほとんどなかったといっていい。欧米で行われていた「スピーチ」をどう訳したらいいのか，福沢諭吉もいろいろ考えただろう。そして，いきついたのが「演説」だった。

たった一人でもできるスピーチは，明治時代，英語会発足当時から，さかんに行われていた。例えば，明治37(1904)年1月に開催された例会では，音楽，対話，暗誦，演劇とともに，演説が行われている。演説のテーマは「時間を守れ」(米沢・高等師範部)と「商業に対する僻見」(小川・商科)だった。場所は大隈大講堂，聴衆は600人であったことを，『早稲田学報』(明治37年2月号)で知ることができる。

同じ年の春の例会では，「露可討」(今橋・商科)のタイトルでスピーチが行われている。朗読，ドラマ，演奏などののち，最後になって，大山郁夫(大政2年)が「英米同情の泉源」の演題でスピーチをし，好評だった。

この時代のスピーチのテーマはは大きく二つに分け

ることができる。ひとつは時代に関係なく若者が関心を寄せているもの，例えば恋愛，民主化の問題など。もうひとつは，時代を反映したもの，例えば日露戦争に関係して，ロシア討つべしとか，国際連盟は世界に平和をもたらすか，などであった。日露戦争も終わり，穏やかな日々がもどってきた。それにつれて，スピーチのテーマも変化している。戦争や世界平和を考えるものが姿を消し，人間の内面に言及したものなどが増えてきた。

明治39(1906)年1月の例会のスピーチのテーマはスミス教授の「公徳心のある人」，マクレガー教授の「批評と提言」だった。

その他，この年の例会のスピチのテーマとしては，「ブッカー・ワシントン」(フィッシャー氏)，「ペリー総督訪日以来の日本」(吉見・大政1年)，「商業主義から見たキリスト教」(石橋・大商2年)などがある。当時，スピーカーはどんな様子で演台に登っていたのだろうか。「早稲田学報」に，ひとつの意見が載せられている。すなわち「スピーチが何のジェスチュアもなく，木偶のごとく突立ち一点張りなのは，いかなるものか」とある。ゲスト・スピーカーはもちろん別だろうが，当時の学生のスピーチの様子をうかがい知ることができる。

明治40(1907)年，英語会例会のスピーカーは，バロン金子。テーマは「日本の教育における基本理念」だった。日露戦争が終わったからといって，日本の周辺に波風が全くなかったわけではない。アメリカでは，大統領令により，日本人労働者の閉め出しが行われており，現地では大きな問題となっていた。この後，明治時代のスピーチの演目を見てみると，「日本教育におけ

る基本理念」「大学生の責任」(服部講師)，「実行家の本領」(大柴亀太郎・大商3年)，「日本人気質」(山田・文科生)などがある。

例会では必ずスピーチが

大正時代を見てみよう。

大正1(1912)年の例会では，横浜在住の著述家，アルメニア人のアプカー夫人がバルカン問題について「近東の苦悶」のタイトルでスピーチをしている。また，大正3(1914)年の例会では，二人のゲスト・スピーカーが演台に立った。ジョルゲンセン氏は「米人の目に映じた欧州戦争」について，また米国法学士の宮崎百十彦氏が「カリフォルニア州における日本人問題」のテーマで話をした。

ちょうどこの年，オーストリア皇太子が暗殺され，第一次世界大戦が始まっている。欧州には暗雲がたちこめていたが，アメリカは局外中立宣言をしている。そんな国際情勢を反映したテーマといえよう。後者は，おそらくアメリカにおける日本人労働者閉め出し問題に言及したものと思われる。

大正5(1916)年4月の英語会大会のスピーチは「私達が最初になすべきこと」(沖中)，「日本芸術の特性」(水上)，「戦争後の経済戦争について」(杉村)だった。

この年，英語会にとって，大切な人を戦争で失った。英国出身，早稲田大学で教鞭を取っていたマクレガー氏だ。明治39(1906)年の英語会例会では，スピーチもしている。義勇兵として参戦したフランスの地で戦死。早稲田大学主催で開かれた追悼会では，英語会幹事長の伊地知純正教授が薫陶を受けた一人として，英語で

弔辞を述べた。

大正6(1917)年3月，英語会の特別会が開かれた。ゲスト・スピーカーが二人登場している。最初は元鉄道院総裁，添田寿一博士で「東西文明の調和」というタイトル，次は勲二等，元朝鮮メソジスト監督のM・C・ハリス氏で，そのテーマは「朝鮮と日本とその将来」だった。

この年，ロシア二月革命が起こり，ニコライ二世が退位宣言に署名。また中立を守っていたアメリカがドイツに宣戦布告するなど，戦争が拡大していった。早稲田大学の中でも，事件が起こっていた。五教官がクビにされたことに抗議し，学内で千人の学生が集会，デモを行っている。山高帽子とドタ靴，独特の歩き方のチャップリンの無声映画が何本もヒットしたのも，この頃のことだ。

大正7(1918)年ドイツが連合国と休戦協定に調印し，四年にわたる第一次世界大戦はやっと終わった。

大正8(1919)年3月，英語会は特別に単独演説会を開いた。招かれたのは，在米16年，雄弁をもって知られた笠井重治氏。テーマは「日本の国際的立場とその運命」だった。

大正9(1920)年11月，英語会大会のスピーチは「京城雑感」(板倉進・大政1年)だった。

大正11(1922)年，総長大隈重信侯が亡くなっている。そして1923(大正12)年関東大震災がおそい，英語会の活動もままならなかった。

大正14(1925)年，岡田首相が学生の演劇を禁止したことにより，主な活動ができなくなった英語会は，それに代わるものとして，関西地方に英語演説旅行を行

うことにした。同じ年，都下男女大学高専英語演説競技大会が，早稲田第一，第二両高等学院主催で開催された。そこに，ソプラノ歌手で戦後「日本のうたごえ」運動の中心として，指導的役割を果たした関鑑子が賛助出演している。

大正15(1926)年になって，第1回の全早稲田英語大会が開催された。第一，第二高等学院と大学の英語会が一堂に会した大会だった。場所はスコットホール。スピーチがそこで行われたが，大学の出口元仁が「支那の将来」のテーマを選んでいる。

同じ年，第2回日本英語会連盟のオラトリカル・コンテストの出場者を決める予選会が行われた。1位，出口元仁(大政1年)，2位，潮田定一(大商2年)，3位，平岡弘男(大商3年)が栄冠を得た。

オラトリカル・デパートメント誕生

時代は昭和へと移る。

昭和2(1927)年，関西学院大学で，第四回全国オラトリカル・コンテストが行われた。早稲田大学からは，平岡弘男が代表として参加，「少年街頭労働者問題」を取り上げてスピーチをした。この年の5月，英語会にドラマティック・デパートメント，エディトリアル・デパートメントとともに，オラトリカル・デパートメントが誕生した。そのため，スピーチへの関心は，ますます高まっていった。

校内オラトリカル・コンテストが6月に行われ，1等・野口勇，2等・青木昇，3等・青柳清が獲得した。第一回が行われることになった早慶オラトリカル・コンテストの予選も行われている。さらに，日本英語会

連盟主催の全国学生オラトリカル・コンテストに，早稲田は野口勇を派遣している。会場は日大講堂だった。

同じ年，第1回早慶オラトリカル・コンテストが慶応大学で開催された。出口元仁，森川貞三，一又正雄，野口勇，篠原二郎の5名が早稲田から派遣されている。また，アメリカのオレゴン大学から，世界討論旅行の3名が来日。国際英語演説大会が朝日新聞社講堂で行われた。日本の代表の一人として，早稲田から出口元仁が参加。テーマは「日本と国際連盟」だった。

昭和3(1928)年，ハワイ大学から学生が来日。学生ホール階上で歓迎会が開かれた。歓迎会の3日後，朝日講堂での日米弁論戦では，青木昇が，列席の外国人も賞嘆するほどの力強いスピーチをした。

夏には，学内のオラトリカル・コンテストが2回開かれた。最初は大学内だけのコンテスト。スピーカーは10名。入選者は，野口勇(高師3年)，青木昇(大商2年)，一又正雄(大法2年)，千葉恒心(高師1年)，太田誉之助(理工1年)だった。2回目は，大学，両学院英語部合同のもの。大学から5名，両学院3名ずつ，計11名のスピーカーだった。入選者は，青木，千葉，出口，一又，太田(以上大学)。

10月，青山学院主催の全国高等専門学校オラトリカル・コンテストに青木昇が出場，2等に入賞した。演題は「世界の新しい希望，太平洋」だった。

11月，第3回英語大会が大隈講堂で行われた。音楽，ドラマなどと並んで，一又正雄が，「昭和維新の目標」で演壇に立っている。やはり11月，早慶英語会オラトリカル・コンテストが大隈小講堂で開催された。それぞれ5名ずつのコンテスタントが熱弁を奮っている。慶

応の演題は「入試の真実」,「文明と人間の幸福」,「慶応と早稲田」,「仕事と遊び」,「思想指導について」だった。早稲田側は「私達の共通の幸福」(出口),「大学生の目標」(千葉),「模倣から独創へ」(太田),「農民と都会人」(一又),「二十世紀の罪」(青木)だった。結果は小差で慶応の勝利となった。

12月,第三回大学英語会連盟主催オラトリカル・コンテストに早稲田は,「農民と都会人」(一又),「私達の国民的忠誠と愛国心」(丸重)を送りこんだ。

全国的に共産党員が検挙されるなど,思想面での締めつけが行われていた。特高(特別高等警察)の拡大があり,全国に設置された年でもある。

大恐慌の到来

昭和4(1929)年,学内では,2回のオラトリカル・コンテストが行われている。2回目,11月1日に行われたコンテストの演題は,「本当の平和はどこから来るのだろうか」(柄沢),「未来の技術者に託されるものは何か」(太田),「百聞は一見にしかず」(衣笠),「未来を受け継ぐ人々のために」(青木),「東支那の鉄道について」(伊藤),「科学が私達に与えるもの」(大久保)だった。1等は太田誉之助,2等は青木昇,3等は久保隆三が獲得している。

ニューヨーク株式市場大暴落があり,世界恐慌が始まった年だった。

世界大恐慌は,昭和5(1930)年の春には日本を直撃した。実施されたばかりの金解禁とあいまって,日本資本主義の危機を招いている。株価,物価は暴落し,貿易も大きく後退した。それに追い打ちをかけるよう

に，この年は豊作で農作物価格が下がり，次の年は凶作という状態から，農業経済も大きく打撃を受けたのだった。

この年，６月の校内英語演説大会の演題は次のとおりだった。「発明の時代」(太田)，「平等ということ」(大久保)「酒について」(片村)，「私達のビジョンの実現」(北村)，「大志を抱け」(大野)，「新しい指導力に期待する」(須見)。入賞者は１等・須見幸吉，２等・大久保隆三，３等・太田誉之助だった。

12月，秋期校内コンテストが大隈小講堂で行われた。「日本の人口問題」「現代資本主義のターニング・ポイント」「環太平洋に平和をもたらす道」「今日のムッソリーニとイタリー」他の演題だった。

昭和６(1931)年，早稲田大学英語会は学生英語会連盟から脱会する。そのため，ハワイへの学生派遣も中止となった。

１月，全早稲田英語会大会開催。音楽，演劇とともに，スピーチも行われた。「有機的進化と社会進化」で須見幸吉が演壇に立っている。この年，部室が新築文学部校舎の一室に移転。商学部校舎裏の長屋の一隅に別れを告げた。

オレーション・クラブができて，活動も活発になってきた。会員も20余名となり，毎月曜日，午後３時から４時半まで，内方先生指導のもと，演説の練習をしている。「これまでは主として名士の演説を暗誦し，それに対して会員が互いに批評などしあったが，２学期からは自分の原稿で，コンテストを行う予定」とある。

校内の三部合同(大学・第一・第二高等学院)のコンテスト(春・秋)の他に，早慶オラトリカルミーティン

グ，全関東，早慶明など外部のコンテストにも積極的に参加していた。

昭和7(1932)年，7月の英語演説会の入賞者と演題は次のとおりだ。1等「経済的非武装」(山田)，2等「私達の義務について」(堀田)，3等「経済的見地から見る満州とモンゴル」(伊藤)，4等「成功への道」(金子)。

12月に行われた英語大会のスピーチは，「早稲田大学英語会のメンバーとして」(堀田)だった。

この年は，第10回オリンピックがロサンジェルスで開催され，早稲田関係では，走幅跳びで南部忠平が銅メダルを，棒高飛びで西田修平が銀メダルを獲得して，大きな話題となった。早稲田大学創立50周年記念式典が行われた年でもある。

軍靴の響き

しかし，日本は戦争への道を歩んでいた。上海事変があり，満州国建国宣言があった。五・一五事件も起きている。

昭和8(1933)年，日本は国際連盟を脱退している。

第8回全早稲田英語大会のスピーチは，伊藤治郎の「人口問題について」だった。また，この年，全早稲田オラトリカル・コンテストに，先輩の故飯島徳次氏夫人より，カップの寄贈があった。そのカップ争奪戦は翌昭和9(1934)年2月に大隈小講堂で行われている。1等は「経済からみたナショナリズムとインターナショナリズム」(尾崎)，2等「若者の弁明」(池上)，3等「世界平和への願い」(松本)だった。

スピーチへの思いが熱くなってきたのだろう。オラトリカル・グループが発足。ケート氏を指導者にむか

えて，希望者を募り，研究を始めた。校外へも，早稲田のオレーターを派遣している。先のオラトリカル・コンテスト3等の松本武雄が都下大学専門学校英語演説選抜大会へ「日本の政治腐敗解決について」を持って参加，また大阪商大語学部主催全国大学高専英語演説大会には，尾崎雄之助を送っている。

11月に行われた第9回全早稲田英語大会でも，演説の部で尾崎が「国際協調」で演壇に上がっている。

東京日比谷映画劇場が50銭均一興行として開場。また東京巨人軍の母体である職業野球大日本東京野球倶楽部が創立されたのも，この年だった。

ここまでの記録の出所は，『早稲田学報』だ。昭和10(1935)年を最後に，『早稲田学報』から「英語会便り」は姿を消し，活動状況を知ることができない。

昭和10年，美濃部達吉の「天皇機関説」が貴族院で攻撃された。これをきっかけにして，軍部，右翼団体が「天皇機関説」反対運動を展開している。その圧力に内閣も屈伏せざるを得ない状態となった。人々の平和が次第に失われていく日々だった。

昭和11(1936)年，第11回全早稲田英語大会のでは，大歳栄一が「現代学生の矛盾」をテーマにスピーチをしている。

戦争中といえども

昭和16(1941)年，戦争が始まった。英語会の活動も思うようにならない。それでも小さな灯をともし続ける会員がいた。

前英語会会長，伊東克己氏(昭和23年卒)の日記から抜粋してみよう。

昭和18(1934)年7月，早大英語会オラトリカル・コンテストが行われている。

昭和20(1945)年，伊地知純正教授にジャッジを依頼して，オラトリカル・コンテストが行われる。1位・中瀬，2位・服山，3位・伊東，4位・松本。

昭和20(1945)年8月15日，戦争が終わった。英語会も少しずつ，復活していく。

昭和22(1947)年，第一回マッカーサー元帥杯全国学生英語弁論大会が開催された。その第2回大会(1948年)に，早稲田は松本政司(昭和25年卒)を送った。「世界平和を求めて」で予選を突破，全国大会へ出場した。松本は翌年昭和24(1949)年の第3回大会にも，予選を経て全国大会に出場している。テーマは「中道路線」だった。

昭和28(1953)年には，ＷＥＳＳ主催のスピーチ・コンテストを始めている。それが全日本(大隈杯)に昇格したのは，21年後の昭和49(1974)年のことになる。

スピーチのタイトルを追ってみると

昭和34(1959)年，会報誌「ＴＨＥ ＡＣＥ」が創刊された。そこに残された記録をたどることで，活動状況を知ることができる。

スピーチ・セクションの新学期の仕事に，レシテイション・コンテストがある。リンカーンのゲティスバーグの演説を，今でもスラスラと言える会員は多いだろう。

この年，四大学(早稲田，慶応，立教，一橋)ジュニア・スピーチ・コンテスト，英文毎日主催全日本，朝日イブニングニュース主催高松宮杯，早稲田英語会主

催全関東学生オラトリカル・コンテスト，四大学(早稲田，慶応，明治，千葉)などが行われている。早稲田内では，春秋2回全早稲田が開催されていた。

昭和35(1960)年以降は「ＴＨＥ ＡＣＥ」に収録されたスピーチ原稿をもとにしていく。

1960年代のスピーチのタイトルを追ってみよう。「演説の仕方について」(東後)「共に考えようではないか」(角田)，「種蒔きと刈り入れ」(角田)，「大学の時計台からの鐘の音」(根岸)，「刈り取る前には蒔かなければならない」(秋葉)，「人間の肖像」(根岸)，「二十世紀のよきサマリア人になろう」(奥田)。この頃は聖書のことばを使ったスピーチが多い。

昭和38(1963)年，アメリカのケネディ大統領暗殺。南ベトナムには，戒厳令がひかれて，ベトナム戦争への道を歩んでいた。「科学時代に世界が忘れているものは何か」(秋葉)，「この私の進むべき道」(石井)，「幹と花」(富川)，「広告活動の効果」(坂本)。

昭和39(1964)年には，東京オリンピックが開催され，どこもかしこも工事中の東京となる。この頃になると，春，秋2回の全早稲田，早慶，四大学，全日本，全関東，その他に横田基地など，コンテストの数も増え，スピーチへの関心は増していった。「もう一人のプロメテウスは罰せられるべきか」(高島)，「学生の特権」(伊東)，「日韓協定」(和田)，「舌はペンよりも強し」(石井)。

関心の高かったスピーチ

昭和40(1965)年に行われたスピーチに関するアンケートをまとめてみると，会員の70パーセントがスピーチに関心を寄せ，50パーセントがスピーチに参加して

スピーチをする会員（昭和53年）

いる。また，コンテストでのスピーチの内容については，抽象的すぎる，焼き直しが多い，個性的でない，という感想が目立つ。テクニックに関しては，能力に大きなギャップがある，でもそれぞれ皆，実力がついてきている，と感じていた。

「彼等のものは私達のもの」(上月)，「教授と水泳」(秋葉)，「誰が荷を背負うのか」(真崎)，「摘発より事故予防を」(厚地)，「心と行為の平和」(久村)，「十二歳ですか？」(松木)，「「希望に向けて耕そう」(秋葉)，「我等，群衆」(真崎)，「自由の代価は何か」(永野)，「家族なくして」(稲福)，「その方がより気高いかどうか」(真崎)，「悪それとも善」(石崎)，「本当は何が欲しいのか」(狛)と続いている。東西六大学など，スピーチ・コンテストも増えてきていた。

昭和44(1969)年には，東大安田講堂事件がテレビで生中継され，人々の目をひきつけた。昭和45(1970)年は衝撃的な三島由紀夫事件のあった年だ。この年から全早稲田が年一回(秋)になっている。

70年から80年へ

1970年代のタイトルは，「どんな歌を歌うのか」(鏡)，「みんな荒廃の森の住人」(成田)，「スウェーデン流儀」

(太田)，「私の教授がそう言ったので」(橋本)，「衣服なき女性」(渡部)，「まずやらなければならないことは」(和田)，「何か眠れるもの」(畔柳)，「何を見つけ出そうとしているのか」(鳥飼)と続く。

昭和47(1972)年，浅間山荘・連合赤軍事件が起こり，世の中を驚かせた。また，国交正常化の日中共同声明に調印，台湾とは外交関係が断絶されることになった。

「方言のひびき」(鈴木)，「武器よさらば」(金田)，「自国を知れ」(臼杵)，「日本のスローガン」(遠田)，「我々次第」(春名)，「共に歩もうとしているのに」(兼田)，「解決への道はあなたの参加があってこそ」(錦織)，「ハンバーグとスキヤキ」(錦織)「金曜日にはワインを」(二木)，「あなた次第」(春名)，「自分に似合う服装」(藤場)，「雄弁家たれ」(春名)，「母がそうしなさいと言ったので」(藤場)，「真の国際人になるには」(我妻)，「スピーチはどこへ行ったのか」(荒井)と続く。

70年代になると，大学主催のスピーチ・コンテストが増えてきている。以前からある東京農大に加えて，白百合女子大，東京女子大，明大，東大その他が主催している。

昭和51(1976)年，ロッキード事件で田中首相が逮捕

スピーチ・コンテスト(昭和55年)

され，国民の政治不信を深めた年だ。

「こうもり」(植松)，「箱からの脱出」(石嶺)，「どうしてもっと頻繁になさないのか」(荒井)，「広がる偏見と性教育」(井澗)，「何が心を開かせるのか」(広田)，「スピーチで語るとはどういうことか」(丸山)，「将来の文明は人類に何をもたらすか」(丸山)，「莫大な情報のただなかで」(松原)，「二流の人々なのか」(曽我)，「生存への道」(笠松)，「人類の最高の勝利に向けて」(坂元)，「文明のあやつり人形」(西川)と続く。昭和54(1979)年にはうさぎ小屋論争があった。昭和55(1980)年には，校内暴力問題が浮上してきている。

1980年代になっても，多くのコンテストへの参加をこなしていた。「チャンスを逃すな」(西川)，「友達同士では？」(真銅)，「負わざるを得ない危険」(辺見)，「自ら下す判断のために」(辺見)，「権利と責任」(汐満)，「ナポレオン的勝利」(小野瀬)，「適切な部門を選べ」(藤原)，「血縁」(大塚)，「E．T.」(尾形)，「縦糸と横糸」(尾形)，「背中で笑っている悪魔」(稲葉)，「心から満足すること」(岡)，「苦しみよ，さようなら」(岡)，「最も大切なことば」(伴)，「真の法治国家」(高杉)と続く。

1990年代，「イン・ヤンの社会」(東方)，「真夏の悪夢」(藤生)，「未完の使命」(遠藤)，「教育への扉」(佐藤)，「見えざる武器」(森山)，「魔法の忠告」(渡部)，「私の最大のショック」(野地)と続く。

英語会創設以来，スピーチはドラマとともに親しまれてきた。100年目のスピーチ・セクションのチーフ，森春菜が「ＴＨＥ ＡＣＥ」33号に書いている。「スピーチは，他活動に比べて，一人で行う部分が多いのですが，91年のスピーチ・セクションのメンンバーはそれ

ぞれ協力し合って，素晴らしいスピーチをつくりあげ，また，その過程で素晴らしい友情をつくりあげていくことができたのであろうとおもいます」。

【小林公子】

第3章

ディスカッション
DISCUSSION

役に立った討論会

英語会には，昔も今も大きな違いはないと思われるさまざまな活動がある。

とっている授業時間との兼ね合いなどから出来上がった仲間による英語の勉強(「グループスタディ」との名前がついた時期も)，住んでいる地域や通学のルートをもとにメンバーがまとまっての交流(「ホームミーティング」と呼ばれた集まり)，そしてドラマ(英語劇)スピーチ，ディベイト，ディスカッションあるいはレクリエーション(合宿)。どれもが意義のある活動であり，それぞれに貴重な体験と得難い思い出をもたらしてくれるということには，どなたも異論がないと思う。しかし「社会に出てから役に立つ」という観点からどれかひとつを選ぶとしたら，筆者はディスカッションを採る(「将来役にたつことだけを考えた“打算的な英語会”にあらず」との声があがるのは十分承知で)。

通常の人々にとっては，英語はコミュニケーションの手段。コミュニケーションとコンピュータが連動した現代，特にインターネットの世界が広がった昨今，英語は「国際共通語」としての役割が一段と高まった。この英語をできるだけ正確な表現と正しい発音で使いこなすということがいっそう求められる時代となって

いる。しかし，いくら流暢なイントネーション，美しい発音を身につけても「語る内容」「相手に語り合いたい人だな，と思わせるだけの論理，知識，教養，etc」を持っていなければなにもならない。

この点で，英語会の「ディスカッション」という活動は身を入れてやれば，本当の意味での「英語遣い」となるための策として，極めて有効である。(「ディベイト」も同等といえるが，こちらの方は，ひとつの問題について賛否両論を十分に準備してからの論戦なので，ディスカッションほど話の展開に広がりがなく，様々な人のいろいろな意見とのやりとり，といった面白さがないように思う)。

筆者は，日本の新聞のアメリカ総局長，その新聞社のアメリカ現地法人の社長として5年間ニューヨークで暮らす間，全米各地でのシンポジウムやセミナーにパネリスト，コーディネーターとして招かれ，また米国のテレビの討論などにも出演した。そして，その都度「こういう時の自分の基礎は，大学時代の英語会のディスカッションにあるな」と痛感した。もちろん，いま当時のノートなどを引っ張り出してみても，我ながら「幼稚な論議なことよ」と恥ずかしくなるようなメモが目にはいるだけで，恐らく話していた英語のレベルも知れていたと思う。しかし，Chairman をやれば，いかに議論をかみ合わせてまとめていくか。討論者の時には，どのようにしてタイミングよく指名を受けて，分かりやすく要領よく自分の論を展開するか。英語会時代に他の活動にも増して積極的に参加したディスカッションで，こうした練習を積んでいたことは間違いない。

「ディスカッション」の流れ

さて，この「ディスカッション」であるが，筆者に与えられていた資料『早稲田大学英語会60年史— 創立記念特集』(早稲田大学英語会広報課編)では，英語会の活動の概略説明の中で「ディスカッション」という言葉が出てくるのは，第3章「昭和初めの隆盛期(昭和元年〜15年頃)」に入ってからである。同特集によれば「英語会が結成」されたのは明治36(1903)年。「英語が話せる日本人は，大変に重宝がられるという時代」に，早稲田大学には「百鬼夜行，実にいろいろの学生がたむろしていて」その中で英語に興味を持つ者たちが集まって，シェイクスピアの「ベニスの商人」を英語劇として上演したのをきっかけに会が発足したとのこと。

英語会の歴史では，明治は「創立の期」であり，続く大正時代は「中興期」と位置づけられる。『60年史』にいわく 英語会における大正時代は，日本の歴史がそうであるように，明治と昭和の掛け橋であった。すなわち明治時代にその萌芽を培った劇やスピーチ等の活動が，内容的に充実し，かつ消化され，次の昭和時代の種子をしっかりと蒔きつけたのである。

どうやら明治，大正期の英語会の活動はドラマとスピーチが中心だったようで，当時の先輩諸氏の寄稿文の中にも「英会話を指導していただいた」といった表現は出てきても，いわゆるディスカッションにあたる活動を思わせるものは見当たらない。

そして昭和。再び『60年史』を引用させていただく——昭和時代に入ると，第一次世界大戦時代の好景気は一転して，社会的不安も高まって，早稲田大学においても学生の思想運動は激しさの度を加え，さらに英語

会においてもこの世相を反映して，ディスカッションのタイトルには「封建思想に対する自由主義，社会主義の問題」などが多く取り上げられた――

察するに，世の中が騒がしくなり，早稲田大学も談論風発という状況で，英語会会員の間でも日常会話や劇だけでなく「時代」や「社会」あるいは「世界」について英語で議論をしようという空気が強まっていったのではないだろうか。引用を続ける――昭和７，８年は不景気のどん底となり就職難は深刻な問題となった。そして五・一五事件，二・二六事件と軍国調も急激に高まり，昭和15年には日独伊三国軍事同盟が締結されるなど世界の歴史は再び戦争へと向かっていった。そのような情勢の下で。英語会におけるディスカッションのタイトルも「米英の圧迫にどう対処するか」などに変わっていった――

このような状況にありながら『60年史』によれば，英語会の活動は「昭和８年から14年頃には一つの黄金時代を現出した」。組織がしっかりし，予算には「比較的余裕があり」，ドラマやスピーチはあげて猛練習，会話のレッスンも盛んになり，そしてディスカッションは「平常」の活動となった。また，後にディスカッション活動の一環ともなった「関西遠征」が始まったのも昭和10年，この黄金時代のことだが，関西遠征については後に触れる。

黄金時代の後にくるのが「戦中戦後の混乱時代（昭和15～24年頃）」。英語が“敵の言葉”とされる中，英語会の活動も縮小を余儀なくされていった。「敵を知るために先ずその言葉である英語を学ぼう」というスローガンで会員を募ったものの，言論統制，学徒出陣，食糧不

足といった世の中で「思い切り羽を伸ばし制約された青春を謳歌することができたのは，何といっても野尻湖での2週間にわたる合宿であった」と『60年史』は記している。昭和16(1941)年の合宿のスケジュールは，午前中が「グループスタディ別ディスカッション」で勉強，午後は水泳大会やボートレース，妙高登山あるいは外人村訪問といったレクリエーションだった。午前中のディスカッションでは，どんなテーマが論じられたのであろうか，当時の世の中を思うにつけ興味をそそるところである。

やがて，この合宿も昭和19(1944)年を最後に中止となり，英語会は，徴兵年齢に達していなかった少ない数の学生が，あらゆる面でたいへん苦しい状況の中，守り通して終戦を迎える。そして終戦直後の混乱期の中で，英語会は“立ち直り”が極めて早く，昭和21(1946)年にはレシテイション・コンテストや英語劇公演が行われ，翌22年にディベイテング・コンテストが開催されている。ちなみにディベイトのテーマは「家族制度を廃止すべきか」と「ローマ字を採用すべきか」であった。

英語会活動の復活

日本の戦後復興が進む中，サンフランシスコ平和条約が締結された昭和26(1951)年前後から英語会の活動も「戦前の隆盛」を取り戻し，それをしのぐ発展への道を歩み出す。『60年史』によると，英語劇が早・慶・立・一橋の「四大学英語劇コンテスト」として復活，ＩＳＡ主催のディベイティング・コンテストに参加したり，野尻湖合宿や関西遠征も復活するといった中で，

ディスカッションも「慶応や立教などとの間で年を追って活発なものになっていった」と書かれている。

そして，昭和30(1955)年代にはいると「ディスカッションの面では，定期的な四大学のディスカッションがあり，対内，対外で月３回ぐらい行われていた。タイトルは時局問題が主に取り上げられた」。時事問題がディスカッションのテーマとなるのは，いつの時代も変わらないようで，もし英語会が毎年，ディスカッションの議題を記録し保存していたら，時代の流れ，世の動きを知る貴重な資料となったであろう。

筆者に届けられた資料のひとつに，昭和36(1961)年卒の福田浩人氏が本誌編集部に送られた「世相を反映するＥＳＳのディスカッション・タイトル」というメモ＝別掲参照＝がある。福田氏は，筆者の記憶が正しければ，昭和34年度のディスカッション・セクションのチーフを務められた。メモは，氏が大学１年生から４年間，自分が参加したディスカッションの相手大学とタイトルを記録したものらしく，「学生時代の備忘録から採りました。結構むずかしいサブジェクトをこなすために〔世界週報〕や〔外交時報〕を読んだ昔が懐かしく思われます」との付記がある。

また30年代に入ると，英語会はその組織を大幅に強化充実，幹事長以下の役員およびドラマ，スピーチなどのセクションが設けられた。「グループスタディ」という方式が発足したのも昭和31年という。会員数が急速に増えて「従来の勉強方法では運営困難となって，時間割制によるグループスタディ制ができ，この制度の下で従来のレッスンのように漠然としたものではなく，内容にアカデミズムを取り入れた」と『60年史』にある。

400～500人の新入会員を抱え，学内外の講師，先輩，上級生がリーダーになって，なるべく多くの会員にできるだけ納得のいく活動を，というのが狙いのグループスタディ。筆者が4年間を過ごした時期には，内容はたいへんバラエティに富んでおり，時事問題を討論するグループもかなりあった。自分でも二つのグループスタディを主宰したが，ひとつは英詩研究でもうひとつが時事問題のディスカッションだったと記憶する。

ところで，ここまで時代を追って，昭和の30年代，英語会が組織の面でも現在の形の基礎を築くところまでの間の「ディスカッション活動」を見てきたが，では「英語会で言うディスカッション」とは何なのか。明治から平成の今日まで，時代によって多少イメージに差があるかもしれない。また，時代によってドラマやスピーチ，ディベイトなど他の活動との比重が異なるかもしれない。

ディスカッション活動

筆者の手元に「E．S．S．のすべて」という緑色の葉書をひと回り大きくしたほどの小冊子がある。1962年のパブリック・リレーションズ・セクションの手になるもので，新入生会員の募集のために作成したためか，中身は英文ではなく日本語。英語会の構成，活動内容などを説明した中で，ディスカッションについては，概略以下のように書いている。

――ディスカッションは，1年間の活動を通じてＥＳＳでは主要な活動の一つで，その目的は，会員相互間および他の大学のＥＳＳとの親睦を深めることと同時に，ディスカッションを通じて大学生としての知性を

も高めることです。現在ディスカッションには，メイン，ジュニア，オールワセダの３通りがあります。メイン・ディスカッションは全会員を対象に他の大学のＥＳＳとの間で行われるもので，タイトルは貿易自由化，憲法問題，ベルリン問題など比較的高度のものが取り上げられます。ジュニアは，１年生には初めからメイン・ディスカッションに参加するのが難しいので，１，２年生を対象として比較的取りつき易い問題をテーマに行われるものです。最後のオールワセダは全会員を対象に，英語会全体で勉強することを目的として，国語国字問題とか中共問題など１，２年生でも取り組むことができるタイトルを選びます。これらのディスカッションは全部で年に20回くらいあります。また６月中旬から下旬には代表が関西に遠征して，多くの大学とディスカッションをし，また関西方面からも多くの大学の代表が早稲田とのディスカッションに遠征して来ます――

ここに記されている関西遠征については，先に「戦前の黄金時代の昭和10年に始まった」と書いたが，実はこの時の遠征はスピーチ活動の一端であった。再び『60年史』を引用すると，関西のＯＢの発案で具体化した関西遠征は「神戸商大，大阪商大，同志社大を相手校として，スピーチコンテストで優秀な成績をおさめた７～８名だけが参加を許された」。この第1回遠征の後がどのような形で続いたか定かでないが，やがて戦争で「それどころではない」状況となった。

そして再開されたのが昭和31(1956)年のことという。「この年は修学旅行のような形式で４年生が遠征して，京大，同志社，阪大，神戸大，大阪市大，神戸女学院，

関西学院等とディスカッションを行い交歓した。その頃から毎年，関西学院や同志社等も東京へ遠征して来るようになった」とあるから，戦後復活してからは，関西遠征はディスカッション活動の一環となった。

ところで，この関西遠征，筆者のおぼろげな記憶によると，昭和35年に“ひとつの改革”があった。

復活してからの関西遠征は「修学旅行のような」という表現からも分かる通り，毎年４年生が行き，関西の各校との交流と同時に，関西在住の稲門会員とも懇談，就職活動の一環にも，との狙いもあったらしい。

ところが，筆者が大学２年になった年，昭和35年には「遠征は関西の各校とのディスカッションを通じて交流を深め，研鑽を積むのがあるべき姿。したがって，英語会の運営にあたる３年生が遠征メンバーであるのが本来。４年生は就職活動に必要なら，それは英語会活動とは切り離して行うべき」との“正論”から，関西遠征は以後３年生が行くこととなった。

それまで毎年４年生が行っていたものを，３年生にするということは，ある一学年が関西遠征を見送るという犠牲を払わなければならない。実は，この「ある意

関西遠征・関西学院大学にて（昭和４９年）

味での正しい姿」にすることを決めたのは，筆者が早稲田大学の新入生として英語会に入会した昭和34年の３年生(幹事長，居城俊夫氏)だったようだ。つまり，その３年生は自分たちが犠牲になったわけだ。そして，翌35年から３年生が遠征することになったが，この年の４年生の間ではいろいろ議論があったとも聞いた。

関西遠征の経験

著者は，昭和35年(２年生の代表の一人として)と36年に関西遠征を経験しているが，戸棚の奥から古い資料を探し出してみたところ，副幹事長を務めていた36年の遠征には25人(２年生２人を含む)が参加。６月23日の夜行列車で24日に大阪入りし，神戸女学院，立命館，同志社，神戸大，関西学院と回って27日の夜行で28日の朝，東京に帰っている。ちなみに当時，東京 大阪間は「月光」とか「彗星」という急行列車で約11時間。料金は往復2,300円(急行券，座席指定券こみ)であった。

ディスカッションのタイトルを見ると，神戸女学院とは「レジャーブーム」となっている。振り返ってみれば，ＥＳＳを中心に学生生活を存分に楽しんだと思うが「レジャーブーム」という言葉と自分の学生時代が必ずしもぴったり重ならないような気がする。女学院のキャンパスの美しさは，覚えているが，ディスカッションの内容は全く記憶にない。残りの４校とのタイトルは「中共問題」。「中共」という言葉もいまや“死語”となったが，世界がケネディ，ドゴール，フルシチョフ，周恩来で東西に向かい合いネルー，チトー，ナセル，カストロで南北に揺れていた当時，共産主義中国の動向は学生が議論するテーマとしては，恰好のものだっ

たであろう。「国連と二つの中国，それと日本」とか「日中関係のあり方，政治，経済」といったアジェンダを組み合わせて，各校を回って議論している。

ところで，このときの関西遠征の費用は，既述の旅費のほか，宿泊代（４泊で2,200円）など一人当たり6,425円となっている。このうち，参加者の自己負担は2,250円。あとは会の予算から20,000円を出し，残りはＯＢからのドネーションなどで賄っている。いずれにしても，ディスカッションのテーマといい，かかった費用といい，まさに隔世の感である。

ついでながら，この年，昭和36年の英語会の全体予算は，収入が738,320円で支出が627,450円となっている。支出項目の中の最大は「ドラマ」で164,500円。ディスカッション・セクションには30,000円が割り当てられている。このうち20,000円は関西遠征費用だから，平常の活動経費は10,000円。

そして活動記録をみると，オール・ワセダのディスカッションが５月，６月，10月と３回。タイトルは「国語」「中国」「国連」。メインは６月に明治大と「小選挙区」について。10月に慶応大と２回，国連と日米関係をテーマに。11月は明治大と明治学院大と日米関係と憲法９条問題について。ジュニア・ディスカッションは６月２回と10，11月各１回の４回，立教大や日本女子大，青山学院，慶応大などと開かれ，日本の観光産業や高度経済成長あるいは朝鮮半島問題，ソ連の核実験再開問題などを論議している。このほかに，他の大学での学園祭などの催しの中の公開討論会にも６回，各２～４人の代表を送って，ディスカッションに参加している。以上は，英語会誌「THE ACE」によるが，この会

国際情勢ディスカッション(昭和55年)

誌が発刊されたのは，1959年，筆者が英語会の一員となった年である。いま，手元には卒業した年，63年発行の第5号までがある。先ほど来，しばしば引用させてもらっている『60年史』は，会誌第4号に掲載された労作である。

この「THE ACE '62」の巻末に3年生有志座談会として「この一年をふりかえる」企画が載っている。中に以下のようなやり取りがある。

「レディスカッションだけど，あれはなくした方がいいと思うんだ」という幹事長(当時)君の発言に，女性が応じていう「あれはなくした方がいいと思うわ。別に今

ディスカッション風景(昭和50年)

のレベルだったら皆うまくやっていけるんじゃないかしら」。

女性だけに参加者を限ったレイディズのためのディスカッション(これをレディスカッションという造語にした？)があったらしいが，これも時代のなせるものだったのでしょうか。

そして，まさに「時代のなせるもの」というべきか，THE ACE 各号の活動報告を見ると，90年代に入って「ディスカッション」という活動は姿を消し，「ディベイト」が取って代わっている。近年英語会の活動はドラマ以外はスピーチ・コンテストとディベイト・トーナメントで成り立っているようである。

(付記)筆者は，この記念誌編集に初めから携わっていたわけではなく，急遽「ディスカッション」についてまとめるように，と依頼されたもので，全体の構成も知らないままに，限られた資料をもとに，この一文を綴った。したがって「ディスカッションについて書くなら触れるべき事項がたくさん欠落している」のではないか，と危惧するとともに，取材する時間もない状況で書くしかなかったことを残念に思っている。

世相を反映するディスカッション・タイトル

(ジュニアは1，2年生のみ)

年・月	相手校	タイトル
昭和32・10	立教大学	人種差別
〃 10	日本女子大学	道徳教育
〃 11	慶応大学ジュニア	機械文明と人間性
〃 12	慶応大学	軍縮
昭和33・4	関西学院大学	？

〃	5	同志社大学	?
〃	5	日本女子大学	友情
〃	6	慶応大学ジュニア	中共と日本の関係
〃	10	慶応大学	日本の外交政策
〃	〃	中央大学	警察と社会
〃	11	明治大学ジュニア	警職法
昭和33・12		日本女子大学ジュニア	天皇制の是非
〃	12	慶応大学ジュニア	安保条約
昭和34・4		同志社大学	安保条約と自衛隊
〃	4	関西学院大学	貿易と市場開発
〃	5	慶応大医学部	恋愛結婚と見合結婚
〃	6	明治大学	二つのドイツ
〃	6	各国留学生	?
〃	6	明治学院大学	日本語の美くしさ
〃	7	慶応大学	冷戦の中の平和
〃	9	東京女子大学	女子大制度の是非
〃	10	立命館大学	安保改訂
〃	11	三田祭パネルディスカッション	アイゼンハワー・フルシチョフのキャンプデービット会談後の国際情勢
〃	11	早稲田祭オープンディスカッション(9校招待)	A．政治：社会党の将来　B．経済：日本の観光資源　C．宗教は日本で若者の背骨となり得るか
〃	12	日本女子大学	社会保障制度
昭和35・11		上智大学	国連における中共の承認
〃	11	早稲田祭オープンディスカッション	A．政治：中立国の役割　B．経済：二重構造

〃　12　慶応大学　　総選挙における民主党大敗の意義

〃　12　日本女子大学　　社会保障制度

【奥田斐規】

関西遠征・戦後第１号の旅

再開のきっかけを作ってくださったのは，大阪在住の先輩西前文吾さんだった。昭和32年の某日，ひょっこり部屋にお見得になって昔ばなしに花を咲かせ，関西遠征の懐古談をひとしきり。資金の手立てのない私たちに「有力先輩に頭を下げてこい。われわれも昔やったのだから」とそそのかしてくださった。

資金調達，テーマ選び，京大，同志社，関学など六つの大学との交渉に半年かけて準備した。有力企業の諸先輩の何とやさしかったことか。ツメエリ姿の，半ばおずおずと自信なげな学生たちを社内に喜んで迎え入れてくれて，ESの活動ぶりなどを尋ねられ，揚げ句にポケット・マネーから大枚を寄付してくださった。感激居士の某君などは思わず涙したものだった。

みな貧しかった。学生のアルバイトは，ニコヨン（日当240円）の肉体労働か家庭教師のささやかな収入だけ，諸先輩の浄財なしには関西遠征はとうてい実現しなかった。

資金事情からメンバーは４年生12名に絞った。今ごろの４年生は就職活動で振り回わされて余裕などないはず。当時の就職難はひどかった。しかし，そうガツガツした連中がいなかったように記憶する。それと討論の実力ではさすが４年生だったこともある。

大阪寺町の安宿をベースに各大学を訪れ，実のある討論，交流をした。実力でいえば関西学院ＥＳが優秀だった。当時，同志社は関西の“ワセダ”といったらしいが，英語力，テーマの突っ込みはいま一つだった。神戸女学院のキャンパスの美しさ，女子大生のかわいらしさも一驚だったのを覚えている。

安宿のムギメシに少々へきえきしだしたある晩，大阪・生駒時計店社長生駒吉之助大先輩が一流の料亭にわれわれを招待してくださった。これまで全員が口にしたこともない山海の珍味を前にだれもが絶句した。今の飽食の時代に育った世代には想像もつかないだろう。ご老体の生駒氏は大隈重信，大山郁夫との触れ合いを目を輝かして孫のようなわれわれに語ってくれた。そこに異次元の早稲田の世界が展開，しばし貧しい学生生活の日常性から解放された一瞬だった。

その翌年だったか，生駒先輩が亡くな

られ，西前さんも今はない。お二人の遺志をつごうと，昭和33年以降，大阪勤務の高鍬（日立製作所）畝田谷（日航）田崎（神戸新聞）らが後輩たち遠征グループを梅田の焼肉屋で歓迎した。それこそペイペイの安月給取りらが集めた，ささやかな浄財だったから，後輩たちがタラ腹食べたかは知らない。

【田崎義信●昭和33年卒業】

第4章

ディベイト

DEBATE

なじみのなかったディベイト

ディベイトという言葉が日本で使われたのはいつ頃だったのだろう。

夏目漱石が二年あまりの英国留学から帰国した明治36(1903)年の『英語世界』5月号,「東京高等商業学校一橋会　第9回英語会」の記事に"ディベイト"の文字を見ることができる。当時の英語会は英語大会といったようなイベントの意味で使われている。その大会でディベイトが行われていた。テーマは「女性の頭脳は男性に比べて劣っているだろうか」。そういう時代だった。

WESSにディベイティング・セクションが生まれたのは,昭和37(1962)年だった。しかし,英語会とディベイトの関係は,昭和初期の日米交流と重なっている。

昭和3(1928)年,ハワイ大学からディベイティング・チームが来日した。が,当時受入れ側である東京の各大学において,ディベイトはまだよく知られていなかったし,英語を母国語とする学生と果たしてそれができるだろうかという懸念があったため,スピーチ大会に変更したという歴史がある。

『早稲田学報』第397号(1928年3月10日号)「英語会便り」に次の記事を見ることができる。「本会弁論部員は学年試験を控えて既報の如く,今春来朝のハワイ大学

弁論部選手と対抗演説をなす為目下猛練習中です。予選は3月25日頃の予定です」。

さらに『早稲田学報』第400号(1928年6月10日号)「英語会便り」には，「既報の対ハワイ大学日米弁論戦日本側選手予選会では，本会の選手，青木昇君が見事入選されて，5月28日夜，朝日講堂で行われる日米弁論戦には，日本側選手として栄ある立場をされる事になりました」とある。

ディベイトの魅力

戦後さかんになったもののひとつに，ディスカッションがあげられる。と言うのも，アメリカ占領軍の文化政策担当(ＣＩ＆Ｅ)が文教政策をコントロールすることになるのだが，デモクラシーを日本国民に浸透させる一つの方法として，パーラメンタリープロシージュア(議会的手続き)を持ちこんだからだ。小学校からクラス委員の選挙制を奨励し，小，中，高とも，立候補者を出して，演説をするというシステムも採用された。

議会は，建設的な討議の場だ。賛成派の意見，反対派の意見を充分に考慮し，妥協点を探り出し，結論を出す。ＣＩ＆Ｅは，日米学生会議でこの民主的な議論の方法を学生に実践させることにした。方法論を伝授された学生たちは，会議の運営を考えたディスカッションができるようになった。

本場アメリカでは，ディスカッションとディベイトが同じ比重で存在していたが，日本の場合，ディスカッションを高度化していくと，ディベイトになる，という感触を得る人が多かった。“結論を出すため”のデ

ィスカッションでは満たされないものがディベイトにはあった。賛成派，反対派，両方の立場で意見を述べられるよう準備するので，ゲームのような面白さがある。相手の立場を理解することによって，コミュニケーションも成立する。ディスカッションに手を染めた人は，次第にディベイトにひかれていくようになった。

昭和22(1947)年，幹事長，住野喜正が提案した第1回ディベイティング・コンテストが行われている。各部対抗で，テーマは「家族制度を廃止すべきか」だった。決勝では，「ローマ字を採用すべきか」で，ガールズ・セクションが第二高等学院を破り，優勝した。

昭和25(1950)年，この年に始まったＩＳＡ主催ディベイティング・コンテストへの参加を決める。

昭和30(1955)年，日英ディベイティグ・コンテストが慶応三田校で行われている。日本からは早慶両校，英国からはケンブリッジ，オックスフォード両校の連合軍。テーマは「科学は人間に幸福をもたらしたか否か」だった。この頃，ディベイトはさかんになってきていた。ＩＳＡで大和田龍夫や望月泰道が活躍，２位のことが多かった。

ディベイト・セクションの誕生

しかしその後，早稲田の英語会においては，ディベイティング・コンテストはあまり認められていなかった。昭和34(1959)年，対外的なコンテストの参加は，全関東(「二院制か一院制か」)のみで，あとはホームミーティング対抗(「日本の中立について」)があるとはいえ，ディベイトに親しむ機会は少なかった。昭和35(1960)年も同じような状況だった。ＩＳＡ「貿易自由

化」，ホームミーティング「中共を認めるべきか」のテーマで行われている。

昭和36(1961)年の春，明るいニュースに部室はわいた。ＩＳＡ全日本１位を獲得したのだ。テーマは「現在の国連安全保障理事会の機構について」(東後，奥田，大駒，安斉，小原，垣見)だった。

さらに発展させたい，とコミッティはディベイティング・セクションを発足させる。それが昭和37(1962)年だった。ちょうどロバート・ケネディ米司法長官が早稲田大学で講演をし，東京都の人口が１千万人を突破，世界最初の１千万都市となった年だ。

初代ディベイティング・セクションのチーフ，島田昌明(昭和39年卒)が，「ＴＨＥ ＡＣＥ」4号でいきさつを記している。

設立の目的は，まず第一に，英語会のメンバー，特に1，2年生にディベイトを浸透させることだった。第二に，５月と９月に行われているＩＳＡ主催のディベイティング・コンテストに優勝するという願いをかなえたかった。そのためには，ディベイトの名手を育てなければならない。英語会として，本腰を入れてやりたかった。

ディベイトには，充分な準備が必要だ。ディベイターを送り出すためには，１，２年生の多大なサポートが欠かせない。それは，ホームミーティング間のディベイトで充分経験ずみだ。賛成派，反対派，二つの主張を完璧なものにしなければならないが，それがかなり大変な仕事だ。セクションを新設することで，大きなサポートを期待した。

知的なゲーム

一年後，昭和38(1963)年のディベイトはどうなっただろう。次期チーフの高梨勝也が「ＴＨＥ ＡＣＥ」5号に記している。

期待されていた大きなサポートは，セクションの内外とも思い通りには得られなかった。他校には大勢のディベイターがいるのに，早稲田の場合，コンテストに参加したメンバーは，たった4，5人というさみしさだった。が，一度，"知的なゲーム"ディベイトにのめりこんでみると，その楽しさが分かる。準備には一か月以上の日数をかけるのだが，ひとつのことに没頭するのは，それなりの楽しさがあるものだ。

こんなエピソードが記されていた。「ディベイトの準備のため，オールナイト喫茶で夜明けまでを過ごした。喫茶店を出てはみたが，行き場所がない。そこで皆で山の手線に乗って眠った。電車の中から見た朝焼け。あれほどにきれいな朝の光は今まで見たことがなかった」。青春まっただ中，うらやましいような経験をしている。

この年，ＴＩＤＬ(東京インターカレッジエイト・ディベイト・リーグ)の第1回目が開催された。「堕胎問題」が取り上げられている。ホームミーティング間は，「国連安全保障理事会の拒否権について」だった。

ハウ・ツー・ディベイトも

第18回オリンピック東京大会が開かれた昭和39(1964)年。世界的にもさまざまな出来事のあった年だった。アメリカのベトナム北爆，インドのネール首相の死，ソ連のフルシチョフ首相の引退，さらには中国

の最初の核実験が行われた。

この年，1964年になると大きなディベイト・コンテストは年に三回行われるようになった。５月，６月，９月，ＩＳＡとＴＩＤＬが主催していた。それとすでに6回目をむかえるホーム・ミーティング間のディベイトもある。ＩＳＡ全日本5人制「尊属殺人に重刑が科せられているのは是か非か」で１位(山内・永井・青木(正)・小林・村越・石井・小倉・小泉)を獲得したこともあり，次第にディベイトは英語会のメンバーの間に浸透していった。ホームミーティング間は，「煙草の是非」で行われている。

ディベイト・セクションのメンバーは，２年生が主となり，データ集め，資料探しに奔走した。いずれの場合も一か月の準備期間を設けるようにした。ホームミーティング間のディベイトでは，資料集めに大きな役割を担っていた１年生の力も見逃せない。さらにディベイト・セクションのメンバーは，「ハウ・ツー・ディベイト」も学ぶことにした。資料集めと同時にテクニック・ブックも読んでいる。

昭和40(1965)年のディベイトのテーマには「中国の国連加盟を認めるべきか」(ＴＩＤＬ)，「煙草専売法は廃止すべきか」(ＩＳＡ)，「日本における長期国債のフロートトについて」(全関東とホームミーティング)などが取り上げられている。

昭和40(1965)に行われた英語会内のアンケート調査では，80パーセント以上のメンバーが，ディベイトに興味を持っていることが明らかになった。

ディベイト風景(昭和49年)

時間が足りない

しかし，ディベイト・コンテストに参加するためには，準備などにかなりのエネルギーを必要とする。そのため，“ディベイトの普及，良きディベイターの育成”をその年の目標に掲げながら，昭和41(1966)年には，２年生が試験のため，ＩＳＡ主催の全日本に参加できないという事態も生まれた。また，ＴＩＤＬチャンピオンシップスにも，試験のため，２年生の参加は数人にとどまった。

新しいディベイト・コンテストに参加したいと思っても，過密スケジュールのため，かなわない。その意味でも，ホームミーティング間のディベイトの重要性が強調された。次の年のディベイトへの力を養うには，かっこうの場に違いない。

結局，昭和41(1966)年，充分な準備をして参加できたのは，全関東だけだった，とディベイトのチーフ，山下勝博が「ＴＨＥ ＡＣＥ」８号に記している。ＴＩＤＬは「国連の再編成」，ホームミーティング間は，「公務員のストライキ権について」で行われている。

英語力と社会的関心

昭和42(1967)年，ディベイトでの快挙があった。山本と深沢がＴＩＤＬ「自衛隊は国軍に再編成されるべきか」と全日本「100円を新１円にデノミすべきか」の両方で1位を獲得したのだ。深沢は卒業後，アメリカに留学したが，そこでもディベイターとして活躍した。全関東とホームミーティング間は，「米の食管法は廃止すべきか」で行われている。第一次資本自由化が行われ，テレビの普及台数が2000万台を突破し，アセアン結成が成った年だった。

昭和43(1968)年，ディベイトのチーフ，太田陽太郎が「ＴＨＥ ＡＣＥ」10号に書いている。「ディベイトの目的は二つ。ひとつは英語力の向上，もうひとつは社会的関心を高めること」。その通りで，ディベイトのテーマを追うと，その時々の世情が思い起こされる。

この年，ＴＩＤＬ「沖縄返還問題」で１位(太田・真崎)を得た。ハワイ大学との交流の復活があり，昭和５(1930)年以来，38年ぶりにハワイ大学のディベイト・チームが来日。「南ベトナム問題は国連に委ねられるべきか」で友好を深めた。ＩＳＡ全日本は，「日米安保条約は廃止すべきか」だった。

成長期を迎えたディベイト

ディベイトへの関心は次第に高くなっていった。昭和44(1969)年には，ホームミーティング間のディベイトにジュニアの部が加えられ，１年生にとっても，ディベイトが身近かに感じられるようになった。「国連安全保障理事会の拒否権」「国や地方自治体が催すギャンブルについて」(ＩＳＡ)「教科書検定」(ＴＩＤＬ)などが

取り上げられている。

機動隊が大学へ何度も出動した年だった。東大安田講堂事件があり，早稲田大学にも，９月３日，機動隊導入，大隈講堂，第二学生会館の封鎖を解除，82人が逮捕という事態となった。そのため，２つのディベイトが中止となっている。各地でゲリラ闘争があり，騒然とした世情だった。

昭和45(1970)年，大阪でアジア初の日本万国博覧会が開催され，のべ６千４百万の人々が集った。秋には，三島由起夫が市谷の陸上自衛隊で割腹自殺をはかるという衝撃的な事件が起き，ニュースは全世界を駆けめぐった。また，日米安保条約が自動延長され，学生運動も次第に勢いを失っていった。

再び来日したハワイ大学とのディベイトは，「アメリカはアジアから戦闘部隊を撤退させるべきか」で行われている。ＴＩＤＬは「日本は中国と国交を回復すべきか」，ＩＳＡ全日本は「日本の非武装政策の是非について」，ＩＥＣ全日本は「少年法適用は18才以下でいいか」(１位・酒井・油田)，全早稲田(ＷＥＳＳ対ＷＥＳＡ)は

ディベイト・コンテスト(昭和５０年)

「二国間ベースでの経済援助は国連を介すべきか」でそれぞれ行われた。

ますます盛んになったディベイト

昭和46(1971)年，ＫＵＥＬ(関東大学英語会連盟) 5人制のディベイトが新設されている。この年，ＩＥＣ全日本「日本語の文字をローマ字に改めよ」で1位(松岡・小鯖)。

昭和46(1971)年のテーマは「円の切り上げについて」(ＴＩＤＬ)，「日本の国防軍事力増強について」「領海内の資源は国連を通して操作されるべきか」(全早稲田)だった。

昭和47(1972)年，「国連安全保障理事会の拒否権は廃止すべきか」(ＴＩＤＬ，１位・池上・浜田)，「公務員にストをする権利はあるか」(ＪＵＥＬ)，「日本の国連安全保障委員会の常任理事国昇格について」(上智大学杯・１位松岡・三上)。

その後のディベイトの主なテーマを拾ってみると「衆議院選挙の今後の方向・一人代表制及び比例代表制」「核実験禁止」「日米安保」(ＴＩＤＬ)(昭和48)，「経済的理由に基づいた中絶を法的に認めている制度を廃止すべきか」「米国の東アジアからの軍事援助の総引き揚げについて」「物価賃金統制」(ＴＩＤＬ)(昭和47)などがある。沖縄返還協定にからんで，安保問題が取り上げられることが多かった。

昭和50(1975)年，全日本５人制「日本の核兵器保有問題」で１位(栗原・宮本・大森・鳥宮・沼尻)を獲得している。ＴＩＤＬは「国連による食糧備蓄」だった。

昭和51(1976)年には，ＫＵＥＬ5人制「日本は韓国へ

活発な討論(昭和53年)

の経済的援助を中止すべきか」に1位(里見・荒井・前田・三宅・山田)。また全日本5人制「文部省による教科書検定制度は廃止すべきか」でも1位(里見・疋田・大塚・下島・山田)を獲得。さらに上智大招待ディベイト「北朝鮮の認識」にも1位(清水・北田)という活躍ぶりだった。ロッキード事件で日本中が揺れていた頃だった。

その後の主なテーマは,「中国との友好協定批准について」「日本の金融機構」(ＴＩＤＬ)(昭和52),「原子力発電所は是か非か」「輸入規制を撤廃すべきか」(ＴＩＤＬ)(昭和53)などがある。

昭和54(1979)年,全日本5人制「衆議院の比例代表制選挙について」で1位(近藤・駒形・野口・大塚・山本)。ＴＩＤＬは「総合的国防政策の拡充」だった。この年(昭和54)新たに全早稲田伊東杯が設けられている。

1980年代の主なテーマは,「穀物豆類に係わる制度改正の必要性について」「税制改革案の採択」(ＴＩＤＬ)(昭和55),「高齢者雇用と公的年金に係わる雇用慣行の改訂方向」「高齢者向き社会福祉制度の改革」(ＴＩＤＬ)(昭和56),「摩擦回避に向けての多角化政策」(ＴＩＤＬ)(昭和57),「消費者保護法の強化にについて」「国土開発の政策変更」(ＴＩＤＬ)(昭和58),「雇用機会及び労働

災害に係わる労働法の改正について」「個人所得税と物品税の引き上げ」「直接税引き上げの是非」「日本国民の保護政策」(ＴＩＤＬ)(昭和59)など。

そして，昭和60(1985)年，ＫＵＥＬ5人制「航空，自動車，鉄道に係わる政府規制の緩和について」で１位(小平・星野・松本・沢登・吉村)を得た。ＴＩＤＬは「国内公共交通手段への国家介入縮小」で行われた。

昭和61(1986)年，チェルノブイリ原発爆発事故で，ウクライナ，白ロシアなどはもちろん，欧州全体に強い放射能汚染をもたらした。またエイズ問題も大きな波紋を生んだ。ＴＩＤＬは「報道の自由と個人の市民権侵害」で行われた。

1989年には，年号が平成へと変わっている。

そしてこれからも

平成２(1990)年，全日本２人制は「日本の軍事力強化の是非」，平成３(1991)年，ＫＵＥＬ２人制「日本は軍事的潜在力を高めるプログラムを中止すべきか」で１位(土屋・山口)。平成４(1992)年，全日本２人制「日本の不公正な商取引規制の緩和について」で１位(上野・甲斐)を得た。

ディベイトの魅力は何だろう。平成３(1991)年度のディベイト・セクション，土屋喜嗣が「ＴＨＥ ＡＣＥ」33号に書いている。「図書館や学館の地下にこもり，オタッキーなディベイト用語をならべ，そして冷静な判断と称してキツイことをズバズバと言い切る。ワード・エコノミーを追求して，レトリックを切り捨てる。一見してこんな印象を持たれがちなディベイト・セクションは，まさに合理的追求者の集団と見られること

が多いはずです。しかし，まあ，入ってしまえばそこは義理と人情の世界も(それなりに)あるし，ディベイトという競技自体にも突き詰めていけば様式美のようなものもあるということもわかりました。色々な人とペアを組んでディベイトをすると，その人のくせというか，人間味のようなものに接することができ，ますます"ディベイトがやめられない"と思ったものでした」。

【小林公子】

第5章

ホームミーティング

HOME MEETING

七つのホームミーティング

七つのホームミーティングが誕生したのは「ＴＨＥ ＡＣＥ」1号が発行された年，昭和34(1959)年だった。「ＴＨＥ ＡＣＥ」1号に初代ホームミーティング・セクションのチーフを務めた吉田伸弥(昭和36年卒)が，その誕生のいきさつ，実情，問題点などを詳しく記している。

ホームミーティングが胎動を始めたのは，昭和32(1957)年末か昭和33(1958)年1月のことだ。横浜と城南，二つのホームミーティングが，まず作られた。続いて中央線ホームミーティングも誕生した。

500人を越える新入生をかかえるには，あまりにも小さな部室。クラブルームの外でも，英語を学ぶことができるよう考慮されたものだった。親しみやすく，楽しい活動を目指していた。ディスカッション，フォークダンス，新年会などが行われている。

三つのホームミーティングの運営は，２年生に任された。昭和34(1959)年４月，入会者は630名という史上最高の数字を見た。三つのホームミーティングの好評ぶりを見た執行部は，ここで七つのホームミーティングを設定した。秋葉原，池袋，高円寺，渋谷，新宿，高田馬場，横浜。メンバーの交通事情により，どこに

城北（昭和54年）

属するのがいいかを考えることにした。

もちろんメンバーの数を考慮に入れると，七つで充分というわけではなかったが，ホームミーティングのリーダーとなる3年生，2年生の数を考えると，これ以上の設定は無理と判断した。将来は，浦和，日暮里，千葉に新たにホームミーティングを作ったらいい，と執行部は望んでいたが，実現はしなかった。

まずホーム対抗のディベイトを

さて，新しく誕生した七つのホームミーティングで，何をしたらいいのだろうか。いろいろな案が出たが，

秋葉原（昭和48年）

高円寺(昭和55年)

結局「ホームミーティング対抗ディベイティング・コンテスト」を採用することにした。新入生の帰属感，連帯感を培うことができるし，ＩＳＡ主催のディベイティング・コンテストに出場するための力を養うことができる。英語会初めての試みだった。

さいわいなことに，朝日イブニングニュースがサポートしてくれることになり，トロフィーの寄贈をはじめ，その運営についてもさまざまな援助を得ることができた。

英語会，最初の「ホームミーティング対抗ディベイティング・コンテスト」は，昭和34(1959)年6月30日，

目白(昭和49年)

渋谷（昭和53年）

大隅小講堂で行われた。テーマは「日本の中立主張は正しいか」だった。優勝は横浜ホームミーティング，準優勝は渋谷ホームミーティングが手中にした。

その問題点とは

ホームミーティングの問題点はどんなところにあったのだろうか。吉田によれば，やはり，ひとつのホームミーティングに100人以上のメンバーがいたこと。解決策として，ホームミーティングをさらに2，3のグループに分けることにした。しかし，これは活動や親睦を深めるための良策とはいえなかった。そのうち

新宿（平成2年）

幸か不幸か，新入生が減っていったため，グループ分けの必要がなくなる。しかし，人数の問題をどう解決するかは，ホームミーティングの大きな課題だ。

二番目には，ホームミーティングでは日常的には何をすべきであるか，ということ。メンバーの英語力向上のため，テキストを使ったグループスタディを発足させたホームミーティングもあったが，英語会本来のグループスタディと同じ方法を取ることがいいことなのだろうか。最初に決めたように，ホームミーティング独自のものでいったほうがいいのではと，提案されている。

誕生の時代背景

ホームミーティング誕生にあたって，社会的な背景も見逃すわけにはいかない。昭和30(1955)年から昭和40(1965)年にかけて，"マスプロ大学批判"が席巻していた。外からの批判に応えるべく，中からも反省の声が上がった。コミュニケーションを大切にしようという風潮が出てきたのだ。

教育システムの見直しが行われた。英語会としても，

横浜(昭和56年)

いろいろ反省すべきところがある。幹部だけの英語会でいいのだろうか。折りからの安保闘争を主とする学生運動の隆盛もその後押しをしている。それまでグループスタディのために使えた教室も，学生運動を警戒する大学が許可しなくなり，英語を学ぶ場がなくなってきていた。そのためにも学校以外の場をみつけなければならなかった。そんな事情がホームミーティングを生む背景にある。

大きな問題児

ホームミーティングも4年目になった昭和37(1962)年には，月1回の「ホームミーティングの日」が設けられた。グループスタディと同じように，英語会の基本的活動のひとつにまで高めるためと，その重要性を理解するためだ。

「ホームミーティングの日」には，それ以外の活動はなしにして，家庭的な雰囲気の中でホームミーティングのイベントに専念できるようにした。4年から1年生まで，すべてのメンバーのためにホームミーティングはあることを，実感したかった。

次第にホームミーティングは，多数のメンバーのいる英語会にとって，効果的な活動の大きな役割を担うまでに成長していった。しかし，英語会本来の活動が多いことと，ホームミーティングにも大勢のメンバーがいるため，しばしばホームミーティングの活動は混乱することになる。だから，ホームミーティングのリーダーは，英語会のコミッティのメンバーである方がいい，という意見も出ている。

英語会の活動，例えばスピーチやディベイトに参加

するためには，高い英語力が要求されるが，ホームミーティングには気軽に参加できる。ハイキングやキャンプだけに参加する人もいて，ホームミーティングがサロン化しているのでは，という批判的な見方も一方にはあった。

ホームミーティングが活発に活動していればいるほど忙しくて，英語会本来の活動に参加できないという矛盾点も出現している。

さらに，4年生から1年生までのホームミティングとうたいながら，実際にリーダーシップを取っているのは2年生なので，3，4年生と1，2年生が溶け合うことがなかなかむずかしい。リーダーとしての2年生の英語力に疑問を持つ人もいた。

昭和40(1965)年頃には，ホームミーティングは，“大きな問題児”扱いを受けるようになった。

ホームミーティングが活発に活動すると，どうしてもグループスタディの影が薄くなるなど，ホームミーティングの存在が，英語会に与える影響が大きいだけに，大きな論点となっていった。

新しい試み

昭和41(1966)年になると，新しい試みが行われた。ホームミーティング間の3年生の移動だ。

英語会本来の活動になじまないまま，ホームミーティングをやり終えた2年生の退部が目立つようになった。触れ合いを大切にしながら英語を学ぶというホームミーティングの雰囲気。そこを抜け出て3年生になり，英語会全体の管理運営，対外折衝という場面に直面すると，違和感を感じて退部する人が多かった。ホ

ームミーティングの中には，３年生不在のものも出てきて，その格差を解消するための人的構成の組み変えだった。

それぞれのホームミーティングが独自の合宿を企画するので，英語会の合宿に参加する人がだんだん少なくなるというのも，この頃のコミッティの悩みだった。

日常会話を学びたい人もいる

1970年代になると，英語会はその方向を示すものとして，「ディスカッション，ディベイト，スピーチ，ドラマの4活動を通じて英語を学ぼう」という線を強く打ち出した。英語の能力のある人が尊敬され，そうでない人は肩身が狭い，という風潮がなきにしもあらず，の英語会だった。

そのため，多忙で活動に参加できない，あるいは活動に参加したくないが，日常会話を学びたいという会員に，どう対処したらいいかが問題となった。

それを補えるのは，グループスタディだろうという考え方に落ち着いた。もし，ホームミーティングで勉強することになると，小さなＥＳＳがいくつもできる，という結果を生む。本来はホームミーティングで，日常会話を学ぶという形態がいいのかもしれないが，あえてここでは，グループスタディを学ぶ場所，ホームミーティングは交流を大切にする場所と位置づけた。勉強に関しては，グループスタディの補助的存在となった。

昭和46(1971)年で，ホームミーティング・セクションのチーフの選出は最後となり，昭和47(1972)年からは不在となった。しかし，ホームミーティング自体は，

ＥＳＳファミリーとして，残っていた。チーフ選出は，昭和49(1974)年にまた復活している。

この年(1974年)，ホームミーティング対抗，ドラマ・フェスティバルが誕生している。

人間関係も大切

4活動(ドラマ，ディベイト，ディスカッション，スピーチ)が大切といっても，すべての会員がそれに参加できるものでもない。また，狭い部室は入れる人数に限りがある。会話を交わすのは，ホームミーティングのメンバーのみ，という人がいても不思議はない。しかし，4活動をこなしていくには，英語力もさることながら，人間関係が大切だ。

そこで，グループスタディでは，それぞれ得意のテーマを持つ3年生，4年生が担当し，各ホームミーティングから参加してもらい，会員間の交流をはかるようにした。

夏の合宿も交流に重点がおかれた。楽しい遊びのなかに，なるべく違うホームミーティングの人が顔を合わせることができるよう，計画が立てられている。ホームミーティング民族主義が芽ばえないように，工夫がなされていた。

昭和52(1977)年頃のホームミーティグは，七つ。秋葉原，渋谷，新宿，目白，城北，高円寺，横浜だ。

この頃のホームミーティングでは，例えばディベイトのプレパレイションに先輩がジャッジをかって出て，コメントをしたり，先輩・後輩の結びつきは強かったようだ。体育会的に厳しかったという話(昭和53年卒，田所)もある。

永遠のジレンマを持ちつつも

1980年代になると，グループスタディ，ディスカッションが姿を消している。ホームミーティングがその肩がわりをすることになった。

対外的な活動が，ディベイト，ドラマ，スピーチの3本柱になり，その他の活動がホームミーティングに集約されることになる。全体活動に出ない会員，出られない会員のため，ホームミーティングはなくてはならない存在となった。

しかし，人的交流がホームミーティング内だけに偏ってはならない，夏の合宿，ドラマの時期には，その枠をはずし，全体としての交流があるよう，コミッティは努めていた。

1985年を最後に横浜ホームミーティングの名が消え，渋谷に吸収されることになった。人数的に成り立たなくなったからだ。従って，現在のホームミーティングは，渋谷，新宿，高円寺，秋葉原，城北，目白の六つとなっている。

ホームミーティングが活発に機能すればするほど，会員が全体としてのＥＳＳになじめない，という永遠のジレンマをホームミーティングはかかえている。とは言え，多くの会員の思い出がいっぱい詰まっているのが，ホームミーティングなのだろう。　【小林公子】

ホームミーティング事始め

ホームミーティングは昭和34（1959）年４月，ＥＳＳの正式機関として創設された。私は当時３年生で，初代幹事として設置地域，活動内容の決定に携わった。幸い，ＷＥＳＳの機関誌「THE ACE」第１号に私が書いたリポート「Home Meeting and I」のコピーが手元にあるのでこれを資料として創設当時の事情を記述する。

ホームミーティングはもともとＥＳＳ会員の地域的な集まりとして，昭和32（1957）年末か33年初めごろから，横浜や，東京の城南地区，中央線沿線の会員の自宅で開かれていた。私の城南ホームミーティングでの経験では，クリスマスパーティや新年会などの楽しい集まりで，英会話の勉強などはあまりやらなかったように思う。なにより，普段はあまり口をきいてもらえない先輩や，ＥＳＳのグループスタディではいっしょにならない仲間と，アットホームな雰囲気で食事をしたりゲームをしたりするのが楽しかった。大学が休みの間，東京や横浜に自宅のある会員が，地域ごとに集まっていた自然発生的な非公式の集まりだったといえるだろう。

それをグループスタディと並ぶ正規の活動に格上げした最大の理由は，ＥＳＳの会員増加である。せまい部室から会員がはみ出してコミュニケーションもままならず，グループスタディに参加できる会員の数も限られる。新人を500人も迎えるようになって，会の活動を維持するには，グループスタディとはもう一つ別の活動の場を提供する必要が感じられた。ホームミーティングは，大学の外で行われることから部室の狭さの制約から解放され，１年生から３年生までいっしょに集まるので相互のコミュニケーションや英会話の向上にも役立つと期待された。

ホームミーテイング創設に当たったのは，幹事の私のほか，副幹事の井田君，田辺君，柴田さんである。

私たちは，まず２，３年生計60人に調査票を出し，さらに500人にのぼる新人の入会申込みカードを調べた結果，次の表にある７個所にホームミーティングを設置した。そして，全会員を交通の利便に基づいて，このいずれかに割り当てた。設置場所も割り当ても，交通の便を基準としている。本当は，日暮里，浦和，千

葉にもつくりたかったのだが，その地域に住んでホームミーティングの運営に当たれる２，３年生がいなかったので，将来の課題としたのである。

実際にホームミーティングの会合が開かれる場所は，人数に見合った広さが得られる各地の東電サービスステーションが多かった。リーダーとして活動の中心になったのは２年生である。３年生はグループスタディを指導し，かつ会の幹事としての役割もあるので，必然的にホームミーティングの運営は２年生中心となった。発足当初の様子を示すのは「THE ACE」第１号に載っている次の表である。

創設時のホームミーティング				
	リーダー	登録人数	初回出席者	費用(円)
秋葉原	松本	82	44	——
池袋	古屋	136	62	50
高円寺	志賀	91	40	50
渋谷	岡崎	113	53	30
新宿	西原	84	43	50
高田馬場	菅野	108	39	——
横浜	久和	82	68	100

次に私たち幹事団は，各ホームミーティングの一体感を強め，しかも英語力を高めるため，ホームミーティング対抗ディベイティング・コンテストを企画した。当時ＥＳＳでは，対外的なディベイト（他大学とのディベイトまたは，代表者のディベイトコンクール出場）はあっても，中ではやっていなかったので，会のディベイト力をつけるためにも最適であった。朝日新聞社にお願いしたところ，アサヒイブニングニュースが後援を引き受け，優勝カップを寄贈してくれた。

ホームミーティング対抗第１回ディベイティング・コンテストは，昭和34年（1959）年６月30日午後，大隈小講堂で開かれた。テーマは「日本は中立国であるべきか否か」。優勝は横浜，準優勝は渋谷であった。その結果は，翌日のアサヒイブニングニュースに掲載された。

このあと，各ホームミーティングは，いっそう英語力の向上に熱心になったようである。同年末に書いた上記の一文で私は次のように書いている。

「ホームミーティング活動を通じて英語をブラッシュアップするのはもちろん必要だが，同時に，友情を強めることも必要だ。会のグループスタディと同じ方法をとるのではなく，ホームミーティングの本来の姿にふさわしい，オリジナルな方法で英語を学べるよう工夫がほしい。

そして，３年生や４年生にも楽しめるものであって欲しい」

どうやら私は，最も原初的なホームミーティングの姿，雰囲気を残しておきたかったようである。

卒業してから30年近くたって，私は新宿ホームミーティングのＯＢ会の案内を受けた。出席したところ，私よりだいぶ若い人たちがホームミーティングの思い出を楽しそうに語り合っていた。私は，創設時の希望通りホームミーティングが発展しているのを知って大変うれしかった。　【吉田伸弥●昭和36年卒業】

「Group Study」－The New York Times を読む

テーマ別にSmall Groupで集まり勉強する会「Group Study」は当期の重点活動として活発に行われた。３年生の幹事役がリーダーとなって，Discussion, Speech, Newspaper Reading etc., 10 Groups以上が活動し，好評であった。

新学期に各Groupの募集活動が行われ，小生は「High Class Newspaper Reading」と銘打って，The New York Timesを読む会としてメンバーを募ったところ，比較的英語に自信があると思われる12～13名が集まった。週1回発売される International Edition－Weekly Review の社説を読むことにした。順番に音読，和訳そしてQ&Aがまわってくるので，メンバーは前もって１部25yenで買って，予習をする必要があった。

近くの食堂の２Fでカレーを注文して部屋を借りたり，喫茶店の２Fにコーヒー１杯で一時間以上ねばったりして集まったが，毎回出席率は良かった。当時はまだ The New York Times を読む人は少なく，何となくプライドをくすぐられ

る思いで参加していたような気がするが，緊張した雰囲気で真剣に読んだ。

Weekly Review には毎号 6 Different Items について社説が掲載されていた。世界は Democratic Group vs. Communist Group の時代で，政治，軍事問題が多かったが，教育，倫理等学生として興味のもてるテーマを選んで読んだ。英語については，全体的には予想外に平易な単語が多く，文章も比較的短いので理解しやすいと思った。ところが，単語は全部わかるけれども文章としての意味が判然としない，ということがよくあった。これは，英語独特の言い回しやフレーズの正確な意味を知らないためであり，この点，やはり本場の Current English は一味違うと感心した。そこで，これらの Useful Expressions を身につけるために短文練習に励み，大いに勉強になった。そして Discussion Meetings 等でこれらを活用できるチャンスがあると大変うれしかったものだ。

この時以来，The New York Times に親しみがあり，卒業後も時には買って読むこともあったがあまり続かなかった。先般，Wifeとニューヨークに旅行し，ブロードウェイでミュージカルを観た劇場のすぐそばで The New York Times の本社を見つけたときは懐かしさもひとしおだった。この度，国会図書館をたずね，40年前にGroup Studyで使ったものと同じ The New York Times International Edition－Weekly Review の現物が整然とファイルされているのを見て，青春の情熱を燃やしたWASEDA ESSの日々を思い出し，胸の高鳴る感動を覚えたことは幸せだった。

【木村正樹●昭和35年卒業】

第6章

国際交流

INTERNATIONAL

ライシャワーと英語会

駐日米国大使Edwin O. Reischauer博士は昭和39(1964)年11月23日(勤労感謝の日)に早大英語会の招きに応じて来校し，講演を行った。会場は，法学部の斉藤金作教授にちなんで俗に「金作教室」と呼ばれたもと学生食堂の3階大教室であった。現在は本部棟が建っている。その場所が選ばれたのは警備上の理由だと聞いている。当時のＥＳＳ幹事長は山内正樹(昭和41年卒)であった。学生運動が盛んであった時代だから，大学当局も，英語会の学生も不安であったが，すべて平穏無事に運んだ。主催した英語会が文化団体連合会に所属しており，その文連が学生運動の一つの拠点になっていたためであろうか。

講演は英語で行われたが，名通訳西山千の日本語が間違っていると指摘するなど，博士ならではのユーモアを交えた，しかも格調の高いものであった。大使は学生たちの求めに応じて数枚の色紙に記念の署名をしたが，その内の1枚は今も伊東の手もとにある。Dateもラインャワー氏の手で記入してあるので，この記念すべき日の証明になっている。

ライシャワー博士と早大英語会の縁は大正15(1926)年にさかのぼる。この年1月22日，英語会のバスケッ

トボール・チームは東京のアメリカン・スクールと親善試合を同校コートで行った。結果は39-18(別資料では28-18)で英語会の負け。よほどくやしかったのか，２月17日に第2戦を第一高等学院コートで行い，この試合は16-15で英語会が辛勝した。そのアメリカン・スクール・チームのフォワードにE.Reischauerの名前がある。この年ライシャワーは米国に帰った。

大正11(1922)年には大隈侯の喪に服し，大正12年には関東大震災で自粛し，同13年には文部省の演劇禁止令が出て，好きな英語劇が上演できない年が続いたので，鬱積した若さを学生たちはアメリカン・スクールとの交流に発散したのであった。彼らが久しぶりに英語劇の上演を楽しんだのは大正15年の秋11月のことであった。当時の『早稲田学報』には楽しい交流の様子が次のように記してある。

「２回とも試合後両方の選手応援団一同，テーブルを囲んでお茶を飲み歓話を交へたので英語のプラクティスとしても大いに得るところがあった。」

この年(大正15年)，アメリカン・スクールとの交流は６月にも行われ，同校の生徒15名が英語会に招待されて，早稲田を訪れ茶話会を楽しんでいる。彼らを引率したのがＹＭＣＡのPaul Raschで，やがて英語会活動に大きな影響を与え，スパイ容疑を受けたり，立教大学教授となり，戦後は清里に牧場を開いて世に知られるようになる人物であった。

『早稲田学報』の英語会報告には，英語会員がスポーツをすることの言い訳や，米人と交流することの正当化など現在では考えられない時代の雰囲気を感じさせる表現が満ちている。

戦前のハワイ大学との交流

「アメリカへ行こう」と英語会の青年たちは何時の時代も考えていた。それは他の人々が「アメリカへ行こう」と言うのとは意味合いがかなり異なっていた。英語会の学生にとって，それは「遠征」なので，米国の青年たちとの交流が目的で，生活の本拠を移すことを意味してはいなかった。

米国遠征計画は，昭和初年に何度か試みられた。日本郵船の中瀬精一(明治40年卒)その他の先輩の援助を受けて，青木昇(昭和5年卒)などもカリフォルニアでスピーチ交流をする寸前までいったが，実行するに至らなかった。日本学生英語会連盟(IFEJ)がポール・ラッシュの肝煎りで結成されると，ハワイ訪問の計画が立てられたが，昭和6(1931)年に早稲田の英語会が同連盟を脱退したので，これも実らなかった。ハワイ大学は英語会連盟から10名の学生を招待し，早稲田からは長谷井(学部)，石坂(第2学院)の両名が参加することになっていたのである。英語会連盟は関屋敏子のリサイタルを開くなどして資金作りをしたという。連盟が早稲田不参加のままハワイ大学と交流を行ったかどうかは不明である。

しかし，米国の大学，とくに日系人が多いハワイ大学からは，ディベイティング・チームが隔年に訪日するようになってきた。昭和3(1928)年5月にはハワイ大学のPan Pacific Debating Teamが来日し，朝日新聞社の後援で日米学生弁論大会を開催した。早稲田学報の記事によれば「朝日講堂の日米弁論戦では青木(昇)君(昭和5年卒)は列席の外人も賞嘆されるほど力強いスピーチをされ」たという。青木はこれに先立って行われ

た予選を2位で通過している。残念ながら当時の日本ではディベイトは知られていなかったし,「太平洋問題」というような政治的な提題で，英語のハンディキャップを差し引いても負ける訳にはいかなかったから，言い放しのスピーチ・コンテストであった。

ハワイ・チームは早稲田を訪問し，英語会主催のGoodwill-Meetingに出て，歓迎を受けた。ちょうど南加大の野球部も訪日していて，英語会は横浜港への出迎えや接待に忙殺されたのである。当時の英語会会長高杉教授は早稲田の野球部を率いて何度も渡米した人なので，英語会は野球部の国際交流にも一役買うことになったのである。

ハワイ大学のディベイティング・チームは昭和5(1930)年6月にも来訪している。朝日新聞社主催の日布学生交歓会が朝日講堂で開催され，早稲田，慶応，商大，立教，外語，日本，法政，青山学院から代表が出てスピーチをした。早稲田からは須見幸吉が出ている。昭和3年の「弁論戦」に比べるとかなりトーン・ダウンして，親善に重点をおいているのが分かる。前回はディベイティング・チームという挑発的な名称に過剰反応したという反省もあったのだろう。各大学のオーケストラ演奏や余興なども行われて，聴衆2千人は日米親善の一時を過ごしたのであった。前回同様ハワイの学生たちは早稲田にも訪れて歓談の午後を過ごした。前記昭和6(1931)年のハワイ訪問計画はこのお返しに企画されたものである。

こうした学生交流は，やがて昭和9(1934)年の青山学院における第1回日米学生会議や，翌年の米国リード大学における第2回日米学生会議などへつながって

ゆくのだが，これについては章を改めて記述するのでここでは触れない。

ハワイ・早・慶ディベイト

ハワイ大学のコミュニケーション学科のクロッフ教授や西山教授が引率する同大学のディベーティング・チームが来訪するようになったのは，「The Ace」を調べた限りでは，昭和43(1968)年4月15日が最初である。この日に早稲田でディベイトが行われている。

2年おいて，昭和45年4月7日には早稲田で“Resolved that U. S. should withdraw all of its combat troops from Asia”という提題でハワイ大学とのディベイトが行われた。ベトナムの戦乱が激しさを増していた頃のことである。学生どうしの親善ムードとプロポジションの厳しさとはいささか矛盾していたが，その前月に開幕した大阪万国博覧会の賑わいの中で赤軍派の日本航空機ハイジャック事件が起こるなどした日本の世相を反映したものといえよう。早稲田は鏡と杉山文子がチームを組んだ。この二人は結婚して今もチームを組んでいる。

戦後来訪するハワイ大学チームの受け入れは，早稲田と慶応のＥＳＳが協力して当たった。昭和45年以来数年途絶えたハワイ大の来訪は，昭和50年に復活して，「第1回ハワイ・早・慶国際交流ディベイト」と名付けられて，以後10回ほど毎年定期的に行われるようになった。この事業の一つの特徴は，戦前のハワイ大訪日と違って，事務処理がほとんど学生の手によって行われ，新聞社など特定のスポンサーにおんぶすることがなかったことである。もちろん，前記のハワイ大の諸

教授のgood officesも必須だったし，早稲田大学の教務部当局も毎回大隈庭園の完之荘で行われるリセプションの費用を支出するなど協力を惜しまなかった。ホーム・ステイ先を見つけるのに苦労したが，英語会のメンバーには良い刺激になった。

以後ハワイ・チームは毎年来訪し，昭和59(1984)年の第10回交流ディベイトまで「The Ace」の記録は残っている。しかしこの間，昭和48(1973)年に日本はスミソニアン合意(昭和46年)(それまでは$1=¥360)による$1=¥308の固定相場制から変動相場制に移行し，$1=¥277からスタートした円相場はじりじりと上げ続けた。昭和58(1978)には$1=¥237から$1=¥175.5まで上がり，ハワイ学生の乏しい財布に大きな影響を与えた。早・慶の担当者に資金不足を訴えるハワイ側の手紙が来るようにもなった。

ハワイ遠征

昭和60(1985)年プラザ合意が行われ，いよいよ円高は進行する。日米の立場は逆転して，日本から米国を訪問する可能性が高まってきた。遠かった米国が近付いてきたのである。

こうしていちばん近いアメリカであるハワイ遠征は，昭和53(1978)年に実現するのだが，この事業の特徴の一つは，その前年の最上級生が，後輩たちの遠征のために準備工作を整えたところにある。1年で政権交代をする学生組織はとかく短期計画，短期実行になりがちだが，この場合は卒業して行く人たちの良い置き土産がうまく後輩に引き継がれた。以後，ハワイ遠征は毎年4月に，すなわち政権交代の直後に行うことが可

能になった。

早稲田・ハワイ大交流年表

前後の記録を整理すると次のような年表になる。

昭和3(1928)	ハワイ大学Debating Team来日
昭和5(1930)	〃
昭和43(1968)	〃
昭和45(1970)	〃
昭和50(1975)	第1回ハワイ・早・慶交流Debate
昭和51(1976)	第2回ハワイ・早・慶交流Debate
昭和52(1977)	第3回ハワイ・早・慶交流Debate
昭和53(1978)	第4回ハワイ・早・慶交流Debate
	第1回ハワイ遠征
昭和54(1979)	第5回ハワイ・早・慶交流Debate
	第2回ハワイ遠征
昭和55(1980)	第6回ハワイ・早・慶交流Debate
	第3回ハワイ遠征
昭和56(1981)	第7回ハワイ．早・慶交流Debate
	第4回ハワイ遠征
昭和57(1982)	第8回ハワイ・早・慶交流Debate
	第5回ハワイ遠征
昭和58(1983)	第9回ハワイ・阜・慶交流Debate
	第6回ハワイ遠征
昭和59(1984)	第10回ハワイ・早・慶交流Debate
	第7回ハワイ遠征
昭和60(1985)	第8回ハワイ遠征
昭和61(1986)	第9回ハワイ遠征
昭和62(1987)	第10回ハワイ遠征
昭和63(1988)	第11回ハワイ遠征

平成１(1989)　第12回ハワイ遠征
平成２(1990)　第13回ハワイ遠征
平成３(1991)　第14回ハワイ遠征
平成４(1992)　第15回ハワイ遠征
平成５(1993)　第16回ハワイ遠征
平成６(1994)　第17回ハワイ遠征

近いハワイ，遠い日本

表によって明らかなように，ハワイ大学からの訪日は最近途絶えている。英語会の現役幹事にとってもそれは「昔」の出来事になってしまった。「十年ひと昔」とはよく言ったものだ。原因の一つは円高である。もう一つは熱心に交流を推進した教授たちの退任である。ハワイ側の母体はコミュニケーション教室で，教室のフィールド・ワークの一つとして来日していたものであるから，どちらかと言えば教員主導で，個人的なものであった。英語会のようながっちりした組織があって，その定期的な事業として引き継がれて行くものではなかった。

米・日両方に共通した弱点は，交流の主体が１年で

ハワイ遠征(昭和５４年)

交代して行く学生であることだ。ある年に何かの理由で事業が行われないと，メモリーは空白になってしまう。「英語会のようながっちりした組織」にとっても，交流の受け入れのような受動的な事業に１年の空白が出来ると，以後復活するのは難しい。

受け入れ側が早・慶2校であることも弱点の一つに数えられよう。１校の都合が悪くなると全体の計画が破綻する。その結果１年の空白が生じ，全当事校のメモリーが空白になってしまう。

交流ディベイトでも，遠征ディベイトでも，（これはディスカッションでも同じことだが）参加者の関心の相違や態度の違いは破綻を呼ぶ。そういう相違があるから交流に意味があるのだという理屈は理解できるが，現実を理解することは難しい。ハワイ側はコミュニケーション専攻の学生で，経済や政治には弱い。日本側は経済摩擦を問題にしたい。しかもディベイトに勝ちたい。結婚観，人種問題，家族問題など先方の持ってくるプロポジションには一般的すぎて関心がない。日本では経済摩擦の情報が溢れているが，米国ではそうでもない。などなどを乗り越えるのが国際コミュニケ

ハワイで遊ぶ（昭和56年）

ハワイでの交流（平成2年）

ーション。話が合わないので交流の意味がないという「仲間選び」の論理は交流事業を危うくする。「自分の土俵で相撲を取りたい」という「日本的経営持ち込み方式の海外進出」は戒めなければならない。

こうした問題を克服して，ハワイ遠征のほうは，円高のおかげもあって，平成6（1994）年4月で第17回目を実施できた。それぞれの世代の現役学生諸君の努力を高く評価したい。しかし，これからは，国際ディベイトに参加する時代である。すでに一度パン・パシフィック・大学ディベイトに参加して，シンガポールに遠征をした実績もある。勝敗の結果は良くはなかったが，英語を母国語，または準母国語とする学生たちを相手に健闘した。参加し，交流することに意味がある。プリンストン大学主催の国際学生ディベイトなど同種の催しは幾つもあるので，将来は早稲田だけでなく日本を代表する国際的なディベイティング・チームを作り出したいものである。

海外との交流はハワイ大学だけではないので，ハワイ大を含む国際交流の章を別にもうける。

日米学生会議など

昭和9(1934)年春，前年に組織された日本英語学生協会の代表として4人の学生が横浜港を後にし，アメリカに向かった。

その2年前，昭和7年に日本は満州国を建国し，国際連盟を脱退した。上海事変が勃発し五・一五事件が起こったのもその年である。当時日本と世界との関係，とりわけアメリカとの関係が悪化していく中で，学生の中にもこのような日本の立場を憂え，せめて日米の学生が直接接触して互いに意見を交換することができないものかと真剣にその手だてを考えているグループがあった。彼らは昭和8(1933)年暮，日米学生会議開催発起委員会(後に日米英語学生協会と改称)を結成し，学生同士の率直な意見を交換する場を設けることについてアメリカ側の意向を打診するため，4人の代表をアメリカに派遣することにしたのである。後に長い間日本とアメリカの学生交流の中心的役割を果たした日米学生会議開催に向かっての第一歩である。

この4人の代表，青山学院の中山公威，慶応の田端利夫(彼は早稲田大学英語会100周年記念式典でKESSのOB代表としてユーモアたっぷりな祝辞を述べてくれたので覚えておられる方も多いと思う)，明治の板橋並治，早稲田の遠藤はサンフランシスコで予想外の大歓迎を受けた。アメリカ側の学生はもとより，日米間の平和を願う日系人たちの期待を一心に受けて，彼らは精力的にアメリカの学校に日米学生会議の意義と必要性を説いて回り，とうとうその第1回の会議をその年の7月に青山学院大学で行うところまでこぎ着けたのである。

第1回日米学生会議はアメリカから77人の学生が参加し，大盛況のうちに終わった。これ以降，第二次世界大戦の戦況悪化により中止になるまで会議は日米両国で交互に行われ，毎回50人前後の学生が互いの国を訪問し意見の交換をするとともに親睦を深めていくことになった。ただ参加する学生が各大学の英語会会員ではなく一般の学生から募集されたため，早稲田大学英語会はじめ各大学英語会としては日本英語学生協会に代表を送りはするものの，積極的に運営に参加することはなかった。第1回目からこの会議に参加し第3回の早稲田大学での大会開催に尽力した後藤潔(昭和14年卒)が述懐するように「英語会としてはドラマなどが活動の中心だった。日米学生会議はオーソドックスな活動ではなかった。青山学院，明治学院，同志社それに各女子大のような英文科の力が強いところは別にして，他の大学ではなかなかメインの活動にはならなかった」らしい。早稲田大学英語会としては，第3回大会を本学で行った際に英語会は全員で準備その他の応援をしたこととそれを記念してワセダガーディアン紙が発行されたこと，第4回会議と第6回会議に委員長として森内信次(昭和13年卒)，鈴木萬之助(昭和15年卒)を出していることなどが記録されている。

だが，各大学英語会との関わり合いは濃淡があるにしても，この会議が多くの学生に訪米とアメリカの学生とのディスカッションの機会を与え，将来の日本を支える人材の養成に役立ったことは疑いを抱く余地はない。後に日本の首相になった宮沢喜一やアメリカの国務長官になったラスクもこの日米学生会議を経験しているし，財界などで活躍している人は枚挙にいとま

のない程である。しかしながら，年々熾烈になっていく太平洋戦争は，学生の国際交流という本来ならばもっとも重視すべきこの会議にも暗い影を投げかけ，官憲の圧力に耐えながら59名の米国人学生を迎えて津田塾大学で行われた昭和15(1940)年の第7回大会を最後に中止のやむなきに至ったのである。

このような日米学生会議と平行して，アジアの学生との交流も盛んにしようという意図から，日本とフィリッピンの学生の間で日比学生会議が昭和12年から開催されるようになった。この開催に当たっては酒匂堅治（昭和13年卒)が力を尽くしたが，各大学英語会との関わりは日米学生会議の場合と似たようであった。なお早稲田大学英語会では第4回のフィリッピン大学での会議に副委員長として椎熊辰男(昭和16年卒)を出している。この会議も第5回(昭和16年)はフィリッピンの学生が出国許可が取れず中止となり，再開は戦後の昭和28年まで待つことになる。

第二次世界大戦が終了し再び学生の国際交流が話題に上り始めたとき，日米学生会議と早稲田大学英語会との関係は一変した。

昭和20年(1945)秋，当時現役の学生だった伊東克己(昭和23年卒)，加藤毅康(昭和23年卒)，住野喜正(昭和23年卒)，中瀬正一(昭和24年卒)らは戦災の復興もまだめどが立たぬ巷の光景を横目に見て早くも将来の日本のあるべき姿や，真の世界平和とは何かなどについて熱い議論を戦わしていた。その結果たどり着いた結論の一つが，日米学生会議の復活である。彼らは焼け跡の中を駆け回って各大学を訪れ，英語会を復活するように説いて回わり，とうとうその連合体としての日

本英語学生協会を復活させたのである。戦災復興の槌音がようやくあちこちに響き始めた昭和22(1948)年春のことであった。

まだ食糧とて十分でない中，彼らが日米交流の夢をかけた日米学生会議は，新たに組織された日本国際学生協会(ＩＳＡ)の主催により昭和22年11月，明治大学で第８回目(戦後第１回)が開かれたのである。当時は全く学生が日米間を往来できるような状態にはなかったため，アメリカ側には日本にいる軍人，軍属およびその家族に呼びかけて出席してもらった。この形態は結局昭和27年まで続いたのであるが，とにかく４人の同級生の必死の努力はとうとう実を結んだのである。東京裁判の通訳を務めたため，同級生より１年遅れてこの活動に参加した中瀬の脳裏に，小学生の頃過ごしたサンフランシスコの町並みの光景がよぎった。この会議の委員長は住野，副委員長は加藤であった。それはまた第９回会議の副委員長中瀬，第10回会議の副委員長長谷川信(昭和24年卒)，第11回会議の委員長嶋澤重夫(昭和26年卒)とその後続いた早稲田大学英語会が日米学生会議にもっとも関与した時期の幕開けでもあった。

その後，アメリカ本土との直接交流という点を除けば日米学生会議は順調に推移した。ところが昭和27(1952)年の早稲田大学で開催された第13国会議を前に，委員長を務めていた早稲田大学英語会の星野聡(昭和28年卒)が突然辞任するという事件が起こったのである。

早稲田大学を会場としての第13回会議を控え，当時の英語会幹事長だった星野はそのポストを離れて会議の準備に専心し，平田幸雄(昭和28年卒)は副幹事長の

まま渉外担当のＩＳＡ委員として星野を助けることになった。ところが星野は選挙の結果，僅差で対立候補の板橋(慶応)を破り委員長に当選したものの，この会議のために苦労した各委員が会議に参加出来なくなるという事態が発生したため，不信任案可決という形で突然の辞任に追い込まれたのである。しかし，大学当局を動かしての本学開催であるため平田はそのままＩＳＡ委員として残り，新たに青山学院の宮崎(一説によると慶応の笹井)を委員長として無事会議の開催にこぎ着けたのである。

この事件を契機として，戦後の日米学生会議の再開を目指し情熱を傾けてその成功に向けて努力を重ねてきた早稲田大学英語会は，その次年の第14回会議に松居泰三(昭和31年卒)が委員長になったことを除いて，日米学生会議から退くことになる。

日米学生会議は会議をアメリカ本土で開催することが日本側の念願だったが，昭和28年には思いがけずハワイから日布学生会議への招待状が届いた。紆余曲折の末，当時ＩＳＡの委員長だった星野らは資金集めに奔走し，国広正雄ら５人をハワイに送り出している。

またこの年日比学生会議が再開された。どういう訳かこの年には２月にマニラで，７月に東京で，合計２回会議が開かれたが，それ以降日比学生会議は開かれていない。

ちなみに日米学生会議は昭和29年の第15回を最後に中止され，それ以降は国際教育振興会の主催のもとに昭和39(1964)年に再開されている。

【伊東克己・川岸高真】

ハワイ遠征準備活動顛末記

私たちが３年となり，英語会の幹事として会の運営に当たったのは，昭和51(1976)年のことでした。前年の先輩方が，ＫＵＥＬ５人制ディベイト及び四大学ドラマ・フェスティバルに優勝したこともあり，私たちも，それを上回る実績を示すとともに，広く，海外に目を向けた活動を展開したいとの気概を持って一生懸命活動に励みました。

その頃の活動は，スピーチ，ディスカッション，ドラマ，ディベイトが四つの柱でしたが，活動の闘争的な要素が，時代を反映し血気にはやる若者の気持ちを捉えたのでしょう，ディベイトに人気がありました。

そんな折，会長の伊東克己先生の友人で，ハワイ大学の教授をされていた西山先生より，ハワイ大学コミュニケーション学部の学生２名を日本に派遣，早慶両英語会の学生とディベイトを行いたいとの話がありました。

【島田哲夫●昭和53年卒業】

第１回ハワイ遠征記

米国のハワイ大学を訪問し，討論を行う「ハワイ遠征」が実現したのは昭和53(1978)年４月のことである。英語会員にとり，それは長年の夢の実現であった。

計画が具体化したのは昭和52(1977)年の暮れだった。派遣人数は７名。新４年生３名(広田，吉永，柏沢)が企画運営にあたり，新幹事長(戸町)と10倍以上の志望者から選ばれた新２年生３名(曽我，大塚，越前)が参加した。官製の学生会議などと違い，学生が自ら企画運営したこの遠征は，英語会にとって画期的だったと自負している。

ハワイ遠征が実現したのは，それまで毎年行われてきたハワイ大学ディベイティング・チームの訪日を何とか両方向の交流にしたいという希望がかねてからあったからだが，特にこの時期に具体化したのは，第一次石油ショック後，日本から自動車・家電を中心として輸出が急激に増大して日米二国間問題が顕在化し，これに学生が危機感を持ったからである。

遠征実現を可能にしたのは稲門英語会の諸先輩の激励と支援である。当時は，

経済的に学生が簡単に海外に行ける時代ではなく，関西遠征方式のように経験者からの支援が軌道に乗るまでは，稲門英語会の支援が欠かせなかったのである。

昭和53年１月にはテーマも「日米貿易不均衡問題」と決まり，我々参加者は早速スタディに入ったが，他の新４年生のメンバーは企画書と趣意書を手に諸先輩を訪問してくれた。今も感謝している。

かくして，７名は昭和53年４月早大ＥＳＳのメンバーに見送られて羽田を４泊６日の日程で旅立った。　見送りの人々のなかには慶応ＥＳＳの諸君もいた。当初，新設の成田空港から出発の予定であったが，３月末に過激派が成田新空港の管制塔を占拠するという事件があって，羽田からの出発になったのである。

ハワイ大学では，クロッフ先生，西山先生の指導のもと，２グループに分かれて，２度にわたって討論を行った。進行も，問題の定義，原因分析，解決策というスタイルであったため，とまどうこともほとんどなかった。解決策として挙げられたのは，日本の内需拡大，輸出の自主規制，現地生産，輸入規制の緩和，流通機構の改善，米側の輸出努力といった点で，こうした解決策が今日も有効であることに問題の根深さを改めて感じる。

討論の後は，ハワイ大の学生とバレーボールなどで交流した。西山先生から「可愛い娘がいるから積極的にアタックするよう」助言をいただいたが，残念ながら記念写真を撮るのがせいぜいだった。

ハワイ滞在中の宿舎は，ハワイ大学の寮であった。宿泊費は朝食のミール・クーポンがついてわずか５ドルであった。１ドル＝240円～260円の時代である。数種類のジュースが幾らでも飲めるので，飲み過ぎて腹をこわすものもいた。

世界各地からの留学生が利用しており，彼らとの交流も楽しかった。吉永のルーム・メイトは，イスラム圏からの学生で，すっかり打ち解けて，一緒にアラーの神にお祈りを捧げていた。後日，彼の結婚式が日本の神式で挙行された。

第１回のハワイ遠征という使命感，責任感から討論の前日は深夜まで模擬討論を行うなど余り余裕はなく，ワイキキ・ビーチを訪れたのもわずか２時間であった。しかし，我々にとって，初めての海外を，観光でなく，明確な目的意識を持って訪れることができたことは，いまでも貴重な財産になっている。

【柏沢由紀一●昭和54年卒業】

第７章

合宿

SUMMER CAMP

昭和４年　両学院野尻湖合宿

『早稲田学報』昭和４年(1929) ７月号の「英語会便り」はつぎのような予告をしている。

「これはまだ，確たる消息は筆者のてもとまでとどいてをりませんが，第一・第二両学院英語部合同で，今夏，休暇中の二週間を信州野尻湖畔に合宿するさうであります。目的は，同地に避暑中の外人諸氏との接触による勉強で，本会及び右二部関係の外人教師諸氏の好意的アッセンのFavourも，あるはずであります。」

文中の第一・第二両学院というのは旧制大学予科(あるいは旧制高等学校)に相当するもので，本会というのは早大英語会(学部と専門部の英語会)である。

それまで「アウチング」と称するピクニックはしばしば行われていたが，「合宿」という言葉が英語会の記録に現れるのはこれが最初である。残念ながら，昭和４年の高等学院の合宿記録は『早稲田学報』には掲載されなかった。また翌昭和６(1931)年の『早稲田学報』にも合宿に関する記事はない。この年には６月にハワイ大学との交歓会や，日米交歓英語劇大会(早稲田の劇はデル・レイ夫人他が演出)その他があって，多忙のため，新しい活動の合宿まで手が回らなかったらしい。

昭和６年　第１回野尻湖合宿

昭和6(1931)年になって，『早稲田学報』8月号に次の記事がある。

「遅ればせながら，私共も夏休の一事業として，野尻湖行きを決定いたしました。七月十四日の夜十時の汽車で，一行十名は元気に出発いたしました。何分天候思はしくなかった為，参加者の案外少かったのは遺憾でした。(山田記)」

かくして，大学英語会の合宿は，高等学院英語部に遅れること２年，昭和６年に野尻湖で始まったのである。続いて，同年の学報10月号は，「野尻湖畔の合宿も第一回の企てとしては成功でした」と簡単に報告を掲載している。確かに成功だったのだろう。このときの参加者が企画，実行したと思われる翌昭和７(1932)年の合宿は，予告段階から熱がこもってくる。

昭和７年　若さ溢れる合宿

昭和７(1932)年の『早稲田学報』７月号英語会便りは次のように呼びかけている。

「夏休みも近くなつてきましたが，我が早稲田英語会も此の休暇を利用して益々精進する為に，七月十二日より二週間，英米人の多数集まる野尻湖畔に合宿する事に決定致しました。合宿費用一日七十銭往復汽車賃五円，都合十四日間で約十五円位で十二分愉快な日を送れますから，会員諸君は振つて御参加の程を希ひます。詳しい事は会室に掲示してあります。」

現在では想像を絶する費用の安さであるが，15円の月給で働く人も多数いた時代である。大学出の初任給は70円くらいだったろうか。

同年の学報９月号「英語会便り」は，野尻湖からの報告を掲載している。

「(略)今年も，大学，第一，第二のＥＳＳ合同の下に野尻湖畔に各部三軒を貸り，大学英語会員八名，第一学院英語部員八名，第二学院英語部員九名，合計二五名のものが合宿致して居ります。合宿期間十三日より二十七日まで二週間を，最も有効に利用したいと思ひます。唯今，私達は同合宿所に居ります。外人達とヨットを走らせながら笑い会って居るもの，ＪＯＮＫ長野放送局に，英語劇放送に出かけるもの，等々真に一同の元気な生活振りは参加出来なかった会員及び先輩諸兄にお見せ致し度い程です。七月十五日津田記」

多少調子に乗りすぎたところがあるにせよ，合宿というものはいつの時代もそうしたものなので，元気の良さを評価すべきであろう。しかし，行間に読み取れるのは，英語会の公式活動というよりは，有志の旅行という雰囲気である。

昭和８年　定着する合宿活動

大学英語会の第３回目の野尻湖合宿報告は『早稲田学報』昭和８年(1933)10月号に簡単に記載されている。人数は第２回の３人から15人に増えていて，合宿というものが定着して行く傾向を示している。記事は次の通りである。

「(略)会員約十五名は猪瀬君のリードの下に七月末約二週間を湖畔の栄泉堂二階で合宿生活を致しました。

其の内には目醒ましい活躍をなすもの等々がありまして予期以上の好結果を得た様であります。此れ等の張り切った諸君の活躍はやがて英語劇にスピーチに或

いはカンバーセイションにと現れる事でせう。(八，九，二〇，中村記)」

昭和９年　合宿の反省

昭和９年(1934)になると『早稲田学報』６月号の「英語会便り」には，その１年間の各種活動予定紹介記事の中に「夏期外人部落合宿」の見出しと説明があり，７月号にはその詳細な案内が出ている。ここに至って英語会の野尻湖合宿は完全に年中行事として定着した。以下は７月号の案内記事の抜粋である。

「(略)例年通り，第一，第二，大学ＥＳＳの同志五十余名を募って，彼の民衆詩人一茶生誕の地柏原を去る事一里，赤倉，妙高山麓，風光明媚な野尻湖畔に合宿生活を二週間いとなむことになりました。湖畔外人夏期部落にはサンマー・ハウス，百十余あり。訪問に或いは相互研究，English Only に，生きた英語活用の機会として(以下略)(矢島正治記)」

この年の学報９月号には植田晃一氏の「野尻湖便り」が報告として掲載されており，また，会の行事としての合宿に関する反省が矢島正治氏の手によって記事となっている。これも，合宿が英語会のシステムのなかでどのような機能を持つかという考え方が生まれたことを意味していて，英語会の活動プログラムに合宿が固定的な地位を占めるようになったことを示すものである。矢島氏の反省記の方から紹介しよう。

「去七月廿八日を以て本年度夏期外人部落合宿を無事終了致しました。年々其の実をあげてはをりますが，一層の充実を期す為指導教授の必要を痛感するもので，此の点皆様の御一考を切に御願ひする次第で御座居ま

す。」

次は植田氏の「野尻湖便り」である。

「合宿もいよいよ終りです。(略)全員四拾名相互の完全な諒解と真面目な研究心とに結びついて，至極元気，何事も協調して平和に意義ある毎日を持ってをります。ボーチングにスキミングに，エナーヂーを蓄へる傍ら，外人部落訪問や，規則正しいレツスンなどに，有効な使ひ道を見出してをります。(略)二十六日には村の公会堂で村人の為に，西村延太郎君の声帯模写を中心として，校歌やオケサ踊りなどのプログラムで「御別れの会」を開き「都の西北」堂を圧してほがらかなワセダ・スピリットに村人を微笑ませました。二十八日有意義な合宿生活を終へて解散，(略)」

省略した部分を含めて，この報告から読み取れるのは，合宿によつて両学院を含む大学全体の英語会のコミュニケーションをはかろうという意図，合宿は健全なレクリエーションの場であるという意識，外人との付き合いは卑屈な外人崇拝から出るものではなくて英語を学び友好を深めるためであるという意識，規則正しいレッスンや生活によって合宿の効果をあげようという意図，地方の農民との融和をはかる意図などである。

時代は，暗黒の木曜日に始まった世界恐慌(1930)のさなかで，満州事変(1931)，五・一五事件，国際連盟へのリットン報告の提出(1932)，国際連盟脱退(1933)，満州国の成立(1934)という血腥い軍国主義化の様相を呈していて，さらに二・二六事件，日独防共協定(1936)から太平洋戦争に突入しようという時であったから，軟弱な英語好きの学生が野尻湖あたりで英米の

外人とだらしなく遊んでいるという非難も会の内外にあっただろうし，冷害(1931)に疲弊した地方の人たちの目も気になるところであっただろう。植田氏のレポートは，そのような批判に答えようとする配慮に満ちている。矢島氏の反省もこれに無関係ではない。

昭和10～17年　合宿らしい合宿

国際連盟の成立(1920)に大きな夢を賭け，存在理由を強化した英語会だったが，国際連盟脱退をはじめとする日本の孤立化が進み，その政治が右旋回を強めるとともに，受難の時代が始まるのである。

『早稲田学報』に関する限り，野尻湖合宿の記事はこれが最後である。というよりも，昭和10年以後早稲田学報に「英語会便り」がなくなってしまうのである。しかし，英語会は健在だったし，野尻湖合宿も引き続き行われていた。合宿も合宿らしさを増して，プログラムも豊富になっていった。

昭和９年に矢島正治氏が切に希望した指導教授の同行もやがて実現した。磯村保曹氏と中瀬洋一氏が提供してくれた資料によると，戦前では，

昭和12(1937)年　Mrs. Canzonery
昭和14(1939)年　Mrs. Baker
昭和15(1940)年　Mr. Ernest stanley
昭和16(1941)年　萩原恭平，高杉滝蔵
昭和17(1942)年　中島正信

の諸先生が野尻湖に同行または訪問している。戦後は，伊地知，中島両先生の命を受けて伊東が同行した。中島先生の訃報を伊東が聞いたのも野尻合宿中であった。

昭和14，15年の野尻湖

磯村保曹氏(昭和17年卒)が寄せた一文を紹介して戦前の合宿を偲ぶことにしよう。

「明治の初めに来日した外人牧師達は避暑地として軽井沢を開発したが，やがて富裕階級の高級避暑地となってしまい，地価も物価も上がるので，慎ましい生活をする外国人牧師達にはとてもすめなくなってしまった。

そこで彼らは大正12，3年(1923，4)頃当時ほとんど知られていなかった野尻湖の東岸一帯を共同購入し，いわゆる外人村を作ったと伝えられる。最初の住民はカナダ人宣教師であったという。

軽井沢の別荘はいずれも庭のある本建築であるが，野尻はなべて林間の斜面に建てられたロッジ式の小さなもので庭はない。僅かに高床式のベランダがエキゾチックと呼べる程度である。外国人でも庶民クラスで，関西方面の居住者が主であった。

湖岸の中程にボートハウスがあり，夏には管理委員会がおかれ，その背後の斜面にチャペルがあった。

英語会が合宿したのはその対岸の野尻村である。村といっても小さな集落で，湖岸に3，4軒の宿屋が並び，街道筋までの200メートルは田圃で，小学校，村役場，公会堂とあるが，人家も疎らだった。酒屋，八百屋，雑貨屋はあるが医者はなかった。街道筋の角に二階建ての菓子屋「栄泉堂」があり，喫茶用に椅子テーブルが置いてあった。

最初の合宿は栄泉堂の二階の二部屋を借りて行われ，10名ずつ前後2班に分かれて，それぞれ10日間の合宿を行った。翌年からは隣の民家も借りた。

合宿は好評で大学当局も歓迎をした。早稲田圏が地方にも広がるからである。参加希望者も増えて，昭和10年頃からか，湖岸の旅館小松屋(第二学院)，坂本屋(第一学院)，野田屋(学部と専門部)と合宿は分散した。

ラジオ体操に始まる午前の行事では日本語を話すと罰金を取られた。9時から正午までは上級生の指導で会話の練習をする。12時で日本語解禁となり，午後は自由行動であった。

ドッジ・ボール大会，野尻湖一周ハイキング，妙高登山，弁天島の宝探し，公会堂での演芸大会，最後の晩のランタン・パーティー等を恒例として青春を楽しんだものである。

同行の外人教師達は，往復の2等乗車券と宿泊料を会が負担，授業料は無料という条件で来てくれて，学生と生活を共にした。興に乗じたMrs. Bakerは社交ダンスのレッスンを玄関の広間でしてくれ，みんなダラシのない浴衣姿で一生懸命教わったが，合宿の後半にMr. Bakerも参加したので，ダンスはそれきりになった。

合宿参加費は交通費と宿泊料だけで，その他いっさ

ハイキング・デー(昭和49年)

いは会の方から支出された。昭和13年に計算してみたところ，東京の下宿に残って昼食を外食し，コーヒーと氷水を飲むより安いという計算がでたから，多分一泊１円60銭ぐらいではなかったろうか。これは２，３年据置の値段で，昭和14年５月に準備交渉に赴いたとき散々もめたことがあった。

第一高等学院の英語部は西伊豆の戸田を開拓し，昭和14年から戸田で合宿をするようになった。」

大戦と合宿

太平洋戦争が始まったのは昭和16(1941)年12月であった。当然英米人教師が合宿に同行するのが難しかったので，昭和16，17年には日本人教員が同行したのである。戦況が厳しくなってきた昭和18(1943)年にはいわゆる学徒出陣があり，大学英語会の野尻湖合宿は中止になった。それでも，徴兵年齢に達しない学生を対象に，授業は，短期の勤労動員を挟みながら行われていて，第二高等学院のＥＳＳは志賀高原の石の湯山荘に合宿を行った。住野喜正，中瀬正一，伊東克己らはこの年に入学したので，英語会会員として，野尻湖に合宿の経験をすることはなかった。第二学院２年生の英語部幹事長伊藤正夫は彼らを引率してその夏，志賀高原に行ったのである。そして，この合宿ではぐくまれた友情が，終戦後の英語会復活に大きな役割を果たすことになる。第一高等学院はこの年の合宿をいっさい行わなかったのと，元来，文系の学生数が少なかったため，後継難に陥り，昭和18年入学者では加藤毅康を除いては，戦後の復活に際して原動力になることはなかった。組織の維持に合宿の果たす役割が大きいこ

とが理解できよう。

学生のいないキャンパス

昭和19年になると，前年の学徒出陣で，徴兵適齢に達した学生たちは病弱者を除いて入営してしまい，未成年の学生は長期の勤労動員で日本鋼管，昭和電工等の工場に行ったから，大学のキャンパスは人の気配がなくなってしまった。授業はもちろん，あらゆる学生の活動は行われなかった。野尻湖合宿など論外であった。彼らは安価良質の労働者として国策企業に奉仕し，寮と工場の間を黙々と往復したのであった。

もちろん，こうした生活の中でも，監督の責任を負った教員は学生の自覚を促し，学生自身も労働に疲れた身体に鞭打って講習会を開いて勉強したり，演劇上演によって一般労働者の慰安と文化啓蒙をはかったりした。その中で英語会会員も積極的な活動をしたのだが，それはこの章の主題ではないから割愛する。大学と学生のプライドがまったく捨て去られた時代ではなかったことを記すにとどめよう。

戦局が苛烈を極め，日本軍敗退の危機が続くようになると，徴兵年齢は１年繰り下げられ，19歳の未成年者にも現役召集の令状が発せられて，大学生の勤労動員体制も崩壊してしまう。昭和20年には，キャンパスはおろか，企業からも学生の姿が消えていくのである。

合宿の復活

「昭和28年。副幹事長になった。４月には各学部でメンバーの勧誘を行った。小林(秀之)幹事長からは何でもよいから機関銃のように英語をしゃべり，煙にまけ，

そして後は任せろと耳打ちされた。テキヤ流のタンカバイを体験した初めだった。

戦前は野尻湖での合宿が伝統だったと先輩から聞かされたが，野尻湖という言葉から計画のヒラメキが出なかった。

出身校の所在地，茨城県大甕水木の海岸の海水浴用の旅館と話をつけ，合宿を復活させることにした。

女子の家には幹事が出向き，責任を持つからとお願いをし，外泊の許可をとりつけた。親とすれば，清水の舞台から飛び降りる思いであったろうと思う。後は皆エスコートして家まで送り届けるよう指示した。米を持参したことや，女子の諸君が徹夜で人生論や恋愛論を語り合い，初めて心の友を得たと言っていたことが印象的だった」（大和田龍夫，昭和30年卒）

野尻湖合宿の歌

青春は歌うべきもの。野尻湖の合宿も若人の歌声に明け，歌声に暮れた。

「九州諫早の海に育った武富哲郎（昭和13年卒）は長身頑丈なむくつけき九州男児であったが，メランコリーに陥ったのか，チビた鉛筆を嘗め嘗め詩を書いて湖岸で嘯いている。妙な節回しだ。別に気にもとめなかったが，翌年になると次年度の人たちの間に大流行をしだした」（磯村保曹氏資料）

昭和12年に武富哲郎氏が作詞した「野尻湖合宿の歌」は，誰が伝えたのか，英語会会誌"The Ace"の第3号，昭和36（1961）年の活動報告に掲載されているので，ここに再録する。「節は練鑑ブルースと同じ」だそうであ

る。ついでながら，"The Ace"第3号の記事に「昭和20年頃歌われていた」と言うのは誤解で，昭和12～17(1937～42)年に歌われたものである。

1．緑の丘に包まれて
　歴史を語る野尻湖よ
　高く聳ゆる妙高山
　集う英語会の意気高し
2．朝は六時に起こされて
　ラジオ体操や雑巾掛け
　七時だ飯だぞイングリシュ・オンリー
　おっといけない罰金だ
3．嫌なレッスンは八時から
　午まで四時間ぶっ続け
　アイ・ラヴ・ユー　ユー・ラヴ・ミー
　毛唐の言葉の難しさ
4．緑したたる外人村
　午後は楽しいフリー・タイム
　追っちゃいけないシャンの後
　帰りゃ早速水葬だ
5．遠い信濃に来て見れば
　訪ねる人とてあるじゃなし
　たまに来る日のポストカード
　いとしあの子の筆の跡
6．就床時間は夜十時
　早速始まる趣味講座
　笑っちゃいけない覚えとけ
　可愛い女房の来る日まで
7．野尻湖畔に夜は更けて

静かに囁く虫の声
湖の女神に抱かれて
辿る夢路は故郷の空

8．月影冴ゆる水面に
仄かに照り映ゆ火の文字
今宵限りの野尻湖に
若き歓喜の迸り

9．友の情けに育まれ
聖なる自然に飛び入りて
共に暮らせし二週間
心の故郷いざさらば
　　心の故郷いぎさらば

野尻湖にギターがこだまする

昭和12年の野尻湖合宿の歌は多分に放歌高吟調であったし，メロディーも兵隊節であったのに対し，昭和40年代から50年代になると，フォークとかポピュラーが流行して，ギターを携えた学生たちが合宿に参加するようになり，自由時間や夜のミーティングで主導権を持つようになった。学生たちは伴奏付きで歌うだけでなく，ハモることも，自作の歌詞や曲を即座に歌うことも出来るようになってきた。

合宿参加者は10余りの班に分かれて，行動し，スポーツなどで勝敗を競うようになったが，優秀自作班歌の表彰も点数に数えられて，参加者の関心を集めている。そのような歌の代表として昭和54年卒業の種村隆久の歌詞と感想を紹介しよう。

「いつか僕に娘ができて
だれかを好きになったら

話して聞かせてやろう

僕らの青春を

これは，われわれがＥＳＳ４年生の時の夏合宿で，４年会のエンタテとして披露した歌の歌詞の一部である。

この歌はおおいに受けた。「いい歌ですね」とわざわざ言いに来てくれた後輩もいた。味をしめたわれわれは，いつのまにか，同期の仲間の結婚式では「都の西北」と一緒にこの歌も歌おうという取り決めまで交わしてしまったのである。そして，取り決めどおり，この歌はたくされの仲間の結婚式で歌われ，去年(1993)その役割を終えた。

卒業から15年が過ぎて，われわれの多くは父親や母親になっている。僕にもひとりの娘がいる。近い将来，歌詞のとおり彼女に話しをする時がくるかもしれない。

しかし，彼女は，ＥＳＳ卒業生同士の夫婦の娘で，幸か不幸か同期の集まりにはいつも参加している。どんなふうに話して聞かせれば，いつも酔っぱらいながら昔の失敗談に花を咲かせているあのおじさんたちをすばらしい仲間だと分かってくれるか，今から不安でならない。」

野田屋から宮川旅館へ

昭和31(1956)年に野尻湖合宿が復活して以来16年間毎夏利用してきた野田屋旅館は，昭和47年隣接地に野田屋ホテルを建設し，高付加価値をめざして，旅館の方を閉鎖することになった。そのため宮川旅館で合宿をするようになったのだが，そのころのいきさつについて昭和49(1974)年卒業の太田行雄が提供した資料を要約しよう。

「昭和46年暮れに，野田屋旅館は翌年より営業をやめるとの情報が入り，昭和47年の夏合宿開催地について五役と急遽検討を行った。

1. 従来通り，野尻湖とする
2. 心機一転，新天地を開拓する

という見地から取りあえず，野尻湖を含め候補地を検討し，合宿にふさわしい旅館を選択することになった。選択に関し，長野県の観光協会や交通公社等より情報を収集するとともに，適当と思われる旅館を推薦してもらった結果，候補地としては，

野尻湖では，宮川旅館　他１軒，聖高原，妙高高原等があった。

候補地を一応決定し，立地条件および宿泊費等々を確認するために，宮川旅館をはじめとした旅館の下見を行った。

下見を行った結果を五役に報告するとともに，検討を行い，

1. 野尻湖に対する思い入れが強く，かつ交通の便が良い
2. 野尻湖であれば先輩も土地勘があり，参加しやすい
3. 旅館の規模として，宮川旅館は適当である（貸切ベースで考えていました）
4. 金銭面では，野田屋旅館と比較し，最も値上がり幅の少ない旅館は，宮川旅館であり，個人負担が最も少ない

以上の理由により，昭和47年の夏合宿は，野尻湖畔・宮川旅館にて開催することに決定したのである。

【伊東克己】

——創立100周年記念事業へ向けて

稲門英語会常任幹事
小林秀之

早稲田大学英語会では，明治・大正・昭和の三代にわたる先輩達が毎年一回の総会に集い旧交を温めるという儀式を数十年の間絶やさず続けて行い，学生たちのさまざまなな活動を，寄付や募金に応じる形で支援してきた。卒業生の多くが早くから海外生活を経験し，困難な時期にわが国の国際活動の先端で活躍したので，その自負心が連帯意識を育てたといえよう。

しかし，戦前世代を中心とする稲門会組織と戦後世代のあいだには，連帯感にも微妙な差があり，戦後卒業生の中には，「WESS」を懐かしく思うけれど「稲門会」の組織には関心がない人たちが増えた。戦後の各時代を通じて，同期会はかなり活溌に集会を行うが，稲門会の総会に出席するものはきわめて僅かで，総会はあたかも戦前世代の会のような様相を呈した。

戦前世代はこれを憂えて，総会を魅力ある集まりにしようと，有力会員の公演をアトラクションに加えたりした。昭和40年代に一般化してきたゴルフのコンペを催したり，現役ESSの新入生歓迎会に出席して挨拶するなど，老若の融和を図ろうともしたが，会の基盤となる関心の相違を埋めることは出来なかった。

一方，野尻湖の合宿には，毎年かなりの数の卒業生が訪れたし，英語劇のリハーサルや合宿にも若いOBが来て指導や激励をした。彼らは毎年ワセダ・プロダクションのユニフォームのセーターをお釣りはいらないと言って買ってくれた。公演の日には寄付を頂戴するためのOB受付もできて，多くの若手卒業生が現役の舞台を応援した。彼らや彼女らの心尽くしの「差し入れ」や，訪問のたびに置いていくなにがしかの寄付は現役学生には卒業生との嬉しい連帯のシンボルであった。伊藤克己がESS会長のときに，こうした場所に必ずいるように心がけたのは，

現役の顔を知らない卒業生が淋しい思いをしないようにという配慮もあった。だが熱心に現役学生を応援してくれた若い卒業生たちもマンネリ化した稲門会にはめったに出席しなかったし，稲門会費の納入には無関心な人が多かった。しかし，誰が彼らを責められよう。卒業生達は，多くの金品と時間を彼らの「こころの稲門会」に納入していたのだ。当然，組織としての稲門会と「こころの」稲門会とのギャップを埋めようとする動きが，戦前・戦後の両世代から出てくる。そのひとつは，稲門会の若返りであった。

昭和61年6月，新稲門英語会会長が選出されるときに，もと山一証券会長潮田定一(昭和3年卒)からもと日本郵船の中瀬洋一(昭和18年卒)へと世代の飛躍があったのはまさに若返りを目途した人事であった。中瀬洋一はさらに戦後世代への若返りを急ぎ，自らは会長を一期務めたのみで，富田広に譲った。めだたない交代人事であったが，中瀬家三代の人柄と洞察力を示す英断であった。

戦後直後の昭和22年に卒業し，学生時代は幹事長を務めた富田広は面倒見のよい先輩の一人であった。明治屋取締役の富田は昭和63年6月稲門英語会会長に選出されると積極的に会の活性化の道を探り始めた。そのため中瀬正一(昭和24年卒)が稲門会幹事長に就任し，奥野文昭(昭和25年卒)が中瀬を補佐するという戦後型執行部が発足したのだが，その矢先に，新組織は，富田と奥野が相次いで急逝するという不幸に見舞われた。

稲門英語会は富田会長を就任の年(昭和63年)の9月に失い，また，晩年まで東京トースト・マスターズ・クラブの世話人として社会人の英語会活動を指導した三井物産の奥野も翌年(昭和64年)12月に他界したのである。

富田は3月という短い期間しか在任しなかったわけだが，任地の札幌から毎週上京するたびに，会長の抱負を稲門会幹事に語り，中瀬正一その他に宛てた文書にも残した。意志の中には，創立90周年の祝賀計画，英語会史の編集出版を前提とする歴史記録の保全と学生活動に対する資金的な支援があった。

富田の没後，半年の間稲門会長代行を務めた三菱商事の中瀬正一は，平成元年

3月，稲門英語会長に就任し，英語会長伊東の要請を受けて，まず学生に対する年間50万円の定額資金援助を提案，実現した。これによって稲門会はOBの親睦会であるだけでなく，ESSの支援団体としての性格をはっきり持つことになって，稲門会と現役の関係は理解しやすくなった。

次は，創立90周年をどういう行事で飾るかという問題である。長い間，明治36(1903)年が早大英語会創立の年と考えられていたから，平成5年(1993)は創立90周年にあたる。中瀬正一稲門会長のもとで開催された幹部会では，これを機に稲門会史を編纂するのが至当ということになったが，資金の問題や，資料収集の方法など，前途は多難であった。

明治36年は，もと稲門英語会長中瀬洋一と現会長中瀬正一兄弟の父で，やはり稲門英語会長だった中瀬精一が新設の早稲田大学商科に入学した年である。中瀬精一は，商科の1期生でもあり，英語会の創立者ともいえる人物であった。温厚な中瀬父子3代の歴史にもなる英語会史の編纂は縁というべきか，正一の手によって着手されたのである。

編纂やその資金集めなどの難問を解決するためには，従来の懇親会的な組織では実行力に欠けるので，もっと強力な別組織が必要であった。副幹事長小林秀之(昭和30年卒)は会の要請を受けて，平成2年に各卒業年次を網羅する90周年事業世話人会を組織した。(90周年事業は，その後100周年事業に変更された)。

在学時における活動や役職にとらわれず，在京でかつ世話人としての適性と時間的余裕を有する人物を卒業年次ごとに指名して組織した世話人会は，期待通りのダイナミックな成果を上げた。昭和17年卒業の磯村保曹，椿晋介を頭に平成2年の新卒業生までほぼ50年にわたる間の全ての年次の代表80人が一堂に集い会議を起こすことができたことだけでも誇りうることであったが，この世話人会が稲門英語会に活性を呼び戻した意義は大きい。世話人達は自ら手弁当で奉仕し，一般会員との連絡を担当し，名簿の整備，資料の入手，募金の実務を担当し，さらに記念事業の重要な企画に参加して執行部をサポートしたのである。会議の場

所は東京駅の精養軒二階。会議はいつも週末。親子以上の大きな年齢差を超えて書生っぽい議論を交わしていた。

平成２年に大学英語会の会長が伊東克己教授から東後勝明(教育学部教授)に引き継がれたこともあって東後の前後の卒業生が世話人会で強力な牽引力を発揮したことは特筆に値する。昭和40年代卒業の会員は人数も多く50代の働き盛りが揃っていた。彼らの実力は記念事業の全ての面で発揮され特に募金面での貢献は多大であった。川岸高真(昭和35年卒)が果たした懸案の名簿整理の成果も特筆に値する。川岸は自分のコンピューターを提供し自らプログラムを開発し入力も自身で行うという孤独な作業を遂行して最新名簿の発行を実現した。転勤が頻繁で住所変更が激しく従来管理不能とも言われていた稲門英語会の全データベースを早期に整備出来たことは記念事業成功の大きな要因である。

稲門英語会では世話人会の活溌な行動力を高く評価し，この活力を稲門英語会で継続的に活かすことを目的に会則の大幅改定を図ることになり，小林と寿康三(昭和29年卒)が起案して平成５年の総会で決定した。改訂の骨子は世話人会と同じように各年次から１名常任幹事の推挙を求め強力な縦軸を構築するとともにその常任幹事の手で年次ごとの横の連絡網を確保し会員との関係を維持することにある。会の長老である会長と運営の中心となる幹事長の選出委嘱の手続きを明文化して，長老先輩の意向を尊重しながら幹事長は常任任幹事の中から選出される実務重視の改訂である。新会則のもとで世話人の多くが新たに常任幹事に選出され，会長に中瀬正一が留任，幹事長に志賀隆(昭和37年卒)が新任した。前任の永原久太郎(昭和27年卒)から一挙に10年飛ばして若い幹事長の誕生である。

会則が改定され，新執行部の人事が定まり，名簿が発行され，機関誌が発行，募金が成功し，英語会史資料の収集を助け，記念植樹の手配を整え，世話人会は解散した。全ての指揮をとった中瀬正一は記念行事の終わりを見届けて稲門英語会の会長を退き，松橋功(昭和31年卒)に後事を託した。松橋は新制大学卒業で初めての会長である。

【昭和30年卒業】

――新生稲門英語会について

稲門英語会幹事長
志賀　隆

平成6(1994)年11月10日発行の“稲門英語会だより”に，「早稲田の杜に500人，創立100周年式典，祝賀会大成功」の大見出しで，皆様に英語会が100周年を迎えたことをお知らせしてから，早くも4年近くがたちました。この“稲門英語会だより”で，初めて英語会が100年もの伝統ある会であることを知った人は少なくありません。またこの100周年の諸行事を機に，多くの方々が自分が稲門英語会員であることを再認識され，会員相互の輪を広げようという声が，各年代・各層から聞かれるようになりました。

100周年を機に，稲門英語会は大きく変化しようとしています。すでに，勉強会，ゴルフ会等のACTIVITY を通じて，会員の親睦がはかられ，また年末の稲門英語会大忘年会には全国から大勢の会員が集まり，懇親を深められ，毎年恒例の行事となってきています。

稲門英語会はどのように変わりつつあるのか，新生稲門英語会の現状を皆様にご紹介し，あわせて会員皆様の積極的ご参加・ご協力をお願い申し上げます。

(1) 100周年記念行事準備のため，諸先輩が中心となり世話役会の初会合が東京駅構内の精養軒で開かれたのが平成2年9月27日でありました。昭和17年から平成2年まで年齢で四十歳もの差がある約60名ほどの世話役が一堂に会したのですが，この初会合は過激な執行部批判も噴き出したりする真面目な，早稲田らしい賑やかな討論の場となりました。その時の議論がきっかけとなり，後に会則の改訂，執行部の大幅な若返りが実現した記念すべき会合でした。「皆が次の百年に向けた英語会の新たな息吹きを感じた大きな瞬間であったように思う。」と，後に小林秀之世話役会代表が述べられています。数多く

の世話役会の討論を通じ，ややもすれば一部の仲良しクラブ的稲門英語会から，2,000名以上在籍する会員がなんらかの形で参加できる楽しいものにしようではないか，とその方向が打ち出されたように思います。

(2) 平成5年度の総会で会則，および役員の大改造がなされ，「生まれ変わる稲門英語会」(平成6年3月1日稲門英語会だより)の誕生となりました。

改訂の主旨は，組織を縦横にがっちり固め，活発に活動が出来るようにすることにあります。そのために下記の事項を決めました。

① 会員の住所変更が頻雑で動静の把握すら満足に行えていなかったことの反省を踏まえ，会の継続，発展のための基礎となる最も重要な最新の会員名簿を作成し，管理すること。

② 卒業年次ごとに実質的に活動可能な世話役を推薦いただき，当会の幹事を委嘱，その幹事の中でもいつでも会議に参加，汗をかいていただける人を，常任幹事とし，その常任幹事で構成する常任幹事会をもって実質的な最高運営組織とすること。従来のように，大先輩が指命する役員委嘱方式を改訂し，会員の皆さんが選出する役員委嘱方式に変えました。

(3) 新しい体制が発足して初めての常任委員会が平成6年9月13日青山“うすけぼ”で開かれました。皆さんの熱意を反映してか多数の常任幹事が出席し，会の運営目的，運営体制，当面の課題を新たに討議し確認しました。

(4) 現在，会として行っている主な事項を紹介します。

① 会報発行 「稲門英語会だより」――年に数回発行を目ざしていますが，予算の制約もありやや回数が減っています。

② 名簿の継続的整備――なにごとをやるにも，連絡網を最新の状態にしておくことがきわめて重要です。変更の際には速やかに連絡してください。

③ 会費の徴収――会の運営の源資は，皆さんからの会費です。自動振込み方式も新たに加えて全会員から公平に会費が徴収出来るよう努力しています。皆さんのご協力を強くお願い致します。

④ 英語会史出版――100周年記念行事のひとつとして計画しましたが，やや遅れ，ようやく出版の運びとなりました。4年間にわたる関係者のご尽力に改めて謝意を表します。

⑤ ACTIVITIES

(イ)WESS国際研修会――3カ月に1回程度，パレス・ホテルで朝食会を催しております。常時30名前後の出席者があり好評です。

(ロ)ゴルフ会――年に2回(春，秋)5組～7組で楽しく懇親を深めています。常連の女性も数名おり，初心者も含めた気軽な会ですので，今後とも会員の，特に女性の参加を期待しています。

(ハ)総会および忘年会――12月初旬に，総会を兼ねた忘年会を催しています。約150名の出席者があり，年々その数も増えています。

(ニ)その他――現役の学生の要望もあり先輩による就職懇談会を開いており，学生からは感謝されています。

⑥ 早稲田大学英語会へ寄付――毎年70万円を英語会活動支援のために寄付しています。

(5) 以上，現在行っている活動内容を簡単に説明いたしました。稲門英語会は，名簿上は約2,000名以上の在籍者がいる大世帯の会です。各年代，個人それぞれ価値観も異なり，全会員が満足することが時として難しいこともあります。また，稲門英語会の運営は，全て一部の有志による献身的な努力，協力にささえられ，成り立っています。会員の皆さんにはこの現状を深くご理解を願うとともに色々な形での積極的な参加を希望します。

21世紀に向け，なお一層の会の発展のため，幹事一同引き続き力をあわせ努力する所存です。稲門英語会が，会員一人一人にとり素晴しい魅力ある会になりますように，皆で大いに盛り上げてゆこうではありませんか。

【昭和37年卒業】

早稲田大学英語会100周年記念祭

記念祭は，平成6(1994)年5月28日に次のように行われた。

(1) 記念植樹祭。午後1時から1時30分まで。早稲田大学演劇博物館前に、記念の桜が植えられた。

(2) 記念式典。午後2時から3時30分まで，早稲田大学国際会議場で行われた。司会は児玉士誠氏。

英語会会長東後勝明氏，幹事長澤明宏氏の挨拶に続いて，祝辞が述べられた。祝辞をいただいた方々は，早稲田大学総長小山宙丸氏，東京アメリカンセンター館長アレキサンダー・アルマゾフ氏(駐日米国特命全権大使ウォルター・モンディル閣下のメッセージ代読)，稲門英語会会友李揆現氏，慶応義塾大学英語会OB代表田端利夫氏，ザ・ワセダ・ガーディアン稲門会代表神尾昭男氏。

次に感謝状および記念品贈呈。伊東克己氏，西山和夫氏，青木昇氏，藤原研三氏，池上泰氏，佐久間央氏，中瀬洋一氏，小倉隆氏，橋本征夫氏，アサヒ・イブニングニュース，マイニチ・デイリーニュース，デイリー・ヨミウリ，ジャパン・タイムス，研究社，小松屋，野田屋，宮川旅館に贈られた。代表で，早稲田大学英語会前会長伊東克己氏が挨拶。

そして，記念講演。「その先の日本へ」のタイトルで，松橋功氏が演台に立った。グリークラブの演奏ののち，稲門英語会会長中瀬正一氏の挨拶，校歌斉唱で終了した。

(3) 記念祝賀会。午後4時から6時。場所をリーガロイヤルホテル早稲田のロイヤルホールに移して行われた。司会は河村亮氏。伊東克己氏，稲門英語会元副会長藤原研三氏の挨拶ののち，乾杯の音頭を稲門英語会元副会長青木昇氏がとって，歓談が始まった。

アトラクションのジャズやシャンソンの生演奏を楽しみながら，時間が流れて，最後は稲門英語会幹事長志賀隆氏の挨拶，校歌斉唱で締め括られた。

出席者およそ500名。旧交を温めた，爽やかな初夏の午後だった。

参考文献

『早稲田学報』
明治時代から発行されている早稲田大学報

『THE ACE』
早稲田大学英語会会報。
昭和34(1959)年発行から現在にいたる。
昭和57(1982)年、昭和61(1986)年から
平成元(1989)年までが未発行で欠号

『早稲田文学』
『英語世界』
『早稲田大学百年史』早稲田大学
『坪内逍遥事典』逍遥協会編
『演劇百科大事典』(全6巻)早稲田大学演劇博物館編

編集協力者

磯村保曹
伊東克己
中瀬正一
石榑和夫
小野眸子
小林秀之
大和田龍夫
松居泰三
松橋　功
川岸高真
平野　亨
志賀　隆
東後勝明
大渡　肇
小林公子
萩原亜海
関　直彦
大渕加寿夫
太田行雄
種村隆久

装丁・デザイン
山口弘毅

編集制作
株式会社EICネットワーク

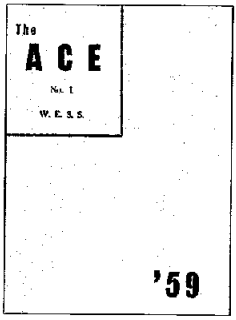
資料・写真提供者

青木　昇
青柳武夫
池上　秦
石榑和夫
磯村保曹
一又正雄
伊東克己
内田　孝
大田行雄
大野　功
岡田和秀
緒方省吾
加唐卯之助
川岸高真
北島リリアン夫人
小安　総
小安茂杜夫
嶋沢重夫
高杉瀧蔵
露木　進
遠間昌平
富沢慎哉
中瀬正一
中瀬洋一
西前文吾
長谷川修
平岡弘男
平松昌雄
福田浩人
藤原研三
松本正司
望月泰道
森内信次
吉田伸弥
駐日米国大使館
駐日英国大使館
二八会
毎日新聞社
早稲田ガーディアン
早稲田大学広報室
早稲田大学大学史資料センター
早稲田大学総長秘書室
(五十音順・敬称略)

あとがき――

早稲田大学英語会100周年記念事業の最後の懸案だった英語会100年史がこのたび完成しました。記念式典の興奮もすでに消えましたが，100年史をまとめようという会員諸氏の熱意がやっとここに実りました。100年を通して埋もれた資料を掘り起こし，人々の話を聞いて記録としてまとめるためには持続するエネルギーと集中力が必要でした。しかし英語会は毎年学生が集い散じる所，そして卒業後はビジネスに明け暮れる会員ばかりの稲門英語会にとって，100年史の編集はいささか困難な作業でした。

しかし、先輩の遺された資料，なかんずくＡＣＥ４号(昭和37年)に掲載された60年史の記録はこの100年史の中核をなす貴重なものです。今となってはお名前も分からないのですが，練達の文章を書かれた当時の先輩方に感謝を申しあげたいと存じます。ＡＣＥは昭和34年に当時の幹事の平野亨，伊東照雄，原田永久氏(昭和36年卒)らの努力で創刊されました。その後ほぼ毎年発行されて英語会の活動を伝える貴重な記録として残っています。



短期間の執筆のために執筆者には不本意な原稿を強いたかと思います。調査の行き届かない点があるとすれば，その責は刊行委員会にあります。お許しください。

また４年余の間，編集会議の場所(ビール，酒肴つき)や，一時は事務所まで用意してくださった川岸高真氏(昭和35年卒)，ライターとして自分の仕事を犠牲にしながらも調査，執筆，編集に携ってくださった小林公子さん(昭和39年卒)に心からのお礼を申しあげたいと思います。編集協力，資料・写真提供を受けながら，お名前を記すことができなかった人がいるかもしれません，失礼をお許しください。

いま，生まれたばかりの本書はこれからも生き続けるでしょう。100年後に英語会200年史をまとめるとき，本書がマイルストーンとなることを願いつつ‥‥。

(『100年史』刊行委員会・大渡)

早稲田大学英語会100年史

1998年12月1日発行

発　行　稲門英語会

編　纂　「早稲田大学英語会100年史」刊行委員会
東京都新宿区西早稲田1丁目6番1号
早稲田大学英語会内

刊行委員会事務局　株式会社保健同人社内　大渡　肇
TEL. 03-3234-6111
FAX.03-3234-6110
〒102-8155
東京都千代田区富士見2丁目12番2号

印刷・製本　株式会社東京印書館

頒価 2000円（送料込み）

WESS 100

1892

1992